

栃木県埋蔵文化財調査報告第 353 集

樺崎渡戸古窯跡・樺崎中妻遺跡・
栃本西遺跡・唐沢山城跡

—北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査XXV—

2012.3

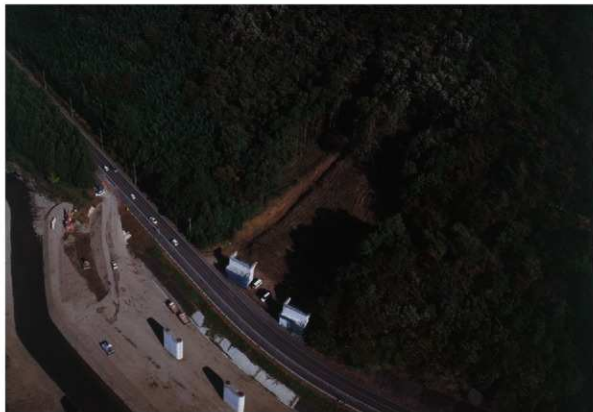
栃木県教育委員会
財とちぎ未来づくり財団

かばさきわたど こようあと かばさきなかつま
樺崎渡戸古窯跡・樺崎中妻遺跡・
とちもどにし からさわやまじょうせき
栃本西遺跡・唐沢山城跡

—北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査XXIV—

2012.3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ未来づくり財団



唐沢山城跡 調査前整備遠景（南西上空から撮影）



唐沢山城跡現況（南西上空から撮影・トンネル入り口部分が壑堀跡）



唐沢山城跡 発掘全景（上空から撮影）



榑崎渡戸古窯跡出土遺物



榑崎渡戸古窯跡出土遺物

序

北関東自動車道は、群馬・栃木・茨城の3県を結ぶ高速道路で、古くからの歴史・産業を合わせ持つ北関東の各都市を繋ぎ、魅力ある都市として再発展される役割を担うべく計画されました。その建設に先立ち、路線内に所在する遺跡について関係機関と協議の結果、記録による保存のための発掘調査を実施することとなりました。

榑崎渡戸古窯跡・榑崎中妻遺跡は、足利市北東部に所在します。これらの遺跡周辺には、足利氏の菩提寺である国史跡・榑崎寺跡をはじめ、重要な遺跡が数多く存在します。今回の榑崎渡戸古窯跡の調査では、県内で発掘調査が行われた中では最古となる古墳時代後期の窯跡が確認されました。古代から現代まで続く、栃木県における窯業の始まりにせまる貴重な成果と言えます。

唐沢山城跡・栃本西遺跡は、佐野市西部に所在します。唐沢山城跡は「関東七名城」の一つに数えられる堅牢な山城で、現在の佐野市域を治めた佐野氏の居城として知られてきました。現在は、佐野市教育委員会による国指定史跡化を目指した調査が継続されています。今回の調査では、家臣団の屋敷地とされる根小屋地区の南を区切る塹堀を調査し、唐沢山城の歴史を明らかにするうえでの重要な情報が得られました。

本書は、これらの成果と共に、北関東自動車道路線内で実施された試掘・確認調査の成果をまとめ、報告書として刊行するものです。県民の皆さまにとりまして、郷土の歴史を理解する一助となると共に、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで多くのご協力をいただきました東日本高速道路株式会社、足利市教育委員会、佐野市教育委員会、旧田沼町教育委員会、栃木県県土整備部をはじめとする関係機関並びに関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

栃木県教育委員会
教育長 須藤 稔

例言

1. 本書は、栃木県足利市榊崎町に所在する榊崎渡戸古窯跡、榊崎中妻遺跡、佐野市栃本町に所在する栃本西遺跡、唐沢山城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、北関東自動車道（足利～岩舟地区）建設に伴う記録保存調査であり、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）の委託事業として、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、財団法人とちぎ未来づくり財団（旧とちぎ生涯学習文化財団）埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本書にはあわせて、北関東自動車道（足利～岩舟地区）建設に伴って行った試掘・確認調査のうち、本調査に至らなかった9箇所の調査についてその結果を掲載した。
4. 各遺跡の調査期間及び調査担当者は以下の通りである。

【榊崎渡戸古窯跡】

試掘調査	平成 18 年 3 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日	主査	仲山英樹
本調査	平成 18 年 4 月 1 日～平成 18 年 6 月 20 日	主査	仲山英樹 主査 伊藤信二

【榊崎中妻遺跡】

試掘調査	平成 18 年 2 月 1 日～平成 18 年 2 月 17 日	主査	仲山英樹
本調査	平成 18 年 6 月 26 日～平成 18 年 8 月 31 日	主査	仲山英樹 主査 伊藤信二

【栃本西遺跡】

試掘調査	平成 15 年 11 月 27 日～平成 15 年 12 月 3 日	主査	鈴木泰浩 主任 横田 桂
本調査	平成 17 年 8 月 1 日～平成 17 年 12 月 28 日	主査	仲山英樹
		嘱託調査員	玉橋さやか

【唐沢山城跡】

本調査	平成 18 年 9 月 1 日～平成 19 年 3 月 29 日	主査	仲山英樹 主事 崎崎武昭
		嘱託調査員	村田沙織

【北関東自動車道路線内の試掘・確認調査】

平成 14 年度

離山遺跡西地点(旧「山前遺跡」)	平成 15 年 1 月 20 日～1 月 31 日	主任	安永真一 主任 横田 桂
吉水遺跡	平成 15 年 2 月 10 日～2 月 28 日	主任	安永真一 主任 横田 桂

平成 15 年度

芝宮南遺跡	平成 15 年 11 月 17 日～11 月 21 日	主査	鈴木泰浩 主任 横田 桂
-------	-----------------------------	----	--------------

平成 17 年度

栃本東遺跡	平成 17 年 7 月 25 日～7 月 29 日	主任	池田敏宏
平石遺跡南地点(旧「平石遺跡(周辺地)」)	平成 17 年 10 月 24 日～10 月 31 日	主査	仲山英樹
	平成 17 年 12 月 8 日	主査	仲山英樹
行屋遺跡	平成 17 年 11 月 1 日～11 月 11 日	主査	仲山英樹

大岩山毘沙門堂及び十二坊跡南地点(旧「巖島神社南遺跡」)	平成 17 年 12 月 12 日～平成 18 年 1 月 31 日	主査	仲山英樹
塩坂遺跡	平成 18 年 2 月 20 日～2 月 28 日	主査	仲山英樹

平成 18 年度

平石遺跡南地点(旧「平石遺跡(周辺地)」)	平成 18 年 8 月 2 日	主査	仲山英樹
-----------------------	-----------------	----	------

平成 19 年度

大平塚群南地点(旧「大平遺跡」)

平成 20 年 2 月 29 日～3 月 31 日

主査 仲山英樹

【整理作業・報告書作成】

平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

主任 合田恵美子

5. 本書の作成・執筆・編集は合田恵美子が担当した。
6. 自然科学分析については、株式会社古環境研究所及び株式会社パレオ・ラボに委託し、その結果を付巻に掲載した。
7. 唐沢山城跡出土人骨の鑑定は、群馬県立自然史博物館学芸員・姉崎智子氏に依頼した。
8. 写真撮影は発掘調査における遺構を各年度の担当者が行い、遺物撮影は合田が行った。
9. 各遺跡の基準点測量及び基準杭設置、唐沢山城跡の航空写真測量図作成は中央航業株式会社に委託した。
10. 金属製品の保存処理、X線撮影、写真撮影は車塚哲久が行った。
11. 発掘調査の実施ならびに報告書の作成にあたっては、次の方々からご指導、ご協力を賜った。
東日本高速道路株式会社関東支社宇都宮工事事務所 栃木県教育委員会事務局文化財課 栃木県県土整備部高速道路対策室 足利市教育委員会 佐野市教育委員会 佐野市文化財保護審議会 唐沢山神社 秋元陽光 足立佳代 板橋稔 市橋一郎 出居博 大澤伸啓 太田嘉彦 賀来孝代 京極博次 今平利幸 齊藤恒夫 齊藤宏 齊藤兵衛 佐野正行 澤田直之 田無清彦 武川夏樹 野代徳一 茂木孝行 山口耕一 山口仁
12. 発掘作業の参加者は次のとおりである。
内田和枝 加藤賢一 加藤節子 小林博 半田利江 須長潔 青木衣子 仁木良作 妻倉ヨシ子 山口シヅ江 湯澤利夫 為貝直文 阿由葉道雄 木村登 永瀬文男 植竹勝男 山上菊三 永瀬晃一 森尻吉男 土田和夫 松島軍治 天野崇弘 角田英昭 鈴木孝市 立木和夫 松島広 山中久巳 清水玉一 永島正夫 植田政明 前原哲夫 山根正 山根幸雄 青木義雄 塩島進 阿久津清 亀田浩子 南雲進 茂呂一恵 五十嵐裕子 湯沢比佐子 大久保保江 川島弘道 山上典子 土沢トシ 清水房枝 根岸孝子 根岸新一郎 熊倉ハマ子 丸山美知子 岩上昭司
13. 整理作業・報告書作成の参加者は次のとおりである。
(整理補助員)
飯島香織 熊谷早苗 市川浩子 高橋正恵 川上須美代
14. 各遺跡の概要については年報等で報告されているが、本書をもって正式報告とする。なお、年報等には「渡戸遺跡」(榊崎渡戸古窯跡)、「中妻遺跡」(榊崎中妻遺跡)、山前遺跡(仮称)等の名称を用いたが、本書の記載をもって正式名称とする。
15. 各遺跡の出土遺物・資料類は、財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターに保管している。

凡 例

遺跡

1. 遺跡の略号は以下のとおりである。

榊崎渡戸古窯跡 AK-KW 榊崎中妻遺跡 AK-KN 榊本西遺跡 ST-TN
唐沢山城跡 ST-KR

遺構

1. 各遺跡のグリッド配置は世界測地系に基づき、方位はその座標北である。
2. 遺構の略称は、SI：竪穴住居跡 SK：土坑 SD：溝跡 SX：性格不明遺構を指す。遺構番号は発掘調査時に遺構の種類にかかわらず、発見された順に番号を付した。
3. 本報告書掲載の遺構は原則 1/60 の縮尺であるが、唐沢山城跡の竪堀全体図等は適宜縮尺を変え、図面脇にスケールで示した。
4. 遺構実測図中の断面水準は標高を示す。
5. 遺構実測図中の遺物番号は、遺物実測図の番号に一致する。

遺物

1. 遺物実測図の縮尺は原則として、縄文土器 1/3、金属製品 2/3、五輪塔 1/6、その他の遺物 1/4 であるが、一部変更しているものについては図面脇にスケールで示した。
2. 観察表中の計測値略号は次のとおりである。計測値の単位は、口径・底径等が cm、重さが g である。
口=口径 底=底径 端=端部径 大=最大径 高=器高 縦=縦軸長 横=横軸長 厚=厚さ
重=重さ
3. 遺物写真図版の縮尺は不統一である。遺物番号は、遺物実測図の番号に一致する。
4. 第 4 章・第 5 章については、須恵器断面を黒、灰釉陶器の断面と黒色処理された土師器内面を灰のトーンで示した。第 3 章については出土遺物が須恵器主体となるため、断面は白抜きのまま示した。

目次

序	
例言・凡例	i
目次・挿図目次・表目次・巻頭図版目次	iv
第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	5
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	15
第2節 歴史的環境	18
第3章 榑崎渡戸古窯跡の調査	
第1節 調査の概要	25
第2節 発見された遺構と遺物	27
第4章 榑崎中妻遺跡の調査	
第1節 調査の概要と基本土層	77
第2節 発見された遺構と遺物	81
第5章 榑本西遺跡の調査	
第1節 調査の概要と基本土層	83
第2節 発見された遺構と遺物	85
第6章 唐沢山城跡の調査	
第1節 調査の概要と基本土層	95
第2節 発見された遺構と遺物	101
第7章 足利～岩舟間における試掘・確認調査	
第1節 試掘・確認調査の概要	119
第2節 足利市域における試掘・確認調査	119
第3節 佐野市域における試掘・確認調査	130
第8章 調査の成果	140
付章 榑崎渡戸古窯跡発掘調査に係る自然科学分析	143

挿 図 目 次

第 1 図	北関東自動車道 (足利～岩舟間) 周辺の道跡	2	第 57 図	栃木西道跡 上層柱状図	84
第 2 図	神崎渡戸古窯跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図	6	第 58 図	栃木西道跡 SI-01 竪穴住居跡	86
第 3 図	神崎渡戸古窯跡 上層柱状図	7	第 59 図	栃木西道跡 SI-01 竪穴住居跡出土遺物 (1)	87
第 4 図	神崎中麦道跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図	8	第 60 図	栃木西道跡 SI-01 竪穴住居跡出土遺物 (2)	88
第 5 図	神崎中麦道跡 上層柱状図	9	第 61 図	栃木西道跡 SI-03 竪穴住居跡	89
第 6 図	栃木西道跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図	10	第 62 図	栃木西道跡 SI-03 竪穴住居跡出土遺物	90
第 7 図	栃木西道跡 上層柱状図	11	第 63 図	栃木西道跡 SI-04 竪穴住居跡	91
第 8 図	唐沢山城跡 調査前の地形航空測量図	12	第 64 図	栃木西道跡 SI-04 竪穴住居跡出土遺物	91
第 9 図	道跡の位置と栃木県の地形区分	15	第 65 図	栃木西道跡 SD-02 溝跡及び出土遺物	93
第 10 図	道跡周辺の地形図	16	第 66 図	栃木西道跡 SK-05～SK-09	94
第 11 図	神崎渡戸古窯跡・神崎中麦道跡周辺の道跡	19	第 67 図	栃木西道跡 上坊出土遺物	94
第 12 図	栃木西道跡・唐沢山城跡周辺の道跡	22	第 68 図	唐沢山城跡 全体図	95
第 13 図	神崎渡戸古窯跡位置図	25	第 69 図	唐沢山城跡 調査区全体図	97.98
第 14 図	神崎渡戸古窯跡 調査区全体図及びグリッド配置図	26	第 70 図	唐沢山城跡 竪堀部分拡大図 (1)	99
第 15 図	神崎渡戸古窯跡 上層断面図	28	第 71 図	唐沢山城跡 トレンチ1 上層断面図	100
第 16 図	神崎渡戸古窯跡 SX-01 透視図	29	第 72 図	唐沢山城跡 トレンチ1 竪堀コーナー部分 エレベーション図	101
第 17 図	神崎渡戸古窯跡 環壕実測図	31	第 73 図	唐沢山城跡 竪堀部分拡大図 (2)	102
第 18 図	神崎渡戸古窯跡 環壕実測図	31	第 74 図	唐沢山城跡 トレンチ2 上層断面図 及び SK-1・SK-9 エレベーション	103
第 19 図	神崎渡戸古窯跡 高坪実測図	32	第 75 図	唐沢山城跡 トレンチ3・4 上層断面図	105.106
第 20 図	神崎渡戸古窯跡 こね鉢実測図	32	第 76 図	唐沢山城跡 トレンチ5・6 上層断面図	109.110
第 21 図	神崎渡戸古窯跡 瓶類 (投瓶・フラスコ瓶・平瓶) 実測図	33	第 77 図	唐沢山城跡 トレンチ7 上層断面図	111
第 22 図	神崎渡戸古窯跡 瓶類 (横断) 実測図	35	第 78 図	唐沢山城跡 トレンチ8・9 上層断面図	112
第 23 図	神崎渡戸古窯跡 瓶類・壺類 (長頸壺・短頸壺・蓋・底部分) 実測図	36	第 79 図	唐沢山城跡 トレンチ10 上層断面図及び突堂平面図	113
第 24 図	神崎渡戸古窯跡 瓶類・壺類 (口縁部) 実測図	36	第 80 図	唐沢山城跡 トレンチ11～14 上層断面図	114
第 25 図	神崎渡戸古窯跡 甕実測図	38	第 81 図	唐沢山城跡 トレンチ15 上層断面図	115
第 26 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (口縁部破状文) 実測図 (1)	38	第 82 図	唐沢山城跡 出土遺物 (1)	116
第 27 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (口縁部破状文) 実測図 (2)	39	第 83 図	唐沢山城跡 出土遺物 (2) 鉄製品	117
第 28 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (口縁部斜行文) 実測図 (1)	40	第 84 図	唐沢山城跡出土縄文土器	118
第 29 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (口縁部斜行文) 実測図 (2)	41	第 85 図	足利市域における試掘・確認調査箇所 (1)	120
第 30 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (口縁部斜行文) 実測図 (3)	42	第 86 図	足利市域における試掘・確認調査箇所 (2)	120
第 31 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (紐付) 実測図	43	第 87 図	難山道跡西地点及び平石道跡南地点位置図	121
第 32 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (口縁部無文) 実測図 (1)	44	第 88 図	難山道跡西地点 周辺地形と試掘トレンチ位置	122
第 33 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (口縁部無文) 実測図 (2)	45	第 89 図	難山道跡西地点 試掘トレンチ上層柱状図	123
第 34 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (口縁部無文) 実測図 (3)	46	第 90 図	平石道跡南地点 周辺地形と試掘トレンチ位置図 及び上層柱状図	124
第 35 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (体部破片) 実測図 (1)	47	第 91 図	大岩山毘沙門堂及び十二坊跡南地点位置図	125
第 36 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (体部破片) 実測図 (2)	48	第 92 図	大岩山毘沙門堂及び十二坊跡南地点 周辺地形と試掘トレンチ位置図	126
第 37 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (体部破片) 実測図 (3)	49	第 93 図	大岩山毘沙門堂及び十二坊跡南地点 試掘トレンチ上層柱状図	127
第 38 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (体部破片) 実測図 (4)	50	第 94 図	堀坂道跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図 及び上層柱状図	129
第 39 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (体部破片) 実測図 (5)	51	第 95 図	佐野市域における試掘・確認調査箇所 (1)	130
第 40 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (体部破片) 実測図 (6)	52	第 96 図	佐野市域における試掘・確認調査箇所 (2)	131
第 41 図	神崎渡戸古窯跡 甕 (体部破片) 実測図 (7)	53	第 97 図	大平塚群南地点位置図	131
第 42 図	神崎渡戸古窯跡 土師質の板状品実測図 (1)	55	第 98 図	大平塚群南地点 周辺地形と試掘トレンチ位置図 及び上層柱状図	132
第 43 図	神崎渡戸古窯跡 土師質の板状品実測図 (2)	56	第 99 図	芝宮南道跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図	133
第 44 図	神崎渡戸古窯跡 竪穴実測図	56	第100 図	芝宮南道跡 上層柱状図	134
第 45 図	神崎渡戸古窯跡 竪穴実測図 (1)	57	第101 図	古水道跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図	135
第 46 図	神崎渡戸古窯跡 竪穴実測図 (2)	58	第102 図	栃木東道跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図 及び上層柱状図	136
第 47 図	神崎渡戸古窯跡 中近世遺物 (陶磁器) 実測図	59	第103 図	古水道跡 出土遺物 (縄文土器)	137
第 48 図	神崎渡戸古窯跡 中近世遺物 (在地系土器) 実測図	59	第104 図	栃木東道跡 調査区内表採遺物	137
第 49 図	神崎渡戸古窯跡 中近世遺物 (瓦) 実測図	59	第105 図	行屋道跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図 及び上層柱状図	138
第 50 図	神崎中麦道跡位置図	77			
第 51 図	神崎中麦道跡 試掘トレンチ配置図	78			
第 52 図	神崎中麦道跡 調査区全体図及び基本土層	79			
第 53 図	神崎中麦道跡 SK-01～SK-07	80			
第 54 図	神崎中麦道跡 道標外出土遺物	82			
第 55 図	栃木西道跡位置図	83			
第 56 図	栃木西道跡全体図	84			

表 目 次

第 1 表	北関東自動車道 (足利～岩間町) 埋蔵文化財発掘調査箇所一覧……………3	第 16 表	榑崎渡戸古窯跡 甕(口縁部無文)観察表……………70
第 2 表	榑崎渡戸古窯跡・榑崎中妻遺跡周辺の遺跡一覧表 ……20	第 17 表	榑崎渡戸古窯跡 甕(破片)観察表……………71
第 3 表	栃本西遺跡・唐沢山城跡周辺の遺跡一覧表……………23	第 18 表	榑崎渡戸古窯跡 土師製の板状品観察表……………73
第 4 表	榑崎渡戸古窯跡 坯蓋観察表……………61	第 19 表	榑崎渡戸古窯跡 窯体観察表……………74
第 5 表	榑崎渡戸古窯跡 坯身観察表……………61	第 20 表	榑崎渡戸古窯跡 焼台観察表……………75
第 6 表	榑崎渡戸古窯跡 高坯観察表……………62	第 21 表	榑崎渡戸古窯跡 中・近世遺物(陶磁器)観察表……………76
第 7 表	榑崎渡戸古窯跡 こね鉢観察表……………62	第 22 表	榑崎渡戸古窯跡 中・近世遺物(在地系土器)観察表……………76
第 8 表	榑崎渡戸古窯跡 瓶類(提瓶・フラスコ瓶・平瓶) 観察表……………63	第 23 表	榑崎渡戸古窯跡 中・近世遺物(EI)観察表……………76
第 9 表	榑崎渡戸古窯跡 瓶類(横瓶)観察表……………63	第 24 表	榑崎中妻遺跡 土坑一覧表……………81
第 10 表	榑崎渡戸古窯跡 瓶類・壺類(長頸壺・短頸壺・ 蓋・底部片)観察表……………64	第 25 表	榑崎中妻遺跡 道構外出土遺物観察表……………82
第 11 表	榑崎渡戸古窯跡 瓶類・壺類(口縁部)観察表……………65	第 26 表	栃本西遺跡 SI-01 出土遺物観察表……………88
第 12 表	榑崎渡戸古窯跡 甕 観察表……………66	第 27 表	栃本西遺跡 SI-03 出土遺物観察表……………90
第 13 表	榑崎渡戸古窯跡 甕(口縁部波状文)観察表……………66	第 28 表	栃本西遺跡 SI-04 出土遺物観察表……………91
第 14 表	榑崎渡戸古窯跡 甕(口縁部斜行文)観察表……………67	第 29 表	栃本西遺跡 SD-02 出土遺物観察表……………92
第 15 表	榑崎渡戸古窯跡 甕(紐付)観察表……………69	第 30 表	栃本西遺跡 土坑出土遺物観察表……………94
		第 31 表	唐沢山城跡 調査一覧……………96
		第 32 表	唐沢山城跡出土遺物観察表……………117
		第 33 表	栃本東遺跡 調査区内表注遺物観察表……………137

写 真 図 版 目 次

巻頭図版一

- 唐沢山城跡 調査前聖廟遺景(南西上空から撮影)
唐沢山城跡現況(南西上空から撮影・トンネル出入口部分が聖廟跡)

巻頭図版二

- 唐沢山城跡 聖廟全景(上空から撮影)

巻頭図版三

- 榑崎渡戸古窯跡出土遺物
榑崎渡戸古窯跡出土遺物

図版一 榑崎渡戸古窯跡 遺構

- 榑崎渡戸古窯跡 調査前遺景(南上空から)
榑崎渡戸古窯跡 現況(西から)

図版二 榑崎渡戸古窯跡 遺構

- 調査区遠景(北東から)
調査区東側 山麓斜面(西から)
調査前の状況(南から)
調査区南北セクション(南西から)
調査区東西セクション(南東から)
調査区東西セクション(南から)
東西セクション(南東から)
南側調査区 調査風景(東から)

図版三 榑崎渡戸古窯跡 遺構

- SX-01(南から)
SX-01 西側壁セクション(東から)
SX-01 出土状況(西から)
D4-14 出土状況(南から)
E4-2 出土状況(南から)
E4-2 完備状況(南から)
南側調査区 完備状況(東から)
北側調査区 完備状況(東から)

図版四 榑崎中妻遺跡 遺構

- 調査区全景(東から)
SK-01(南から)
SK-05(南から)
SK-02(南から)
SK-03(南から)
SK-04(南から)
SK-06(南から)
SK-07(南から)

図版五 栃本西遺跡 遺構

- 調査区全景(南西から)
調査区全景(北東から)
SI-01(西から)
SI-01 出土状況(南東から)
SI-01 カマド(西から)
SI-01 カマド出土状況(南から)
SI-01 カマド配方(西から)
SI-01 貯蔵穴(西から)

図版六 栃本西遺跡 遺構

- SI-03(西から)
SI-03 カマド(西から)
SI-03 南東コーナー突出部(北から)
SI-03 北東コーナー突出部(西から)
SK-03 炉(西から)
SI-03 配方(西から)
SI-04(南から)
SI-04 カマド(西から)

図版七 栃本西遺跡 遺構

- SK-05(南から)
SK-06(北東から)
SK-07(南から)

SK 08 (西から)
SK 09 (南から)
SD 02 (南西から)
SD 02 (北から)
調査区全景 (東から)

図版八 唐沢山城跡 遺構

唐沢山城跡遠景 (西上空から)
唐沢山城跡 調査前状況 (南西上空から)

図版九 唐沢山城跡 遺構

竪堀遠景 (調査前・西から)
竪堀東端から秋山川を望む (東から)
調査前の竪堀埋没状況 (西から)
調査前の竪堀奥部 (西から)
調査区南側の斜面 (北から)
調査区東側斜面 (西から)
調査区南側の斜面 (西から)
調査区南側の斜面と平坦部 (南から)

図版十 唐沢山城跡 遺構

竪堀完備状況 (西から)
竪堀完備状況 (南東から)

図版十一 唐沢山城跡 遺構

トレンチ1 竪堀コーナー西壁セクション (東から)
トレンチ1 竪堀コーナー完備状況 (南東から)
トレンチ1 竪堀コーナー北壁セクション (南西から)
トレンチ1 竪堀コーナー完備状況 (西から)
トレンチ1 竪堀コーナー東壁セクション (南西から)
C4 グリッド付近 土坑集中状況 (南西から)
トレンチ1 竪堀コーナー完備状況 (北西から)
作業風景

図版十二 唐沢山城跡 遺構

トレンチ2 北側部分セクション (北西から)
トレンチ2 中央部分セクション (西から)
トレンチ2 南側部分セクション (南西から)
トレンチ2 中央部分セクション (東から)
トレンチ2 調査状況 (南から)
SK 05 ~ 09 (南から)
SK 01 (南から)
SK 01 (北東から)

図版十三 唐沢山城跡 遺構

トレンチ2 遺物出土状況 (西から)
土坑群の集中状況 (北西から)
SK 09 及び周辺ピット群 (南西から)
トレンチ3 セクション (南西から)
トレンチ3 土塁部分セクション (南から)
トレンチ3 北側部分セクション (西から)
トレンチ3 中央部分セクション (南西から)
トレンチ3 南側部分セクション (北西から)

図版十四 唐沢山城跡 遺構

トレンチ4 セクション (南西から)
トレンチ4 土塁部分セクション (南から)
トレンチ4 中央部分セクション (北西から)
トレンチ4 南側部分セクション (西から)
トレンチ4 から東側完備状況 (西から)
トレンチ5 土塁部分セクション (南西から)

トレンチ5 北側部分セクション (西から)
トレンチ5 南側部分セクション (南西から)

図版十五 唐沢山城跡 遺構

トレンチ5 から東側完備状況 (南西から)
トレンチ6 土塁部分セクション (西から)
トレンチ6 北側部分セクション (西から)
トレンチ6 中央部分セクション (西から)
トレンチ6 南側部分セクション (西から)
トレンチ6 南端部分セクション (北西から)
竪堀完備状況 (北東から)
調査風景

図版十六 唐沢山城跡 遺構

トレンチ7 北側部分セクション (南西から)
トレンチ7 中央部分セクション (西から)
トレンチ7 南側部分セクション (北西から)
竪堀東端の岩盤 (西から)
C9 グリッドから東側完備状況 (西から)

図版十七 唐沢山城跡 遺構

トレンチ8 セクション (南から)
トレンチ9 北側部分セクション (西から)
トレンチ9 セクション (西から)
トレンチ9 セクション (北西から)
トレンチ10 セクション (西から)
トレンチ10 北側部分セクション (北西から)
トレンチ10 炭窯 (北西から)
トレンチ10 炭窯境上 (北西から)

図版十八 唐沢山城跡 遺構

トレンチ11 セクション (南から)
トレンチ12 セクション (北から)
平坦部トレンチ設定状況 (北から)
トレンチ13 セクション (北西から)
トレンチ14 セクション (北西から)
トレンチ15 セクション (北から)
トレンチ15 中央部分セクション (北から)
トレンチ15 西側部分セクション (北から)

図版十九 榊崎渡戸古窯跡 遺物

環蓋 1・2・4・5・6
環蓋 1 輪職
环身 1・2・5・7
环身 1 輪職
环身 2 輪職
高环 1・2・5・7・8
高环 2 下面
こね鉢 2
こね鉢 2 底部
こね鉢 3
こね鉢 3 底部

図版二十 榊崎渡戸古窯跡 遺物

平瓶 7
徳川雑部 2・4 ~ 8
横瓶 1・5・6・8
短頸直 5・6
提瓶 2・8
膠付直 13
長頸直 1

長頸蓋 3 内面
長頸蓋 14

図版二十一 榑崎渡戸古窯跡 遺物

甕 (波状文) 1
甕 (波状文) 2 表・裏
甕 (波状文) 3 表・裏
甕 (波状文) 5
甕 (波状文) 10
甕 (波状文) 10 接合面
甕 (波状文) 11
甕 (波状文) 11 接合面
甕 (斜行文) 9 表・裏
甕 (斜行文) 10 表・裏

図版二十二 榑崎渡戸古窯跡 遺物

甕 (斜行文) 1
甕 (斜行文) 1 口縁部
甕 (斜行文) 1 口縁部裏
甕 (斜行文) 6・8

図版二十三 榑崎渡戸古窯跡 遺物

甕 (紐付) 1
甕 (紐付) 1 柳職
甕 (紐付) 2・4・6
甕 (斜行文) 2・3・11～13

図版二十四 榑崎渡戸古窯跡 遺物

甕 (口縁部無文) 1～7
甕 (口縁部無文) 2 接合面

図版二十五 榑崎渡戸古窯跡 遺物

甕 (破片) 1 表・裏
甕 (破片) 3 表・裏
甕 (破片) 6 表・裏
甕 (破片) 9 表・裏
甕 (破片) 15 表・裏
甕 (破片) 21 表・裏
甕 (破片) 22 表・裏
甕 (破片) 26 表・裏
甕 (破片) 27 表・裏
甕 (口縁部無文) 8・14

図版二十六 榑崎渡戸古窯跡 遺物

焼台 1～7・12・13
焼台 3 裏
焼台 4 裏
窯体 1 (実測真正面)
窯体 1 (斜め方向)
窯体 2 (虚型口縁部 1)
窯体 3 (虚型口縁部 2)

図版二十七 榑崎渡戸古窯跡 遺物

土師質の板状品 (表) 1～16
土師質の板状品 (裏) 1～16

図版二十八 榑崎渡戸古窯跡・栃本西遺跡 遺物

SI 01 1～3・8～13・15
SK 06 1・3
SK 09 4

内耳土器 3
瓦 1

図版二十九 唐沢山城跡・栃本東遺跡 遺物

唐沢山城跡 1・6～9・12～15
唐沢山城跡 鉄製品 16・17
唐沢山城跡 人件 18
栃本東 1
栃本東 2
栃本東 3

図版三十 榑崎中妻遺跡・唐沢山城跡・吉水遺跡 遺物

榑崎中妻遺跡出土遺物 4・7～11
唐沢山城跡・吉水遺跡出土縄文土器

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

北関東自動車道は、群馬県高崎市から茨城県ひたちなか市に至る延長約150kmの国土開発幹線自動車道である。群馬、栃木、茨城3県の主要都市並びに国際空港那珂港を結ぶとともに、上信越自動車道や中部横断自動車道と一体となり、東京から100km～150km圏を環状に結ぶ「関東環状道路」を形成する高速道路である。関東地方における高速道路網の強化により各主要都市の交流の促進や地域の総合的発展の基盤施設としての役割が期待されている。

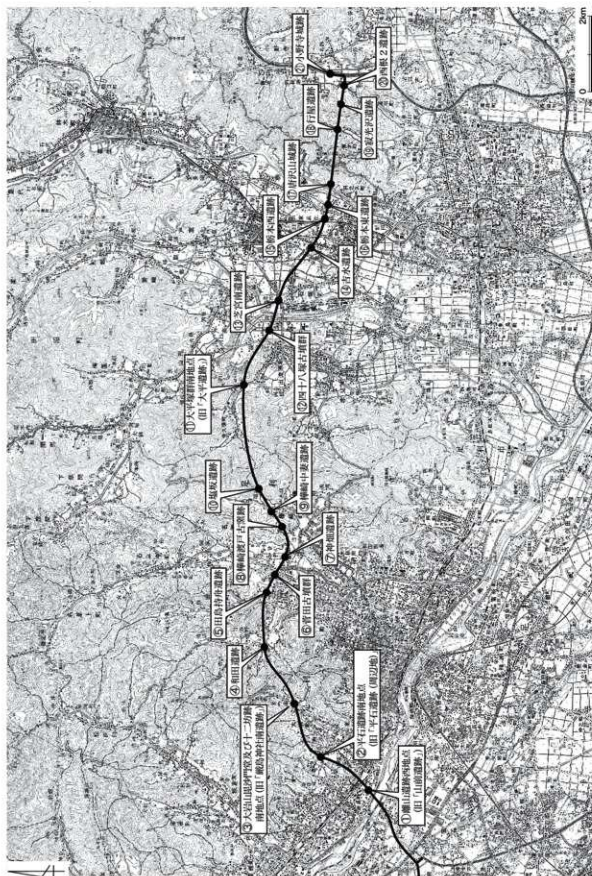
栃木県内は足利市、佐野市、岩舟町、栃木市、壬生町、下野市、宇都宮市、上三川町、真岡市の6市3町、約58kmを通過する。このうち、東北自動車道（栃木都賀JCT）から新4号国道（宇都宮上三川IC）までの約19kmは優先着工区間とされ、平成12年7月27日に開通している。次いで、宇都宮上三川ICから真岡ICまでの約8kmが平成20年3月15日に、真岡ICから桜川筑西ICまでの約14kmが平成20年12月20日に、東北自動車道（岩舟JCT）から佐野田沼ICまでの約5kmが平成22年4月17日に、佐野田沼ICから太田桐生ICまでの約18kmが平成23年3月19日にそれぞれ開通している。

東北自動車道重複区間及び優先着工区間の両側に位置する上三川～旧二宮間、足利～岩舟間においては平成3年2月8日都市計画決定、平成3年12月20日基本計画決定、平成8年12月27日整備計画決定をへて、群馬県境～足利は平成9年12月25日、真岡～茨城県境は平成10年4月8日にそれぞれ施行命令が出されている。

日本道路公団東京第一建設局（当時、以下公団）長は、平成9年7月1日付けで、栃木県土木部高速道路対策室（当時、以下県対室）を経由し栃木県教育委員会教育長（以下県教育長）あて路線内の埋蔵文化財について照会した。そこで栃木県教育委員会事務局文化課（以下県文化課、平成11年度より県文化財課）は、平成9年7月8日から18日にかけて所在調査を実施した。この調査により周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に上三川～旧二宮間で14箇所、足利～岩舟間で18箇所の調査必要箇所が確認された。結果は平成10年3月18日付で公団局長あて回答され、あわせて県対室長あて報告された。

これら調査必要箇所の取り扱いについて、県文化財課、公団、県対室による協議の結果、工事の影響を免れない範囲について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。そのため、平成13年1月15日、公団局長、県教育長及び発掘主体者の財団法人とちぎ生涯学習文化財団（当時、以下財団）理事長により「北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」（以下協定書）が締結された。この協定書において、上記の32箇所について現地発掘調査期間は平成18年3月まで、整理作業・報告書作成期間は平成19年3月まで、費用概算額は2,167,967,000円とされた。また、平成12年度は上三川～旧二宮間の柳林遺跡、西物井遺跡、峰高前遺跡について調査に着手することとなり、協定書に基づき公団局長及び財団理事長間で「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」が締結され、北関東自動車道上三川～旧二宮間及び足利～岩舟間の発掘調査が開始された。

その後、財団は文化財課の指導にもとづき発掘調査業務を実施してきたところ、工事予定の変更や新たな埋蔵文化財包蔵地の確認等により協定書中全体実施計画等の見直しが必要となった。そのため、平成18年3月29日付、東日本高速道路株式会社（平成17年10月1日、日本道路公団の民営化に伴い設立：以下東日本高速（株））関東支社宇都宮工務事務所長、県教育長及び財団理事長により「北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する変更協定書（第1回変更）」が締結された。この協定においては新たに4箇所を加えた36箇所（壬生PA新規建設に伴う旧都賀～上三川間、



第1図 北関東自動車道(足利～岩舟間)関連の道路の遺跡(1/100,000)

第1表 北関東自動車道(足利～岩舟間)埋蔵文化財発掘調査箇所一覧

No.	遺跡名・調査箇所名称	所在地	当初調査対象面積 (㎡)	調査区分	調査面積 (㎡)	遺跡の概要
1	離山遺跡西地点	足利市龍島町	4,300	試掘	480	平成14年度試掘調査。遺構・遺物なし。旧「山前遺跡」
2	平石遺跡南地点	足利市山下町	11,700	試掘	365	平成17年度試掘調査。遺構・遺物なし。旧「平石遺跡(西辺地)」
3	大谷山鹿沼門堂及び十二坊跡南地点	足利市大谷町	19,845	試掘	910	平成17年度試掘調査。遺構・遺物なし。旧鹿沼神社南遺跡
4	和田遺跡 (23年度報告)	足利市月谷町	29,320	確認 発掘	840 28,000	平成16年度確認調査。 平成16～18年度本調査。古墳～平安時代の惣穴住居跡100軒、独立柱建物跡6棟、溝跡14条、土坑714基。
5	田島持舟遺跡 (22年度報告)	足利市田島町	15,800	試掘・確認 発掘	1,396 19,750	平成16年度試掘・確認調査。 平成16～18年度本調査。常生時代の住居跡3軒、古墳時代の住居跡43軒、古代の住居跡17軒、IⅢ1基ほか
6	菅田古墳群 (23年度報告)	足利市菅田町	12,000	発掘	11,300	平成17～18年度本調査。古墳時代の円墳9基前方後円墳1基、箱式石棺2基、土坑墓1基。
7	神畑遺跡 (23年度報告)	足利市菅田町	8,030	試掘 確認 発掘	90 1,037 8,030	平成17年度遺跡隣接地試掘調査。 平成15年度確認調査。 平成15～16年度本調査。縄文時代後・飛騨の住居跡2軒、土坑2基、古墳・平安時代の溝跡2条ほか。
8	榊崎渡戸古竈跡 (23年度報告)	足利市榊崎町	2,900	試掘・確認 発掘	160 2,900	平成17年度試掘・確認調査。旧「渡戸遺跡」 平成18年度本調査。古墳時代の須置器窯跡発原。
9	榊崎中庭遺跡 (23年度報告)	足利市榊崎町	7,000	試掘 発掘	310 7,000	平成17年度試掘調査。旧「中庭遺跡」(仮称) 平成18年度本調査。中世の惣穴住居跡1基、土坑6基。
10	塩取遺跡	足利市榊崎町	7,350	確認	170	平成17年度確認調査。遺構・遺物なし。
11	大平塚遺跡南地点	佐野市寺久保町	7,400	試掘	125	平成19年度試掘調査。遺構・遺物なし。旧「大平遺跡」
12	四十八塚古墳群 (22年度報告)	佐野市出流原町	30,560	確認 発掘	4,320 20,200	平成17年度確認調査。 平成17～19年度本調査。古墳時代後期の円墳15基。中世土坑府、溝跡。
13	芝宮南遺跡	佐野市戸奈良町	8,200	試掘	634	平成15年度試掘調査。遺構・遺物なし。
14	吉水遺跡	佐野市吉水町	5,500	試掘	500	平成14年度試掘調査。遺構なし。
15	栃木西遺跡 (23年度報告)	佐野市吉水町	12,400	試掘 発掘	821 9,325	平成15年度試掘調査。 平成17年度本調査。 平安時代住居跡3軒・溝1条・土坑5基。
16	栃木東遺跡	佐野市栃木町	10,600	試掘	970	平成17年度試掘調査。栃木西遺跡の隣地。遺構なし。
17	唐沢山遺跡 (23年度報告)	佐野市栃木町	9,000	発掘	5,800	平成18年度本調査。堀に付随する中世の惣堀。
18	行屋遺跡	佐野市富士町	2,100	確認	260	平成17年度確認調査。遺構・遺物なし。
19	宍光沢遺跡 (22年度報告)	下都賀郡岩舟町小野寺	12,415	試掘 発掘	1,000 12,415	平成15～16年度試掘調査。旧「宍光沢遺跡」 平成16～17年度本調査。奈良～平安時代の須置器窯跡3基。窯跡に付随する溝跡。
20	西根2遺跡 (20年度報告)	下都賀郡岩舟町小野寺	4,620	確認 発掘	186 4,620	平成16年度確認調査。 平成17年度本調査。古墳～平安時代の惣穴住居跡7軒。古代～中世の溝跡16条、井戸跡23基ほか。
21	小野寺城跡 (20年度報告)	下都賀郡岩舟町小野寺	4,500	確認・発掘	793	平成15年度確認調査時遺構精査。中世の堀1条。

※ 試掘・確認調査のみの箇所については、23年度一括して報告

※ 1～3・8・9・11の各遺跡については、当該市教育委員会との協議により名称を変更した。

谷向遺跡を含む)について、現地発掘調査は平成23年3月まで、また整理作業・報告書作成は平成24年3月までの期間、費用概算額は3,302,692,000円と変更された。

平成19年3月には、上三川～旧二宮間における14箇所の現地発掘調査が総て終了し、平成20年3月までに足利～岩舟間及び旧都賀～上三川間における22箇所の現地発掘調査も終了した。整理作業・報告書作成作業においては、総ての遺跡について平成24年3月に報告書を刊行し、これをもって北関東自動車道(足利～岩舟、上三川～二宮)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の全作業が終了となる。なお、調査に係る費用の総額は2,824,295,250円である。

第1章 調査の経緯

榑崎渡戸古窯跡・榑崎中妻遺跡は足利市榑崎町に所在する新発見の埋蔵文化財包蔵地、榑山西遺跡は佐野市榑本町に所在する新発見の埋蔵文化財包蔵地、唐沢山城跡は佐野市榑本町他に所在する周辺の埋蔵文化財包蔵地（県道番号5215）である。榑崎渡戸古窯跡・榑崎中妻遺跡は、平成17年度確認調査、平成18年度本発掘調査を実施した。榑山西遺跡は平成15年度試掘・確認調査、平成17年度本発掘調査を実施した。唐沢山城跡は平成18年度に本発掘調査を実施した。これら4遺跡の整理作業・報告書作成作業を平成23年度に実施し、このたび報告書上梓のはこびとなったものである。

調査組織

平成14年度

埋蔵文化財センター所長	望月 守	主任 江原 英	主任 横田 桂
管理部長	中田 清	主任 吉田 哲	主任 宮田 宣浩
管理部管理担当 主任	板井 恭子	主任 合田恵美子	
主幹兼調査部長	大金 宣亮	嘱託調査員 玉橋さやか	鈴木 芳英
大規模調査班班長	橋本 澄朗	調査補助員 平山 紋子	村田 沙織
北関東道路調査担当総括	藤田 典夫		
主査 永岡 正美	主査 賀川 倫夫		
主査 塚本 師也	主査 森口 尚志		
主査 仲山 英樹	主査 西田 知生		
主任 江原 英	主任 池田 敏宏		
主任 田代 己佳	主任 安永 真一		
主任 亀田 幸久	主任 塚田 浩久		
主任 横田 桂	技師 安藤 美保		
技師 合田恵美子	主事 吉村 英子		
嘱託調査員 平山 紋子 (7/1～3/3)			
調査補助員 玉橋さやか 平山 紋子 (4/1～6/30)			

平成15年度

埋蔵文化財センター所長	篠原 洋		
管理部長	中田 清		
管理部管理担当 主任	板井 恭子		
主幹兼調査部長兼大規模調査班班長	橋本 澄朗		
北関東道路調査担当総括	藤田 典夫		
主査 芹澤 清八	主査 賀川 倫夫		
主査 塚本 師也	主査 森口 尚志		
主査 鈴木 泰浩	主査 西田 知生		
主任 池田 敏宏	主任 田代 己佳		
主任 亀田 幸久	主任 横田 桂		
技師 合田恵美子	主事 吉村 英子		
嘱託調査員 平山 紋子 (4/1～8/30)			
調査補助員 玉橋さやか 鈴木 芳英 平山 紋子 (9/1～3/3)			

平成17年度

埋蔵文化財センター所長	篠原 洋
管理部長	大田原 博
管理部管理担当 主任	板井 恭子
主幹兼調査部長	橋本 澄朗
大規模調査班班長兼北関東道路調査担当リーダー	川原 由典
主査 芹澤 清八	主査 椎名 聡
主査 仲山 英樹	主査 西田 知生
主査 中村 享史	主査 篠原 浩恵
主査 田代 己佳	主任 池田 敏宏

平成18年度

埋蔵文化財センター所長	篠原 洋
管理部長	大田原 博
管理部管理担当 主任	板井 恭子
調査部長	川原 由典
北関東道路調査担当副主幹	初山 孝行
主査 進藤 敏雄	主査 椎名 聡
主査 仲山 英樹	主査 中村 享史
主査 伊藤 信二	主査 高野 欽哉
主査 田代 己佳	主査 江原 英
主査 磯 寿人	主任 横田 桂
主任 今平 昌子	主任 亀田 幸久
主任 吉田 哲	主任 宮田 宣浩
主任 合田恵美子	主事 峰崎 武昭
嘱託調査員 田村 雅樹	玉橋さやか 鈴木 芳英
調査補助員 長濱 健一	村田 沙織

平成19年度

埋蔵文化財センター所長	篠原 洋
管理部長	安西 和雄
管理部管理担当 主任	板井 恭子
調査部長	川原 由典
北関東道路調査担当副主幹	初山 孝行
主査 仲山 英樹	主査 篠原 浩恵
主査 田代 己佳	主査 池田 敏宏
主任 合田恵美子	主事 峰崎 武昭
嘱託調査員 田村 雅樹	

平成23年度

埋蔵文化財センター所長	会沢 登
管理部長兼調査部長	初山 孝行
管理部管理担当 係長	板井 恭子
整理第二担当副主幹	芹澤 清八
係長 進藤 敏雄	主査 谷中 隆
主任 合田恵美子	
嘱託調査員 阿部 茂	村田 沙織 田中 裕子

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

【榊崎渡戸古窯跡】

試掘・確認調査

榊崎渡戸古窯跡は、平成9年度に実施された北関東道自動車道路線地内の遺跡所在調査（以下「路線内遺跡所在調査」）の際に、周知の埋蔵文化財包蔵地である「渡戸遺跡（市遺跡番号99、県遺跡番号3899）」の一部として試掘調査の対象となった。調査対象地内は宅地及び田畑の造成により地形の改変が著しかったが、路線内に位置する山麓の南斜面裾で須恵器片が多数確認されたこと、地形的にも窯跡が存在する可能性が高いことから、試掘・確認調査の後に取り扱いを決定することとなった。

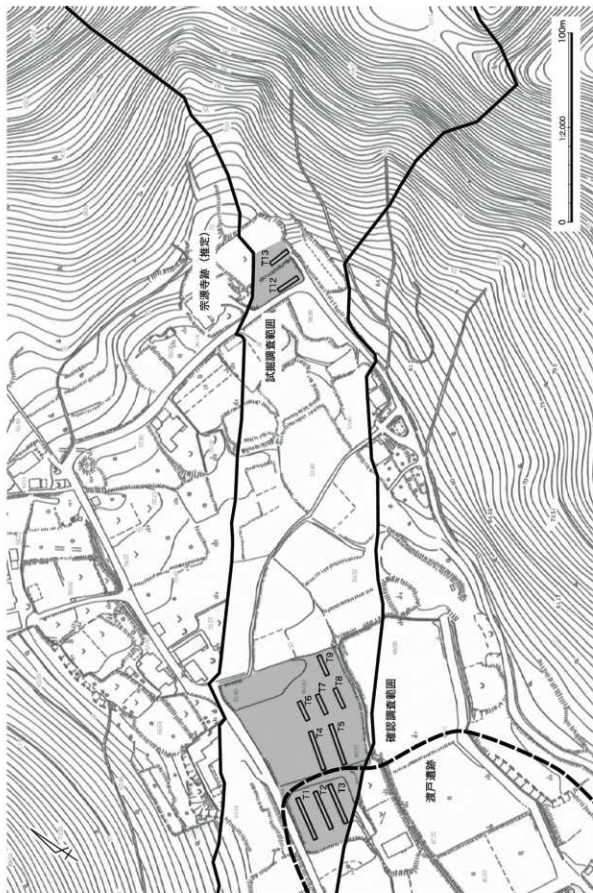
平成17年度に本遺跡の試掘・確認調査を行った。周知の埋蔵文化財包蔵地「渡戸遺跡」に該当する箇所を確認調査の範囲とし、併せて地表面で遺物の分布が認められた隣接する東側部分を試掘調査の範囲としたが、便宜的に2カ所とも「渡戸遺跡」として取り扱った。発掘調査対象面積は、2,900㎡である。

確認調査対象箇所（第2図左側部分）では未取去の家屋や家屋基礎および引き渡し未了箇所があったため、その部分は調査不能として調査範囲から除外した。調査可能箇所については、地形や土地の形状に沿って幅1m、長さ10または20mのトレンチを9本設定し、重機により遺構の有無が確認できる深さまで掘削を行った。その結果、厚さ約30cmの表土層の下に、暗黄褐色ローム土層または多量の礫を含む暗褐色ローム土層が堆積していることが確認された（第3図）。これらの層は、第2・3トレンチでは互層状に堆積しており、また、渡戸遺跡の包蔵地範囲である第1～3トレンチでは、宅地造成による攪乱が著しく、遺構・遺物は確認されなかった。第4～9トレンチではローム土層が安定して堆積している状況が確認されたものの、遺構・遺物は確認されなかった。また、周辺地の地表面にも、遺物の散布は認められなかった。

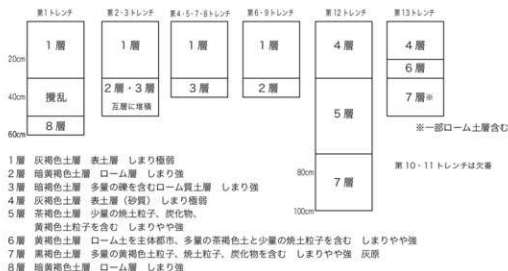
試掘調査部分（第2図右側部分）では、幅1m、長さ10mのトレンチを2本設定し掘削を行ったところ、厚さ約20～30cmの表土層の下に、多量の焼土粒子や炭化物を含む土層を確認した（第3図）。この土層内には須恵器器蓋、蓋、窯跡焼台片、窯体片等が多量に含まれており、窯跡に付帯する灰原の存在が確実であると考えられた。しかし、1980年代後半の宅地造成によりトレンチ周辺の丘陵斜面は大きく削られており、その断面では窯跡、灰原等の存在は確認できなかったことから、窯跡本体は失われているか、事業地外に存在するものと推定された。また、地形的に狭い山裾端部に位置していることから、大規模な窯跡群が展開している可能性は少ないと判断された。以上の結果により、県文化財課からは、従来の渡戸遺跡（確認調査部分）包蔵地範囲内は未取去家屋等も含む対象箇所全域について「慎重工事」、試掘調査箇所においては、灰原を確認した地点を本調査とし、近接箇所についての試掘調査実施が必要との回答を得た。また、本調査実施時には正式な遺跡名称が必要となることから、足利市教育委員会に確認を求めたところ、正式名称は「榊崎渡戸古窯跡」となった。

本調査

発掘調査は試掘調査の所見に基づき、前年度の試掘調査部分2,900㎡を対象に行った。表土除去は人力により遺構確認面まで行い、続いて遺構確認作業を行った。遺構確認作業の後、南北軸に北から南までアルファベット、東西軸に西から東へ算用数字を用い、各グリッドの名称とした。さらに、大グリッド内を16分割し、北西から南東に向かって1～16の算用数字を用い、2.5m×2.5mの細部グリッドを設定した。グリッドラインに沿って調査区全体のセクション観察のためのベルトを十字に設定し、各グリッド毎に順次掘り下げを行った。出土遺物は細部グリッド単位で取り上げた。調査区全体の掘り下げが完了した後、セクションベルトの土層観察、図化、写真撮影を行った。



第2図 神崎渡戸古河跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図



第3図 榊崎渡戸古竈跡 土層柱状図

【榊崎中妻遺跡】

試掘調査

榊崎中妻遺跡は、路線内遺跡所在調査時に新発見の遺跡(旧「中妻遺跡」)とされたが、試掘調査後の足利市教育委員会の判断により、「榊崎中妻遺跡(市遺跡番号22)」の一部とされた。所在調査では遺物の散布は認められなかったが、周辺に榊崎中妻遺跡、榊崎八幡宮北遺跡(市遺跡番号21)が所在することや、路線が南東向きに舌状台地の先端を通ることから、試掘調査の対象とされた。発掘調査対象面積は7,000㎡である。

平成17年度に試掘調査を行ったが、調査対象地内に未除去の家屋や家屋基礎、引き渡し未了箇所があったため、その部分は調査不能として調査範囲から除外し、調査可能箇所8,500㎡について地形や土地の形状に沿ってトレンチを設定し、重機により遺構の有無が確認できる深さまで掘削を行った(第4図)。その結果、時期不明の竪穴住居と推定される遺構1基及び土坑1基を確認した。竪穴住居と推定される遺構からは、古墳時代以降の土師器片が出土している。また、榛名ニッ岳渋谷テフラ(Hr-FA)が第1～16・18トレンチの8層で、浅間Bテフラ層(As-B)が第18トレンチの7層で確認されたため、テフラ層下の水田遺構の有無について調査が必要と判断された(第5図・第4章を参照)。以上の結果により、県文化財課からは、遺構が確認された箇所については本調査を実施、その他の箇所については「慎重工事」との回答を得た。

本調査

平成18年度に行った本調査は、前年の試掘調査結果を受け、遺構が確認された部分約7,000㎡を対象とした。調査は平成18年7月3日から開始し、重機により表土除去を行った。表土除去後に発掘調査区全体に国土座標第IX系(世界測地系)に基づく10m×10mの大グリッドを設定し、人力により適宜サブトレンチを設定しながら遺構確認を行った結果、試掘調査時に発見されていたものを含めて土坑7基を確認した。あわせて、試掘調査で浅間Bテフラを確認した地点を肉眼により観察しながら掘り下げたが、水田やその他の遺構は確認されなかった。土坑は、大型のものについては十字に土層観察用のベルトを設定し、その他のものは二分法で掘り下げを行った。土層断面図の作成及び写真撮影を行った後に全体を掘り上げ、完掘状態の平面図作成と写真撮影を行った。遺物は遺構単位で取り上げ、遺構外のものは一括して取り上げた。



第4図 棒崎中要道跡 周辺地形と試験トレンチ位置図



第5図 榊崎中妻遺跡 土層柱状図

【榊山西遺跡】

試掘・確認調査

榊山西遺跡は、路線内遺跡所在調査により発見された遺跡である。平成15年度に、調査対象面積12,400㎡のうち、用地引き渡しが完了した6,575㎡について試掘調査を行った。東武佐野線西側の調査区は幅2mのトレンチを4本、東側の調査区は幅1.5mのトレンチを4本設定し、遺構が確認できる深さまで掘削を行った。その結果、西側調査区では現地表面から50～80cm下で二次堆積ローム土層が確認され、その上面で南北方向の旧河道と考えられる溝状の落ち込みが検出されたが、その他に遺構及び遺物は確認されなかった。東側調査区では、トレンチ6で竪穴住居跡1軒、トレンチ7で土坑1基、全てのトレンチの西端で溝跡1条が確認された。この試掘結果に基づき、次年度以降に遺構が確認された東側調査区の本調査、及び用地未取得部分の試掘・確認調査を実施することとした。

平成17年には、東側調査区の本調査と同時に、東側に隣接する試掘調査区のうち、未除去の家屋部分を除く部分の試掘調査を行った。調査区内には、幅2mのトレンチを路線に並行して5本設定し、遺構が確認できる深さまで掘削を行った。その結果、現地表面から約30cmの深さで二次堆積ローム土層が確認されたが、遺構・遺物は確認されなかった。この試掘結果に基づき県教委文化財課と協議したところ、未除去の家屋部分に遺構が存在する可能性は極めて低いと判断されたため、榊山西遺跡の試掘調査は当年度で終了し、以後は「慎重工事」の取り扱いとすることとなった。

本調査

平成17年に行った本調査は、平成15年度の試掘調査で遺構が確認された東側調査区（以下本調査区）約3,500㎡を対象とした。まず重機により調査区全体の表土除去を行った後、人力により遺構確認を行った結果、竪穴住居跡3軒、土坑5基、溝跡1条を確認した。遺構確認後、発掘調査区全体に国土庁標第IX系（世界測地系）に基づく10m×10mの大グリッドを設定した。竪穴住居跡は十字に土層観察用のベルトを設定し、掘り下げを行った。床面まで掘り下げた時点で土層断面図を作成及び写真撮影を行い、その後ベルトを掘り下げた。カマドには別途土層観察用のベルトを設定して掘り下げ、土層断面図作成及び写真撮影を行った。カマドの調査が終わった段階で住居跡全体の完備状態の平面図及び写真撮影を行い、その後必要に応じてカマドの断ち割り及び床下の調査を行った。土坑は二分法で掘り下げを行った。土層断面図の作成及び写真撮影を行った後に全体を掘り下げ、完備状態の平面図作成と写真撮影を行った。溝跡は、グリッドラインに沿って土層観察用のベルトを設定して掘り下げた。土層断面図作成と写真撮影を行った後、全体を掘り下



第6図 栃本西遺跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図

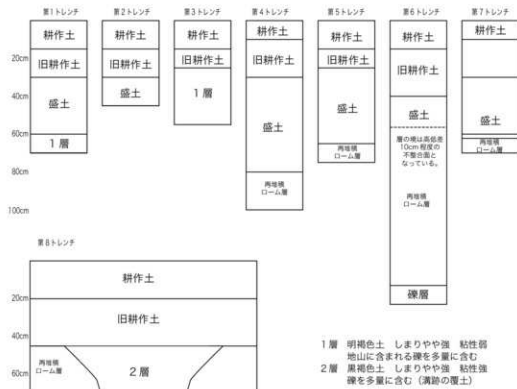
けて完掘状態の平面図作成と写真撮影を行った。全ての遺構を完掘した段階で、調査区全体の写真撮影を行った。遺物は、大型破片については手掘で3次元位置を記録しながら取り上げ、その他のものは遺構単位で取り上げた。また、遺構外の遺物はグリッド単位で取り上げた。

【唐沢山城跡】

本調査

唐沢山城跡は、当初の協定書（平成10年1月15日付）では調査対象箇所とされていないが、平成17年度に唐沢山城跡トンネルの設計確定に伴い、城跡内の「根小屋南端の堅堀」と呼ばれる遺構が路線内にかかったため調査の対象となった。調査前の時点で、旧田沼町教育委員会及び佐野市教育委員会による調査、及び地表面からの観察により堅堀の存在が確実であったため、試掘・確認調査は行わず、平成18年度に本調査を行うこととなった。調査対象面積は9,000㎡である。

調査区内の立木及び下草を刈り払った段階で、発掘調査区全体に国土座標第Ⅸ系（世界測地系）に基づく10m×10mの大グリッドを設定し、現況を航空写真撮影及び測量により記録した。その結果、一部堅堀に沿って土塁が残っていることが確認されたため、堅堀と土塁を横断する幅2mのトレンチを約10m置き



第7図 栃木西遺跡 土層柱状図

に設定し、重機による表土除去を行った後に、トレンチ内を人力により順次掘り下げて堅堀の形状と覆土堆積状況を確認し、写真及び図面作成を行った。堅堀は調査区内西端で北方向に向かって曲がっており、その付近では堅堀内に長方形土坑が数基確認されたため、トレンチを広げて面的な調査を行った。トレンチ内の調査が終了した後に、堅堀内を全体的に掘り下げた。また、堅堀南側に確認された平坦面にも十字方向にトレンチを設定して掘り下げたところ、遺構は確認されなかった。堅堀全体の調査が終了した段階で、再度航空写真撮影及び測量を行った。出土遺物はグリッド毎に取り上げたが、人骨や五輪塔など重要な遺物については、手測により3次元の位置を記録した。

2. 本調査の経過

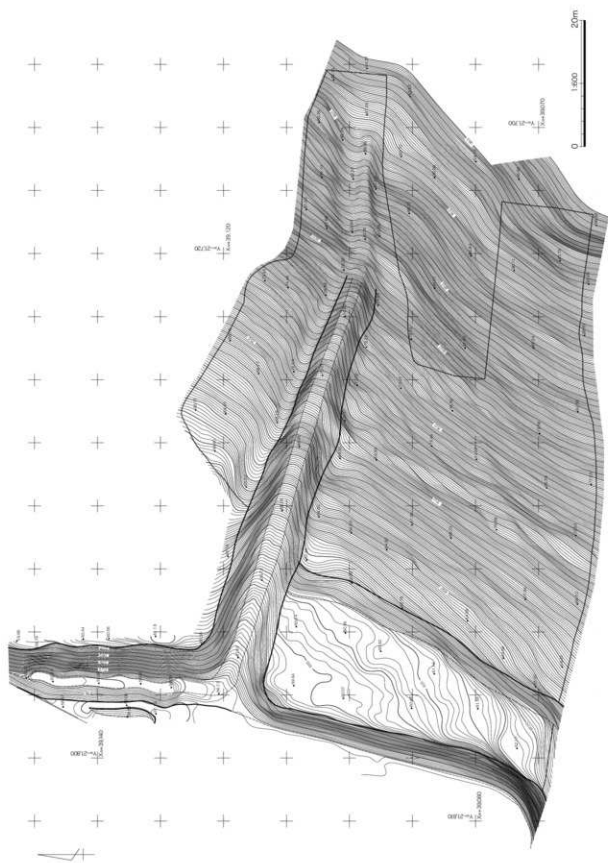
【榊崎渡戸古窯跡】

本調査は、平成18年4月1日から6月20日までの約3ヶ月間実施した。

- | | |
|-------------|------------------------------------|
| 4月1日～5月14日 | 発掘準備 |
| 5月15日 | グリッド設定 |
| 5月16日～21日 | 人力による表土層除去作業 |
| 5月22日～6月12日 | グリッド掘り下げ、写真撮影、遺物取り上げ等 |
| 6月13日 | 調査区内セクション図、平面図作成、完掘状態写真撮影 |
| 6月14日～6月18日 | 調査区内ベルト掘り下げ、補足調査 |
| 6月19日～6月23日 | 現地における調査終了後、出土遺物及び機材搬出、調査事務所プレハブ撤去 |



榊崎渡戸古窯跡 調査風景



第8図 府沢山城跡 調査前の地形航空測量図

榊崎渡戸古窯群の発掘調査で記録された情報は、遺構図面7枚、35mmモノクロ及びリバーサルフィルム各7本、出土遺物は中型バンケース約30箱である。

【榊崎中妻遺跡】

本調査は、平成18年6月26日から8月31日までの約2ヶ月間実施した。

6月26日～6月30日	発掘準備
7月3日～7月7日	重機による表土除去作業
7月10日～7月13日	サブトレンチ掘り下げ、遺構全体図作成
7月14日～7月27日	遺構掘り下げ、平面図作成、写真撮影
7月28日～8月2日	重機による調査区埋め戻し
8月3日～8月31日	現地補足調査、出土遺物及び機材搬出、埋蔵文化財センターにて遺物・図面等の資料整理

榊崎中妻遺跡の発掘調査で記録された情報は、遺構図面4枚、35mmモノクロ及びリバーサルフィルム各4本、出土遺物は小型バンケース1箱である。

【栃本西遺跡】

本調査は、平成17年8月1日から12月28日までの4ヶ月間実施した。岩舟～足利間の試掘・確認調査と同時並行で実施したため、調査は断続的となった。

8月1日～8月19日	発掘準備
8月22日～8月25日	重機による表土除去作業
8月26日～9月23日	発掘調査事務所設営、遺跡周辺現地調査
9月26日	遺構確認作業
9月27日～10月14日	遺構調査、写真撮影、図面作成、遺物取り上げ等
10月17日～10月21日	本調査区全体写真撮影、補足調査
11月14日～11月16日	本調査区埋め戻し
11月17日～11月28日	試掘トレンチ掘削、トレンチ内精査、埋め戻し
11月29日～12月28日	器材及び調査事務所撤収、埋蔵文化財センターにて遺物・図面等の資料整理



栃本西遺跡 調査風景

栃本西遺跡の発掘調査で記録された情報は、遺構図面14枚、35mmモノクロ及びリバーサルフィルム各13本、出土遺物は中型バンケース約10箱である。

【唐沢山城跡】

本調査は、平成18年9月1日から平成19年3月29日までの7ヶ月間実施した。なお、9月から12月上旬は、岩舟～足利間の他遺跡における本調査と併行して担当しながら準備をすすめた。

9月1日～12月15日	本調査準備（岩舟～足利間の本調査と同時並行）
10月26日～10月27日	調査区内立木刈り払い
11月2日	航空写真測量準備
11月7日	航空写真撮影・測量
11月8日	重機搬入・調査区内表土除去

第1章 調査の経緯

- 11月8日～11月16日 仮設階段設置工事
11月21日 基準点測量、発掘調査事務所
設営
- 12月18日～1月31日 人力による豎堀トレンチ掘り
下げ、図面作成、写真撮影
- 2月1日～2月2日 重機による豎堀掘削
- 2月5日～3月1日 人力による豎堀掘り下げ、豎
堀内土坑の図面作成、遺物取
り上げ、写真撮影



唐沢山城跡 調査風景

- 3月2日 航空写真撮影
- 3月5日～3月9日 豎堀全体の写真撮影、器材・発掘調査事務所撤収
- 3月12日～3月29日 補足調査、埋蔵文化財センターにて遺物・図面等の資料整理

唐沢山城跡の発掘調査で記録された情報は、遺構図面 29 枚、35mm モノクロ及びリバーサルフィルム各 17 本、出土遺物は中型パンケース 5 箱である。

3. 整理作業・報告書作成の経過

平成 23 年度に栃本西遺跡・唐沢山城跡・榊崎中妻遺跡・榊崎渡戸古窯跡及び試掘・確認調査結果の整理・報告書作成作業を同時進行で行った。そのため、ここでは本報告書全体の作業経過を記す。

遺物の大半は調査時に洗浄されていたため、23 年 4 月は遺物の注記作業から開始した。

- 4月～5月 遺物注記作業、遺物接合作業、
写真・図面整理
- 6月～7月中旬 遺物実測作業、遺構図版作成作業
- 7月下旬～8月 遺構図版版下作成作業・遺物図版ト
レース作業、遺物観察表作成
- 9月～12月 遺物復元作業、遺構図版トレース作業、
遺物図版版下作成作業、遺物写真撮影、
原稿執筆
- 平成 24 年 1月 印刷業務委託入札、原稿入稿
- 2月～3月 校正作業、遺物収納作業、図面・写真
等記録整理・収納作業



遺物実測作業



トレース作業



遺物復元作業

平成 24 年 3 月の本報告書の刊行を持って、北関東自動車道建設に伴う榊崎渡戸古窯跡・榊崎中妻遺跡・栃本西遺跡・唐沢山城跡の埋蔵文化財発掘調査は全て終了した。

第2章 遺跡の環境

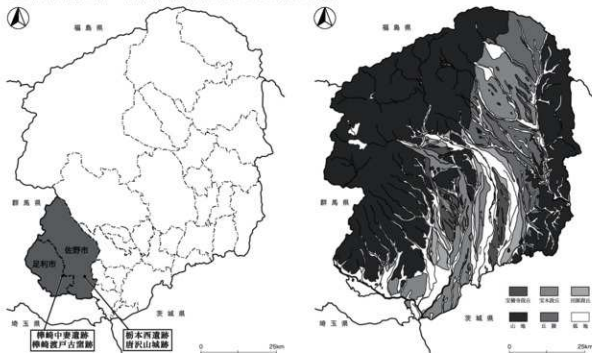
第1節 地理的環境

1. 榑崎渡戸古窯跡・榑崎中妻遺跡周辺の地理的環境

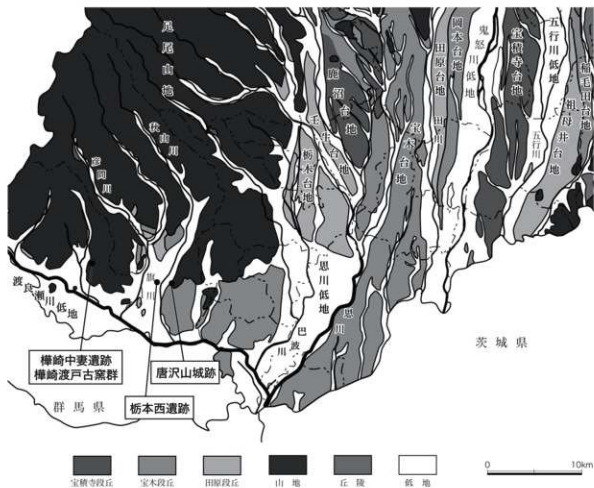
榑崎渡戸古窯跡及び榑崎中妻遺跡は、栃木県足利市榑崎町に所在する。足利市は栃木県南西部に位置し、東及び北は佐野市、南及び西は県境で群馬県太田市・桐生市とそれぞれ接している。市域は、渡良瀬川によって南北に分けられ、北部は足尾山地から連なる山地・丘陵地帯、南部は関東平野の北縁部に在る平野地帯である。北部丘陵地帯では、足尾山地を水源とする榑崎川・名草川・田島川・袋川及びその支流などの中小河川が南流し、平野部で渡良瀬川へと合流する。丘陵の裾野はこれらの河川によって南北に長く開析されている。榑崎中妻遺跡は、このような開析谷のうち、榑崎川によって開析された「榑崎の谷」の入り口から約1 km 北に入った地点、南端に八幡山が連なる丘陵の東側斜面に刻まれた沢の小支谷の奥に位置する。一方、榑崎渡戸古窯跡は、榑崎中妻遺跡の尾根を挟んだ反対側の西側斜面に刻まれた小支谷の奥に位置する。榑崎渡戸古窯跡の標高は約 59 m、榑崎中妻遺跡の標高は約 62.5 m である。両遺跡が位置する丘陵地を取り囲む平地は沖積低地で、その中に暗灰色や白色の粘土層が点在している。また、丘陵の多くはチャートから形成されており、山裾が削られた部分では、その露頭を多く見ることができる。

市域南部では、昭和 40 年代以降に国道 50 号周辺を中心として大規模な市街地化が進んだのに対し、市域北部の丘陵地帯では、山裾を削平して平地にするといった小規模な開発の他は、ほぼ旧地形を残した状態で保たれてきた。現在でも、丘陵に刻まれた谷や沢の平地部分に居住域を設け、沖積低地を水田として利用する景観が残っているが、榑崎渡戸古窯跡や榑崎中妻遺跡での活動が営まれた古代から中世・近世にかけても、このような土地利用がなされていたものと考えられる。

2. 栃本西遺跡・唐沢山城跡周辺の地理的環境



第9図 遺跡の位置と栃木県の地形区分 (S=1/1,250,000)



第10図 遺跡周辺の地形図 (S=1/400,000)

榑嶺西遺跡は榑嶺県佐野市榑嶺町、唐沢山城跡は同市榑嶺町・富士町・吉水町に所在する。平成17年2月28日に行われた佐野市・田沼町・葛生町の合併により約356km²の面積を要する新佐野市が誕生したが、榑嶺西遺跡、唐沢山城跡の調査部分はいずれも旧田沼町域に位置している。

佐野市は榑嶺県南西部に位置し、東は下都賀郡岩舟町、西は足利市、北は鹿沼市、南は県境で群馬県館林市とそれぞれ接している。市域北部は関東平野の北縁部にあたり、北西部から北東部にかけては、足尾山地から南東に向かって延びる山地・丘陵地、および足尾山地の最南端が関東平野に突出して分断丘陵となった三叢山に囲まれている。足尾山地を水源とする彦回川・旗川、秋山川は、これらの山地・丘陵地から平野部へと南流し、市域の南境となる渡良瀬川に合流する。

唐沢山城は、旧田沼町と旧佐野市の境界となっていた唐沢山の山頂部を中心に築かれた山城である。唐沢山は足尾山地から三叢山へと延びる山地の一端を占めており、標高242mの本丸を中心とした一帯は、県立自然公園に指定されている。唐沢山西側では、山裾に沿って秋山川が南流し、山の間には南北に細長い沖積地が形成されている。南側の奈良湖町、富士町周辺では緩やかな山麓であるのに対し、調査地が位置する榑嶺周辺から北側にかけては、急斜面と秋山川支流で開析された深い谷が入り組んでいる。

市域南部は旗川が山地・丘陵地を抜けた点から広がる田沼扇状地及び田沼台地、旗川・秋山川下流域に広がる沖積地(旗川低地)で構成され、市境・県境である渡良瀬川まで、おおよそ標高20～30mの平坦な地形が続いている。榑嶺西遺跡は、旗川低地内に島状に残された微高地上に位置し、周辺には扇状地から伏

流してきた地下水の湧水地が点在している。栃木西遺跡の標高は約53 mである。栃木西遺跡周辺では、古代以降の集落遺跡が存在する微高地と、湧水が作り出す沼地や泉とが入り組んだ景観が昭和30年代頃までは残っていたとされるが、その後の耕地開発事業から現在の市街化事業に至るまでの大規模な開発により、旧地形の大半は失われている。現在では、東北自動車道・北関東自動車道・国道50号などの主要幹線と、それに付随する地方幹線道路が交差する交通の要衝としての側面が強くなりつつある。

第2節 歴史的環境

1. 榊崎渡戸古窯跡・榊崎中妻遺跡周辺の遺跡

榊崎渡戸古窯跡・榊崎中妻遺跡が位置する足利市北東部では、縄文時代以降の遺跡が数多く確認されている。ここでは、今回の調査で遺構・遺物が確認された古墳時代後期、中世前半における発掘調査成果を中心に、両遺跡周辺の歴史的概要を示す。

縄文時代 遺跡周辺で確認された最も古い遺物は、菅田西根遺跡(28)の燃糸土器である。遺構に伴うものではないが、当該時期の遺跡が丘陵や標高の高い台地上に多いことに対し、沖積低地内微高地上からの出土例として注目される。榊崎渡戸遺跡に隣接する神畑遺跡(3)では、前期前葉～中葉にかけての竪穴住居跡が確認されている。また、田島舟遺跡(5)では、縄文時代前期中葉(黒浜式)の集石遺構1基と、黒浜式～諸磯式を中心とする土器とそれに伴う各種石器が包含層から出土している。縄文中期には、県内全域で遺跡数が増加するのに反比例するように足利市内では遺跡数が減少するが、後期に入ると再び増加へ転じる。これは、後期以降の遺跡の立地が、それまでの台地中央部から、低地を望む台地縁辺や沖積低地内の微高地へと変化することに起因するものと考えられる。前述の神畑遺跡では、北関東自動車道に伴う発掘調査によって、後期後半から晩期にかけての石鏃製作址を伴う集落が確認されている。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、縄文時代終末に引き続いて低地やそれを望む低台地縁辺に立地すると予測されるが、発掘調査事例が少なく不明な点が多い。遺跡周辺では、菅田西根遺跡(28)で弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓や、弥生時代中期にさかのぼる可能性のある水田跡が竪穴住居跡と共に確認されている。田島舟遺跡(5)では、中期後半～後期の竪穴住居跡3軒をはじめとして、円形周溝遺構や土坑などが多数確認されている。

古墳時代 古墳時代の足利市域は、毛野地域の中心として大和政権の影響下に入る。古墳時代前期には、足利市南部の矢場川流域を中心に藤本観音山古墳や小曾根浅間山古墳(遺跡地図外)といった首長墓が築造される。遺跡周辺では、神畑遺跡(3)で前期の方形周溝墓が確認されている。中期にはいると、群馬県太田市に東国最大の前方後円墳である太田天神山古墳が出現し、これを築造した首長が毛野一帯を支配するようになる。古墳の分布域は市域中央部まで広がり、勸農塚古墳(93)、助戸十二天古墳(85)などの帆立貝型古墳が築造される。遺跡周辺では、神畑遺跡(3)で5世紀終わり頃の前方後円墳・神畑1号墳が築造されている。後期に入ると、東部毛野地区や、北部丘陵地帯に群集墳が築造され、その数は爆発的に増加する。特に榊崎渡戸古窯跡・榊崎中妻遺跡が位置する北郷地区は、市内で最も多くの古墳が確認されている地域であり、菅田古墳群(4)はこのような後期群集墳を代表する古墳群である。菅田古墳群では約50基の前方後円墳・円墳が確認されているが、北関東自動車道建設に伴い13基が調査された。遺跡周辺ではその他にも、赤坂古墳群(12)、坊山古墳群(49)、馬坂古墳群(16)といった後期群集墳が密集して存在する。また、北郷地区を中心とする北部丘陵地帯の山裾には、この時期から須恵器窯が作られる。中でも馬坂古窯跡(17)は7世紀初頭までさかのぼる窯跡とされており、今回調査された榊崎渡戸古窯跡もこれらの窯跡と共に、周辺の後期古墳に須恵器を供給した窯跡である可能性が高い。

古墳時代の集落跡は調査例が少なく不明な点が多いが、概ね古墳の分布や増減と連動した動態を示すと想

定されている。前期は市城南部の矢場川流域を中心に分布が見られる。中期には市域中心部へと分布が拡大し、後期に入ると群集墳の増加と共に集落遺跡も急増し、市内全域で確認されるようになる。遺跡周辺では、田島持舟遺跡（5）で古墳時代中期～後期の竪穴住居跡が約50軒確認されており、大規模な集落であったことが明らかとなった。

奈良・平安時代 奈良時代にはいと、足利市域も律令制の下に組み込まれ、下野国足利郡・梁田郡となる。このうち足利郡の役所である足利郡衙は国府野遺跡、梁田郡衙は中里阿弥陀前遺跡にそれぞれ推定されている。このうち国府野遺跡（84）は発掘調査により基壇、掘立柱建物跡、柵列等の遺構が検出されている。集落の調査は古墳時代同様事例が少ないが、国府野遺跡の東に隣接する助戸・勸農遺跡（89）では8世紀末～9世紀にかけての集落が検出されており、郡衙と関わりの深い集落である可能性が指摘されている。遺跡周辺では田島持舟遺跡（5）で20軒近い竪穴住居跡が確認されている。また、和田遺跡（6）では7世紀代のもも含め、古代の竪穴住居跡が94軒確認されるなど、少ない事例ながらも集落の様相が明らかになりつつある。また、遺跡周辺の平野部には条里制が敷かれ、江川・利保条里跡（35）などにその名残を見ることができる。古墳時代後期から生産が開始された北部丘陵地帯の窯跡では、引き続き須恵器や瓦の生産が行われている。中でも、前述した国府野遺跡から出土した瓦は、田島岡古窯跡（34）で生産されたことが発掘調査により明らかになっている。

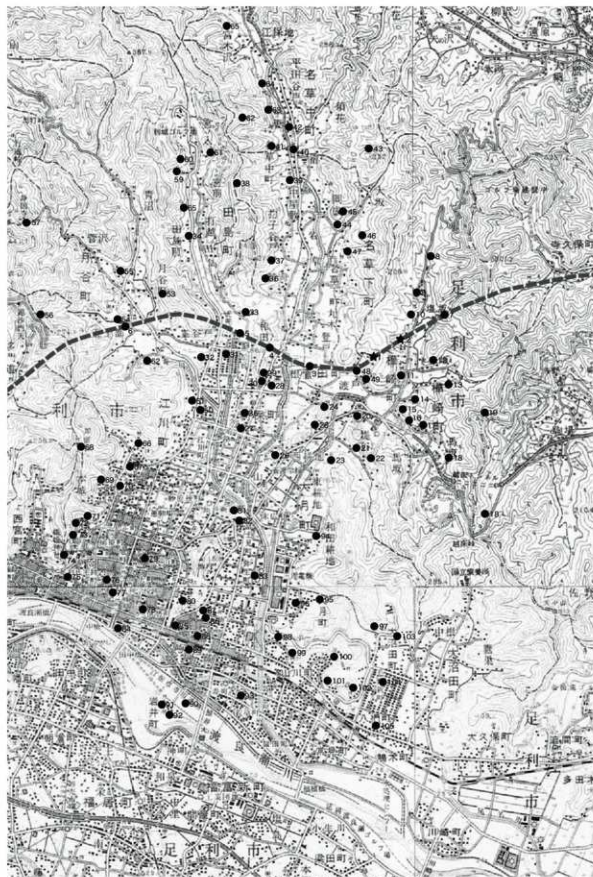
中世 古代末期、足利市域が含まれる足利庄を領有した源義家の流れを組む源姓足利氏と、足利城（68）を拠点とした藤原秀郷の流れを組む藤姓足利氏（足利惣領家）が武士団として台頭し、争うようになった。その後、源平合戦を経て平氏側に着的藤姓足利氏は滅亡し、源氏側についた源姓足利氏は鎌倉幕府の有力御家人になると共に足利市域の領主としての地位を築いた。当主の足利義兼は足利における政治上の拠点となる居館（現在の鍬阿寺）（76）を建て、また、奥州征伐の戦勝祈願のために榊崎の地に榊崎寺（法界寺）（11）を創建した。その後、奥州で毛越寺、中尊寺などの浄土庭園を目の当たりにした義兼は、榊崎寺に園池を中心とした浄土庭園を建てた。榊崎寺は義兼の子孫である足利氏の隆盛と共に繁栄し、南北朝時代に最盛期を迎えたが、15世紀中頃に降を境に徐々に衰退していき、明治維新後の神仏分離令により廃寺となった。

2. 栃本西遺跡・唐沢山城跡周辺の遺跡

栃本西遺跡（2）が位置する田沼扇状地内は遺跡の分布がまばらな地域であるが、近年の区画整理事業や北関東自動車道をはじめとする道路建設事業等により、遺跡発掘調査が増加している地域でもある。一方、唐沢山城跡周辺では、小規模な開発は散発しているものの、基本的に唐沢山城の史跡整備に伴う発掘調査が主体となっている。ここでは、それらの成果を元として、主として田沼扇状地の歴史的な概要を示すこととする。

旧石器時代 傾城塚遺跡（65）では、発掘調査に伴って尖頭器2点と剃片1点が発見されている。いずれも層位が伴うものではないが、田沼扇状地内で唯一出土位置がわかる資料として貴重な事例である。その他に、傾城塚遺跡の北方約400mに位置する大森遺跡（67）で礫器1点、陸岸坊古墳（82）南東の陸岸坊遺跡で剃片が採集されている。田沼扇状地は砂礫層を基盤とし、その上に粘土化したローム層が堆積しているため、旧石器時代の居住空間としては適さない環境であったと考えられる。しかしその一方で、扇状地内には湧水点が多く存在しており、傾城塚遺跡や大森遺跡のそばにも「御目洗井戸」とよばれる湧水点がある。旧石器時代の遺跡は、このような湧水点周辺に形成されていた可能性が高い。扇状地外に範囲を広げると、越名沼周辺では後期旧石器時代の大規模な環状ブロックが確認された上林遺跡（87）など、田沼扇状地の状況とは異なり、ツール類が豊富に出土する遺跡が点在している。

縄文時代 縄文時代に入ると、特に栃本地区や吉水地区で遺跡が増加する。しかし、単発的に遺物や遺構が発見されているのみで、集落はいまだ確認されておらず、旧石器時代に引き続き、居住空間としては適さな



第11図 榊崎渡戸古窯跡・榊崎中妻遺跡周辺の遺跡

第2章 遺跡の環境

第2表 榊崎渡戸古窯跡・榊崎中妻遺跡周辺遺跡一覧表

県番号	遺跡名	種別	時代	県番号	遺跡名	種別	時代
1	榊崎渡戸古窯跡	窯跡	古墳	54	4904 月谷遺跡	散布地	縄文
2	4882 榊崎中妻遺跡	散布地	古墳～中世	55	4906 月谷古墳群	古墳	古墳
3	4877 神徳遺跡	集落跡	縄文～中世	56	4947 大岩山毘沙門堂及び十二坊跡	寺院跡	奈良～中世
4	4872 菅田古墳群	古墳	古墳	57	4946 行道山淨因寺	寺院跡	中世・江戸
5	4873 田島持舟遺跡	集落跡・古墳	縄文～近世	58	4834 田島宮前遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
6	4908 和田遺跡	集落跡	古墳～平安	59	4840 東光寺裏山古窯跡	窯跡	奈良・平安
7	5251 塩取遺跡	散布地	古墳・奈良	60	4867 堂平遺跡	散布地	奈良・平安
8	5249 榊崎入谷遺跡	散布地	古墳～中世	61	4842 田島宮入遺跡	散布地	古墳～平安
9	5250 入谷古墳群	古墳	古墳	62	4859 名草城跡	城館跡	中世
10	4883 榊崎八幡宮北遺跡	散布地	古墳～平安	63	4858 名草清水遺跡	散布地	縄文・古墳・奈良
11	4885 榊崎寺(法界寺)跡	寺院跡	中世	64	4857 江保地遺跡	散布地	奈良・古墳
12	5252 赤坂古墳群	古墳	古墳	65	4856 大橋古墳群	古墳	古墳
13	5253 榊崎城跡	城館跡	中世	66	4912 本城一丁目古墳群	古墳	古墳
14	4888 足利萬古窯跡	窯跡	近世	67	4913 本城一丁目遺跡	散布地	縄文・弥生・平安
15	4894 馬塚遺跡	散布地	縄文～平安	68	4937 足利城跡	城館跡	平安・中世
16	4893 馬塚古墳群	古墳	古墳	69	4916 本城二丁目古墳群	古墳	弥生・古墳
17	5258 馬塚古窯跡	窯跡	古墳～平安	70	4915 心通院裏遺跡	散布地	弥生
18	5257 越味遺跡	散布地	古墳	71	4917 本城三丁目古墳群	古墳	古墳
19	5254 赤見駒場城跡	城館跡	中世	72	4927 法楽寺跡	寺院跡	中世
20	4891 渡戸古墳群	古墳	古墳	73	4902 徳正寺跡	寺院跡	奈良・平安
21	4895 堤谷遺跡	散布地	古墳	74	4918 機神山古墳群	古墳	古墳
22	4892 堤谷古墳群	古墳	古墳	75	4901 新田町遺跡	散布地	縄文・古墳・奈良
23	4900 東耕地古墳群	古墳	古墳	76	4922 足利氏居館跡及び鏡阿寺十二坊跡	居館跡・寺十二坊跡	中世・近世
24	4889 榊崎山城跡	城館跡	縄文・江戸	77	4921 史跡足利学校跡	学校跡	中世・近世
25	4899 西耕地遺跡	散布地	縄文～平安	78	6126 大町車塚古墳	古墳	古墳
26	4890 榊崎山西耕地古墳群	古墳	古墳	79	4923 丸山耕地遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳
27	4928 伊保南遺跡	古墳	弥生～平安	80	4924 助戸山古墳群	古墳	古墳
28	4876 菅田西根遺跡	集落跡	縄文～中世	81	4925 助戸新山古墳群	古墳	古墳
29	4875 北郷小裏遺跡	散布地	縄文	82	4926 尻無山城跡	城館跡	中世
30	4903 足利藩陣屋跡	館跡	近世	83	4930 助戸・大月条里跡	条里跡	奈良・平安
31	4874 赤松古遺跡	散布地	弥生・奈良・平安	84	6155 国府野遺跡	官衙跡	奈良・平安・中世
32	4878 岩花遺跡	散布地	縄文・古墳～平安	85	6128 助戸十二天古墳	古墳	古墳
33	4871 田島古墳群	古墳	古墳	86	6133 助戸車塚古墳	古墳	古墳
34	4870 田島岡古窯跡	窯跡	奈良・平安	87	6132 助戸大車塚古墳	古墳	古墳
35	4929 江川・利保条里跡	条里跡	奈良・平安	88	6134 助戸宮脇館跡	城館跡	中世
36	4864 名草持舟遺跡	散布地	古墳～平安	89	6154 助戸・鈴鹿遺跡	集落跡	縄文～平安
37	4863 谷子谷戸古墳群	古墳	古墳	90	6156 助鹿遺跡	散布地	縄文
38	4865 石尊山城跡	城館跡	中世	91	6160 岩井山古墳群	古墳	古墳
39	4848 名草殿入遺跡	散布地	古墳	92	6161 助鹿城跡	城館跡	中世
40	4862 南氏居城跡	城館跡	中世	93	6153 助鹿車塚古墳	古墳	古墳
41	4860 殿入古墳群	古墳	古墳	94	4931 和田耕地古墳群	古墳	古墳
42	4861 名草中妻遺跡	散布地	古墳～平安	95	4932 南耕地古墳群	古墳	古墳
43	4847 本笠山城跡	城館跡	中世	96	6136 南耕地遺跡	散布地	弥生～平安
44	4866 岡成古墳群	古墳	古墳	97	6142 西根古墳群	古墳	古墳
45	4841 岡成遺跡	散布地	古墳～平安	98	6137 山川遺跡	散布地	縄文
46	4868 丸木古墳群	古墳	古墳	99	6139 宮先古墳群	古墳	古墳
47	4869 上丸木遺跡	散布地	縄文・弥生	100	6143 山川長林寺遺跡	散布地	縄文
48	4886 渡戸遺跡	散布地	古墳～平安	101	6149 高寂寺古墳群	古墳	古墳
49	4887 坊山古墳群	古墳	古墳	102	6145 八幡古墳群	古墳	古墳
50	4911 江川遺跡	散布地	古墳～平安	103	6146 大沼田西根遺跡	散布地	縄文
51	4910 江川古墳群	古墳	古墳	104	6147 大沼田条里跡	条里跡	奈良・平安
52	4909 和田南遺跡	散布地	古墳～平安	105	6251 八幡城跡	城館跡	中世
53	4905 高松坊跡	寺院跡	中世・近世				

い環境下にあったと考えられる。大まかには、唐沢山周辺や扇状地北側の丘陵およびその裾部分で早期から前期、平地部分で中期以降の遺物が確認される傾向にあるが、本書に掲載した吉水遺跡(6)の試掘調査では前期黒沢式の破片が採集されており、平地でも前期以前の遺跡が存在する可能性がある。傾城塚遺跡(65)では、縄文早期～前期の所産と推測される陥し穴状遺構17基と、縄文時代から現代まで「御目洗井戸」湧水点を源流とする小川として存在していたと考えられる埋没谷1箇所が確認されているが、いずれも時期が明確な遺物は伴っていない。包含層からは、縄文早期から後期の土器片と、打製石斧・石鏃などの石器が出土している。周辺地区に目を転じると、越名沼周辺では屋敷東Ⅱ遺跡(91)で燃糸文明の住居跡、上林遺跡(87)や下林遺跡(89)で前期の住居跡が確認されている。また、馬門南遺跡(104)では中期の袋状土坑、四ツ道北遺跡(90)では後期前半の住居跡等が確認されるなど、各時期の集落が多く確認されている。また、赤見地区の北の内遺跡(11)では、中期の集落が確認されている。

弥生時代 弥生時代の遺跡は全体的に少ない傾向にあるが、田沼扇状地内でも現在まで遺構・遺物とも確認されていない。周辺地区では、中期の再葬墓群として著名な出流原遺跡(9)が赤見地区に所在する。

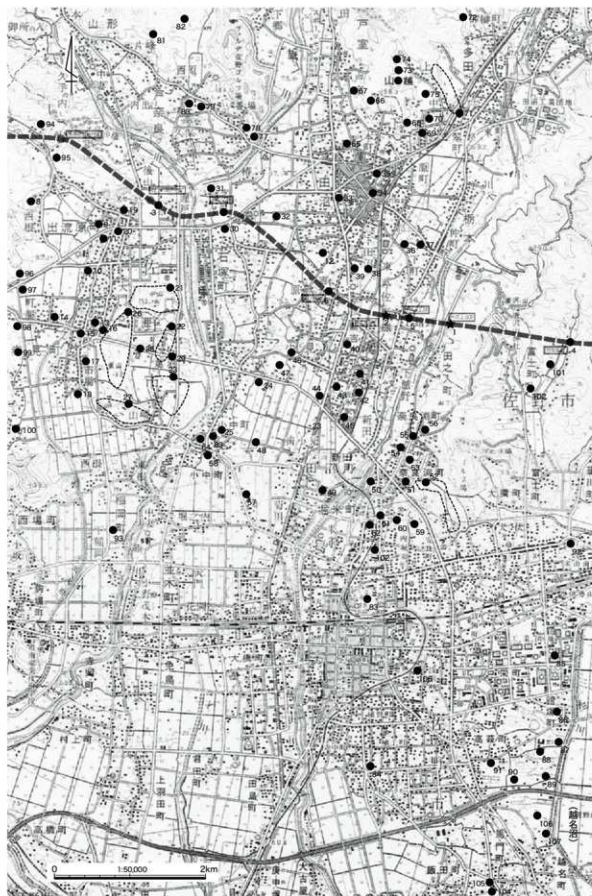
古墳時代 古墳時代前期に入ると、遺跡が位置する栃木県南西部は毛野地域の中心となり、田沼扇状地の南にあたる平野部に前方後円墳、前方後方墳が多く築造される。主要なものとしては、前方後方墳である松山古墳(107)、馬門南遺跡で発見された前方後円墳である馬門愛宕塚古墳(105)などがある。また、工業団地内遺跡(85)や上林Ⅱ遺跡(88)では方形周溝墓が確認されている。主要な集落遺跡としては、馬門愛宕塚古墳に隣接する馬門南遺跡(104)、工業団地内遺跡(85)、堀米遺跡(61)などがあげられる。

中期になると、前項で述べたとおり群馬県太田市に太田天神山古墳が出現し、それまでの首長墓は円墳化する。この時期の代表的な古墳としては唐沢山の南端山麓に位置する八幡山古墳(59)、主要な集落遺跡としては若宮遺跡(84)などが確認されている。また、田沼扇状地と台地の境に位置する人丸神社裏遺跡(25)では、大型高塚が多数出土した第40号竪穴住居跡を含む大規模な集落が確認されている。

後期に入ると、再び首長墓が上毛野・下毛野に対応する東西の2地域に分かれて群集墳が築造されるようになる。それに伴い、田沼扇状地の西側に接する台地上にも、トコチ山古墳(24)、五箇古墳群(23)、蓮沼古墳群(22)、四十八塚古墳群(3)などの群集墳が密集して作られる。主要な集落遺跡は上敷遺跡や人丸神社裏遺跡、堀米遺跡、若宮遺跡など、中期から続くものが多い。この時期になると田沼扇状地内でも遺跡が確認されるようになり、古墳時代後期の住居40軒などが確認された傾城塚遺跡(65)、住居4軒が確認された寺之後遺跡(44)の発掘調査が行われている。2遺跡とも、扇状地内に島状に残る小規模な微高地上に営まれた集落である。この地域では古墳時代以降の散布地が点在していることから、同様に微高地上に所在する集落が存在している可能性が高い。

奈良・平安時代 佐野市域は、律令制下では下野国安蘇郡に含まれる。『後名類聚抄』によれば、安蘇郡内には四つの郷が存在し、遺跡周辺に残る「小見」の地名から、現在の北関東自動車道の南側一帯が「麻統(おみ)郷」の推定地とされている。古墳時代に引き続き古代の集落が確認されている人丸神社裏遺跡(25)、寺之後遺跡(44)は、この「麻統郷」に属する集落である可能性が高い。一方、「安蘇郡」に属する地域とされる越名沼周辺や旗川流域では、馬門南遺跡(104)や工業団地内遺跡(85)、ゴロノミヤ遺跡(86)、館之前遺跡(93)といった大規模集落が形成されている。

唐沢山城の東側にあたる三龜山東山麓には、律令制下で発展した一大産業遺跡群である三龜山窯跡群が展開する。窯跡群は6世紀後半から生産を開始していると想定されるが、発掘調査で確認された北山・八幡窯跡群は7世紀末から8世紀初頭に須恵器生産を開始しており、その後に続く周辺の窯跡群と共に、県内各地へ須恵器の供給を行っている。さらに8世紀にはいと町屋窯跡群等で瓦の生産が始まり、下野国分寺・下野国府へ瓦を供給したことが明らかとなっている。北関東自動車道建設に伴い調査が行われた寂光沢窯跡では、奈良時代後半から平安時代前期(8世紀後半から9世紀前半)の窯跡3基が確認され、初期の瓦生産



第12図 栃本西遺跡・唐沢山城跡周辺の遺跡

第3表 栃木西遺跡・唐沢山城跡周辺遺跡一覧表

県番号	遺跡名	種別	時代
1	5215 唐沢山城跡	城跡跡	中世・戦国
2	- 栃木西遺跡	集落	平安
3	5339 四十八塚古墳群	古墳	古墳
4	5238 行屋遺跡	不明	中世?
5	- 栃木東遺跡	散布地	古墳～平安?
6	- 古水遺跡	散布地	縄文
7	- 芝宮南遺跡	散布地	古墳～平安?
8	5363 源竜寺裏遺跡	散布地	縄文・奈良～平安
9	5341 出流原遺跡	集落	縄文・弥生
10	5306 下千道跡	散布地	縄文・古墳～平安
11	5343 北の内内遺跡	集落跡	縄文・古墳～平安
12	- 田沼城跡	城跡跡	中世
13	5300 藤小路城跡	城跡跡	奈良～平安～中世
14	5360 赤見城跡	城跡跡	室町
15	5287 松葉遺跡	集落	古墳～中世
16	5285 千代岡北遺跡	散布地	縄文・古墳～平安
17	5278 赤見市場古墳	古墳	古墳
18	5271 十三法塚古墳群	古墳	古墳
19	5340 出流原石山古墳	古墳	古墳
20	5344 宿西2号墳	古墳	古墳
21	5316 中山古墳群	古墳	古墳
22	5317 藤沼古墳群	古墳	古墳
23	5319 五箇古墳群	古墳	古墳
24	5331 土卜子山古墳	古墳	古墳
25	5327 八丸神社裏遺跡	集落跡	縄文・古墳～平安
26	5281 嵐山古墳群	古墳	古墳
27	5320 愛宕山古墳群	古墳	古墳
28	5351 藤沼遺跡	集落跡	平安
29	5318 向原遺跡	集落跡	平安
30	5334 十三墓塚古墳	古墳	古墳
31	5073 芝宮遺跡	散布地	奈良～平安
32	5335 密子原古墳	古墳	古墳
33	5200 二ツ山遺跡	散布地	縄文
34	5199 一飯塚古墳	古墳	古墳
35	5198 稲崎久保古墳	古墳	古墳
36	5202 五通A遺跡	散布地	縄文
37	5203 五通B遺跡	散布地	縄文
38	5204 六通遺跡	散布地	縄文
39	5205 杉内遺跡	散布地	縄文
40	5206 興聖寺城(清水城)跡	城跡跡	鎌倉～室町
41	5208 五平前遺跡	散布地	縄文
42	6839 清水塚遺跡	散布地	縄文
43	5210 東明寺古墳	古墳	古墳
44	5209 寺之後遺跡	集落跡	古墳～平安
45	5211 一丁田遺跡	散布地	縄文～平安
46	5333 小見遺跡	散布地	縄文
47	5332 小見城跡	城跡跡	室町
48	3437 中堰遺跡	散布地	奈良～平安
49	6392 権道寺裏寺跡	寺跡跡	中世
50	6393 上通西遺跡	散布地	古墳～平安
51	6396 下田遺跡	散布地	古墳～平安
52	6415 榎米古墳群	古墳	古墳
53	6412 中道遺跡	散布地	不明
54	5246 奈良原遺跡	散布地	古墳～平安

県番号	遺跡名	種別	時代
55	5244 奈良岡古墳群	古墳	古墳
56	5245 大江山古墳群	墓跡	鎌倉～室町
57	6284 粟沼田遺跡	散布地	奈良～平安
58	6283 穴田遺跡	散布地	奈良～平安
59	6411 八幡山古墳	古墳	古墳
60	6397 茶臼山古墳	古墳	古墳
61	6394 榎米遺跡	集落跡	弥生～平安
62	6395 上通東遺跡	散布地	奈良～平安
63	5326 後ノ道跡	散布地	古墳～平安
64	5325 小中津跡	城跡跡	室町
65	5194 榎城塚遺跡	集落・交通	縄文・古墳・中世
66	5192 愛宕山古墳	古墳	古墳
67	5193 大森遺跡	散布地	旧石器
68	5195 三通遺跡	散布地	縄文
69	5196 深根遺跡	散布地	古墳～平安
70	5197 糠子尾遺跡	散布地	古墳～平安
71	5093 山越古墳群	古墳	古墳
72	5087 石道跡	散布地	古墳～平安
73	5089 菊水道跡	散布地	縄文
74	5090 観治入遺跡	散布地	古墳～平安
75	5178 竜谷遺跡	散布地	縄文・古墳～平安
76	5091 新瀬川遺跡	散布地	古墳～平安
77	5066 磯山古墳群	古墳	古墳
78	5065 磯山城跡	城跡跡	中世・戦国
79	5062 烏谷戸城跡	城跡跡	中世・戦国
80	5056 中妻古墳群	古墳	古墳
81	5048 片峰B遺跡	散布地	弥生
82	5049 開闢坊古墳	古墳	古墳
83	6406 佐野城(春日御城)跡	城跡跡	近世
84	6391 若宮遺跡	集落跡	縄文・古墳～中世
85	6497 工業団地内遺跡	集落跡	縄文・古墳～中世
86	6525 コロノミヤ遺跡	集落跡	縄文・古墳～中世
87	6534 上林遺跡	集落跡	旧石器
88	6533 上林B遺跡	集落跡	古墳・縄文
89	6536 下林遺跡	集落跡	旧石器・縄文
90	6535 四ツ道北遺跡	集落跡	旧石器・縄文
91	6537 屋敷東遺跡	集落跡	古墳～平安
92	12 米山古墳群	古墳	古墳
93	6209 館之前遺跡	集落跡	奈良～平安
94	5365 大平塚群	塚	中世
95	5364 八木田遺跡	散布地	縄文
96	5357 鶴崎古墳群	古墳	古墳
97	5356 清明塚古墳	古墳	古墳
98	5263 町屋古墳群	古墳	古墳
99	5265 八長寺塚寺	寺跡跡	中世
100	5268 市の沢古墳群	古墳	古墳
101	5239 ゼニゴテ塚跡	塚跡	奈良～平安
102	5240 上富士塚跡	塚跡	奈良～平安
103	6400 榎米城跡	城跡跡	中世(鎌倉)
104	6576 聖門南遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳
105	6575 聖門愛宕塚古墳	古墳	古墳
106	6557 エダコ遺跡	集落跡	旧石器・縄文・古墳・中世
107	6585 松山遺跡	集落跡	縄文・古墳
108	6486 阿曾沼城跡	城跡跡	中世(鎌倉～室町)

第2章 遺跡の環境

から須恵器生産主体へと移行する状況が明らかになった。

栃本西遺跡(2)の集落が機能していた10世紀には、後に安蘇郡一帯を支配する佐野氏ゆかりの人物として著名な藤原秀郷が下野国内で勢力を保持していたとされる。しかし、10世紀の集落は栃本西遺跡以外には寺之後遺跡(44)で確認されているのみで、不明な点が多い。遺跡の立地も、前代同様に沖積地内の狭い微高地上に展開するものが多いと予測される。

中世 古代末期になると、佐野市域では藤原秀郷の子孫から別れた小山氏・足利氏の二大勢力が拮抗する。12世紀末、源平合戦を経て源氏側の小山氏は幕府の有力御家人となった一方、平家側についた足利惣領家の藤姓足利氏は滅亡した。しかし、藤姓足利氏末流にあたる佐野氏は小山氏側に加担し、鎌倉御家人として現在の佐野市域を支配するようになったとされる。そのため佐野市域には、これらの有力氏族に関わる鎌倉～戦国期の中世城館が数多く残る。遺跡周辺には主要なものだけでも、清水城(興聖寺城)跡(40)、小見城跡(47)、堀米城跡(103)、田沼城跡(12)、小中館跡(64)、雙山城跡(78)などが確認されている。

戦国期に一帯を支配した佐野氏の本拠地とされるのが、今回調査された唐沢山城跡(1)である。15世紀末に佐野盛綱が築城したと伝わるが、現在までの発掘調査では、その年代は明らかになっていない。現在、山頂付近に見られる高石垣などの遺構は天正十八(1590)年以降の改修によるものと考えられているが、改修から間もない慶長七(1602)年に、最後の城主佐野信吉が佐野城(春日岡城)(83)へ移城したことを期に廃城されたとされる。佐野城はその僅か12年後の慶長十九(1614)年に、佐野氏の改易と共に廃城の道をたどることとなった。

城館以外の中世遺跡として特筆されるのが、道路状遺構と共に地下式坑、方形竪穴などが数多く確認された傾城塚遺跡(65)である。道路状遺構を中心とした一連の遺構群は13世紀～14世紀にかけて成立したもので、文献史学・考古学両分野で不明な点が多いとされる中世前半期において、ムラの景観を理解するための貴重な調査事例といえる。

(参考文献)

- 足利市教育委員会 1989『足利市遺跡地図』
- 足利市教育委員会 1989『足利市文化財総合調査総括報告書』
- 足利市教育委員会 1995『法界寺跡発掘調査概要』足利市埋蔵文化財調査報告第29集
- 足利市教育委員会 2008『史跡神崎寺跡(法界寺跡)発掘調査概要Ⅱ』足利市埋蔵文化財調査報告第57集
- 佐野市教育委員会 1990『佐野市遺跡地図』
- 佐野市教育委員会 2007『佐野市の文化財保護』佐野市文化財調査報告第4集
- 佐野市教育委員会 2010『傾城塚遺跡』佐野市文化財調査報告第26集
- 栃木県教育委員会 1997『栃木県遺跡地図』

第3章 樺崎渡戸古窯跡の調査

第1節 調査の概要

樺崎渡戸遺跡は、足利市北東部の足尾山地末端に位置する八幡山・琴平山の西側斜面にあたり、樺崎川によって開析された小支谷の頂点に位置する。この小支谷のとば口部分には、周知の埋蔵文化財包蔵地である渡戸遺跡（県遺跡番号 4886・足利市遺跡番号 113）が位置し、摩耗した土師器や石器の剥片の散布が確認されている（足利市文化財総合調査班 1981）。また、渡戸遺跡の東側、八幡山の南西麓には坊山古墳群（県遺跡番号 4887・足利市遺跡番号 114）が所在し、円墳 5 基が確認されている。八幡山の反対側となる東側斜面には、中世を代表する豪族武士団足利氏の氏寺跡・廟所跡である国史跡樺崎寺跡（法界寺跡・県遺跡番号 4885・足利市遺跡番号 115）が位置している。

今回の調査では、須恵器窯の灰原跡と考えられる遺物集中地区が発見された。出土した遺物は 7 世紀初頭から前半に位置づけられるもので、遺跡周辺に位置する馬坂古窯群・田島岡古窯群よりも古く、また、栃木県内で発掘調査が行われた須恵器窯跡の中では最も古い年代のものとなる。発掘調査区内の山麓斜面は発掘調査以前に大きく削られており、その断面を観察したところ窯本体や灰原の痕跡は確認できなかったことから、窯本体は地形変化によって失われたか、調査区に隣接する八幡山裾部に作られているものと推定される。



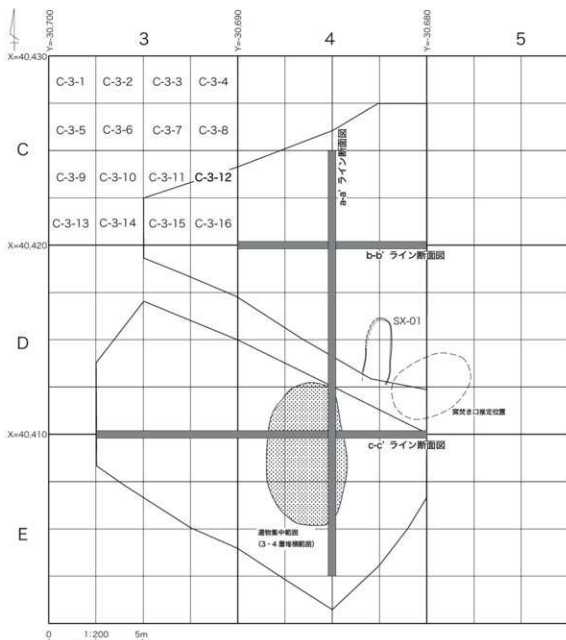
第13図 樺崎渡戸古窯跡位置図（足利市遺跡地図 1989 を一部改変）

第3章 榊崎渡戸古窯跡の調査

また、地形的には山に挟まれた狭い小支谷に位置していることから、大規模な窯跡群が展開する可能性は低く、出土遺物の時期からも作業期間は非常に短いものであったと考えられる。

灰原跡の中では、性格不明の溝状遺構 SX-01 が確認された。灰原跡の中でも特に遺物が集中していたが、遺構の特徴から、窯に関わる遺構であるか否かは判断できない。出土遺物の多くは、SX-01 外から出土している破片と接合、または同一個体と考えられる破片だが、この遺構に集中して出土した遺物の中に土師製の板状品がある（第 42・43 図）。須恵器製同様にタタキやカキメが施されているが板状を呈するもので 1 点を除き還元焼成が行われていない。おそらく埴またはそれに類するものと考えられる。

窯跡に属する遺物の他に、中世の瓦や中世から近世にかけての生活雑器などが少量確認された。瓦は榊崎寺で出土しているものと同じ特徴を持ち、14 世紀半ばから後半に位置づけられる。また、土師質小皿や内



第 14 図 榊崎渡戸古窯跡 調査区全体図及びグリッド配置図

耳土器は、その多くが中世段階のものである。調査区北側にあたる小支谷の最奥部は、樟崎寺を建立した理真上人の隠居寺とも言われる「宗源寺」の推定地にもあたり（足利市教育委員会 1995・足利市文化財愛護協会 2009）、これらの遺物がそれに由来する可能性もある。

第2節 発見された遺構と遺物

1. 遺物集中区（灰原跡）の調査

調査の方法

今回対象となった調査区では全体的に須恵器片が分布していることが試掘調査の結果から予想されたため、灰原跡の形状と範囲の把握を目的として、設定されたグリッド毎に水平に掘り下げながら併せて旧地形の確認を行った。しかし、予想以上に宅地や畑・水田の造成に伴う地形改変が著しく、旧地形を復元することは困難だった。グリッド断面での土層観察（第15図）から、おそらく、調査区北東から南西に向かって緩やかに傾斜していたと考えられる。また、現況では調査区中央のD3-1グリッドからD4-16グリッドにかけて北西から南東に延びる地境の北と南で約1mの段差があるが、その上段側（D4-1～8及びD4-13・14グリッド；以下「調査区北側」とよぶ）で表土層直下に約10cm厚の整地層が確認された。この整地層は、下段側（D4-13～16およびE4グリッド；以下「調査区南側」とよぶ）では確認されていないため、上面の畑および宅地造成に伴う比較的新しい時代の整地の痕跡と考えられる。地山と考えられる土層（9層）の上面レベルは、調査区南側と北側で約1.3mの高低差があるが、それぞれの調査区内では、南に向かって僅かに傾斜しているのみである。よって、調査区を南北に分ける地境の段差が設けられる以前も、地形がこの箇所できき下がっていたと推測され、その段差を利用して窯跡を設けていた可能性も否定できない。いずれにせよ、今回の調査結果のみでは判断材料に乏しく、第14図に示した窯跡本体の位置については、全くの推測と言わざるを得ない。なお、現況では高速道路の北側に山裾の緩斜面が残っており、今後新たに須恵器窯が確認される可能性もある。

グリッドの掘り下げは、遺物の出土状況に合わせて暗黄褐色土層（9層）まで掘り下げた部分と、黒色土層中（6～8層）の遺物がなくなる深さまで掘り下げた部分に分かれるが、特に地形に変化は見られなかった。また、調査区北側の北半（C3・C4グリッド）は、表土を除去した段階で暗黄褐色土層が確認され、遺物も確認できなかったため、それ以上の掘り下げは行っていない。

遺物は、須恵器器各種の他、中世の瓦、陶磁器片、在地系土器などが出土している。これらの遺物については、一括して「2. 出土遺物」の項で述べる。

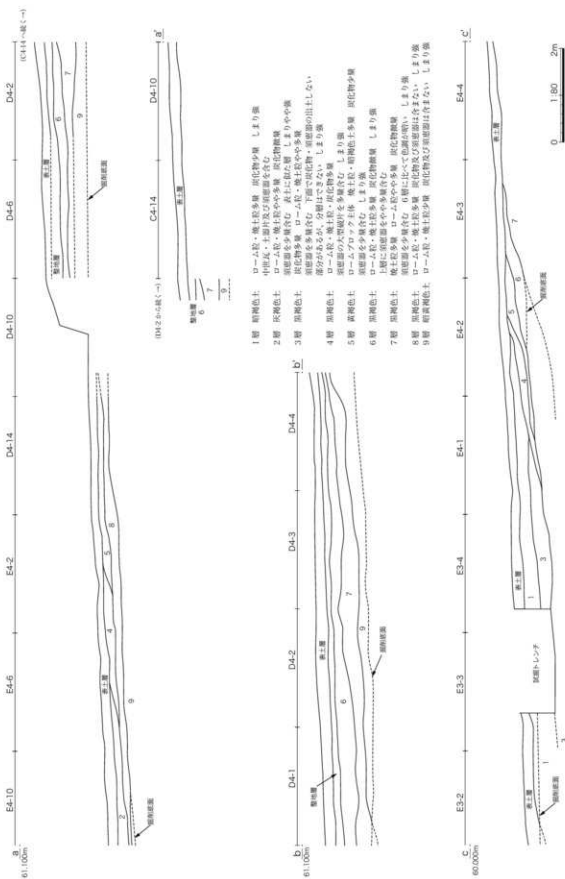
土層堆積状況

土層は、現在の耕作土である表土層・造成に伴う整地層を除き、9層に分層された。これらは、土層に含まれる内容及び遺物の出土状態から大きくⅠ～Ⅲ層にまとめることができる。

Ⅰ層 旧耕作土及び中世以降の土層（Ⅰ・Ⅱ層）

Ⅰ層は表土に近い特徴を持つ土層で、おそらく旧耕作土と考えられる。Ⅱ層は、須恵器片と共に中世の遺物を含んでおり、窯跡に伴う土層と考えられるⅡ層が堆積するE4-1グリッド周辺で部分的に堆積していた。焼土粒を多量に含んでいるが、これはその下部に堆積するⅡ層に由来するものと推定される。

Ⅱ層 須恵器片を多く含む土層（Ⅲ～Ⅶ層）



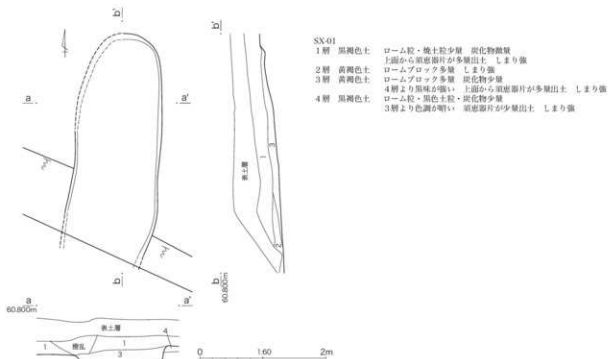
第15図 榑崎渡戸古窯跡 土層断面図

Ⅱ層とした3～7層は、調査区北側と南側でさらにⅡ-1層（3～5層）・Ⅱ-2層（6・7層）に分層される。調査区南側に堆積するⅡ-1層では、多量の炭化物と須恵器片を含む3層・4層の下に、ロームブロックと焼土粒を多量に含むが遺物が少ない5層が堆積している。3層・4層は炭化物・焼土粒と共に須恵器片を多量に含むことから、窯跡または灰原に伴う層と考えられ、特に4層には、大型の須恵器片が集中していた。3層・4層の堆積範囲は調査時の記録がないため判然としませんが、セクション図からE4-2グリッドを中心に、おおよそ東西4m、南北7.5mの楕円形に広がっていたと考えられる（第14図網掛け部分）。上面はかなり削平を受けているが、断面での傾斜方向から、おそらく北東から南西に向かって傾斜して堆積していたものと考えられる。この点から、調査時にはD5-9グリッドからD4-16グリッドあたりに窯の焚口があった可能性を考え精査したが、その痕跡は確認できなかった。なお、3・4層に含まれる炭化材の年代測定を実施したところ、須恵器片の年代と合致する7世紀前半から中頃の年代以外に、9世紀中頃から10世紀中頃の年代を示した資料もあった（付章 自然科学分析を参照）。須恵器片の出土状況や、その年代を示す炭化物の存在からこの土層が窯跡に付随する灰原跡であることに疑いはないが、少なくとも9世紀以降にも、灰原跡付近で木の燃焼を伴う活動があった可能性があると言える。

Ⅱ-2層は、調査区北側のみで確認されている。6層は多量の焼土粒を含むが、炭化物がほとんど含まれない層である。6層の上部には須恵器片が多く含まれていた。その下部の7層は、6層に似るが須恵器があまり含まれない。6・7層を合わせて50～60cmの厚さがあり、調査区北側の南半全体にほぼ水平に堆積していた。この層が窯跡に伴う土層か否かは判断できない。

Ⅲ層 自然堆積層（8・9層）

遺物を含まない層である。8層は調査区南側のみ堆積していた土層で、ローム粒・焼土粒を多く含んでいる。自然堆積層のローム層と黒色土層の漸移層と考えられる。9層はローム土層で、内容物の少ない均質な土層である。この土層は、先に述べたとおり調査区北側と南側で段差をもって堆積していた。



第16図 榊崎渡戸古窯跡 SX-01 遺構図

遺物出土状況 遺物はⅡ層を中心に、中でも3層・4層に集中的に含まれていた。特に4層に含まれていた須恵器片は大型のものが多かった。器種による分布に有為な差は見られないが、窯壁の破片や粘土塊は特にE4グリッドから多く出土している。破片は離れたグリッド同士でも接合するものが多く、耕作に伴い破片が特に調査区南側全体に広がったものと考えられる。

性格不明遺構 (SX-01)

D4グリッドに位置する。幅1m40cm、深さ10～20cmの浅い溝状を呈し、南側は造成時の削平によって失われている。底面は平坦だが、踏み固めや焼けた痕跡は認められなかった。覆土は周辺の土層に比べ色調が暗く、炭化物やロームブロックがやや多く含まれている。出土遺物は中型のパンケース1箱分で、須恵器の大型破片と、還元焼成が行われていない土師質の板状破片(出土遺物の項を参照)がまとまって出土している。須恵器の大型破片は周辺のグリッドと接合するものが多く、特にこの遺構内にまとめて廃棄された様相は認められない。一方、土師質の板状破片はこの遺構に特に集中しており、須恵器の大型破片とは相反する出土状況を示す。以上のことから、SX-01は自然の凹みを利用した土師質の板状破片を投棄した場所であり、須恵器の大型破片は灰原の埋没過程で凹みに流れ込んだ可能性が高いと考えられる。

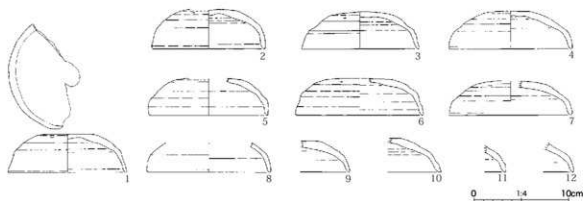
2. 出土遺物

榊崎渡戸古窯跡から出土した遺物は、接合作業前の状態で中型パンケース30箱分であった。そのほとんどを占めるのは須恵器である。蓋環、高環、こね鉢、提瓶、平瓶、横瓶、長頸壺、短頸壺、甕などと共に、窯道具である焼台及び窯の窯体片も多く出土した。また、用途は不明であるが、埴に似た土師質の板状品が出土している。榊崎渡戸古窯跡周辺では、調査地から沢を挟んだ南側の台地上に位置する馬坂古窯跡や、尾根筋を二つ挟んだ北西側に位置する田島岡古窯跡など、多くの窯跡が存在するが、いずれも小規模な発掘調査しか行われておらず、全体像は不明である。ここでは、近隣の窯跡の中で最も様相が明らかとなっている金山丘陵窯跡群(八幡窯跡群・辻小屋窯跡群・菅ノ沢遺跡 駒澤大学考古学研究室2007・2009)との比較を中心として、出土遺物の様相を概観する。

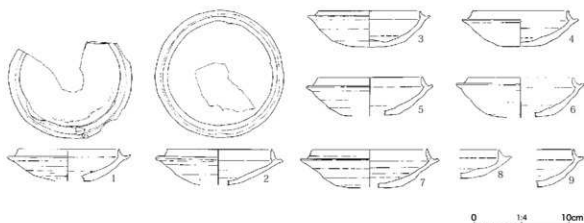
須恵器

(1) 蓋環類

小片を含めて環蓋32点、坏身18点、蓋または環の体部破片26点が出土しており、そのうち環蓋12点・坏身7点を図化した。坏身に比べて、環蓋の出土量が多い。蓋・環とも奈良文化財研究所による分類の環Hにあたり、環Gは図化していない破片資料の中にも見あたらない。また、北関東型須恵器と呼ばれる口縁部が八の字に開く蓋(藤野2007)も、確実にそれと判断される個体は出土していない。全体的に薄手の作りで焼き歪みも少なく、製作技術のレベルとしては比較的高いものと考えられる。環蓋は、復元径が求められた8点のうち、12.0～13.0cmのものが7点、13cmを超えるものが1点であった。高さは3.6cm～4.1cmの間におさまっている。坏身は、口径の残存率が高い4点のうち、口径が10.7～10.9cmのものが3点(1・2・5)、口径12.0cmと大きいものが1点(7)である。また、高さは1を除いて3.8～4.1cmの間におさまる。環蓋 全ての個体で、ロクロナデ後に天井部外面に回転ヘラケズリを施す。回転方向がわかるものは、全て正位で反時計回り(左回り)である。天井部のヘラケズリの範囲は口径の2/3程度に及んでいるが、口縁部との境の境近くまで削るものはない。天井部内面は手持ちヘラナデを施すものが大半である。口縁部が長



第17図 榊崎渡戸古窯跡 坏蓋実測図



第18図 榊崎渡戸古窯跡 坏身実測図

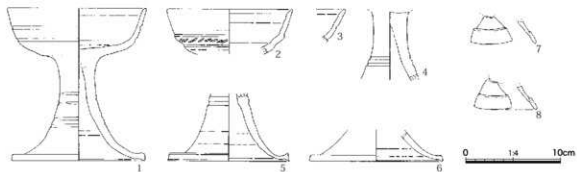
いもの(第17図1~3・6)と短いもの(4・5・7~12)が見られ、後者がやや多いようである。口縁部が短いものは口縁部境の稜が緩く、口縁部が長いものは稜がはっきりとする傾向にあるが、9は口唇部が短い稜がはっきりしている。口唇部は、10・11が僅かに内削ぎ状となって尖る他は、丸味を帯びる。北関東型須恵器とされる口縁部が八の字に開く蓋は、第17図9・10に近い形態と考えられるが、それ以外には認められなかった。

坏身 全ての個体で、ロクロナデ後に底部外面に回転ヘラケズリを施す。回転方向がわかるものは、全て逆位で反時計回り(左回り)である。底部のヘラケズリの範囲は最大径の2/3程度に及び、第18図1は受け部近くまで及んでいる。口縁部はやや短く内傾し、口唇部断面は鋭く尖って外反するもの(第18図1・8)、丸味を帯びて外反するもの(第18図2~7・9)の2種に分けられる。どちらの種も受け部は、口唇部が尖るものは受け部と底部の境がなだらかで、口唇部が丸味をおびるものは受け部と底部の境が緩く凹み、ロクロ目が強い。

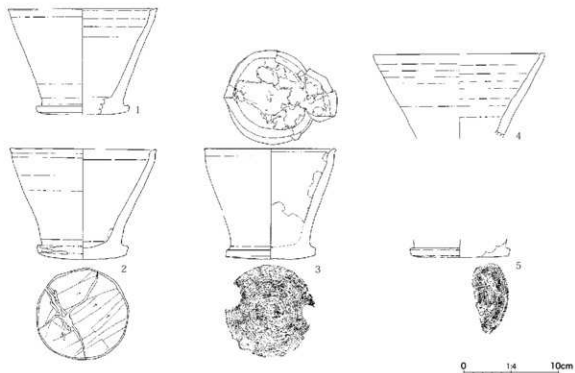
(2) 高坏

小片を含めて17点出土しており、そのうち8点を図化した(第19図1~8)。蓋环同様、他の器種と比較して出土量が少なく、全体が復元できたのは第19図1のみである。図化していない破片はいずれも無蓋高坏で、坏部破片5点、坏・脚部接合部分の破片2点(同一個体)、脚部破片2点の計8点である。

第19図1~6は無蓋高坏である。出土点数が少ないため法量の傾向は不明だが、金山丘陵窯跡群の管ノ沢遺跡で多いとされる口径・脚端部ともに14.0cm台のものに近い。脚部は2条の沈線により2段に区画す



第19図 榑崎渡戸古窯跡 高环実測図

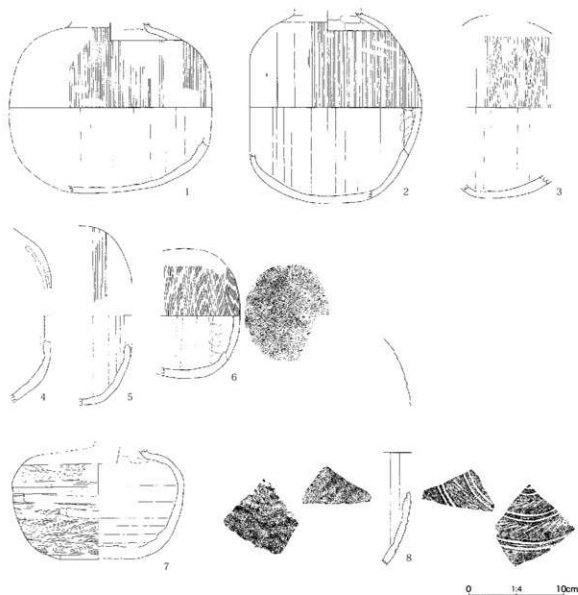


第20図 榑崎渡戸古窯跡 こね鉢実測図

るが、いずれの個体も透かしを持たない。管ノ沢遺跡では透かしを持たない無蓋高环は出土しておらず、榑崎渡戸古窯跡固有の特徴と言える。坏部と脚部の接合部分で欠損している個体はなく、成形が丁寧に行われていると考えられる。第19図1・3はいずれも坏部に2条の沈線をめぐらせている。2は非常に作りの良い個体で、坏部下端を段状に削りだし、段部分にハケ状工具で連続刻みを施している。ハケ状工具による連続刻みを施すものは他に1点出土しているが、小片のため図化していない。7・8は脚部に形状不明の透かし孔を持つ高环と考えられるが、金山丘陵窯跡群を含め周辺に類例が見あたらないため、別器種の可能性もある。

(3) こね鉢

小片を含めて9点出土しており、そのうち5点を図化した(第20図1～5)。全体の器形が窺えるものは、底部から口縁部に向かって緩く内弯するもの(第20図1～3)と、直線的に開くもの(第20図4)の2種に分けられる。図化していない小破片は4点とも緩く内弯するものに分類される。口縁部は4以外全て内



第21図 榊崎渡戸古窯跡 瓶類（提瓶・フラスコ瓶・平瓶）実測図

削ぎ状になるが、4も他の個体と同じように端部を平坦にしている。底部は円盤状の粘土を接合し、底部周縁が突出する。底部の調整は手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリの2種があり、回転ヘラケズリを行う3・5はいずれも逆位で反時計回りとなり、坏身・坏蓋と同じ回転方向である。手持ちヘラケズリを行う1・2は、底面を一方に削った後、底部周縁をヘラケズリしている。回転ヘラケズリを行う個体では、周縁のヘラケズリは行われていない。量量は4以外ほぼ同じで、小型・大型などの量量の分化は認められなかった。

(4) 瓶類

瓶類は、提瓶、平瓶、横瓶の他に、フラスコ瓶の可能性が高いものの16点を図化した。これらの個体以外に中型バンケース1箱分の破片が出土しているが、その多くが横瓶と考えられる破片である。また、提瓶と考えられる口縁部を5点図化した(第24図4～8)。瓶類の口縁部とした第24図1～3も、提瓶やフラスコ瓶の口縁部である可能性も否定できない。第24図に示した以外に横瓶と考えられる短い口縁のものが十数点出土しているが、いずれも口径1/8以下の小片だったため図化していない。

復元された個体は、提瓶か横瓶か判断に迷う個体が多い。確実に横瓶とされる第22図1～3・7・8と、提瓶とされる1～3を比較したときに、横瓶は提瓶に比べて僅かだが体部断面が厚いと言える。また、横瓶は全面に自然釉がかかり、胎土の色調が黄色味を帯びている。一方、提瓶は自然釉が付着しておらず、胎土の色調が灰色である。以上の点に注目して、判断に迷った閉塞部のみ残存する第21図4～6及び第22図4～6については便宜的に分類し、観察表にその旨を記載した。

提瓶・フラスコ瓶 提瓶あるいはフラスコ瓶と判断したものは、7点を図化した(第21図1～6・8)。いずれも残存部分が少なく、体部全体が復元できた個体は第21図1～3の3点のみである。この他にカキメが施される破片や閉塞部の破片が小型パンケース1箱分出土しているが、小片では提瓶またはフラスコ瓶と横瓶の区別が付かないため、総量は不明である。器形は横に膨らむものが多い。1は卵形を呈する提瓶で、2も卵形に近い形を呈するものである。閉塞部が残る第21図2・4～6は、いずれも絞りながら円盤閉塞を行う。内面に絞り目がはっきりと残るのは4のみで、後は円盤閉塞を行った後に、2や6に見られるように指で押さえたり撫でたりといった調整を行っている。6は、残存部が少なく判断に迷うが、北関東型の在地化したフラスコ瓶の可能性はある。

8は、当古窯跡に近い菅田古墳群(北関東自動車道建設に伴い発掘調査・平成23年度報告書刊行予定)で、区画内にハケ状工具による連続刺突を施す提瓶が出土しているため、ここでも提瓶として扱ったが、長頸壺の肩部である可能性も残る。

平瓶 平瓶とした個体は、破片も含めて第21図7のみだが、瓶類・壺類底部とした第23図11もその可能性がある。7は口縁部と体部左側が残存していないため、他の器種の可能性も残るが、底部内面に残る降灰が底部中央よりも器壁に寄った部分にあるため、平瓶と判断した。底部内面には指頭痕が、体部にはわずかに粘土紐の痕跡が残っていることから、円盤状の粘土に粘土紐を積み上げて成形したものと考えられる。**横瓶** 横瓶は8点を図化した。全体が窺える個体は第22図1のみだが、明らかに横瓶とわかる破片は中型パンケース1箱分出土しており、榊崎渡戸古窯跡を特徴づける器種と言える。

タタキ成形を行うもの(第22図1・6～8)と内面ロクロナデのもの(第22図2～5)の2種が見られるが、いずれも外面全体にカキメが施される。タタキ成形を行う4点の内、7と8は同じ当て具を使用する個体である。この2点は口縁部形態、法量などがよく似るが、当て具の進行方向が逆になっており、別個体と判断した。タタキ成形を行うものは、内面がロクロナデのものに比べて大型となる。

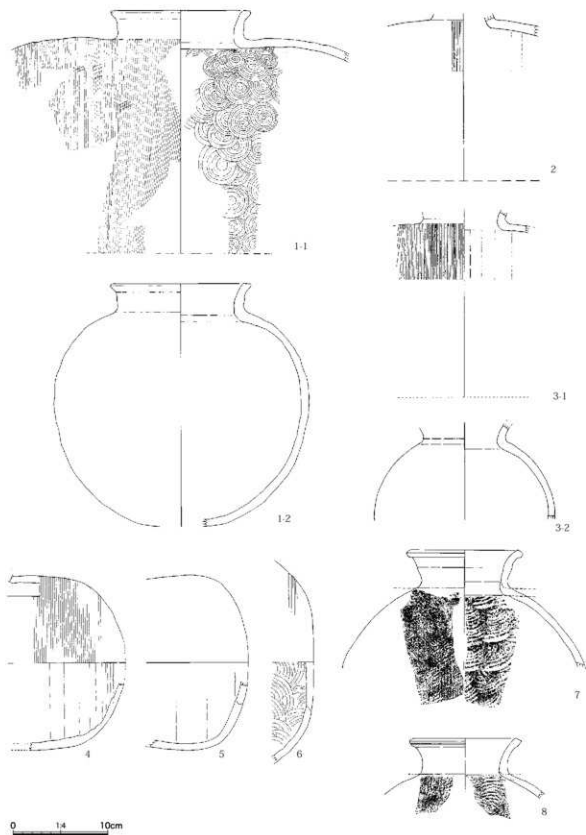
閉塞部分が残る個体は3点あり、いずれも円盤閉塞である。6は閉塞後に当て具を当てており、閉塞後にさらに叩き占めたものと考えられる。4は、円盤の上から回転を利用したヘラナデを行っているもので、工具痕が稜となってはっきり残っている。

横瓶はいずれも自然釉が付着している。2は口縁部から体部側面に向かって自然釉が流れており(実測図の横方向に流れる)、長端部を上下方向にして置いて焼成したと想定される。3も同じ方向に自然釉が流れ、図化していない個体も同様のものが複数見られる。

(5) 壺類

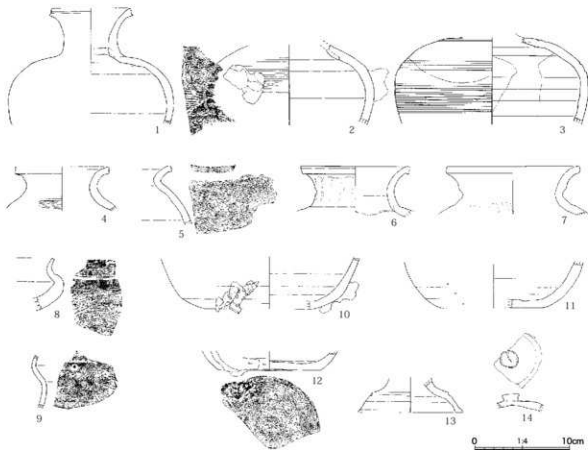
壺類は、第23図1～14の14点を図化した。出土量は少なく、いずれも残存状況が悪いことから、瓶類に比べて生産量が少ない器種であったと想定される。図化できない小片は、小型パンケース1箱分出土している。

第23図1は長頸壺、2・3は同じく長頸壺の可能性が高いと考えられるものである。口縁部が残る1は、口縁部と体部を別にした後に頸部で接合し、さらにロクロナデを行う。自然釉が厚いため外面の調整は不

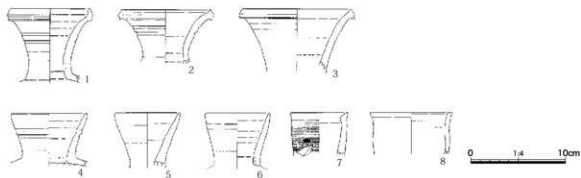


第22図 榑崎波戸古窯跡 瓶類(横瓶)実測図

第3章 榑崎渡戸古窯跡の調査



第23図 榑崎渡戸古窯跡 瓶類・壺類（長頸壺・短頸壺・蓋・底部片）実測図



第24図 榑崎渡戸古窯跡 瓶類・壺類（口縁部）実測図

明である。2・3は体部破片で、破片上端部のカキメ径が小さくなることから壺類と判断したが、2は頸部の段が提瓶や横瓶の閉塞部にも似ているため、その可能性も否定できない。3は、頸部内面に放射状の敷がごく僅かに残り、3段構成のようにも見える（写真図版二十参照）が、小片のため判断としない。外面は肩部と最大径部分に2条の平行沈線をめぐらせて段を構成している。

4～9は短頸壺としたものである。いずれも短い口縁部が外反する点で共通しているが、体部ロクロナデ後にカキメを施すもの（4・5）、タタキ成形のもの（7）など、成形や調整にはバラエティーが認められる。

8・9は小型の短頸壺と判断したものである。破片のため全体の器形などは不明である。8は胎土断面に層状の剥離が見られることから、一度成形した後にさらに外面に粘土を貼って調整を施したものと考えられる。

(6) 瓶類・壺類底部

瓶類・壺類の底部と考えられるものは、第23図10～13の4点である。10～12の3点は、いずれもロクロナデ後に底部を回転ヘラズリにより調整し、底部径が約11cmと共通するものである。11は、降灰が器壁に寄った位置に付着するため、平瓶の可能性もある。12は中央が僅かに上げ底状になる。13は、脚端部半ばに沈線を伴う強い稜を持つ点などから脚付壺の底部と判断したが、端部に平坦面が作られるなど、金山丘陵窯跡群で出土している脚付壺とは異なる特徴も見られる。また、出土資料はこの1点のみのため、確定は難しい。

(7) 瓶類・壺類蓋

瓶類・壺類の蓋と考えられるものは、図化していない破片も含めて第23図14の1点のみである。径約2cmのボタン状の握みを天井部に貼り付けるもので、端部が残っていないため口径は不明である。このような形態を持つ蓋は、坏G蓋、有蓋高坏、長頸壺の例があるが、坏Gと有蓋高坏については坏部が当古窯跡では出土していないことから、13は長頸壺の蓋と判断した。

(8) 瓶類・壺類口縁部

瓶類・壺類の口縁部は8点図化した(第24図1～8)。第24図1～3は、長頸壺の口縁部と考えられる。1・2は第23図1と異なり、口唇部が内傾し、内面が受け口状となる。口唇部外面は断面三角状にとがり、頸部半ばには2条の平行沈線がめぐる。2は1に比べて口縁部が短く、口径が大きい。金山丘陵窯跡群の資料では、1・2と同様の口縁部形態を持つ長頸壺の出土例が見られる。なお、この2点は、窯壁内に埋め込まれたと推測される資料である(第44図2・3参照)。3は口唇部外面が鋸状にとがるもので、第23図1とほぼ同じ形態であることから、長頸壺の口縁部と考えられる。

4～6は、口縁部が直線的に開き口唇部が薄く尖る形態で、提瓶の口縁部と考えられるものである。4は口縁部半ばに2条の平行沈線がめぐる。7・8は口唇部内面が三角状に尖って稜を作り出すものである。7は、外面に密なカキメが施される。いずれも提瓶の口縁部と考えられる。

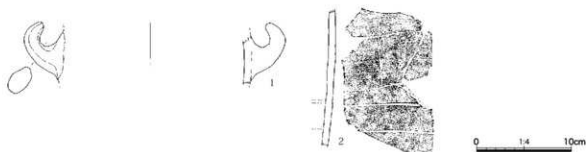
(9) 甌

甌は同一個体の小片が2点出土したのみである(第25図1・2)。他の器種に比べて体部が非常に薄手の作りだが、著しく焼きが甘い。2は、体部に2本1組の平行する沈線がめぐる。

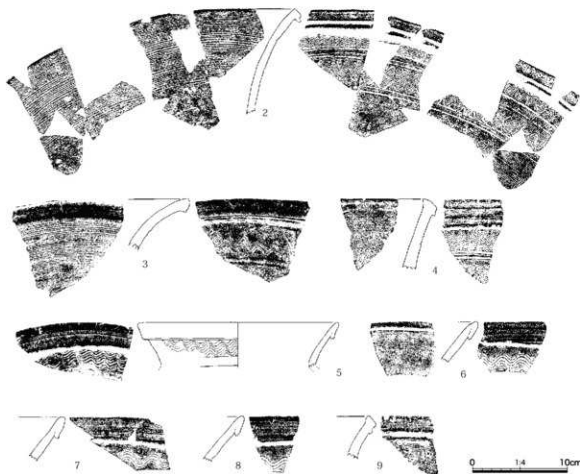
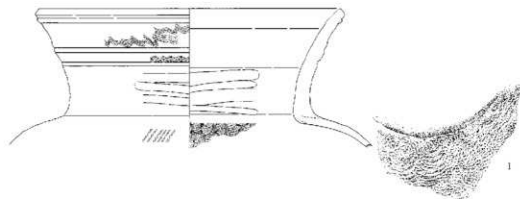
(10) 甕類

甕類は今回の調査で最も多く出土したが、全体の器形がある程度復元できた個体は、18点と少なかった。復元された個体を除く甕類の破片は中型のパンケース14箱分で、全ての器種の破片総量の8割近くを占める。復元された甕は、口縁部に波状文などの文様が施されるもの、口縁部が無文のものに大まかに分けられ、後者の方がやや復元率が高いようである。いずれも全体の器形がわかるものを優先して図化した。口縁部に文様を持つものについては、使用工具のバリエーションを示すため、小片でも図化したものがある。

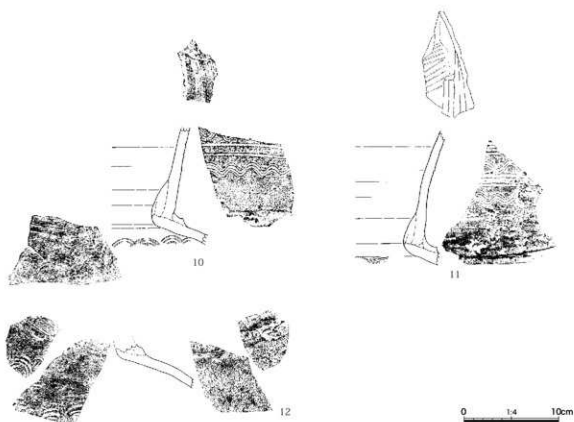
口縁部波状文の甕 口縁部に波状文が施される甕は、頸部補強帯があるものと無いもの2群に分けられる。頸部補強帯がある資料は、破片も含めて図示した3点のみである(第27図10～12)。このうち、10と11は同一個体の可能性が高い。いずれも小片のため、全体の器形や大きさは不明である。1・2の口縁部側の接合面は丁寧なナデが施されており、体部側には平行タタキが残っている。接合面ではがれていることから、接合面の乾燥がある程度進んでから口縁部を貼り付けたものと考えられる。1・2は、内面にも2



第25図 榊崎渡戸古窯跡 榎実測図



第26図 榊崎渡戸古窯跡 甕(口縁部波状文) 実測図(1)



第27図 榊崎渡戸古窯跡 甕（口縁部波状文）実測図（2）

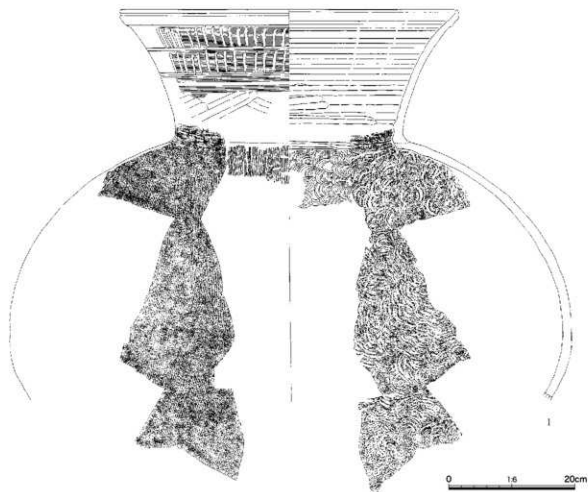
～3cm幅の粘土帯を貼り付けて接合部分を補強し、その上から丁寧な調整を施しているが、破片の残存幅が狭いため内面の調整方法がロクロナデかあるいはヘラナデによる調整かは判然としにくい。このように内面に粘土帯を貼り付ける手法は、金山丘陵窯跡群内の菅ノ沢遺跡の資料にも見られる。

補強帯を持たない資料は第26図に示した9点で、1以外は全て破片である。菅ノ沢遺跡の波状文を施す甕の一群と比べても口縁部が短く、口縁部波状文の段数も1～2段と少ない。さらに、1は体部の厚さが5mm程度と著しく薄手となる点でも、菅ノ沢遺跡の資料とは異なる様相が見られる。

補強帯の有無に関わらず全体の資料の波状文を見ると、細かい柵目で波状も細くなるもの（第26図1～4・9）と、柵目1本の幅が広く、大きな波状となるもの（第26図5～8、第27図10・11）の2類に分けられる。細かい波状の一群は、口唇部形態が矩形で直下に鈎状の稜がめぐる。大きな波状となる一群は、口唇部形態が折り返し状になる。径が復元できる個体は少ないが、断面の厚さやカーブの具合から見て、前者は1のように口径が30cm前後の中型のもの、後者は5のように比較的小型のものが多くと推測される。

体部まで残存するものが3点しかないため、タタキ調整や当て具痕の特徴は不明だが、第26図1と第27図10は当て具痕の同心円の幅が線状に細くなっている。

小破片ではあるが特徴的なものとして、第26図9の破片がある。甕の口縁部破片の断面を含めた全体に粘土を塗りつけたもので、僅かに波状文が残っている。波状文の特徴や口唇部形態からみて、第26図2や4と同じ種類の資料と考えられるが、両者に見られる自然軸は付着していない。粘土の塗りつけが焼成前か後かも不明であるが、破片断面にも塗られていることから、おそらく焼成後に破損した破片に粘土を塗りつ



第28図 榊崎渡戸古窯跡 甕(口縁部斜行文)実測図(1)

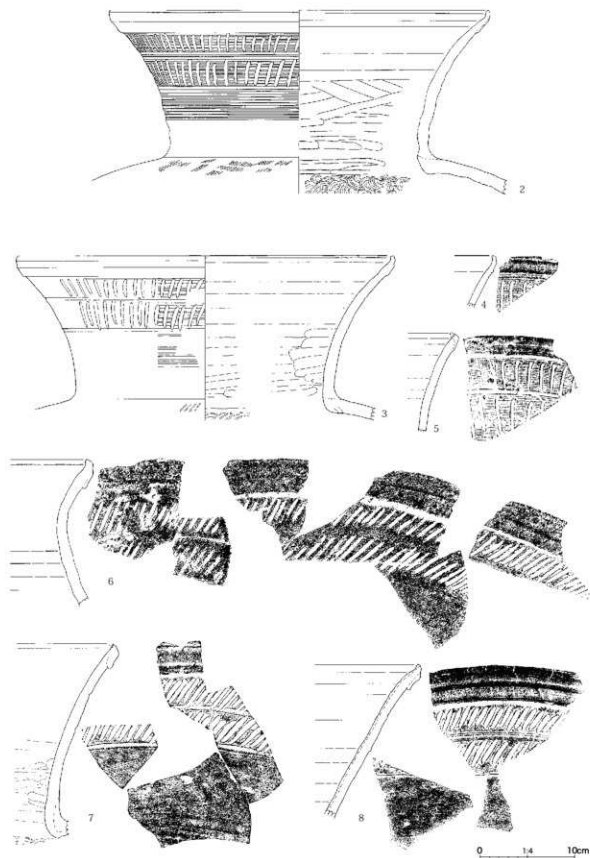
けたものと考えられる。

口縁部斜行文の甕 口縁部に斜行文を施す甕(第28図～第30図)は、いずれも頸部補強帯を持たない。口縁部と頸部の接合部分は丁寧に接着されており、この部分ではがれている個体は第28図1のみである。頸部接合面の体部側には平行タタキが薄く残る。1と第29図2の接合部分の内側には、補強帯を持つ甕(第27図1・2)と同様に粘土帯を貼り付けて補強しているようであるが、口縁部内面半ばより下から頸部にかけては丁寧なヘラナデが施されており、表面からは貼り付けの状況がはっきりとは確認できない。

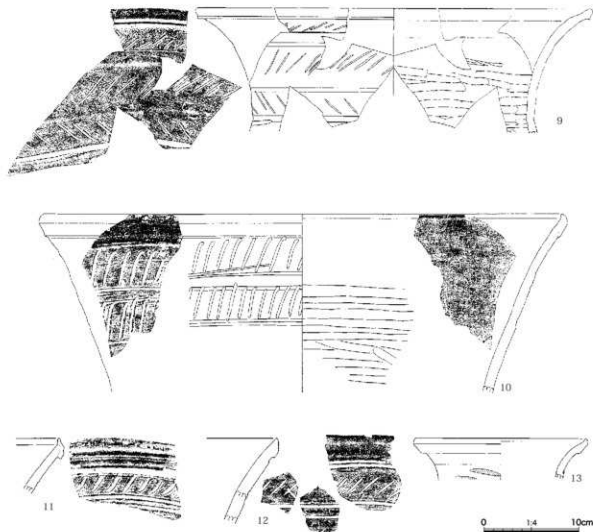
口唇部形態は折り返し状になるものが多くを占め、口縁部波状文の甕に多く見られる矩形で鋸状の稜を持つものは出土していない。折り返し部分は、実際には口唇部外側に薄い粘土帯を貼り巡らせて、ロクロナデにより撫でつけている。おそらくこれと同時にロクロナデによって、粘土帯の裏側に当たる口唇部内面直下には浅い凹みが、口唇部端はつまみ出したような稜がめぐる。第30図12は折り返し状ではあるが、口唇部外側がカマボコ状に膨らみ、内側は平坦になる。

折り返し状の口唇部形態を持たない個体は、第30図9のみである。9は、口縁部波状文の甕で1点のみ確認されている口唇部が丸味を帯びて鋸状の稜が鋭く尖るもの(第26図3)と同じ口唇部形態を有する。

第29図8は、口縁部内面に薄く粘土を塗って調整を施したと考えられるものである。口縁部内側から0.5mmくらいの厚さで色調が大きく変化しており(実測図断面 破線部分)、その一部が層状にはがれてい



第29図 榊崎渡戸古窯跡 甕（口縁部斜行文）実測図（2）



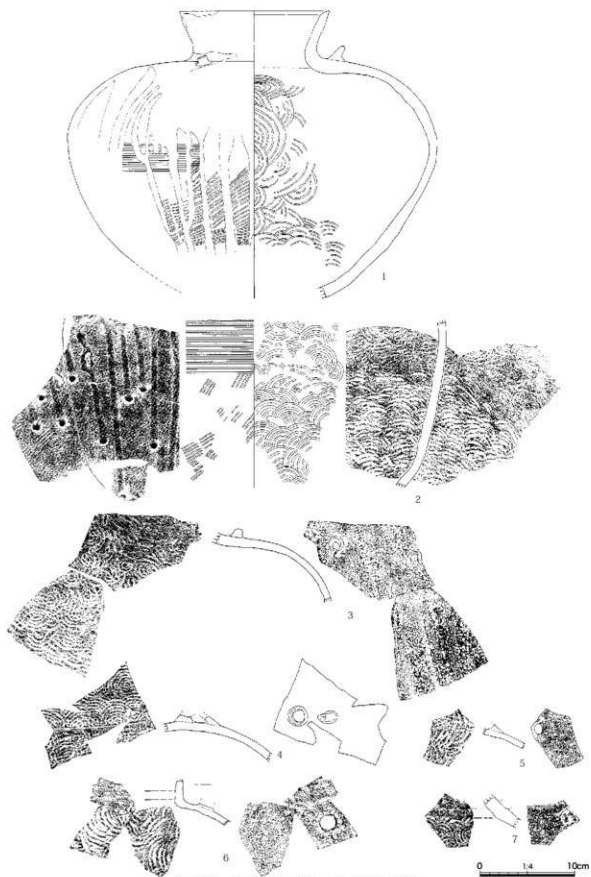
第30図 榊崎渡戸古窯跡 甕（口縁部斜行文）実測図（3）

ることから、化粧土に似た調整を行ったものと考えられる。第29図7も、断面の色調変化が5層に分かれる部分があり、同じく化粧土に似た調整を行った可能性がある。

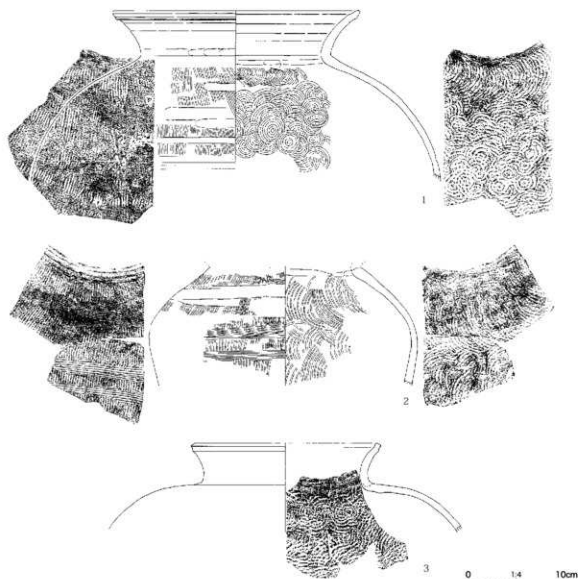
口縁部文様は、カキメを施すものと施さないもので大きく分かれる。また、9・12・13以外の斜行文は全て上から下へと工具を押し引いて施文されており、手の動き自体は波状文と同じ意識で行われているものと考えられる。

カキメを施すもの（第28図1・第29図2～5）は、口縁部を2段に区画し、棒状工具による斜行文を連続して施す。1～3は、カキメや連続斜行文が非常によく似ており、同一工具を使用したものと考えられる。胴部内面の当具痕も、同一工具の可能性が高い。4・5は強いカキメを有するもので、斜行文とともに同一工具を使用しているが、4は器厚が著しく薄いため5とは別個体と考えられる。

カキメを施さないもの（第29図6～8・第30図9～13）は、工具のバリエーションがカキメを施すものよりも多い。6～8は同一の太い棒状工具により斜行文を密に施すもので、口縁部を浅い沈線により2段に区画する。6と8は口唇部の折り返しなどの幅なども非常によく似ている。9～13はヘラ状あるいはハケ状工具を使用する一群で、いずれも同一工具による別個体が確認されなかったものである。口唇部形態や成形、施文の方法なども1～8とは異なる部分があり、イレギュラー的に製作された一群と判断した。9は、斜行



第31図 榊崎渡戸古窯跡 裏(紐付)尖測図

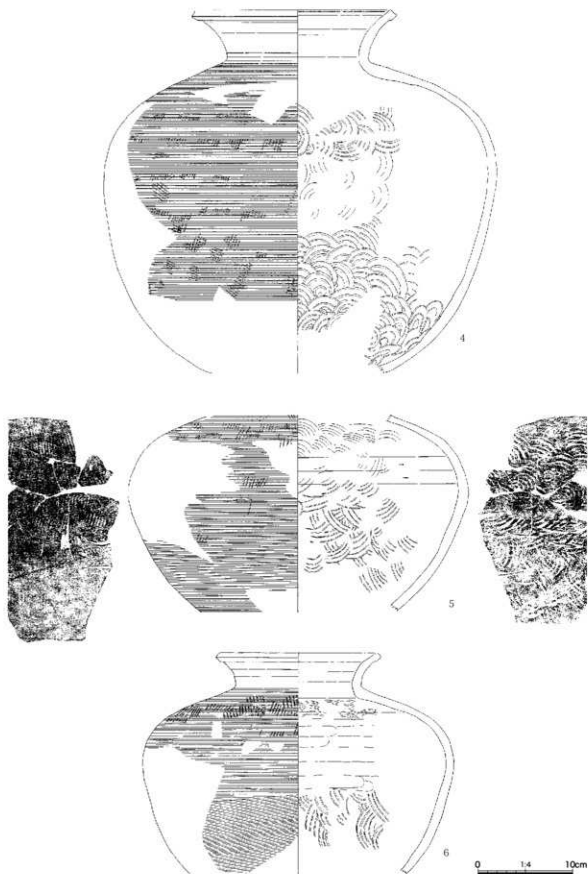


第32図 榑崎渡戸古窯跡 甕（口縁部無文）実測図（1）

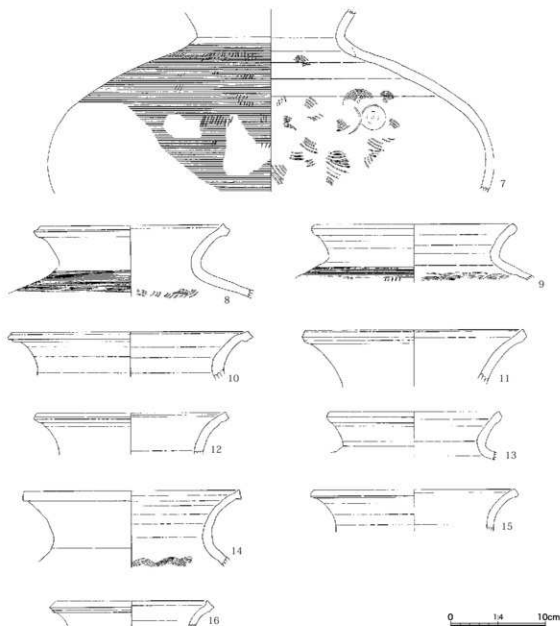
文を有する甕の中で唯一口唇部形状が折り返し状にならないもので、口縁部もこの個体だけが3段に区画され、その区画も微隆起線状になるなど、他の個体とは大きく異なる特徴を有するものである。10は6～8の一群に作りは似るが、斜行文にヘラ状工具を使用し、施文や区画が雑になっている。11は斜行文が緩いS字状になっており、波状文をより強く意識した施文が行われていると考えられる。12・13は、斜行文の内部にハケ状の痕跡が見られるものである。他の個体とは異なりハケ状工具を押し当てて斜行文を施文していることから、波状文への意識が弱い個体と考えられる。13は他の個体に比べてかなり小型となる。

紐付の甕 大きくは口縁部無文の甕に含まれるものであるが、肩部に紐が付くものを第31図にまとめて示した。全体の器形が復元出来たものは第31図1のみで、その他は体部破片や紐部分の小破片である。第31図2は肩部が残っておらず、紐付ではない可能性もあるが、1と同一の当て具を使用し、施文方法や自然軸の付着状況が非常によく似ていることから、ここに含めて図示した。

1は、肩が大きく張り出す中型の甕で、頸部に3単位の紐が付いている。口縁部は内削ぎ状に尖り、端部



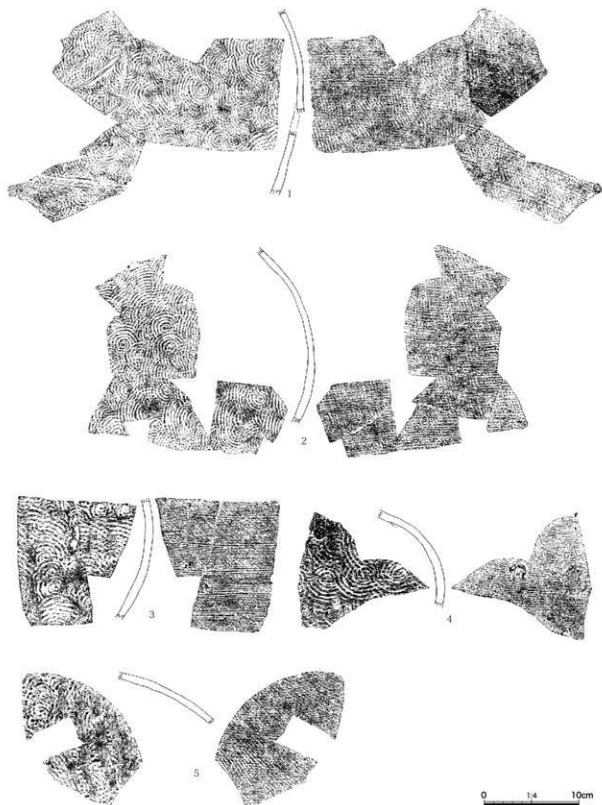
第33図 榊崎波戸古窯跡 甕(口縁部無文)実測図(2)



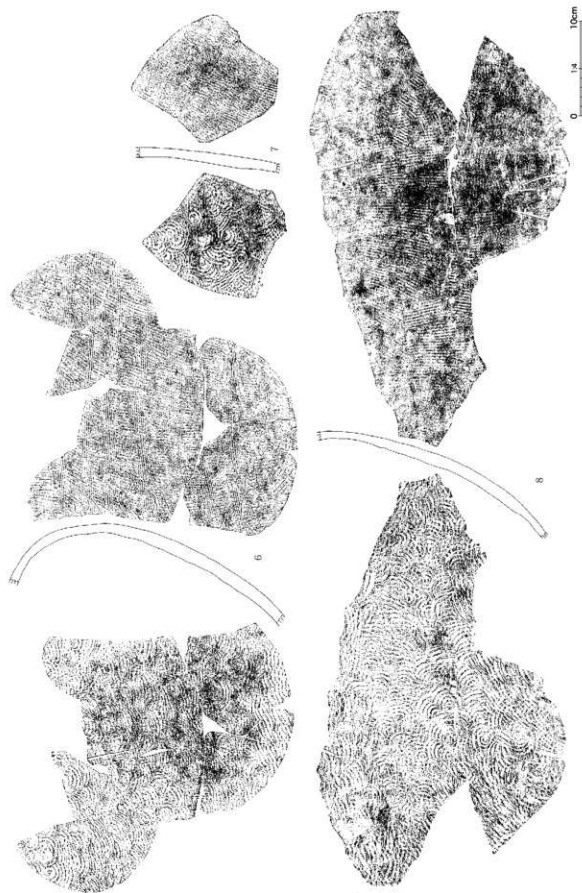
第34図 榊崎渡戸古窯跡 甕（口縁部無文）実測図（3）

は浅い凹線がめぐるようだが、自然釉が厚く付着しているため確定はできない。体部に平行タキを施した後にカキメを施すといった点は他の口縁部無文の甕と同様であるが、カキメは体部上半のみに見られる。カキメの有無を境として、内面の当て具痕も変化している。カキメ部分の内面は当て具痕が浅く、カキメが無い部分の内面は、当て具が深く密に当てられている。別の当て具を使用したようにも見えるが、カキメの内面部分は当て具痕の上から回転を利用したナデにより消したために、体部下半とは当て具痕が異なって見えるようである。このナデが意図的に行われたものか、あるいはカキメを施す際に因らずもナデ消されたものかは判断に迷うところである。この個体は器形や軸のかり方から、一見中世陶器を思わせるものであるが、タキにより成形されていることから確実に須恵器であると言える。同様の特徴を持つ甕は、現在のところ周辺遺跡では確認されていない。

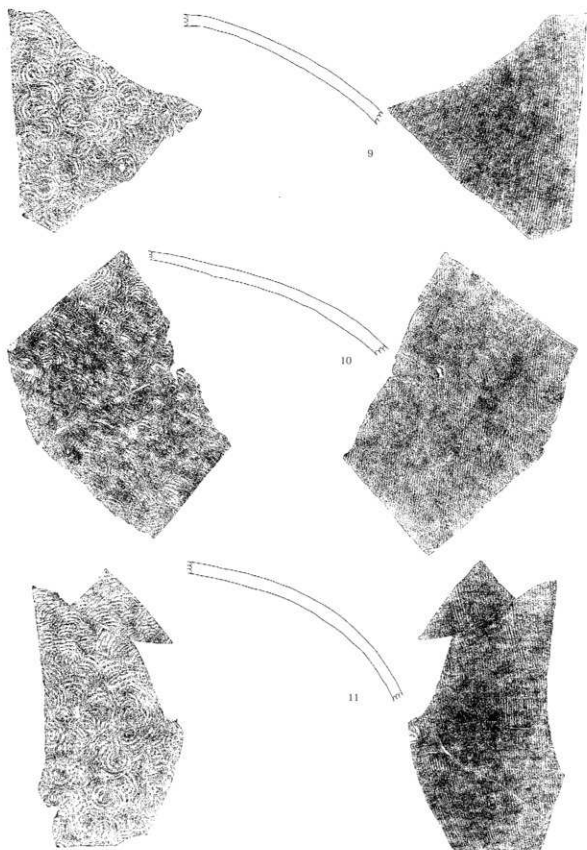
2は1と同じ当て具を使用し、外面の調整も非常によく似る個体だが、器形や体部径が異なっている。こ



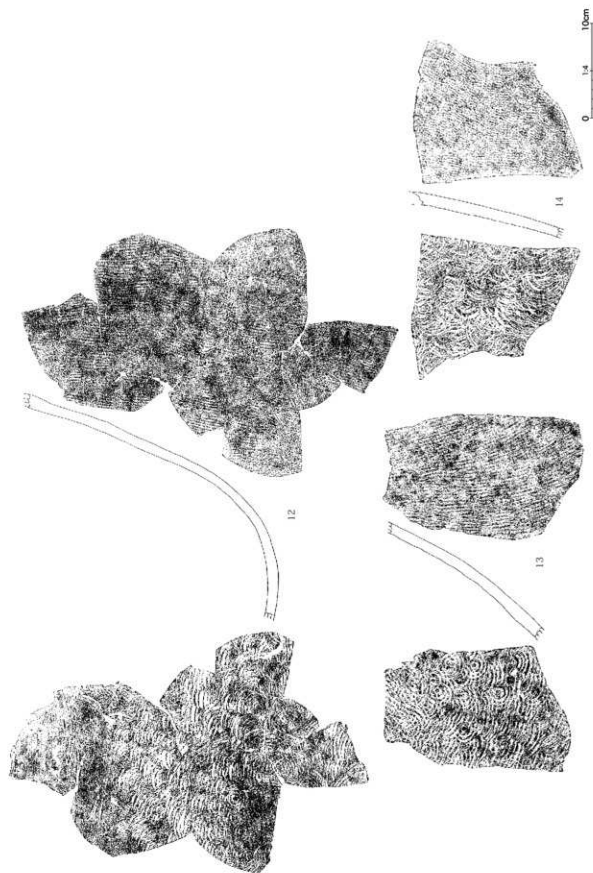
第35図 榊崎渡戸古窯跡 斐(体部破片)実測図(1)



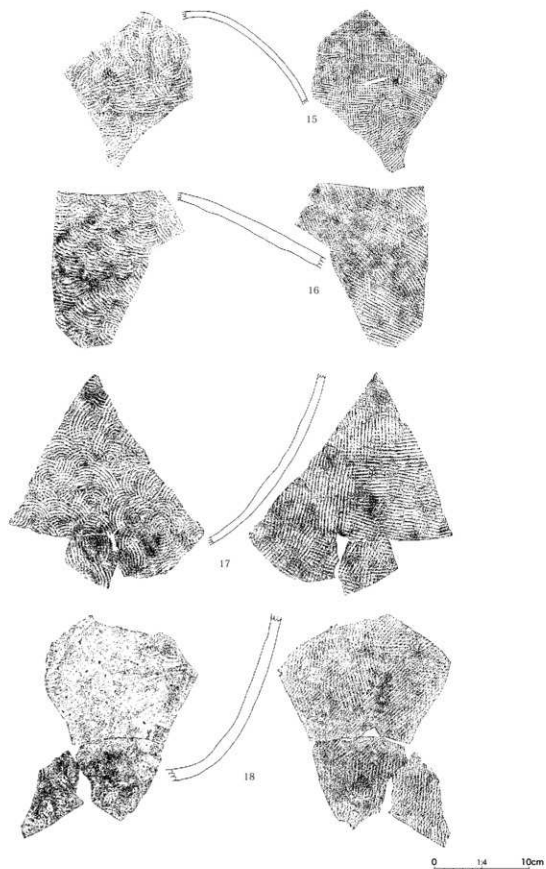
第36圖 榑崎渡戸古窯跡 裏(体部破片)実測図(2)



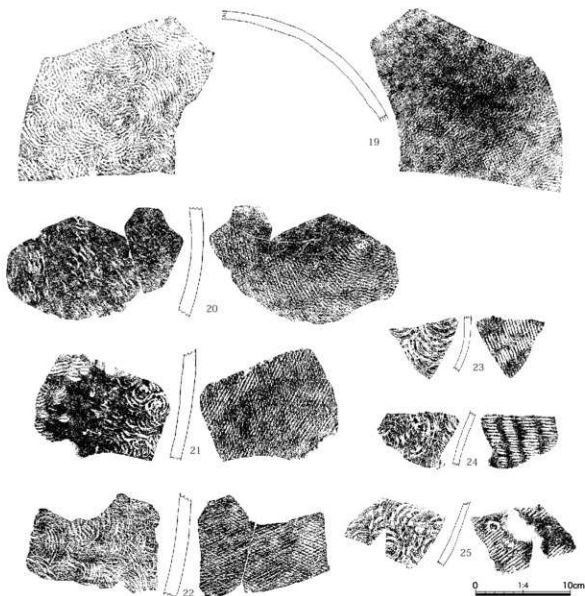
第37図 榊崎渡戸古窯跡 糞(体部破片)実測図(3)



第38圖 榑崎渡戸古窯跡 甕(体部破片)実測図(4)



第39図 榊崎渡戸古窯跡 襦（体部破片）実測図（5）



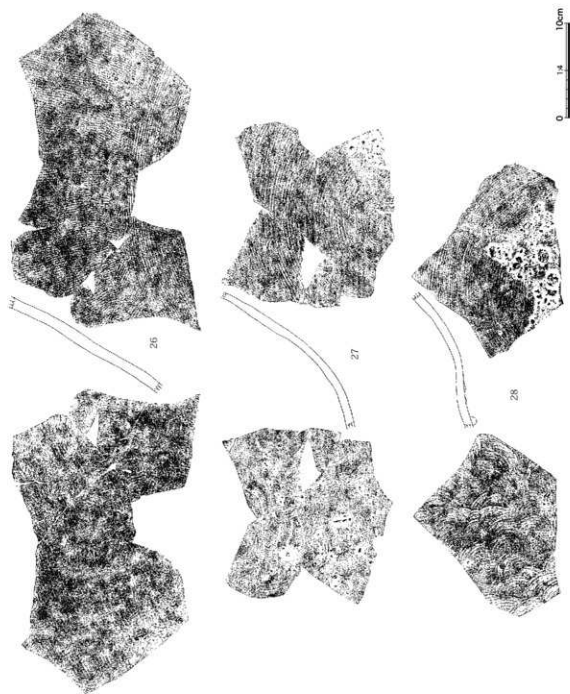
第40図 榑崎渡戸古窯跡 甕(体部破片)実測図(6)

の個体とよく似た破片が多数出土しており、複数個体が製作されたものと考えられる。

第31図3～7は、紐部分の破片である。3の紐は1と同じく鉤状だが、4～7は欠損部分の傾き具合から見て、環状になると考えられる。ただし、4は内面のナデの方向から、提瓶である可能性もある。紐が付く破片は図示したものが全てで、全体量と比較すると少ない生産量であったと推測される。

口縁部無文の甕 口縁部が無文となる甕は、第32図～第34図に示した。体部が残る個体は全て平行タタキの後にカキメを施すもので、カキメがまばらなもの(第32図1～3)と密に施されるもの(第33図4～9)とに分けられる。

カキメがまばらなもの(第32図1～3)は3点図化した。カキメが密なものに比べ、全体的に薄手の作りである。大きさ、器形、口唇部形態等は様々で共通性は見られないが、口縁部と頸部の接合部分の内面を丁寧にヘラナデしている点、カキメと共に回転を利用したヘラナデを施す点は共通している。1は体部上半に回転を利用したヘラナデが施され、その位置を境に内面の当て具痕が変化している。体部上下を別に作っ



第41圖 榑崎渡戸古窯跡 裏(体部破片)実測図(7)

て接合し、接合部分にヘラナデを施した可能性もある。2は、頸部接合面が特徴的な個体である。接合面の外側がヘラナデにより平坦に整えられ、一見口唇端部のように見える。頸部直下に回転を利用したヘラナデを施しており、その部分内面の当て具痕もナデにより薄くなっている。

第33図4～6・第34図7～9は、カキメを密に施す一群である。体部部分が残る4～7に見られる他の共通点としては、①回転台を利用するナデにより、内面の当て具痕が一部消される ②口唇部の断面形態が矩形となる ③自然軸が付着せず、灰白色で軟質の焼き上がりになっている、といった3点があげられる。②と③はこの一群に特徴的で、口縁部のみが残る8～16のうち、8・15・16を除く6点にも②と③の特徴が見られる。①は他の裏類にも共通する特徴だが、この一群では最大径部分の内面が丁寧なナデ消されているのが特徴的である。さらに、口縁部と頸部の接合面に丁寧なナデが施されるため、この部分の当て具痕もほとんど消えた状態になっている。6は、最大径部分のナデを境として上下で別の当て具を使用しており、最大径部分のナデも他の個体よりも強く施されていることから、上下を別々に作って接合した可能性が考えられる。

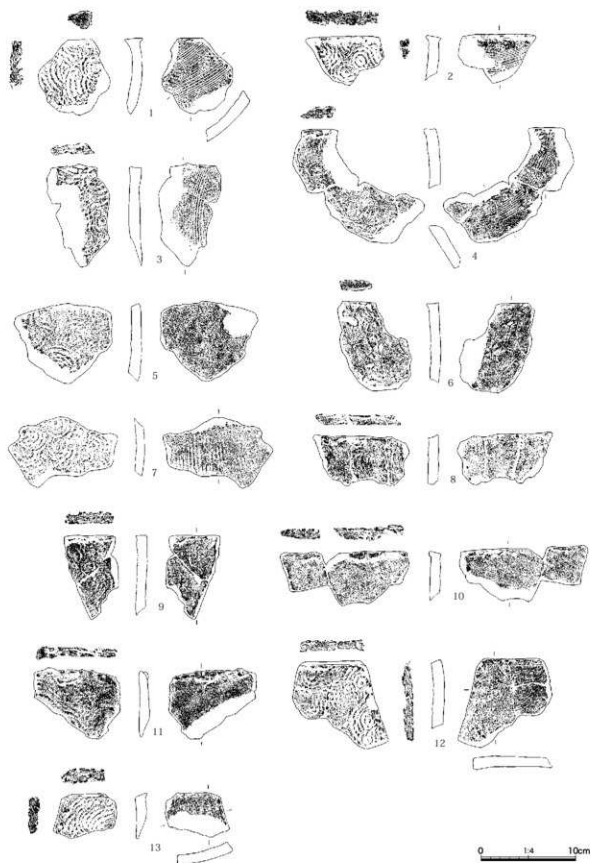
裏の体部破片 裏については、調整痕のバラエティを示すため、大型のものを中心に特徴のある破片を選んで掲載した。第35・36図は、平行タタキの上からカキメを施すもので、口縁部無文の裏(第32～34図)の体部破片と考えられる。第37・38図は平行タタキのみが施される破片で、口縁部斜行文の裏(第28～30図)の体部破片と考えられる。第37図9は、第28図1と同じ当て具を使用しているものである。第39～41図は、器形が復元できた裏の中に、同類の調整痕が認められないものである。第39図は平行タタキが多方向に施されるもの、第40図19～22は擬格子状タタキのものである。それぞれの器厚から、前者は比較的小型、後者は大型の裏の体部破片と考えられる。第40図22～25は短い平行タタキが施される破片で、内面の当て具痕が同一工具であることなどから、同一個体の破片と考えられる。第41図26～28は、裏の底部破片と判断したものである。底部近くにカキメを施すもので、内面は当て具痕が密に重なっている。カキメの径から見て、口縁部無文の裏(第32図～34図)など中型の裏の底部破片と考えられる。

土師質の板状品

SX-01 周辺を中心として、十分な還元炎焼成が行われていない板状の製品が多数出土している(以下、土師質の板状品とする)。小片を含めて72点出土しており、そのうちの16点を図化した。末実測資料の中には1点のみ断面が灰色がかっているものがあるが、焼成は甘く表面が赤化している。板状品の多くは、内面に同心円状の当て具痕、外面に平行タタキやカキメといった須恵器裏の製作技法と共通する特徴を有する。中には完全な板状にならず断面が丸味を帯びるものもある(第42図1・5など)ことから、裏の体部破片を板状に切り分けたものが混在している可能性がある。このような板状品の類例は、周辺の窯跡や古墳、集落では認められず、用途も判然としない。県内での類例としては、真岡市の神宮寺塚古墳で出土している埴があるが、大きさや形状で当古窯跡の出土資料とは異なるようである(小森・梁木1990)。窯の焼成温度を確認するためのテストピースの可能性もあるが、いずれにしても当古窯跡の資料のみでは判断しがたい。

窯壁

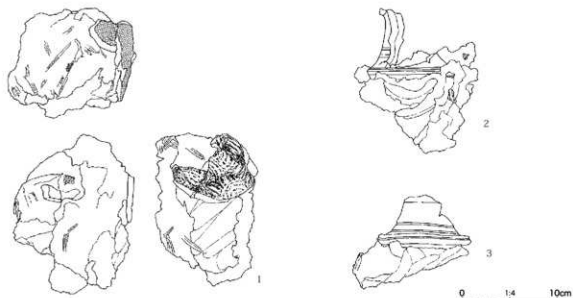
灰原跡からは、窯壁(窯体)の破片と考えられる粘土塊が中型パンケース3箱分出土している。第44図1は、窯壁の基礎として組まれた木組と想定される木材の跡が残る資料である。窯の内面側(実測図右側)には、須恵器裏の破片が融着し、その下には指で壁面を整えた跡が残る。全体的にスサと思われる植物の茎



第42図 榑崎渡戸古窯跡 土師質の板状品実測図(1)



第43図 榊崎渡戸古窯跡 土師質の板状品実測図(2)

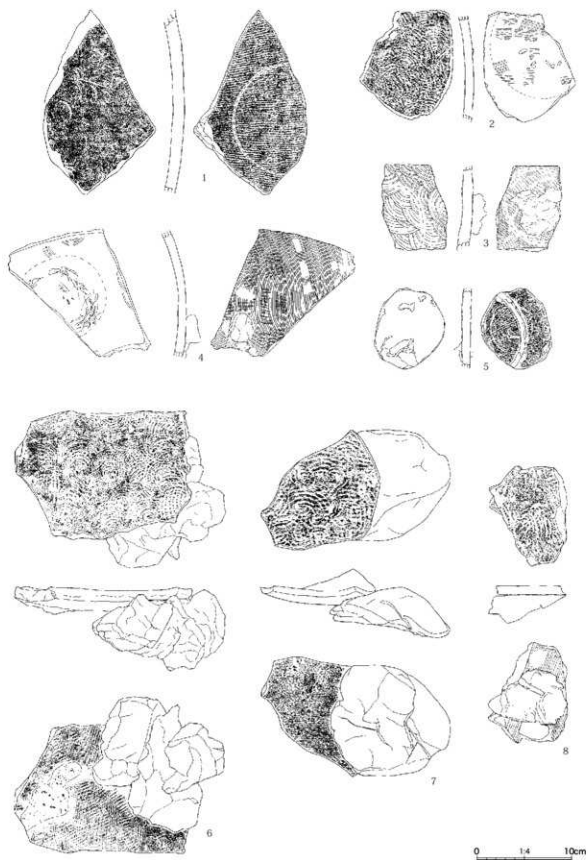


第44図 榊崎渡戸古窯跡 窯体実測図

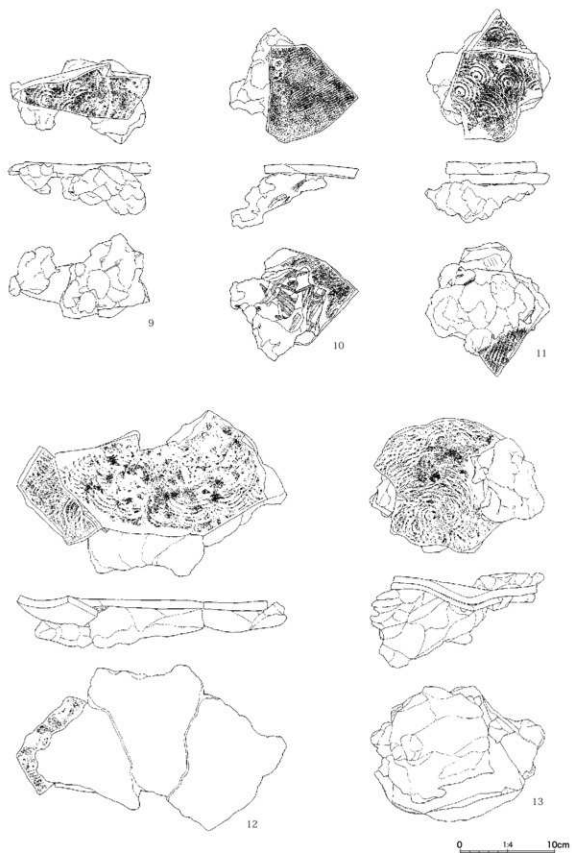
の痕跡が残り、粘土内には基礎の材が焼け落ちた跡の空洞が残る。空洞は矩形を呈することから、基礎には割材が使われたものと考えられる。第44図2・3は、窯壁内に塗り込められたと想定される瓶類口縁部の破片である。口縁部の実測図は第24図に示した。窯の壁や床に口縁部が融着した可能性も考えたが、いずれも実測図下面に指で撫でた跡が残るため、壁の中に塗り込められた破片と判断した。窯壁を補強するなどの意図があったものと考えられる。

焼台

焼台は中型パンケース1箱分出土しており、そのうち13点を図化した。第45図1～5は、円形の重ね焼き痕または融着痕が残る甕の体部破片である。重ね焼き痕は径約8cm～12.0cmと様々だが、いずれも小型の器種に使用されたものと考えられる。3は両面に重ね焼き痕が残るが、外面のものは内面のものより



第45図 榊崎渡戸古窯跡 焼台実測図(1)



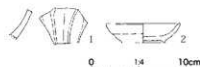
第46図 榑崎渡戸古窯跡 焼台実測図(2)

も1回り小さい径となっている。6～13は、甕の体部破片に傾斜角調整の為の礫や粘土が融着するものである。比較的大型の破片を使用するもの(6・7・12・13)と、小型の破片を使用するもの(8～11)の2種がある。観察表に記した傾斜角は、破片の水平に対する粘土や礫の傾きを示しているが、 $10^{\circ}\sim 29^{\circ}$ と数値がばらつくため、この値から窯底面の傾斜角を求めるのは難しいと判断した。12は、甕の底部破片が焼台と共に窯の底面に融着したものと考えられるもので、第31図1・2に似る破片である。

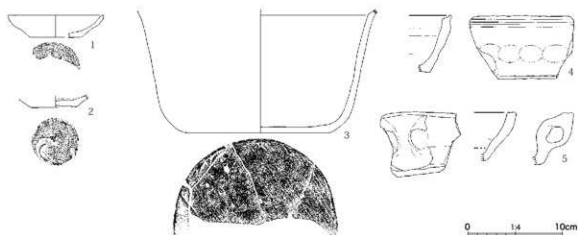
中世・近世の遺物

窯跡に関する遺物以外では、中世の青磁碗破片、在地系土器(土師質小皿、内耳土器)、瓦及び近世陶器などがごく少量出土している(第47～49図)。これらはいずれも、須恵器と同じ層位(灰原内)から出土しているが、出土量は須恵器に対して非常に少なかった。以下に、遺物の概要をまとめる。

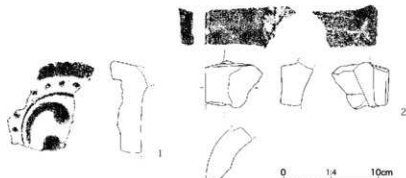
青磁碗(第47図1)は鉛連弁文が施される破片が1点出土した。小片のため判然としなが、14世紀代のものと考えられる。



第47図 榊崎渡戸古窯跡 中近世遺物(陶磁器)実測図



第48図 榊崎渡戸古窯跡 中近世遺物(在地系土器)実測図



第49図 榊崎渡戸古窯跡 中近世遺物(瓦)実測図

第3章 榊崎渡戸古窯跡の調査

土師質小皿(かわらけ)(第48図1・2)は、2点図化した。全体が復元できたものは第48図1のみである。復元径が10.2cmと小さい点に疑問は残るが、体部半ばに屈曲点を持つ、口縁部がほぼ直線に開くといった特徴から、榊崎寺(法界寺)Ⅳ期・大澤伸啓の編年(大澤2003)の5期から6期に比定され、14世紀中葉から後葉に相当する資料と判断されよう。

土師質鍋は3点図化した。第48図4・5は浅い焙烙形を呈するもの、3は深い桶形を呈するものである。全体の様相を伺える遺物は出土していない。3は、器壁が直線的に立ち上がり、口縁部下端に転換点を持って外反し、底部が平底になるものである。地理的に近い上野や武蔵の編年(浅野1988・1991など)から見て、15世紀後半から16世紀前半に比定される。焙烙形の4・5も、耳(把手)が口縁部に接して接合される古い様相が見られることから、桶形とほぼ同じ年代の所産と考えられる。

瓦(第49図1・2)は、軒丸瓦1点、丸瓦3点、平瓦2点が出土しているが、図示した軒丸瓦と丸瓦の2点以外は小片である。瓦当部分が残存している軒丸瓦(第49図1)は法界寺(榊崎寺)C類に比定され、年代は14世紀中葉から後葉と考えられる(足利市教育委員会1995)。地形の特徴や近隣に中世寺院が所在する点から、瓦窯跡の存在も視野に入れて調査を行ったが、出土量は極少ないことから調査区近辺に瓦窯が存在する可能性は低いと判断した。

出土した陶器のうち、近世段階に比定されるものは第47図2の黄瀬戸小皿のみで、おおよそ16世紀末に比定されるものである。なお、図化していない遺物のうち、中世段階に比定されるものは捏ね鉢・措鉢の破片が1点ずつ、土師質鍋の破片が約10点ほどである。また、確実に近世段階に比定できるものはなかった。

以上のとおり、今回の調査で出土した須恵器窯跡以外の遺物は、大半が中世段階に比定されるものである。少量ではあるが、土師質皿や内耳土器などの生活雑器が出土していることから、調査区近辺に中世段階の遺構が存在していたものと考えられる。遺物の年代は14世紀から16世紀前半と幅広いが、遺跡が位置する山の反対側にあたる榊崎寺跡が機能していた期間に相当することから、何らかの関わりを持つ遺構だった可能性が高い。

今回の調査区付近は、鏝阿寺文書の中に、「榊崎村大窪家源寺(「家」は「宗」の誤記か)。理真人閑居地也」の記述があることから、榊崎寺の開祖である理真人の閑居寺とされる「宗源寺」(庵寺)の推定地とされている(足利市教育委員会1995・足利市文化財愛護協会2009)。寺は調査地が位置する沢の奥にあったとされており(第13図)、今回出土した中世遺物の年代とも大きな矛盾はないが、調査区内では遺構は確認されなかった。足利市文化財愛護協会の調査によれば、寺院伝承地の一部は北関東自動車道建設に伴い消滅したとされているが、調査区北側の民家裏手にある墓地区内に宗源寺に関係する銘文を持つ墓石や、建物礎石の可能性のある円礫が散在することから、今後、調査区近辺で「宗源寺」に関わる遺構が発見される可能性が残されていると言えよう。

第4表 榊崎渡戸古窯跡 坯蓋観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第17図 1 坯蓋	口(12.5) 高4.0	内外面ロクロナデ後天井部内面を手持ちヘラナデ、天井部回転ヘラズリ(正位で反時計回り)。外面に重ね焼き痕が残る。	5Y5/1 灰 砂礫やや多 砂粒多 焼成良	3/8	14 トレンチ
第17図 2 坯蓋	口(12.0/12.4 高4.1	内外面ロクロナデ後天井部内面を手持ちヘラナデ、天井部回転ヘラズリ(正位で反時計回りか)。外面にオリープ灰色の自然釉が薄く付着。焼き歪みあり。	2.5YR6/2 灰黄 砂礫やや多 砂粒・黒色融解 粒多 焼成やや良	6/8	E4-6 黒
第17図 3 坯蓋	口(12.4) 高3.9	内外面ロクロナデ後天井部内面を手持ちヘラナデ、口縁部ロクロナデ後に天井部回転ヘラズリ(正位で反時計回り)。口縁部と天井部の境に凹線が通り、その上は強いロクロナデにより凹む。	2.5Y7/2 灰黄 砂礫少 砂粒・黒色融解粒多 焼成やや良	口縁部 2/8 天井部 6/8	D4-9 黒・E3-8 黒・ E4-5 黒
第17図 4 坯蓋	口(13.0) 高4.0	内外面ロクロナデ後天井部内面を手持ちヘラナデ、口縁部ロクロナデ後に天井部回転ヘラズリ(正位で反時計回り)。口縁部と天井部の境には縦くカーブし、様は不明瞭。	10Y6/1 灰 砂礫・砂粒やや多 焼成良	4/8	SX-01・D4-13 黒・ E4-2 黒下
第17図 5 坯蓋	口(12.5) 高(3.9)	内外面ロクロナデ後底部内面を手持ちヘラナデ、底部外面回転ヘラズリ(正位で反時計回り)。口縁部に木目状の凹線跡が見られる。	5Y6/1 灰白 砂礫やや多・砂粒少 焼成やや良	4/8	D4-9 黒
第17図 6 坯蓋	口(13.2) 高(3.8)	内外面ロクロナデ後底部内面を手持ちヘラナデ、底部外面回転ヘラズリ(正位で反時計回り)。ロクロ目強。	5G5/1 オリープ灰 砂礫少・砂粒やや多 焼成良	4/8	E4-6 黒
第17図 7 坯蓋	口(13.0) 高(3.6)	内外面ロクロナデ後底部内面を手持ちヘラナデ、底部外面回転ヘラズリ(正位で反時計回り)。口縁部と天井部の境が強いロクロ目によって凹む。口縁部の残存少なく、口径は参考程度。	5Y7/1 灰白 砂礫やや多 砂粒・黒色融解 粒多 焼成やや良	3/8	D4-6 表土
第17図 8 坯蓋	口(13.0) 高(3.1)	内外面ロクロナデ、残存部少なく口径は参考程度。	10Y6/1 オリープ灰 砂礫・砂粒やや多 焼成やや良	1/8	E4-1 黒・E4-2 黒
第17図 9 坯蓋	破片	内外面ロクロナデ後天井部内面を手持ちヘラナデ、口縁部ロクロナデ後に天井部回転ヘラズリ(方向不明)。口縁部と天井部の境に強い稜が通り、その上は強いロクロナデにより凹む。口縁部が短く、ハの字状に開く。※推定で口径14.0、高さ3.6程度	7.5Y7/1 灰 砂礫やや多・砂粒多 焼成やや良	1/8 以下	D4-13 黒
第17図 10 坯蓋	破片	内外面ロクロナデ後天井部回転ヘラズリ(方向不明)。口縁部に強いロクロ目有り。口縁部はハの字状に開く。※推定で口径12.0～12.5、高さ3.6程度	2.5Y6/3 にぶい黄 砂礫少 黒色融解粒やや多 焼成やや良	1/8 以下	E4-2 黒
第17図 11 坯蓋	破片	内外面ロクロナデ。口縁部が短く、体部との境が強いロクロ目により凹む。破片断面に緑色の自然釉付着。※推定で口径12.0前後	2.5Y5/2 暗黄灰 砂礫少 砂粒・黒色融解粒多 焼成やや良	1/8 以下	E4-2 黒
第17図 12 坯蓋	破片	内外面ロクロナデ後天井部回転ヘラズリ(方向不明)。口縁部が短く、体部との境は緩やかにカーブする。※推定で口径12.0前後	2.5Y5/2 暗黄灰 砂礫少・砂粒・黒色融解粒 やや多 焼成良	1/8 以下	D4-13 黒

第5表 榊崎渡戸古窯跡 坯身観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第18図 1 坯身	口10.7 大12.9 残存高3.4	内外面ロクロナデ、底部外面回転ヘラズリ(逆位で反時計回り)。内外面に坯蓋の端部が融着。	5Y6/1 灰 砂礫・砂粒・黒色融解粒多 焼成やや良	5/8	D4-1 黒・D4-7 黒・ D4-14 黒
第18図 2 坯身	口10.9 大13.5 高3.9	内外面ロクロナデ後底部内面を手持ちヘラナデ、底部外面回転ヘラズリ(逆位で反時計回り)。受け部下面と体部の境に凹線がめぐる。	2.5YR6/2 灰黄 砂礫少 砂粒・黒色融解粒多 焼成やや良	口縁部完存 底部 7/8	D4-13 黒・ D4-16 黒
第18図 3 坯身	口(10.7) 大(13.0) 高3.8	内外面ロクロナデ後底部内面を手持ちヘラナデ、底部外面回転ヘラズリ。外面に自然釉・窯体片が付着し泡立っている。受け部に坯蓋の端部が融着。残存部少なく、口径は参考程度。	2.5Y6/4 にぶい黄 砂礫やや多 砂粒・黒色融解 粒多 焼成良	1/8	D4-7 黒
第18図 4 坯身	口(10.2) 大(12.1) 高3.9	内外面ロクロナデ、底部外面回転ヘラズリ(逆位で反時計回り)。口縁部に縦積痕が残る。残存部少なく、口径は参考程度。	2.5Y6/2 灰黄 砂礫少・黒色融解粒やや多 焼成やや良	1/8	E4-2 黒
第18図 5 坯身	口(10.8) 大(13.2) 残存高4.0	内外面ロクロナデ後底部内面を手持ちヘラナデ、底部外面回転ヘラズリ。ロクロ目強。受け部に坯蓋の端部が融着。	2.5YR5/2 暗黄灰 砂粒・黒色融解粒やや多 焼成やや良	3/8	E4-2 黒下

第3章 榊崎渡戸古窯跡の調査

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第18回 6 環身	口(11.1) 大(13.5) 残存高4.1	内外面ロクロナデ後底部内面を手持ちヘラナデ、底部外面回転ヘラクスリ。ロクロ目直。受け部と口縁部の境が円筒状になる。残存部少なく、口径は参考程度。	5YR6/1 灰 砂砂やや多・白色細粒子多 焼成良	1/8	D4-1
第18回 7 環身	口(12.0) 大(14.4) 残存高4.0	内外面ロクロナデ、底部外面回転ヘラクスリ。受け部と口縁部の境が円筒状になる。ロクロ目直。外面全体に緑色の自然釉付着。	10Y3/2 オリーブ灰(自然釉) 5Y5/1 (内面) 砂砂・黒色融解粒多 焼成やや良	3/8	D4-14 黒
第18回 8 環身	破片	内外面ロクロナデ。口縁部が長く口端部が鋭く尖って強く外反する。	5Y4/1 灰 砂砂・白色粒子少 焼成良	1/8以下	D4-13 黒
第18回 9 環身	破片	内外面ロクロナデ後底部内面を手持ちヘラナデ、底部外面回転ヘラクスリ。ロクロ目直。体部外面に緑色の自然釉付着。	2.5Y5/1 灰 砂砂少・砂砂・黒色融解粒や 多 焼成良	1/8以下	D4-14 黒

第6表 榊崎渡戸古窯跡 高環観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第19回 1 無蓋高環	口(14.2) 端14.0 高15.8	環内外面ロクロナデ、環底部内面に一定方向のヘラナデ。底部外面は回転ヘラクスリ後、脚との接合部を手持ちヘラナデか、脚部は環部接合後に内外面丁寧なロクロナデ。環口口縁部と底部の境に浅い沈線が2条めぐる。脚部中央に2本1組の沈線が2段めぐるが、上段の沈線は閉じずに途中で止まっている。脚端部は下方を尖らせて面を形成する。脚端部を除く外面と、脚部内面全体に薄く自然釉がかかる。	2.5Y7/1 灰黄 脚部) 砂砂やや多 砂砂・白 色粒子多 環部) 砂砂少 砂砂・白色粒 子多 焼成良	環部1/8 脚部上完存 脚部部7/8	E4-6 黒 E4-1 黒 接合しない同一個 体破片有り
第19回 2 無蓋高環	口(13.4)	内外面ロクロナデ、底部回転ヘラクスリ。底部は丸みを帯び、口縁部との境に段を作り、ハケ状工具で別点文を施す。口唇部は内閉じ状で尖る。内面に径約2cmの窓体片が付着。及び降灰。外面は透明の自然釉が薄く付着。	N3/ 灰 砂砂・白色粒子少 焼成良	口縁部2/8	E4-5 黒 D14-3 黒ベルト
第19回 3 無蓋高環	破片	内外面ロクロナデ、口縁部と底部の境に沈線が2条めぐる。 ※推定で口径14.0cm前後	5Y6/1 灰 砂砂・白色粒子多 焼成良	1/8	D4-8 黒ベルト
第19回 4 高環脚部	残存高 (7.2)	内外面ロクロナデ。環脚部に2本1組の沈線がめぐる。上端は環部との接合面か。摩擦が著しく、一部破片は剥熱。	2.5Y8/1 灰白 砂砂少 砂砂多 焼成不良	脚部中位 8/8	SX 01 覆土・ D3-16 黒
第19回 5 高環脚部	端(12.8) 高(7.2)	内外面ロクロナデ。脚部中央に2本1組の沈線がめぐる。脚端部は下方・上方とも尖らせて面を形成するが、上方の稜はやや丸みを帯びる。	7.5GY5/1 緑灰(内面) 10Y5/1 灰(外面) 白色粒子少 焼成良	脚部部1/8 脚部中位 3/8	E4-6 黒
第19回 6 高環脚部	口(14.0) 高(3.5)	内外面ロクロナデ。脚端部は下方を尖らせて面を作る。摩擦が著しい。 ※残存部少なく、環部径は参考程度。	2.5Y8/1 灰白 砂砂・砂砂・白色粒子やや多 焼成不良	脚部部1/8	D4-13 黒
第19回 7 高環か	破片	内外面ロクロナデ。脚端部を折り返して面を作る。端部先端は丸みを帯びる。破片上部に透かし孔あり(形状不明)。8と同一個体か。(別器種の可能性もあり)	7.5Y4/1 灰 微細白色粒子微量 焼成やや良	1/8以下	D4-2 黒
第19回 8 高環か	破片	内外面ロクロナデ。脚端部を折り返して面を作る。端部先端は丸みを帯びる。破片上部に透かし孔有り(形状不明)。7と同一個体か。(別器種の可能性もあり)	7.5Y5/1 灰 微細白色粒子微量 焼成やや良	1/8以下	E4-2 黒

第7表 榊崎渡戸古窯跡 こね鉢観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第20回 1 こね鉢	口(15.8) 底(9.6) 高11.1	口縁部～体部成形後に底部内盤を接合し、全体をロクロナデ。底部外面及び外周を手持ちヘラクスリか(摩擦により不明) 底部中央は丸みを帯びる。口縁部直下に強いロクロナデによる凹み有り、口唇部は平坦。	5Y7/1 灰白 砂砂少 砂砂・黒色融解粒多 焼成不良	2/8	D4-6 黒・D4-11 黒
第20回 2 こね鉢	口15.6 底9.3 高11.7	口縁部～体部成形後に底部内盤を接合し、全体をロクロナデ。見込み部分は強いナデにより凹む。底部中央は丸みを帯びる。底部外面及び外周を手持ちヘラクスリ。口縁部直下に強いロクロナデによる凹み有り、口唇部は平坦。内面に降灰、緑色の自然釉及び細かな窓体片、外面は自然釉が薄く付着。底部に空気が入って破裂か。	2.5Y4/2 暗黄灰 砂砂少 砂砂・黒色融解粒多 焼成良	口縁部～体 部7/8 底部8/8	D4-7 黒・D4-13 黒ベルト・E3-4 黒・E4-5 黒・E4-6 黒

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第20図 3 こね鉢	口 (13.8) 底 9.3 高 12.6	口縁部～体部成形後に底部円盤を接合し、全体をロクロナデ。底部中央は丸みを帯びる。底部外周をロクロナデ後、外面を回転ヘラケズリ(逆位で反時計回り)。口縁部直下にロクロナデによる縦い凹みあり、口縁部は内閉ぎ状に突る。内面に窓体片が落ち込んでいる。外面も窓体片、別個体の破片が融着。	10Y5/1 灰 砂礫多 黒色融解 粒多 焼成良	口縁部～体 部 1/8 底部完存	D4-13 黒・E4-6 黒
第20図 4 こね鉢	口 (18.0) 残存高 9.0	内外面ロクロナデ。内面はロクロ目が良く残る。口縁部は平坦。 ※残存部が少なく、口径・傾きは参考程度。	10Y4/1 灰 砂礫・黒色融解粒多 焼成良	口縁部 2/8	D4-13 黒ベルト
第20図 5 こね鉢	底 10.2 残存高 1.9	こね鉢底部破片。底部外面を回転ヘラケズリ。 ※残存部が少なく、底径は参考程度。	10Y4/1 灰 砂礫少 砂粒やや多 焼成良	底 2/8	D4-13 黒・D3-12 黒

第8表 榊崎渡戸古窯跡 瓶類(提瓶・フラスコ瓶・平瓶) 観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第21図 1 提瓶	残存高 18.0	体部内外面ロクロナデ。外面全体にカキメ。側面近くにカキメ以前のハケ状工の調整痕が残る。内面に粘土接合痕が残る。口縁部別作りで接合(調整不明)。実測図右側面で見える。外面に窓体片が付着。内外面ともあばた状の潤滑が見られる。器形は卵形か。実測図左側は丸みを帯びると考えられるが、残存していない。横瓶の可能性もあり。	5Y3/1 オリーブ黒(外面) 7.5Y5/1 灰(内面) 砂礫少 白色粒子・黒色融解 粒多 焼成良	頸部 3/8 体部 3/8	D4-8 黒ベルト・ D4-11 黒・D4-13 黒・D4-14 黒
第21図 2 提瓶	残存高 19.9	体部内外面ロクロナデ。外面体部半ば～閉塞部までカキメ。実測図左側面は回転ヘラケズリ(時計回り)。閉塞は径 9.2cm の円盤を絞りながら接合。内面体部に粘土接合痕が残る。口縁部別作りで接合後、頸部内面をヘラナデ。外面一部に暗灰色の自然釉が付着。	2.5Y6/1 黄灰 小砂礫・白色粒子多 黒色融 解粒多 焼成良	頸部 1/8 体部 2/8	D4-6 黒・D4-13 黒・D4-13 黒ベル ト
第21図 3 提瓶か	残存高 19.0	体部内外面ロクロナデ。外面にカキメ。実測図右側内面に降灰。外面に暗灰色の自然釉が付着。	2.5Y6/1 黄灰 砂礫少 砂粒・白色粒子多 焼成良	体部 2/8	E4-6 黒・SX-01 覆土
第21図 4 提瓶か	残存高 18.4 破片	内外面ロクロナデ。外面自然釉付着により不明。閉塞部は径 5.2cm の円盤を絞りながら接合(円盤部は欠損)。外面自然釉は閉塞部から口縁部方向へ垂れる。	5G2Y/1 オリーブ黒(外面) 2.5Y5/3 黄褐(内面) 砂礫少 黒色融解粒多 焼成良	体部 1/8	D4-12 黒
第21図 5 提瓶か	残存高 19.0 破片	内外面ロクロナデ。外面はカキメ? (自然釉付着及び摩擦により不明) 閉塞は径 6.0cm の円盤を絞りながら接合(円盤部は欠損)。閉塞接合面に自然釉が付着。	7.54Y/3/2 オリーブ黒 砂礫少 黒色融解粒多 焼成良	体部側面 2/8	D4-7 黒・E4-1 黒 D4-13 黒
第21図 6 フラスコ 瓶か	最大径 (13.0) 底径 (7.6)	体部内外面ロクロナデ。外面カキメ。閉塞は長径約 9.8cm、短径約 8.5cm の楕円形円盤を絞りながら接合。閉塞近くに指押さえ痕あり。群馬系の在地化したフラスコ瓶の可能性もあり。	2.5Y5/2 暗黄灰 砂粒やや多 黒色融解粒多 焼成やや良	体部側面 1/8	D4-12 黒・E4-2 黒
第21図 7 平瓶	最大径 (13.0) 底径 (7.6)	内外面ロクロナデ。内面ロクロ目強。底部外周から体部外面カキメ。口縁部別作りで接合後、頸部をヘラナデ及びロクロナデ。底部は円盤状の粘土に粘土糊を巻き上げて成形か(底部中央は調整無し)。底部内面中央から器壁に寄った部分以降灰。	5Y7/1 灰白 砂礫やや多 砂粒・微細な白 色粒子少 焼成やや良	頸部 1/8 体部 3/8 底部 4/8	E4-6 黒
第21図 8 提瓶また は長径直 か	破片	内外面ロクロナデ。外面にカキメの後、外面 2本1組の比喩で3段に区画。区画内にハケ状工具で連続刺突を施す。残存部最下段にはカキメのみ、円盤閉塞か。残存部が少なく、長頸直筒部の可能性もあり。復元径は参考程度。	5Y6/1 灰 砂礫少 砂粒・白色粒子(微 細)多 焼成良	体部 1/8 以 下	D4-1 黒・D4-13 黒

第9表 榊崎渡戸古窯跡 瓶類(横瓶) 観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第22図 1 横瓶	口 (13.2) 高 25.4	口縁部ロクロナデ。体部内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ後カキメ。口縁部接合後に頸部ヘラナデ。外面にコバルト色・緑色の自然釉付着。口縁から体部側面に向かって垂れる。内面にも自然釉の流れ込みあり。外面の大部分は摩滅。口唇部上端は平坦。	10Y3/2 オリーブ黒(外面) 2.5Y6/2 灰黄(内面) 砂礫・砂粒やや多 白色粒 子・黒色粒子(一部融解)多 焼成良	体部垂直方 向 4/8 口縁部 4/8	D4-10 黒・D4-6 黒・D4-13 黒 D4-8 黒ベルト

第3章 榊崎渡戸古窯跡の調査

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第22図 2 横瓶	頭(6.3) 残存高2.3	体部内面クロコナデ、外面は自然輪付着により不明、口縁部接合後に頸部ヘラナデ(口縁部は接合面で欠損)、外面の自然輪は直立し、一部割断。復元胴圍17.6cm(参考程度)	10Y3/1 黒(外面) 2.5Y6/2 灰黄(内面) 小砂礫少 白色粒子・黒色融解粒多 焼成やや良	頸部4/8 体部直交方向1/8	E4-6黒・D4-6表土
第22図 3 横瓶	頭8.8 残存高10.2	体部内外面クロコナデ後、外面カキメ。口縁部接合後に頸部ヘラナデ、外面全体に緑色の自然輪付着、実測図水平方向に垂れる。復元胴圍19.6cm(参考程度)	7.5Y5/2 灰オリーブ 砂礫多 黒色融解粒多 焼成良	頸部6/8 体部直交方向2/8	SX01覆土・SX-01No.14・D4-7黒・E3-4黒
第22図 4 横瓶	破片から復元	内外面クロコナデ後、外面カキメ。閉塞は径約8.0cmの円盤を絞りながら接合、円盤の接着強。内面クロコナデ目立、外面に緑色の自然輪が厚く付着。復元胴圍18.4(参考程度)	7.5Y3/2 オリーブ黒(外面) 2.5Y7/2 灰黄(内面) 砂礫・砂粒少 黒色融解粒・白色粒子多 焼成やや良	破片	D4-13黒ベルト・D4-13黒・D3-11黒・E4-2黒
第22図 5 横瓶	残存高18.4	内外面クロコナデ、外面摩滅及び自然輪付着により調整不明。閉塞は径約7.0cmの円盤を絞りながら接合、円盤接合面に自然輪が付着、焼成時に破裂か。図版番号6、未実測の横瓶体部片と共に窯体に融着。	2.5Y6/1 黄灰 砂礫少 白色粒子多 黒色融解粒極多 焼成良	体部2/8	D4-13黒・D4-7黒・D4-11黒
第22図 6 横瓶か	残存高21.4	体部内面同心円状当て具痕、外面カキメ? (窯体融着により不明)。閉塞は径約10cmの円盤を絞りながら接合、円盤の接着強。内面に降灰、透明の自然輪が薄く付着。図版番号7、未実測の横瓶体部片と共に窯体に融着。	2.5Y6/3 にぶい黄(内面) 砂礫少 白色粒子多・黒色融解粒多 焼成良	体部3/8	D4-9黒
第22図 7 横瓶	残存高12.4	口縁部クロコナデ、体部内面同心円状当て具痕、外面平行タキ後にカキメ。口縁部接合後にヘラナデ。外面全体に緑色の自然輪付着(口縁部内面にも付着)。口唇部は矩形を呈し外反する。復元高は31cm程度か、当て具は8と同じ工具。	10Y4/2 オリーブ灰(外面) 2.5Y6/2 灰黄(内面) 小砂礫・白色粒子少 黒色融解粒多 焼成やや良	口縁部1/8 頸部2/8 体部垂直方向2/8	E4-1黒・E4-2黒ベルト・E4-1黒ベルト
第22図 8 横瓶	残存高6.4	口縁部クロコナデ、体部内面同心円状当て具痕、平行タキ後にカキメ。口縁部接合後に丁事なナデ(内面は痕跡が残っていない)。外面及び口縁部内面に緑色・透明の自然輪が薄く付着。口唇部は矩形を呈し外反する。当て具は7と同じ工具。	2.5Y5/3 黄褐 砂礫少 白色粒子・黒色融解粒多 焼成やや良	口縁部1/8 体部垂直方向1/8	E4-1黒

第10表 榊崎渡戸古窯跡 瓶類・壺類(長頸壺・短頸壺・蓋・底部片)観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第23図 1 長頸壺	口(8.2) 大17.4 残存高12.2	口縁部クロコナデ、体部内面クロコナデ、外面は自然輪が厚く調整不明。口縁部接合後に頸部ナデ。口唇部はつまみ出しで鋭く尖る。体部平ば(破片下部)に別個体の破片が融着し、自然輪が口縁部から底部に向けて垂れる。口縁部内部に自然輪・窯体片が付着することから、横向きあるいはやや斜めに添って焼成したと考えられる。	2.5GY3/1 暗オリーブ灰(外面) 5Y8/1 灰白(内面) 小砂礫少 白色粒子・黒色融解粒多 焼成良	口縁部1/8 体部2/8	D4-13黒・D4-7黒
第23図 2 壺類	大(18.0) 残存高8.4	体部内外面クロコナデ後、肩部外面カキメ、体部下平回転ヘラズリ? (残存部少なく不明)。頸部接合面で破損。濃い緑色の自然輪が肩部から体部にかけて垂れ、体部平ばに窯体片が融着。復元径は参考程度。	7.5Y4/1 灰 砂礫少 砂粒・黒色融解粒やや多 焼成やや良	体部上半 1/8	E4-1黒
第23図 3 壺類	大(20.2) 残存高9.1	体部内外面クロコナデ後、体部下平カキメ、体部上半は自然輪付着により不明。肩部は2本1組の沈槽で2段に区画。口縁部を絞りながら接合、内外面の自然輪が流れる方向から(実測図一点距離部分)、長頸壺あるいは短頸壺の類と判断。復元径は参考程度。	2.5Y6/1 黄灰 砂礫やや多 白色粒子・黒色融解粒多 焼成良	肩部～体部 上半1/8	D4-9黒
第23図 4 短頸壺	口(10.0) 残存高4.6	口縁部クロコナデ、体部内外面クロコナデ後外面カキメ。口縁部は絞りがながら接合か。口唇部断面は矩形で大きく外反、全体的に摩滅。自然輪の付着無し。	5Y8/1 灰白 砂粒・砂礫・白色粒子やや多 焼成不良	口縁部2/8	SX01覆土
第23図 5 短頸壺	破片	口縁部クロコナデ、体部内外面クロコナデ後外面カキメ(幅1.2cmの工具)。口縁部接合後に頸部ヘラナデ。口縁部断面は矩形で大きく外反。自然輪の付着無し。口縁部径は推定で約11.0cm。	10Y6/1 灰 砂礫やや多 砂粒・白色粒子少 焼成良	口縁部1/8	D4-11黒
第23図 6 短頸壺	口(11.4) 残存高5.2	口縁部クロコナデ、体部は残存部少なく不明。口縁部クロコナデ前に縦方向のヘラズリ? 口縁部接合部分は粗い撫でつけのみで調整無し。口唇部断面下側が鋭く尖り、大きく外反する。口縁部内面に降灰。	7.5Y4/1 灰 砂礫少 砂粒・白色粒子やや多 焼成良	口縁部3/8	D4-6表土
第23図 7 短頸壺	口(13.9) 残存高5.0	口縁部クロコナデ、体部内面不明、外面平行タキ。口縁部平ばが都らむ。口唇部断面は矩形で大きく外反する。全体的に摩滅し、調整・口縁部接合方法は不明。	5Y8/1 灰白 砂礫少 砂粒やや多 焼成不良	口縁部2/8	D4-7黒

番号/ 器種	大きさ (cm)	特 徴	色調 / 胎土 / 焼成	残存状態/ その他	注 記
第23図 8 短頸直	破片	口縁部ロクロナデ、体部ロクロナデ後回転ヘラケズリ、頸部は1条の沈線がめぐる。口唇部断面は丸みを帯び、大きく外反する。体部の器厚は非常に厚く、断面の一部が斜状に剥離する。成形後に粘土を外面に貼り付けか。	2.5Y6/2 灰黄 砂礫少 砂粒多 焼成良	破片	E3-8 黒
第23図 9 小型壺?	破片	内外面ロクロナデ、全体的に薄手の作り。頸部及び体部最大径部分で自然輪が掛け分け状に水平になっているが、偶然のものか?	10Y3/1 オリーブ黒 砂粒・黒色融解粒多 焼成良	破片	D4-8 黒ベルト
第23図 10 瓶類? 底部	残存高 5.5	体部下ロクロナデ後、底部回転ヘラケズリ。外面剥落のため、調整不明。外面に小石が付着、自然輪が底部方向に向かって垂れる。破片断面にも自然輪付着、焼き台に転用可。横断面の可能性もあり。	2.5Y6/2 灰黄 砂礫やや多 砂粒・白色粒子多 焼成良	体部下平 2/8	D4-14 黒
第23図 11 瓶類底部	底 (11.0) 残存高 4.8	内外面ロクロナデ後、底部～底部外周を回転ヘラケズリ (反時計回り)。内面底部中央から器壁に寄った部分に降灰。平期の底部か? 自然輪の付着無し。	5Y6/1 灰 砂礫少 白色粒子やや多 焼成良	底部 1/8	D4-10 黒
第23図 12 瓶類底部	底 (10.6) 残存高 2.0	内外面ロクロナデ後、底部～底部外周を回転ヘラケズリ (反時計回り)。底部中央は椎か上げ状になる。底部外周に別個体の破片が融着。内面中央に降灰。外面から底部にかけて濃い灰色の自然輪付着。	S2 5Y6/1 黄灰 砂礫・砂粒・白色粒子多 焼成良	底部 3/8 体部下平 1/8	D3-4
第23図 13 壺類	脚端 11.0 残存高 3.6	脚付壺の脚端部か。内外面ロクロナデ。脚端部平ばに強い稜、その下が沈線状になる。端部断面は外側に尖り、接地面は平直。	10YR6/2 灰黄褐 白色粒子 (砂礫状)・砂粒・ 黒色融解粒多 焼成良	脚端部 4/8	D4-13 黒・E4-1 黒
第23図 14 瓶類蓋	破片	内外面ロクロナデ後、天井部分に掘り貼り付け。外面は緑色の自然輪付着のため調整不明。実測図稜線部分での推定径は5.3cm。長頸瓶の蓋か?	2.5Y7/2 灰黄 砂粒・黒色融解粒多 焼成良	破片	D4-8 黒ベルト

第11表 榊崎渡戸古窯跡 瓶類・壺類 (口縁部) 観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特 徴	色調 / 胎土 / 焼成	残存状態/ その他	注 記
第24図 1 瓶・壺類 口縁部	口 8.4 残存高 7.6	内外面ロクロナデ。外面に2本1組の沈線がめぐる。頸部内面に粘土接合痕が残る。体部接合部分で内面に鋭い稜を作り、くの字に屈曲する。口唇部上端はつまみ上げて尖らせ、下端も突出させて外側に面を作り出し、さらに段を作る。外面に暗灰オリーブ灰色の自然輪付着。口唇部は第44図2の壺体と融着する。	5Y5/1 灰 (外面) 小砂礫・白色粒子・黒色融解 粒多 焼成良	口唇部 7/8 頸部 1/8	D4-14 黒・E4-5 黒
第24図 2 瓶・壺類 口縁部	口 9.4 残存高 5.5	内外面ロクロナデ。外面に2本1組の沈線がめぐる。破片下端の内面は、強い回転ヘラケズリにより凹む。口唇部上端はつまみ上げて尖らせ、下端も突出させて外側に面を作り出し、さらに段を作る。内外面に暗オリーブ灰色の自然輪が付着。口唇部は第44図3の壺体と融着する。	2.5Y6/2 灰黄 砂粒・黒色融解粒多 焼成良	口唇部 6/8 頸部 2/8	D4-11 黒・E4-1 黒
第24図 3 瓶・壺類 口縁部	口 12.0 残存高 6.7	内外面ロクロナデ。口唇部は下方を尖らせて面を作り出し、さらに段を作る。内外面に緑色・コバルト色の自然輪が付着。	5Y5/1 黄灰 砂粒・白色粒子多 焼成良	口唇部～頸 部 2/8	D8-16 黒
第24図 4 瓶・壺類 口縁部	口 (7.9) 残存高 5.5	内外面ロクロナデ。口縁部平ばに2本1組の沈線がめぐる。口縁部下端内面が強いロクロナデにより凹む。口縁部は絞りながら接着。ユビ押さえ。内面は口唇部から頸部に向かって自然輪が垂れる。	2.5Y7/2 灰黄 砂礫少 砂粒・白色粒子やや 多 焼成良	口縁部 2/8	E4-1 黒
第24図 5 瓶・壺類 口縁部	口 (7.0) 残存高 5.8	内外面ロクロナデ。頸部接合面で欠損。内面に降灰及び褐色の自然輪が薄く付着、外面にはコバルト色の自然輪が付着。	2.5Y5/2 暗黄灰 砂礫少 砂粒・白色粒子・黒 色融解粒多 焼成良	口縁部 4/8	D4-14 黒
第24図 6 瓶・壺類 口縁部	口 5.8 残存高 5.6	内外面ロクロナデ。破片下端に一部接合面、粘土接合痕が残る。口唇部は楕円状に大きく歪む (実測図は長径が横方向)。外面に濃い緑色の自然輪が薄く付着。	5Y3/1 オリーブ黒 砂粒・黒色融解粒多 焼成良	口縁部 6/8	D4-9 黒

第3章 榊崎渡戸古窯跡の調査

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第24図 7 瓶・直頸 口縁部	口(6.0) 残存高4.5	内外面ロクロナデ後、外面にカキメ。口唇部内面は内削ぎ状で、上端が外傾しながら尖り、内面は鋭い稜を作り出す。その下は強いロクロナデにより凹凸。内外面に透明の自然釉が薄く付着。外面に別個体の口縁部が融着。	2.5Y5/2 黄褐 砂礫少 砂粒・白色粒子・黒色融解粒多 焼成良	口縁部1/8	D4-7 黒
第24図 8 瓶・直頸 口縁部	口(8.6) 残存高4.4	内外面ロクロナデ。口唇部内面は内削ぎ状で、上端が外傾しながら尖り、その下が強いロクロナデにより凹凸。外面に緑色の自然釉が付着。内面に降灰。	2.5Y4/1 黄灰 白色粒子・黒色融解粒多 焼成良	口縁部2/8	D4-9 黒

第12表 榊崎渡戸古窯跡 瓶 観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第25図 1 瓶	残存高7.0	摩擦により調整は不明。把手部分を手捏ねにより別作りし、体部に接合後指で推す。焼成不良により還元せず。胎土は軟質。と同一個体の可能性あり。	10YR7/3 にぶい・橙 砂礫やや多砂粒・白色粒子多 焼成不良	体部1/8	D4-14 表土層
第25図 2 瓶	破片	摩擦により調整は不明。破片中ほどに2本1組の平行沈線がめぐる。焼成不良により還元せず。胎土は軟質。1と同一個体の可能性あり。	10YR7/3 にぶい・橙 砂礫やや多砂粒・白色粒子多 焼成不良	破片	D4-10 黒・D4-7 黒

第13表 榊崎渡戸古窯跡 甕(口縁部波状文)観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第26図 1 甕	口(32.0) 残存高 14.5	口縁部ロクロナデ、体部内面同心円状当て具痕。外面平行タキ(厚減)。口縁部は沈線により2段に区画し、4～6本1組の波状文をそれぞれの段に施文する(1段目は2組以上の波状文の可能性有り)。最下段はヘラナデを施す。口唇部断面は矩形となり、直下に蹄状の稜がめぐる。口縁部下半の内面をヘラナデ。口縁部と頸部の接合部分内面には薄く粘土を貼った後にヘラナデ。口縁部内外面と体部外面に緑色の自然釉が厚く付着し、一部は剥落する。体部内面は透明の自然釉が薄く付着。体部破片断面にも自然釉が付着。体部は薄作り。残存部分少なく、復元は参考程度。	2.5GY3/1 暗オリーブ灰 (外面自然釉部分) 5Y6/1 灰(外面無釉部分) 5Y5/2 灰オリーブ(内面) 砂礫少 砂粒・白色粒子・黒色融解粒やや多 焼成やや良	口縁部1/8 頸部2/8	E4-1 黒
第26図 2 甕	破片	口縁部ロクロナデ後、内外面全体にカキメ。口縁部内面下半はヘラナデ。外面は2本1組の沈線により2段に区画し、1段目に5本1組の波状文、2段目に7～9本1組の波状文を施文する。口縁部最下段は無文。口唇部断面は矩形となり、外側に蹄状の稜がめぐる。外面全体に暗灰色の自然釉が付着。部定口径は38cm程度。	5Y4/1 灰～5Y3/1 オリーブ 黒(外面) 2.5Y6/1 黄灰(内面) 砂礫やや多 砂粒・白色粒子・黒色融解粒多 焼成良	1/8 以下	D3-16 黒・D3-12 黒
第26図 3 甕	破片	口縁部内外面ロクロナデ後、内面にカキメ。外面は沈線により2段以上に区画。1段目に4本1組の波状文を施す。沈線・波状文とも極浅く、器面の硬化が進んだ段階での施文か。口唇部断面は丸みを持ち、外面が鋭く尖った蹄状になる。	2.5Y4/1 黄灰(外面) 2.5Y6/1 灰黄(内面) 砂礫多 白色粒子やや多 焼成やや良	1/8 以下	E4-3 黒
第26図 4 甕	破片	口縁部内外面ロクロナデ。外面は2本1組の沈線により2段以上に区画。1段目・2段目に9本1組の波状文を施す。口唇部断面は矩形となり、外面は折り返し状で幅広い面を作り出す。内面は鋭い稜となる。外面は暗褐色。外面は薄い緑色の自然釉が付着。	2.5Y3/1 黒褐(外面) 2.5Y6/1 黄灰(内面) 砂礫多 砂礫少 焼成やや不良	1/8 以下	E4-5 黒
第26図 5 甕	口(21.0) 残存高4.8	口唇部ロクロナデ。口唇部を外側に折り返し、幅広い面を作り出す(折り返し面もロクロナデ)。口縁部は6本1組の波状文を施し、下端をヘラナデ。波状文の段数は不明。破片下端は外反する。内面は全体的にオリーブ色の自然釉が付着。外面は暗灰色の自然釉が滑れる。	5P6/1 紫灰(外面) 10Y3/2 オリーブ黒(内面) 砂粒・砂礫・白色粒子多 焼成良	口縁部1/8	SX-01 覆土
第26図 6 甕	破片	口唇部を外側に折り返し、幅広い面(折り返しは幅は不均一)を作り出した後に口縁部全体をロクロナデ。口唇部内面上部に沈線がめぐる。口縁部は5本1組の波状文を施す。破片下端に区画した沈線が僅かに残るが、段数は不明。口唇部外側以外の内外面に暗褐色の自然釉が付着。	5YR2/1 黒灰(自然釉部分) 5P6/1 紫灰(釉以外の部分) 砂礫多 砂粒・白色粒子やや多 焼成良	1/8 以下	D4-14 黒? (注記不詳)

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第26図 7 費	破片	口縁部ロクロナデ。口唇部を外側に折り返し、下端を強いロクロナデにより鋭い稜を作り出す。口縁部は4本1組の波状文を施す。段数は不明。内面はあぼた状の刻線あり。	7.5YR3/1 黒褐 砂礫微 白色粒子少 焼成良	1/8以下	D3-11 黒
第26図 8 費	破片	口唇部を外側に折り返し、幅広の面(折り返しの幅は不均一)を作り出した後に口縁部全体をロクロナデ。口縁部は3本1組の波状文を施す。波状文下に区画状の沈線が残るが、段数は不明。内外面に暗褐色の自然釉が附着。	5YR2/1 黒褐(自然釉部分) 5P6/1 紫灰(釉以外の部分) 砂粒・白色粒子少 焼成良	1/8以下	E4-1 黒
第26図 9 費	破片	波状文を持つ費の口縁部破片全体に粘土を塗りつけたもの。断面を含め、全面に粘土を塗りつけている。粘土の塗りつけは、焼成前か後かは不明。費自体の作りは2に似るが、自然釉は附着していない。	10Y6/1 灰 破片本体の胎土は緻密。塗りつけた粘土は小砂礫・砂粒を多く含む 焼成良	1/8以下	E4-1 黒
第27図 10 費	破片	口縁部と頸部の接合面ではがれた破片。口縁部内外面ロクロナデ。頸部近く内面はヘラナデか? 外面は2本1組の平行沈線により2段以上に区画し、上下の区画に5本1組の波状文を施す(段数は不明)。最下段の波状文下は区画無し。外面は厚減により、詳細な調整は不明。体部内面は同心円状当て具痕、外面は平行タタキ。頸部接合面にも平行タタキを施す。接合部分の外面には補強帯をめぐらせ、断面は矩形となる。接合部分内面にも粘土帯を貼り付けて補強。11と同一個体の可能性有り。	2.5Y6/2 灰黄(外面) 5Y3/1 オリーブ黒(内面) 砂礫少 砂粒・白色粒子やや多 焼成良	口縁部～頸部 1/8以下	E4-1 黒・E4-2 黒 ヘルト
第27図 11 費	破片	口縁部と頸部の接合面を残す破片。口縁部内外面ロクロナデ。頸部近く内面はヘラナデか? 外面は2本1組の平行沈線により3段以上に区画し、上下の区画に5本1組の波状文を施す(段数は不明)。最下段の波状文下は区画無くロクロナデのみ。外面に泥状の粘土が付着。体部内面は同心円状当て具痕、外面は平行タタキ。頸部接合面にも平行タタキを施す。頸部と口縁部の接着部分の間に、三角状の空割が残る。接合部分の外面には補強帯をめぐらせ、断面は矩形となる。接合部分内面にも粘土帯を貼り付けて補強。10と同一個体の可能性有り。	5Y3/1 オリーブ黒 砂礫少 砂粒・白色粒子やや多 焼成良	口縁部～頸部 1/8以下	D3-12 黒・D4-7 黒
第27図 12 費	破片	頸部補強帯を持つ破片。口縁部は欠損。体部内面は同心円状当て具痕、外面は自然釉が厚く付着するため不明。口縁部と頸部の接合面が残る。10・11と同じその面にも平行タタキを施す。頸部接合部分の外面には補強帯をめぐらせ、断面は矩形となる。頸部内面はヘラナデか?	7.5Y2/1 黒(外面) 7.5Y3/1 オリーブ黒(内面) 5P6/1 紫灰(断面・接合面) 砂礫少 白色粒子・砂粒やや多 焼成良	1/8以下	E4-1 黒・D3-12 黒

第14表 榑崎渡戸古窯跡 費(口縁部斜行文)観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第28図 1 費	口(53.0) 大(90.0) 残存高 60.0	口縁部ロクロナデ後外面にカキメ、内外面ともほぼより下はヘラナデ。外面は2本1組または1本のみの沈線により2段に区画し、棒状工具による斜行文を連続施文する。最下段より下は施文無し。口唇部外側には薄い粘土帯を貼り付けて折り返し状の面を作り、その上をロクロナデして浅く凹ませる。断面は台形となる。内側は強いロクロナデによりつまみ出す。体部内面は同心円状当て具痕、外面は平行タタキ。当て具は2と同じ工具か。口縁部と頸部の接合部分内面には薄い粘土帯を貼って補強し、細いへらによるナデを加えて接着させる。体部上端の接合面には、平行タタキの痕が残る。底部近く外面に、濃いオリーブ色の自然釉が薄く付着。同一個体の体部破片が多くあるが、直接接合はしない。	2.5C/3/1 暗オリーブ灰 (外面自然釉部分) 5Y6/1 灰(外面無釉部分) 5Y5/2 灰オリーブ(内面) 砂礫微 砂粒・白色粒子・黒色融解粒やや多 焼成やや良	口縁部1/8 頸部2/8	E4-1 黒

第3章 榊崎渡戸古窯跡の調査

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第29図 2 費	口 (40.0) 残存高 19.8	口縁部ロクロナデ後外面にカキメ、内面平ばり下はヘラナデ。外側は2本1組または1本のみ沈線により2段に区画し、棒状工具による斜行文を連続施文する。最下段より下は施文無し。口唇部外側には薄い粘土帯を貼り付けて折り返し状の面を作り、その上をロクロナデして浅く凹ませる。断面は台形となる。内側は強いロクロナデによりつまみ出す。体部内側は同心円状当て具痕、外面は平行タタキ。当て具は1と同じ工具か。口縁部と頸部の接合部分内側には粘土帯を貼って補強しているようだが、強く凹でつけて接着しているため、表面観察でははっきりとしない。内面口縁部及び外面の一部に、薄いオリーブ色の自然釉が付着。3と同一個体の可能性もあるが、若干口縁部が短い。	10YR4/1 褐灰 5RP5/1 紫灰 (外面) 5Y3/1 オリーブ黒 (内面) 砂礫・小砂礫・白色 粒子多 焼成良	口縁部～頸 部 4/8	D4-7 黒・D4-8 表 土・D4-12 黒・ SX 01 覆土・SX- 01No.17・18・19
第29図 3 費	口 (40.0) 残存高 16.2	口縁部ロクロナデ後外面にカキメ、内面平ばり下はヘラナデ。外側は2本1組または1本のみ沈線により2段に区画し、棒状工具による斜行文を連続施文する。最下段より下は施文無し。口唇部外側には薄い粘土帯を貼り付けて折り返し状の面を作り出し、その上をロクロナデして浅く凹ませる。断面は台形となる。内側は強いロクロナデによりつまみ出す。体部内側は同心円状当て具痕、外面は平行タタキ。当て具は1と同じ工具か。口縁部と頸部の接合部分内側には粘土帯を貼って補強し、強く凹でつける。頸部接着面には平行タタキ、口縁部内側には同心円状当て具痕が写っている。内面口縁部及び外面の一部に、薄いオリーブ色の自然釉が付着。2と同一個体の可能性もあるが、若干口縁部が短い。	2.5Y4/1 黄灰 (外面) 2.5Y6/1 灰黄 (内面) 砂礫多 白色粒子やや多 焼成やや良	口縁部 2/8 頸部 1/8	D4-6 黒・D4-7 黒・ D4-8 黒・D4-9 黒
第29図 4 費	破片	口縁部ロクロナデ後にカキメ、棒状工具による斜行文を連続施文する。段数は不明。口唇部内側は強いロクロナデによりつまみ出し、外側は広い面を作り出す。他の個体に比べ薄く付着。内面は褐色の自然釉が泡だち剥落、外面は薄く付着。	2.5Y5/2 暗黄 砂礫少 黒色融解粒多 焼成良	1/8 以下	E4-6 黒
第29図 5 費	破片	口縁部ロクロナデ後にカキメ、外側は沈線より2段以上に区画し、棒状工具による斜行文を連続施文する。口唇部内側は強いロクロナデによりつまみ出して尖った稜を作る。外側は広い面を作り出し、その上を強いロクロナデで凹ませる。内外面に薄いオリーブ色の自然釉が付着。器壁内に空気が入り、所々膨らんでいる。胎土分析実施個体 (分析 No.13)。	2.5Y5/2 暗黄灰 砂礫・砂礫・黒色融解粒多 白色粒子少 焼成良	1/8 以下	トレンチ 12・ D3-13 黒・SX 01 覆土
第29図 6 費	破片	口縁部ロクロナデ後にカキメ、内面平ばり下はヘラナデか。外側は沈線より2段以上に区画し、棒状工具による斜行文を連続施文する。口唇部外側には薄い粘土帯を貼り付けて折り返し状の面を作り、その上をヘラナデして稜を作り出す。内側は丸みを帯びた稜になる。内面に褐色の自然釉が薄く付着、外面は濃い緑色の釉が厚く付着する。器壁内に空気が入り、膨らんで破裂している。焼き跡も著しい。	7.5Y3/1 オリーブ黒 (外面) 2.5Y5/1 黄灰 (胎土断面) 7.5Y5/2 灰オリーブ (内面) 小砂礫・砂礫・白色粒子・黒 色融解粒多 焼成良	1/8 以下	D4-14 黒・D4-9 黒・D4-1 黒ベ ルト・D4-8 黒・ D4-11 黒・D4-5 黒
第29図 7 費	破片	口縁部ロクロナデ、内面の平ばり下はヘラナデ。外側は沈線より2段に区画し、棒状工具による斜行文を連続施文する。最下段より下はヘラナデ。口唇部内側は強いロクロナデによりつまみ出して稜を作る。外側は薄い粘土帯を貼って折り返し状の面を作り、その上を強いロクロナデで凹ませる。自然釉の付着無し。拓本の破片は内外面が赤化、断面内部は酸化還元した灰色部分と赤化した部分がサンドイッチ状になる。接合しない同一個体の中には、赤化やサンドイッチ状の断面が見られない個体もある。	7.5YR5/3 にぶい褐 (赤化部 分) 7.5Y5/1 灰 (還元部分) 砂礫・砂礫・白色粒子・黒色 融解粒多 焼成不良	1/8 以下	E4-2 黒・E4-2 黒 ベルト・E4-5 黒・ D3-12 黒・E4-3 黒ベルト・D4-4 黒
第29図 8 費	破片	口縁部ロクロナデ、内面の平ばり下はヘラナデか。外側はヘラナデによる幾帳起線で2段に区画し、棒状工具による斜行文を連続施文する。最下段より下はヘラナデ。口唇部内側は強いロクロナデによりつまみ出して稜を作る。外側は薄い粘土帯を貼って折り返し状の面を作り、その上を強いロクロナデで凹ませて、稜を2段作り出す。断面内側から3mm程度の厚さで層状に大きく色調が異なっており、色調変化の境に0.5mmほどの極薄い灰色の層が見られる。内側に化粧土のような調整を施したのか。外面は濃いオリーブ色の自然釉が付着。	7.5Y3/1 オリーブ黒 (外面) 2.5Y6/3 にぶい黄 (内側化 粧土?部分) 10YR5/1 褐灰 (断面内部) 砂礫・砂礫・白色粒子・黒色 融解粒多 焼成良	1/8 以下	D4-7 黒

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第30図 9 甕	口 (42.0) 残存高 13.0	口縁部ロクロナデ、内面平ばり下はヘラナデ。外面はヘラナデによる鋭い斜行文を連続して3段施文する。2段目の上下は浅い凹線により区画、3段目下は沈線により区画する。1段目の斜行文直下には、極細い沈線がめぐめる。段数は不明。口唇部外側はつまみ出して鋭い稜を作り、上端は丸みを帯びる。外面は薄いオリープ色の自然釉が付着。残存部少なく、復元径は参考程度。	5Y4/2 灰オリープ (外面) 10Y5/1 灰赤 (断面内部) 砂礫多 砂粒・白色粒子やや多 焼成良	1/8	E4-6 黒
第30図 10 甕	口 (55.0) 残存高 18.6	口縁部ロクロナデ、内面平ばり下はヘラナデ。外面は沈線と幅広い回転ヘラナデにより2段に区画し、ヘラナデ工具による斜行文を連続施文した後に、区画内を強くヘラナデ、口唇部内側はつまみ出して稜を作る。外側は薄い粘土帯を貼って折り返し状の面を作り、その上をロクロナデして凹ませる。粘土帯下方はヘラナデ。外面は黒色化、内面は薄いオリープ色の自然釉が斑状に付着。残存部少なく復元径は参考程度だが、1と同じ程度の大きさになる個体か。	10Y8/1 黒褐 (外面) 5Y5/2 灰オリープ (内面) 砂礫やや多 白色粒子多 焼成良	1/8	D3-16 黒・E3-4 黒・D4-13 黒・SX-01 覆土・SX-01N0 13
第30図 11 甕	破片	口縁部ロクロナデ、外面は2本1組の沈線により1段以上に区画。最上段にヘラナデ工具による幅広い斜行文を連続施文する。口唇部内側はつまみ出して稜を作り出し、外側は粘土帯を貼って折り返し状の面を作り出し、下端を尖らせる。自然釉の付着無し。	10Y5/1 灰 砂礫多 砂粒・白色粒子やや多 焼成良	1/8 以下	E3-4 黒
第30図 12 甕	破片	口縁部ロクロナデ後、外面は2本1組の沈線により2段以上に区画し、上2段にハケ状工具による斜行文を連続施文する(斜行文内にハケメあり)。口唇部内側は平坦だが、上部が弱いロクロナデにより僅かに凹む。外側は折り返し状になり丸みを帯びる。自然釉の付着なし。	2.5Y6/1 黄灰 砂礫・白色粒子やや多 焼成良	1/8 以下	E3-4 黒・E4-1 黒・E4-10 黒
第30図 13 小型甕	口 (18.0) 残存高 4.4	口縁部ロクロナデ、外面にハケ状工具による連続刷突。口唇部内側はつまみ出して鋭い稜を作り、外側は折り返し状で幅広い面を作り、その上をロクロナデにより凹ませる。全体的に薄焼。復元径は参考程度。	5Y7/1 灰白 砂礫・砂粒やや多 焼成不良	1/8	D4-12 黒

第15表 榊崎渡戸古窯跡 甕(組付)観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第31図 1 甕	口 15.8 (39.1) 残存高 30.2	口縁部ロクロナデ。体部内面同心円状当て具痕。一部ナデ。当て具は径が大きいものを使用し、特に同部内面に強いナデ。底部近くの当て具痕は明瞭。外面平行タタキ後、胴部一部中央にカキメ。口縁部と頸部の接合部分は丁寧なナデが施され、接合痕・調整痕は残っていない。胴部は大きく張り出して上面が水平になり、胸状の紐が3単位付く。緑色～コバルト色の自然釉が、外面口縁部から胴部までは全面、胴部からは筋状に流れて付着する。口縁部内面にも自然釉が垂れる。体部内面は透明な自然釉が薄く付着。	5Y6/2 灰オリープ (外面無 胎土部分) 2.5Y6/2 灰黄 (内面) 砂礫・小砂礫やや多 白色粒 子・黒色融解粒多 焼成良	口縁～胴部 完存 体部 2/8	D4-6 黒・D4-7 黒・ D4-10 黒・D4-11 黒
第31図 2 甕	残存高 17.7	体部内面同心円状当て具痕。一部ナデ。破片中央から上は当て具痕が浅く、下は明瞭。外面は平行タタキ後破片上手にカキメ。外面全体に、口縁部方向から緑色の釉が流れている。1とよく似た作りだが、体部径が一回り大きい。接合しない同一個体片・作りが異なる破片多数。	5Y6/2 灰オリープ (外面無 胎土部分) 2.5Y6/2 灰黄 (内面) 砂礫・ 小砂礫やや多白色粒子・黒色 融解粒多 焼成良	体部 3/8	D4-11 黒・E4-1 黒
第31図 3 甕	破片	体部内面同心円状当て具痕。一部ナデ。外面は黒褐色の自然釉が厚く付着し不明。自然釉は直立し、表面が一部剥落している。胴部が大きく張り、胸状の紐が付く。接合しない同一個体片多数。	10Y3/2 オリープ 黒 (外面) 2.5YR4/2 暗黄灰 (内面) 小砂礫少 白色粒子・黒色融 解粒多 焼成良	1/8 以下	E4-2 黒・E3-4 黒・ E4-5 黒・E4-6 黒・ E4-2 黒下・D4-11 黒
第31図 4 甕か	破片	内面同心円状当て具痕の上から縦方向の強いヘラナデ。外面はオリープ色の自然釉が厚く付着し不明。自然釉は泡だって剥落している。胴部に環状の紐が付くが、上半分は欠損。内面ナデの方向から、複製の可能性もあり。	10Y3/2 オリープ 黒 (外面) 2.5YR6/3 に近い黄 (内面) 砂礫少 砂粒・黒色融解粒多 焼成良	1/8 以下	SX-01N0 13・14

第3章 榊崎渡戸古窯跡の調査

番号/ 部種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第31図 5 費	破片	体部内面同心円状当て具痕、外面は黒褐色の自然釉が厚く付着して不明。肩部に紐(環状か?)が付くが、上端は欠損。薄手の作り。	10Y3/2 オリーブ黒 (外面) 2.5YR4/2 暗黄灰 (内面) 砂粒・黒色融解粒多 焼成良	1/8以下	D4-14 黒
第31図 6 費	破片	口縁部ロクロナデ、内面同心円状当て具痕、外面は剥落により調整不明。口縁部は垂直に近い角度で立ち上がる。肩部に紐が付くが、欠損している。外面に濃いオリーブ色の自然釉、内面に透明の自然釉が薄く付着。	2.5Y1/1 黄灰 小砂礫・白色粒子多 黒色融解粒少	1/8以下	D4-6 黒
第31図 7 費	破片	体部内面同心円状当て具痕、頸部から体部にかけてナデ。外面は緑色の自然釉が厚く付着して不明。肩部に紐の接着面が残る。接着面にはハケメ状の調整痕有り。	10Y3/1 オリーブ黒 (外面) 2.5YR5/2 暗黄灰 (内面) 砂礫少 砂粒・黒色融解粒多 焼成良	1/8以下	E4-5 黒

第16表 榊崎渡戸古窯跡 費(口縁部無文)観察表

番号/ 部種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第32図 1 費	口 (26.0) 大 (43.2) 残存高18.0	口縁部ロクロナデ。体部内面同心円状当て具痕、当て具は、頸部近くと体部で別工具を使用か、あるいは口縁部は当てる間隙を密にしている。口縁部と頸部の接合部分の外外面をヘラナデ。体部外面は平行タタキ後、部分的に横方向のヘラナデ。最大径部分に回転台を利用したヘラナデをめぐらせる。破片下端に幅広のカキメ。口唇部上端は丸みを帯び、上端内外面をロクロナデにより浅く円ませ、外面下端はやや強い壁になる。口縁部内面と体部外面に降灰及びオリーブ色の自然釉が薄く付着。	5Y5/2 灰オリーブ (外面) N6/灰 (内面) 砂礫少 白色粒子多 焼成良	口縁部6/8 体部上半 2/8	E4-2 黒・E4-2 ベルト
第32図 2 費	頸16.0 残存高12.3	口縁部と頸部の接合面で欠損。体部内面青歯波状当て具痕(径の大きな同心円状当て具の可能性あり)、頸部接合部分は横方向のヘラナデ。外面は平行タタキ後、最大径部分に2段のカキメ、体部上半に回転台使用によるヘラナデ。頸部接合面は平坦に整えられている。内面から断面中程までは、焼成不良による赤化。	10Y5/1 灰 (外面) 7.5YR5/4 に近い褐 (内面) 小砂礫少・白色粒子やや多 焼成やや不良	頸部～体部 上半5/8	E4-6 黒・D4-13 黒
第32図 3 費	口 (19.8) 残存高7.8	口縁部ロクロナデ。体部内面同心円状当て具痕、肩部はナデ消し。口縁部と頸部を接合する際のナデか。外面は濃い緑色の自然釉が頸部から下に向かって厚く流れており調整は不明。口縁部内外面にも自然釉が付着するが、外面と対称的になるため、口縁部を横向きに据えて焼成か。付着頸部接着部分でヒビが入り、自然釉が流れ込む。口唇部断面は矩形となり、外面には沈線がめぐって接を作り出す。全体的に薄手の作り。胎土分析実施個体(分析No.9)。	7.5Y3/2 オリーブ黒 (外面) 2.5Y5/2 暗黄灰 (内面) 砂礫少 砂粒・黒色融解粒多 焼成良	口縁部3/8 頸部～肩部 2/8	D4-14 黒・E4-5 黒・ E4-1 黒ベルト
第33図 4 費	口18.6 大(41.5) 残存高38.1	口縁部ロクロナデ。体部内面は同心円状当て具痕。最大径部分は回転台を使用したナデにより当て具痕が消える。底部近くは当て具痕が明瞭。体部外面は平行タタキ後、全体にカキメ。口縁部と頸部の接合部分内面は丁寧なナデにより調整痕が消える。口唇部の断面は矩形となり、上端と内面、外面はロクロナデにより僅かに凹む。自然釉の付着無し。	10Y5/1～7/1 灰～灰白 小砂礫少 砂粒やや多 白色粒子・黒色粒子(岩片) 多 焼成やや不良	口縁部完存 体部下半 4/8	D4-6 黒・D4-7 黒・ D4-9 黒・D4-11 黒・D4-13 黒・ D4-14 黒・E3-16 黒ベルト
第33図 5 費	大(36.0) 残存高20.5	体部内面同心円状当て具痕、その後最大径部分に回転台を使用した鋭いナデ(回転反時計回り)。当て具痕は深く付くが、全体的なナデにより不明瞭。外面平行タタキ後、全体にカキメ。外面・内面共にかなり厚膜。自然釉の付着無し。	7.5Y7/1 灰白 砂礫・黒色粒子多 焼成不良	体部2/8	E4-1 黒・E4-2 黒 ベルト
第33図 6 費	口(16.7) 残存高23.3	口縁部ロクロナデ。肩部と体部下半に同心円状当て具痕、その後上からナデ。最大径付近は回転台を使用したナデにより当て具痕が消える。肩部と体部下半の当て具は別工具で、上下を別々に作った後に接合した可能性もあり。外面は平行タタキ後、全体にカキメ。自然釉の付着無し。	5Y7/1 灰白 砂粒・白色粒子多 小砂礫少 焼成やや不良	口縁部～体部 上半4/8 体部下半 1/8	E4-1 黒
第34図 7 費	大(47.2) 残存高19.8	口唇部欠損。口縁部ロクロナデ。体部内面同心円状当て具痕、その後全体にロクロナデのためナデ消される。外面平行タタキ後、全体にカキメ。口縁部と頸部の接合部分に粘土紐の接着面が残る。内面頸部から体部にかけて自然釉が薄く流れ込む。全体的に焼き歪みあり。	2.5Y6/1 黄灰 砂粒少 砂礫やや多 白色 焼成良	頸部～体部 上半3/8	E4-2 黒下

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注 記
第34図 8 甕	□ 19.3 残存高 7.5	口縁部ロクロナデ。体部内面同心円状当て具痕。外面全体にカキメ。口縁部と頸部の接合部分内面は回転台を使用した丁寧なナデ。肩部内面に、当て具痕の上から薄く粘土を貼り付けている部分有り。口縁部断面は矩形となり、上端を凹ませて稜を作り出す。口縁部内面、体部外面にオリープ色の自然釉が斑状に付着。	7.5Y4/2 灰オリーブ (外面) 7.5YR5/2 灰褐 (無釉部分) 砂粒・白色粒子やや多 焼成良	口縁部-頸 部 4/8	D4-9 黒
第34図 9 甕	□ (21.0) 残存高 6.2	口縁部ロクロナデ。体部内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ後、全体にカキメ。カキメは木端状でかなり浅い。口縁部と頸部の接合部分は、回転台を使用した丁寧なナデ。口縁部断面は矩形となり、上端は僅かに凹む。自然釉の付着無し。残存部少なく、復元径は参考程度。	7.5YR/1 灰白 砂礫・砂粒少 焼成やや良	口縁部 1/8 頸部 2/8	D4-9 黒
第34図 10 甕	□ (25.0) 残存高 4.6	口縁部ロクロナデ。頸部との接合部分近くに薄く粘土を貼り、その上からもロクロナデを施して補強か。口縁部断面は矩形となり、外面は僅かに凹む。自然釉の付着無し。	N4/ 灰 砂礫やや多 砂粒・白色粒子少 焼成良	口縁部 1/8	D4-9 黒
第34図 11 甕	□ (23.0) 残存高 6.0	口縁部ロクロナデ。口縁部断面は矩形となり、内面はロクロナデにより僅かに凹む。外面は丸みを帯びる。自然釉の付着無し。	10YR5/1 灰 砂礫やや多 砂粒・白色粒子多 焼成良	口縁部 1/8	D4-2 黒下・ D4-14 黒
第34図 12 甕	□ (20.0) 残存高 4.4	口縁部ロクロナデ。口縁部断面は矩形となり、上端と内面がロクロナデにより僅かに凹む。外面は丸みを帯びる。自然釉の付着無し。全体的に厚減。	7.5YR8/1 灰白 砂礫少 砂粒・白色粒子微 焼成不良	口縁部 1/8	E4-5 黒・E4-6 黒
第34図 13 甕	□ (18.0) 残存高 5.9	口縁部ロクロナデ。口縁部断面は矩形となり、上端がロクロナデにより僅かに凹む。外面は丸みを帯びる。頸部近くの屈折部分内面は面取状で、平坦な面が作られる。自然釉の付着無し。	5Y6/1 灰 砂礫少 砂粒・黒色融解粒やや多 焼成やや良	口縁部 2/8	D4-9 黒
第34図 14 甕	□ 23.0 残存高 8.0	口縁部ロクロナデ。体部外面同心円状当て具痕。外面平行タタキ。口縁部外面の下端をつまみ出して鋭い稜を作る。内面、上端は平坦。全体的に厚減。焼成不良のため断面はオレンジ色がかっている。	2.5Y8/1 灰白 砂礫やや多 砂粒・白色粒子やや多 黒色粒子(岩片)少 焼成不良	口縁部 3/8 頸部 2/8	E4-6 黒
第34図 15 甕	□ (21.2) 残存高 4.3	口縁部ロクロナデ。口縁部断面の上端はつまみ出して外側に稜を作る。内外面に褐色の自然釉が薄く付着。内面は泡だてで剥落している。外面に降灰。	2.5Y4/2 暗黄灰 砂礫やや多 白色粒子・砂粒多 焼成良	口縁部 2/8	D4-8 黒ベルト・ D4-6 黒
第34図 16 甕か	□ (17.4) 残存高 2.9	口縁部ロクロナデ。口縁部断面が矩形となり、上端と外面を凹ませて強い稜を作り出す。外面の一部に暗灰色の自然釉付着。	5Y6/1 灰 砂礫少 砂粒・白色粒子少 焼成良	口縁部 1/8	D4-8 黒ベルト

第17表 榑崎渡戸古窯跡 甕(破片) 観察表

番号	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	注 記
第35図 1 甕	破片	内面同心円状当て具痕の上から一部ヘラナデ。外面平行タタキ後カキメ(一部ナデ)。当て具痕は工具の形に凹み、明瞭に残る。同じ当て具痕がつく別個体が複数あり。内面に別個体の破片が融着。薄い褐色の自然釉が部分的に付着。焼きみで亀裂が入る。2と同一個体。	10Y5/1 灰 砂礫やや多 白色粒子・砂粒多 焼成良	D4-9 黒・E4-1 黒・ D4-13 黒ベルト・ D3-16 黒・D4-14 黒
第35図 2 甕	破片	内面同心円状当て具痕の上から一部ヘラナデ。外面平行タタキ後カキメ(一部ナデ)。当て具痕は工具の形に凹み、明瞭に残る。同じ当て具痕がつく別個体が複数あり。1と同一個体。	10Y5/1 灰 砂礫やや多 白色粒子・砂粒多 焼成良	E4-1 黒・D4-14 黒・ E4-2 黒
第35図 3 甕	破片	内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ後に密なカキメ。当て具痕はヘラナデにより部分的に消されている。外面に降灰。内面破片下部にオリープ色の自然釉が付着。接合しない同一個体片が数点有り。甕の体部半ばの破片か。	2.5Y6/2 灰黄 砂礫微 白色粒子・砂礫少 色融解粒多 焼成やや不良	E3-16 黒ベルト・ E4-14 黒
第35図 4 甕	破片	内面同心円状当て具痕の上から回転を利用したナデ。外面平行タタキ後密なカキメ。当て具痕はナデによりつぶれる。外面に薄緑色の自然釉が付着。内面は筋状の粘土塊が付着する。直接接合しない口縁部破片有り。口縁部携帯部は箱状となる。小型甕の破片。	2.5Y6/2 灰黄 砂礫微 白色粒子・砂粒少 色融解粒多 焼成良	D4-6 黒・D4-13 黒 ベルト・D4-14 黒
第35図 5 甕	破片	内面同心円状当て具痕の上から縦方向のヘラナデ。外面平行タタキ後密なカキメ。当て具痕はナデによりつぶれる。自然釉の付着なし。	2.5Y6/2 灰黄 (外面) 10Y5/1 灰 (内面) 砂礫少 黒色融解粒微 焼成良	D4-6 黒 E4-5 黒
第36図 6 甕	破片	底部に近い破片か。内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ後にまばらなカキメ。当て具痕は工具の形に凹む。破片下端は別の工具による当て具痕が見られる。胎土は粗く、不均一。	2.5Y5/1 黄灰 小砂礫・砂粒多 砂礫少 白色 粒子極多 焼成やや良	D4-7 黒・D4-12 黒

第3章 神崎渡戸古窯跡の調査

番号	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	注記
第36図 7 費	破片	内面同心円状当て具痕の上から部分的に回転を利用したヘラナデ。外面平行タタキ。内面に降灰、自然釉の付着なし。断面内部は焼成不良により赤化。	7.5Y7/1 灰(外面) 7.5Y7/2 灰褐(内面) 砂礫・白色粒子少 焼成やや不良	E4-2黒ベルト
第36図 8 費	破片	内面同心円状当て具痕。外面多方向の平行タタキ後、破片上部に密なカキヌ。当て具痕は2種類の工具を使用。破片上部、下部の当て具痕は工具の形に凹む。破片上部に褐色の自然釉が薄く付着。部分的に亀裂が入り、断面にも一部自然釉がかかる。胎土は粗く、不均一。	N6/ 灰 砂礫やや多 砂粒・白色粒子多 焼成良	E4-2黒・E4-6黒
第37図 9 費	破片	肩部に近い破片か。内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ。当て具痕は同心円がきれいに丸く残る。タタキは浅い。第28図1に調整や胎土が似る。自然釉の付着なし。断面内部は酸化還元した灰色部分と赤化した部分が互層状になる。11と同一個体。同一個体の胎土分析実施(分析No.15)	10YR4/2 灰黄褐(外面) 7.5YR5/1 褐灰(内面) 砂礫少 白色粒子やや多 焼成良	E4-1黒ベルト
第37図 10 費	破片	肩部に近い破片か。内面同心円状当て具痕の上から部分的にヘラナデ。外面多方向の平行タタキ。当て具痕は木目あり。タタキは浅い。第28図1に調整や胎土が似る。自然釉の付着なし。断面内部は部分的に赤化している。	10Y5/1 灰 砂礫少 白色粒子やや多 焼成良	D4-12黒
第37図 11 費	破片	肩部に近い破片か。内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ。当て具痕は同心円がきれいに丸く残るが、破片上部では青面波状となり、2種類の当て具を使用している可能性あり。タタキは浅い。第28図1に調整や胎土が似る。自然釉の付着なし。断面内部は酸化還元した灰色部分と赤化した部分が互層状になる。9と同一個体。	10YR4/2 灰黄褐(外面) 7.5YR5/1 褐灰(内面) 砂礫少 白色粒子やや多 焼成良	E4-2黒・E4-2黒下・ E4-3黒ベルト
第38図 12 費	破片	底部に近い破片か。内面同心円状当て具痕の上から部分的にナデ。破片上部は回転を利用したヘラナデにより当て具痕をナデ消す。体部下端の当て具痕には木目あり、2種類の工具を使用か。内面の一部に、薄く粘土を撫でつけた痕跡が残る。外面平行タタキ。図化した破片以外に接合する破片があるが、焼き歪みが著しいため掲載していない。外面に薄いオリープ色の自然釉が付着。破片断面にも一部自然釉がかかる。26・27と胎土がよく似ている。	5Y5/1 灰(外面) 2.5Y6/4 にぶい黄(内面) 砂礫・砂粒・白色粒子やや多 焼成良	E4-2黒
第38図 13 費	破片	内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ。タタキは木目あり。内面には指紋が残る。自然釉の付着なし。断面内部は酸化還元した灰色部分と赤化した部分がサンドイッチ状になる。	10YR5/2 灰黄褐 砂礫・白色粒子少 焼成やや不良	E4-2黒下
第38図 14 費	破片	内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ(2方向のタタキがX字状に交差する)。当て具痕には木目あり。第28図1の大型鏝と工具痕がよく似た破片。自然釉の付着なし。破片断面が2層に分かれ、境目に同心円状当て具痕が見られることから、一度タタキで成形した後、内面に粘土を見足してさらにタタキで成形した可能性がある。(破片上部の断面に当て具痕がある。)	5Y4/1 灰 砂礫・白色粒子少 焼成良	D4-8表土
第39図 15 費	破片	内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ(多方向のタタキが重なる)。当て具痕は工具の形に深く凹むが、一部弱いヘラナデにより消されている。破片上部に回転による弱いヘラナデが施される。自然釉の付着なし。肩部に近い破片と判断したが、実測図が上下逆で底部に近い破片の可能性もあり。	2.5GY オリーブ灰 砂礫微 白色粒子やや多 焼成良	E4-6黒
第39図 16 費	破片	肩部に近い破片か。内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ(2方向のタタキがX字状に交差する)。当て具痕は工具の形に深く凹む。タタキはやや浅く、部分的に浅いヘラナデを施す。自然釉の付着なし。断面内部は酸化還元した灰色部分と赤化した部分がサンドイッチ状になる。	N5/ 灰 砂礫微 白色粒子多 焼成良	E4-5黒・E4-6黒
第39図 17 費	破片	裏の底部に近い破片。内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ(2方向のタタキが直交し格子目状となる)。当て具痕は工具の形に深く凹み、タタキも明瞭に残る。内面下部に水平に薄紫色の自然釉が付着。接合しない同一個体が数点あり、外面に回転によるナデを施すものもある。	2.5Y5/1 黄灰(外面) 5PB5/1 青灰(自然釉部分) 砂礫少 白色粒子やや多 焼成良	D3-15黒・D3-16黒
第39図 18 費	破片	内面同心円状当て具痕。外面平行タタキ(多方向のタタキが重なる)。内面は緑色の自然釉が厚くかかり、調整が不明瞭。外面は褐色の自然釉が薄くかかる。	5Y6/2 灰オリーブ(外面) 10Y3/2 オリーブ黒(内面) 砂礫少 白色粒子・黒色磁解粒 やや多 焼成良	E4-6黒
第40図 19 費	破片	内面同心円状当て具痕。外面縦格子状タタキ。外面は多方向の弱いヘラナデが施される。部分的に短いカキヌあり。当て具痕は工具の形に深く凹む。自然釉の付着なし。裏の肩部に近い破片か。	5B5/1 青灰 小砂礫少 白色粒子やや多 焼成良	D4-8黒ベルト

番号	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	注記
第40 20 図	破片	内面同心円状当て具痕の上から丁寧なヘラナデにより全体をナデ消す。外面縦格子状タタキ。自然釉の付着なし。破片外面上縁は、丁寧にナデによりタタキをナデ消す。自然釉の付着なし。	N5/灰(外面) S7/1灰白(内面) 砂礫やや多 白色粒子・黒色融解粒多 焼成良	D4-3 黒
第40 21 図	破片	内面同心円状当て具痕の上からヘラナデにより全体的にナデ消し、さらにその上に別の同心円状当て具痕(木目あり)。外面縦格子状タタキ。自然釉の付着なし。	N4/灰(外面) S7/1灰白(内面) 砂礫少 白色粒子・砂粒やや多 黒色融解粒多 焼成良	D4-7 黒
第40 22 図	破片	内面同心円状当て具痕の上から弱いヘラナデ、外面縦格子状タタキ。自然釉の付着なし。断面内部は酸化還元した灰色部分と赤化した部分がサンドイッチ状になる。23・24・25と同一個体。	S5/1灰白(外面) 10YR7/2にぶい黄橙(内面) 小砂礫少 微細な砂粒・黒色粒子・白色粒子やや多 焼成やや不良	E4-5 黒
第40 23 図	破片	内面同心円状当て具痕、外面平行タタキ後、筋状の細いナデにより間隙を作り出す。当て具痕に木目が認められ、大型糞に使用されている当て具と径や同心円の幅が類似する。内外面に薄いオリーブ色の自然釉が付着。22・24・25と同一個体。	S5/3/1オリーブ黒(外面) S5/6/2灰オリーブ(内面) 白色粒子・黒色融解粒多 焼成良	D4-12 黒
第40 24 図	破片	内面同心円状当て具痕、外面平行タタキ後、筋状の細いナデにより間隙を作り出す。当て具痕に木目が認められ、大型糞に使用されている当て具と径や同心円の幅が類似する。内外面に薄いオリーブ色の自然釉が付着。破片下端にも付着。22・23・25と同一個体。	S5/3/1オリーブ黒(外面) S5/6/2灰オリーブ(内面) 白色粒子・黒色融解粒多 焼成良	D4-13 黒ベルト
第40 25 図	破片	内面同心円状当て具痕、外面平行タタキ後、筋状の細いナデにより間隙を作り出す。当て具痕に木目が認められ、大型糞に使用されている当て具と径や同心円の幅が類似する。内外面に薄いオリーブ色の自然釉が付着。22・23・24と同一個体。	S5/3/1オリーブ黒(外面) S5/6/2灰オリーブ(内面) 白色粒子・黒色融解粒多 焼成良	SX-01 覆土・D4-7 黒
第41 26 図	破片	内面同心円状当て具痕の上から丁寧にヘラナデにより全体をナデ消す。外面平行タタキ後、破片下端に密なカキメ。内外面とも調整は無い。焼き歪みが著しく、部分的に亀裂が入る。自然釉の付着なし。断面内部は酸化還元した灰色部分と赤化した部分がサンドイッチ状になる。接合しない同一個体片が数点有り。底部に近い破片片。	N6/灰(外面) S7/1灰白(内面) 小砂礫少 白色粒子多 焼成良	E4-2 黒
第41 27 図	破片	内面同心円状当て具痕の上からヘラナデにより全体的にナデ消し、外面平行タタキ後に密なカキメ。当て具痕は工具の形に凹むが、同心円は不明瞭。焼き歪みが著しい。内面に降灰、外面には濃緑じり色の砂(窯床か)が付着している。胎土断面は2層に分かれ、境が明確している部分がある。28と同一個体。	10YR5/1 褐灰(外面) 2.5Y6/4にぶい黄(内面) 砂礫少 白色粒子多 焼成良	E4-2 黒下
第41 28 図	破片	内面同心円状当て具痕の上からヘラナデにより全体的にナデ消し、外面平行タタキ後に密なカキメ。当て具痕は工具の形に凹む。焼き歪みが著しい。内面にごく少量の降灰、外面には濃緑じり色の砂(窯床か)が付着している。胎土断面は2層に分かれる。27と同一個体。	10YR5/1 褐灰(外面) 2.5Y6/4にぶい黄(内面) 砂礫少 白色粒子多 焼成良	E4-2 黒下

第18表 榑崎渡戸古窯跡 土師製の板状品観察表

番号	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	注記
第42 図 1	縦7.8 横7.5 厚1.1 重78.15	緩やかに湾曲する破片。実測図左面は同心円状当て具痕、右面は平行タタキ後にカキメ。上面・左側面は平滑に整えられ、上面はT字状に折れ曲がる。裏の体部を切り取り、側面を板などに押しつけて作り出したものか。	7.5Y6/6 橙 砂礫少 白色粒子やや多 焼成やや良	SX-01 覆土
第42 図 2	縦5.1 横7.8 厚1.1 重52.93	緩やかに湾曲する破片。実測図左面は同心円状当て具痕、右面平行タタキ後にカキメ。上面は平滑に整えられT字状に折れ曲がる。1同様裏の体部を切り取り、側面を板などに押しつけて作り出したものか。	7.5YR5/4にぶい褐 砂粒微 白色粒子少 焼成やや良	SX-01No.20
第42 図 3	縦10.7 横6.4 厚1.2 重66.34	僅かに湾曲する破片。実測図左面は同心円状当て具痕。右側面はカキメ。上面が平滑に整えられる。左面は二次被熱痕あり。	7.5YR6/6 橙 砂礫微 白色粒子微 焼成不良	SX-01No.20
第42 図 4	縦6.6 横10.3 厚1.2 重133.05	僅かに湾曲する破片。実測図左面は同心円状当て具痕後にナデ、右面はカキメ。上面が平滑に整えられ、一部折り返し状になる。実測図横断面は平坦。二次被熱痕あり。裏の胴部を切り取ったものか。	7.5YR6/6 橙 砂礫・砂粒少 砂粒やや多 白色粒子微 焼成やや良	SX-01No.20

第3章 榊崎渡戸古窯跡の調査

番号	大きさ (cm)	特徴	色調 / 胎土 / 焼成	注 記
第42図 5	縦 10.3 横 8.3 厚 1.2 重 94.62	僅かに湾曲する破片。実測図左面は同心円状当て具痕、右面は平行タタキ。左側面と上面が平滑に見えるが、摩滅が著しく不明。二次被熱により実測図左面は赤化。	7.5YR7/6 橙 砂礫・砂粒少 白色粒子・赤色 融解粒微 焼成不良	SX.01No.20
第42図 6	縦 9.7 横 7.1 厚 1.1 重 72.23	僅かに湾曲する破片。実測図左面は同心円状当て具痕、右面は平行タタキ？(摩滅が著しく不明。) 上面が平滑に整えられる。5と破片形状がよく似るが、接合しない。	7.5YR7/6 橙 砂礫・砂粒少 白色粒子・赤色 融解粒微 焼成不良	D4-12 黒
第42図 7	縦 6.6 横 11.3 厚 0.9 重 74.90	僅かに湾曲する破片。実測図左面は同心円状当て具痕、右面は平行タタキ。はっきりとした平坦面はない。両面とも二次被熱により赤化。	5YR5/8 明赤褐 砂礫・白色粒子少 砂粒やや少 焼成不良	SX.01 覆土
第42図 8	縦 5.2 横 9.5 厚 1.1 重 68.91	板状の破片。実測図左面は同心円状当て具痕、右面は摩滅により不明。上面が平滑に整えられる。	7.5YR6/6 橙 砂礫少 白色粒子微 焼成不良	SX.01No.20・ SX.01 覆土
第42図 9	縦 8.7 横 5.3 厚 1.1 重 54.06	板状の破片。実測図左面は同心円状当て具痕、右面は摩滅により不明。上面が平滑に整えられる。	7.5YR6/6 橙 砂礫やや少 白色粒子微 焼成不良	SX.01No.20
第42図 10	縦 5.5 横 13.3 厚 1.1 重 83.07	板状の破片。実測図左面は同心円状当て具痕？ 右面は摩滅により不明。上面が平滑に整えられる。両面とも摩滅が著しい。	7.5YR5/6 明褐 砂粒多 白色粒子微 焼成不良	D4-12 黒・SX. 01No.20
第42図 11	縦 7.0 横 9.1 厚 1.1 重 76.90	板状の破片。実測図左面は同心円状当て具痕、右面は摩滅により不明。上面が平滑に整えられる。二次被熱により実測図左面は赤化。	7.5YR6/6 橙 砂礫少 砂粒・白色粒子やや多 焼成不良	SX.01No.20
第42図 12	縦 9.0 横 8.6 厚 1.2 重 108.91	板状の破片。実測図左面は同心円状当て具痕、右面は摩滅により不明。上面が平滑に整えられる。二次被熱により実測図左面は赤化。	7.5YR6/6 橙 砂礫・砂粒やや多 白色粒子少 焼成不良	SX.01No.20
第42図 13	縦 4.6 横 6.3 厚 1.1 重 32.74	板状の破片。実測図左面は同心円状当て具痕、右面は摩滅により不明。上面・右側面が平滑に整えられる。左側面も平滑面の可能性あり。	7.5YR6/6 橙 砂礫微 砂粒少 白色粒子微 焼成不良	SX.01 覆土
第43図 14	縦 8.5 横 6.6 厚 1.3 重 78.93	板状の破片。実測図左面は不明(無文)、右面は平行タタキ。下面・右側面が平滑に整えられる。	7.5YR6/6 橙 砂礫やや多 白色粒子微 焼成やや良	SX.01No.20
第43図 15	縦 12.7 横 6.6 厚 1.3 重 101.02	板状の破片。両面ともナデのみで無文、実測図左面は撫でつけた粘土が残る。上面・右側面が平滑に整えられる。	7.5YR6/6 橙 砂礫・砂粒・白色粒子・黒色粒 子少 焼成やや良	SX.01No.20
第43図 16	縦 6.0 横 9.2 厚 1.0 重 72.23	板状の破片。両面とも摩滅により調整不明。上面が平滑に整えられる。二次被熱により赤化。	5YR5/6 明赤褐 砂礫・白色粒子やや少 焼成不良	SX.01No.20

第19表 榊崎渡戸古窯跡 窯体観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調 / 胎土 / 焼成	残存状態 / その他	注 記
第44図 1 窯壁	幅 12.8 奥行 11.9 高 16.6	実測図左側が内壁、須臾器費の破片が融着している。内壁は指で粘土を撫でつけた跡が残る。内壁部分以外は破損面の可能性が高く、スサの痕跡が残る。実測図正面から奥に向けて、割材が貫通した痕跡有り。窯壁の基礎部分が崩れ落ちて空洞化したものか。	N3/暗灰(内壁部分) 7.5Y4/1灰(窯体部分) スサ・小砂礫多	—	E4-1 黒
第44図 2 窯体か	幅 13.2 奥行 11.1 高 15.1	第24図1の瓶頸口縁部破片が融着する。実測図左下面が窯壁からはがれた面か。口縁部は焼成中に融着したものではなく、粘土と共に塗り込めたものかと考えられる。実測図表面に指で撫でつけた痕跡有り。粘土部分は高温により発泡している。	5Y3/1 オリーブ黒(窯体部分) 小砂礫多	—	E4-5 黒 D4-14 黒(口縁部)
第44図 3 窯体か	幅 12.3 奥行 11.2 高 10.0	第24図2の瓶頸口縁部破片が融着する。実測図下面が窯壁からはがれた面か。口縁部は焼成中に融着したものではなく、粘土と共に塗り込めたものかと考えられる。スサの痕跡が多い。1・2とは色調が大きく異なる。	2.5Y5/2 暗黄灰(窯体部分) スサ・砂礫多	—	E4-1 黒 D4-11 黒(口縁部 破片の一部)

第20表 榑崎渡戸古窯跡 焼台観察表

番号	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第45図 1 焼台	長軸 19.3 短軸 12.0	甕の体部破片を転用。破片外面に径12.0cmの重ね焼き痕が残る。蓋環部の焼成に使用か。破片内面は同心円状当て具痕の後ナデ。外面は平行タタキ。	N4/灰 砂礫やや多 多 焼成良	破片	E4-1黒
第45図 2 焼台	長軸 11.2 短軸 9.8	甕の体部破片を転用。破片外面に復元径12.0cmの重ね焼き痕が残る。蓋環部の焼成に使用か。破片内面は同心円状当て具痕。外面は平行タタキ。外面に降灰。	10Y5/1灰 小砂礫少 砂粒・白色粒子多 焼成良	破片	E4-1黒
第45図 3 焼台	長軸 9.2 短軸 6.8	甕の体部破片を転用。破片内面に復元径9.0cmの重ね焼き痕。外面に復元径7.7cmの重ね焼き痕が残る。外面重ね焼き痕の中心部分には窯体片が付着。2回以上使用か? 破片内面は同心円状当て具痕(木目あり・なしの2種類)。外面は平行タタキ。	5Y6/1灰 小砂礫少 白色粒子・黒色融 解粒多 焼成良	破片	E4-1黒ベルト
第45図 4 焼台	長軸 13.5 短軸 8.2	甕の体部破片を転用。破片内面に重ね焼き痕。融着防止のための藁葺?が残る。復元径は8.8cm。外面には高さ1.5cmの小礫が付着。傾斜調整したものか。破片内面は同心円状当て具痕の後に回転台を利用したナデ。外面は平行タタキ後に密なカキメ。	10Y4/1灰 小砂礫少 白色粒子・黒色融 解粒やや多 焼成良	破片	D4-14黒
第45図 5 焼台	長軸 8.6 短軸 7.6	小型の甕または鉢の底部を転用か。外面に蓋環部の端部?が自然融れより融着。復元径は10.8cm。破片断面に自然融れが付着。外面は別個体の破片が融着。破片外面は回転ヘラズリ。内面は自然融れにより不明。	2.5Y6/2灰黄 白色粒子・黒色融解粒多 焼成良	破片	D3-16黒
第45図 6 焼台	長軸 22.1 短軸 16.3 傾斜角 20°	甕の体部破片を転用。外面を下にして置き、チャート角礫を側を利用して傾斜調整している。砂岩と共に窯体が融着。破片内面は同心円状当て具痕。外面は平行タタキの後カキメ。8とよく似る破片だが、接合はしない。	10Y2/1黒(破片外面) 砂礫・白色粒子多 焼成良	破片	D4-14黒
第45図 7 焼台	長軸 19.2 短軸 11.3 傾斜角 10°	甕の体部破片を転用。外面を下にして置き、川原石(砂岩)を利用して傾斜調整している。砂岩は被熱により表面が発泡している。破片内面は同心円状当て具痕の後に回転台を利用したナデ。外面は平行タタキの後カキメ。	2.5Y7/2灰黄 砂礫・砂粒やや多 黒色融解粒多 焼成良	破片	E4-8黒
第45図 8 焼台	長軸 10.5 短軸 8.3 傾斜角 20°	甕の体部破片を転用。外面を下にして置き、チャート角礫を利用して傾斜調整している。破片内面は同心円状当て具痕の後ナデ。外面は平行タタキの後カキメ。破片は6とよく似るが接合しない。	10Y2/1黒(破片外面) 砂礫・白色粒子多 焼成良	破片	E3-1黒
第46図 9 焼台	長軸 14.4 短軸 8.5 傾斜角 10°	甕の体部破片を転用。外面を下にして置く。粘土による傾斜調整か。窯床が付着したものか不明。粘土部分にはスサの痕跡が残る。破片内面は同心円状当て具痕。外面は不明。自然融れが厚く付着。	5Y5/1灰 砂礫・白色粒子やや多 焼成不明	破片	E4-2黒下
第46図 10 焼台	長軸 13.4 短軸 12.2 傾斜角 29°	甕の体部破片を転用。内面を下に置く。粘土による傾斜調整か。窯床が付着したものか不明。粘土部分にはスサの痕跡が多く残る。破片内面は同心円状当て具痕。内面は平行タタキ。	5Y4/1灰 砂粒少 黒色融解粒やや多 焼成良	破片	E4-2黒ベルト
第46図 11 焼台	長軸 13.8 短軸 13.0 傾斜角 24°	甕の体部破片を転用。同一個体の破片2枚を重ね、外面を下に置く。粘土による傾斜調整か。窯床が付着したものか不明。粘土部分にはスサの痕跡が残る。破片内面は同心円状当て具痕。外面は平行タタキ。	N4/灰 砂礫やや多 白色粒子少 焼成良	破片	D4-6黒
第46図 12 焼台か	長軸 28.5 短軸 17.5	甕の底部破片に焼台と窯床が融着したもの。焼台は甕の体部破片を2枚転用し、外面を下に置く。傾斜調整の方法は不明。窯床はチャート礫と砂が混ざる。焼台に転用された破片の内面は同心円状当て具痕の後ナデ。外面は平行タタキの後カキメ。融着した甕の内面は同心円状当て具痕。第31図1・2の甕によく似た破片。内面には、濃い緑色の自然融れが流れ込み、降灰が見られる。甕の底部に窯床が融着したもの可能性あり。	10Y3/2オリーブ黒(自然融れ部分) 砂礫少 白色粒子多 焼成良	破片	D4-8黒ベルト
第46図 13 焼台	長軸 18.3 短軸 14.4 傾斜角 25°	甕の底部破片に焼台が融着したもの。焼台は甕の体部破片を1枚転用し、外面を下に置く。さらに、チャート角礫を利用して傾斜調整をする。焼台に転用された破片の内面は不明。外面は平行タタキ。融着した甕の内面は同心円状当て具痕。第31図1・2の甕によく似た破片。内面には、濃い緑色の自然融れが流れ込む。融着した甕の内面にも粘土塊が融着しているため、2回以上利用されたものと考えられる。	5Y6/2オリーブ灰 砂礫少 白色粒子多 焼成良	破片	D4-8黒ベルト

第3章 榑崎渡戸古窯跡の調査

第21表 榑崎渡戸古窯跡 中・近世遺物(陶磁器)観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第47図 1 青磁碗	破片	鎚造弁文を施す青磁破片。軸はやや厚く、胎上に微細な茶褐色粒子を含む。	10GY8/1 明緑灰 茶褐色粒子微 焼成良	破片	D4-12 黒
第47図 2 陶器小皿	口(8.0) 底(4.6) 高2.0	黄瀬戸小皿。内外面ロクロナデ。高台内施軸(あぶらげ手)。さらに径の小さいものが軸着した痕跡有り。高台接地面輪ハケ。	2.5Y7/4 浅黄 黒色粒子微 焼成良	口1/8以下 底3/8	D4-10 黒・D4-11 黒

第22表 榑崎渡戸古窯跡 中・近世遺物(在地系土器)観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第48図 1 土師質皿	口(10.2) 底(5.4) 高2.5/2.0	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り難し後調整無し。体部中ほどに縦い模あり。口縁部は丸味を帯びる。内面体部と見込み部の境は不明瞭。	7.5YR5/6 明褐 砂粒・赤色崩解粒多 焼成良	口～底2/8	C4-13 黒・ D4-7 黒
第48図 2 土師質皿	底(5.0) 残存高1.3	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り難し後調整無し。体部は欠損し不明。内面体部と見込み部の境は不明瞭。	7.5YR5/6 明褐 砂粒・赤色崩解粒多 焼成良	底部完存	D4-1
第48図 3 内耳土器	底(14.0) 残存高 12.9	体部内外面ロクロナデ。底部は手捏ねにより円盤状に成形後、体部を接合か。体部外面に板状の圧痕が薄く残る。外面に薄くスス付着。土師質。	10YR4/2 灰黄褐 砂粒・雲母・角閃石微 焼成やや不良	体～底4/8	E4-1 表土・C4-?
第48図 4 内耳土器	破片	内外面ロクロナデ後、指頭による調整を施す。口縁部外面に2条の平行沈線がめぐる。復元高は6.0cm程度。外面に薄くスス付着。土師質。	10YR4/2 灰黄褐 白色粒子多・雲母少 焼成良	破片	D4-11 黒
第48図 5 内耳土器	破片	把手部分の破片。把手は丁寧に接着される。復元高は5.3cm程度。外面に多量のスス付着。土師質。	10YR3/2 黒褐 白色粒子・雲母多 焼成不良	破片	E3-4 黒

第23表 榑崎渡戸古窯跡 中・近世遺物(瓦)観察表

番号/ 器種	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	注記
第49図 1 軒丸瓦	周縁部径 (外径)15.0 周縁幅 1.6	内区文様は左周りの三巴文、圏線はなく外区は珠文がめぐる(個数は不明)。巴の頭は円形で、断面径は低いカムボコ状となる。瓦当部分裏面は内状にユビナデ。周縁径・周縁幅及び文様から、法界寺C類に比定される。	7.5Y5/1 灰(瓦当表面) 7.5Y7/1 灰白(断面) 微細な黒色粒子多、白色粒子 微 軟質	D3-11 黒
第49図 2 丸瓦	厚2.0	玉縁基部の破片。凸面の調整は不明、凹面は密な布目痕が残る。1の軒丸瓦と胎土がよく似ている。	7.5Y7/1 灰白(断面) 微細な黒色粒子多、白色粒子 微 軟質	D3-11 表土

第4章 樺崎中妻遺跡の調査

第1節 調査の概要と基本土層

1. 調査の概要

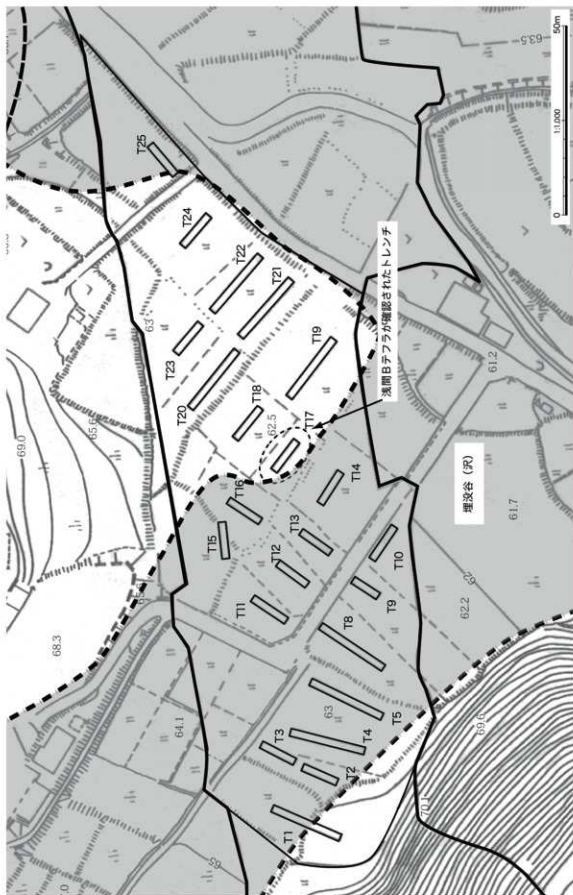
樺崎中妻遺跡の調査では土坑が7基発見された。いずれの土坑も遺物が出土しないか、あるいは近世～近代の小片が主であったため、遺構の時代及び性格は不明である。遺構外から出土した遺物は、土製紡錘車及び近世の土師質小皿の2点以外はいずれも小片で、特に古代の須恵器・土師器は著しく摩滅した破片が多い。調査地周辺には、足利氏ゆかりの樺崎寺（法界寺）跡や古墳群が多数存在しており、それらの遺跡からもたらされた遺物である可能性も否定できないが、遺跡の中心は今回の調査区以外にあると考えられるため、今回の調査成果をもって遺跡の時代及び性格を特定することは難しいと言える。なお、試掘調査では、水田遺構を確認するための重要な鍵となる様名ニヶ岳沙川テフラ（Hr-FA）および浅間Bテフラ（As-B）が確認されたが、本調査の結果、次項で述べるとおり水田遺構に伴う堆積物ではないと判断された。

2. 基本土層

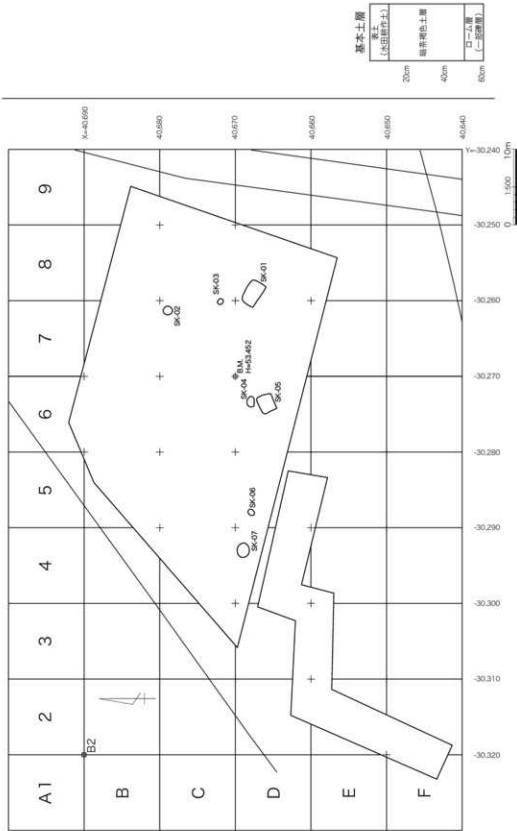
基本土層については第1章の試掘調査の概要において詳述しているが、ここでは試掘調査で確認されたテ



第50図 樺崎中妻遺跡位置図（足利市遺跡地図1989を一部改変）

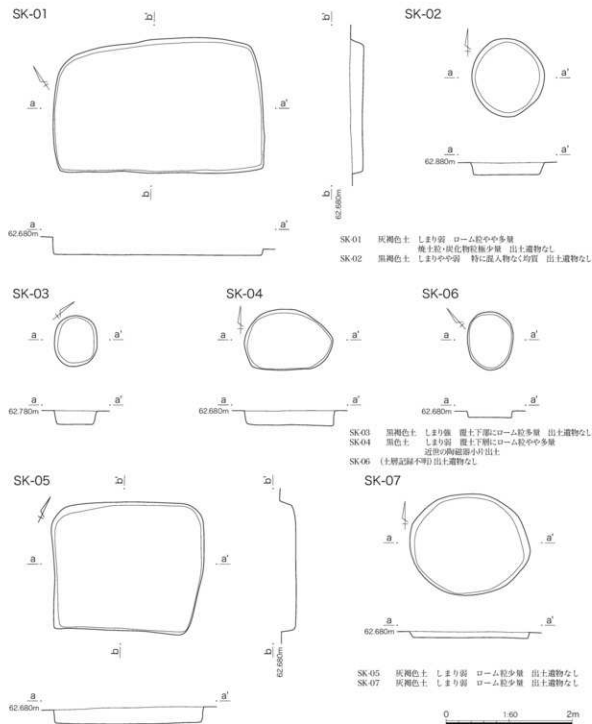


第51図 榑崎中麦遺跡 試掘トレンチ配置図



第52図 榑崎中妻遺跡 調査区全体図及び基本土層

第4章 榑崎中妻遺跡の調査



第53図 榑崎中妻遺跡 SK-01～SK-07

フラ層と微地形について再度まとめておく。

試掘調査におけるトレンチ内の基本土層は、第1章第5図で示したとおりである。試掘調査範囲全体に、厚さ10cmの表土層（水田耕作土）がほぼ水平に堆積していたが、トレンチ調査の結果、現在水田化している部分は埋没谷（沢）であったことが確認された。試掘調査範囲西側の大部分は埋没谷の中となり、榛名二ヶ岳渡川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭降下（註））を含む厚さ10cmの黒褐色土層が確認された。この層は埋没谷部分以外では確認されなかったことから、谷地形の底に自然堆積したものと判断した。

本調査の対象となった東側は微高地となっており、この微高地が埋没谷に向かって突き出す部分に入れた第17トレンチで浅間Bテフラ（As-B、1108年降下）が確認された。浅間Bテフラについては、その下面から水田状遺構が確認される可能性があるため本調査時に確認箇所周辺を慎重に掘り下げたが、水田状遺構は確認されなかった。また、浅間Bテフラ自体も広がりが見られなかったことから、スポット的に自然堆積したものと判断した。

本調査の対象となった微高地上では、厚さ約40cmの小石及び砂礫を含む暗茶褐色土層が堆積しているが、客土と考えられる多量のローム粒子を含む茶褐色土層が部分的に堆積していた。これらの土層の下に、黄褐色ローム土層が堆積しており、遺構はこの上面で確認しているが、遺構の深さなどから、実際にはその上面（3層）から掘り込まれているものと考えられる。

（註） 榛名二ツ岳浅川テフラについては、榛名山東麓で確認されたHr-FA・Hr-FPの堆積層中から発見された樹幹を使用したウィグル・マッチング法による年代測定（中村他2009）や、浅川火砕流堆積物層から得られた炭化物を使用した炭素14年代測定（下司・大石2011）の結果から、噴出年代を5世紀末とする意見もある。

第2節 発見された遺構と遺物

1. 土坑

今回の調査では、時期不明の土坑7基が発見された。いずれも深さ10cm～20cmと浅く、覆土は中・近世以降の遺構に特徴的な混入物が少ない均質な土層である。確認調査の際に竪穴住居跡と考えられていた遺構（SK-05）は、調査の結果、浅い方形の土坑であることが判明した。SK-01と共に、調査時には竪穴状遺構（方形竪穴）と考えていた遺構であるが、出土遺物や遺構の形状からは遺構の時期が判断できなかったため、ここでは土坑として報告する。図化可能な遺物はいずれの土坑からも出土していないため、遺構の時期は不明であるが、素焼きの土管や瓦が出土しているSK-05については、現代に近い時期の所産であると推測される。

2. 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、主に表土層から出土している。土壌の影響がいずれも摩滅しており、遺存度合は極めて低い。また、遺物の時期も古墳時代前期から中近世と幅広く、これらをもって遺跡の時期や性格を決めることは難しいと判断された。

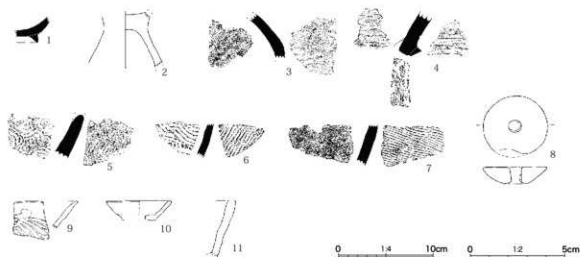
古墳時代から古代の遺物は摩滅した小片が多く、図化できたものは第54図1～8の8点である。土師器は、台付甕の台部（第54図2）以外に図化できるものは出土せず、須恵器は坏及び甕類の破片である。第54図8は土製紡錘車で、中央の孔には木質が残存している。表面は摩滅が著しい。

中世の遺物は第54図9～11の3点を図化した。青磁碗片が1点出土しているが（第54図9）、時期等は不明である。その他に土師質小皿、土師質鋼の破片が出土している。

第24表 樽崎中妻遺跡 土坑一覧表

遺構名	位置 (グリッド)	形状	長軸・長径 (cm)	短軸・短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物
SK-01	D-7・8	長方形	332	212	8	遺物なし
SK-02	C-7	円形	124	117	19	遺物なし
SK-03	C-7	楕円形	81	66	21	遺物なし
SK-04	D-6	楕円形	141	96	12	近世陶磁器片が少量出土
SK-05	D-6	長方形	238	204	21	土師器片、近代の素焼き土管・瓦片が出土
SK-06	D-5	楕円形	93	72	10	遺物なし
SK-07	D-4	楕円形	189	159	10	遺物なし

第4章 榑崎中妻遺跡の調査



第54図 榑崎中妻遺跡 遺構外出土遺物

第25表 榑崎中妻遺跡 遺構外出土遺物観察表

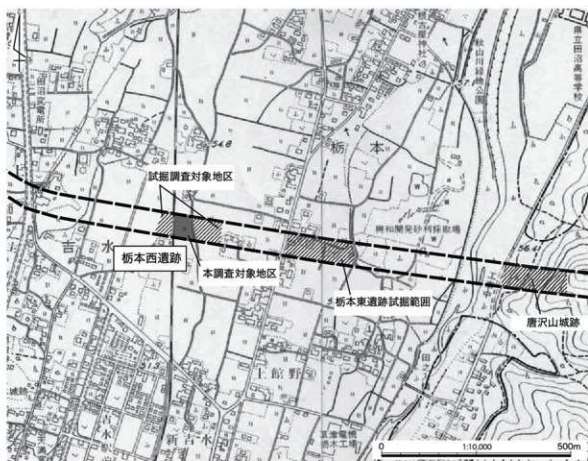
番号/種類	大きさ (cm)・重量 (g)	特徴/残存状態	色調/胎土/焼成	注記
第54図1 須恵器環	破片	内外面口クロナデ、高台付、全体的に摩滅のため調整不明。	2.5Y5/4 黄褐色 砂粒・砂礫多 焼成不良	表土層
第54図2 土師器台付甕	残存高 5.2	台付甕の台接合部。全体的に摩滅し調整は不明。	10YR6/4 に近い粗 砂粒多 砂礫やや多 焼成良	トレンチ表土層
第54図3 須恵器瓶頸	破片	瓶頸の体部破片か。内外面口クロナデ後、外面はカキメ、内面はヘラナデ。	5Y4/1 灰 砂礫少 焼成良	トレンチ表土層
第54図4 須恵器甕	破片	甕の口縁部破片。内外面口クロナデ。外面はヘラナデの痕にハノ状工具による刺突。内面はヘラナデ。頸部接合面で割傷。	10Y6/1 灰 白色粒子多 砂礫やや多 焼成良	表土層
第54図5 須恵器甕	破片	甕の体部破片。内面同心円状当て具痕、外面平行タタキ。	10Y4/1 灰 砂粒・白色粒子多 焼成やや良	表土層
第54図6 須恵器甕	破片	甕の体部破片。内面同心円状当て具痕、外面平行タタキ。当て具・タタキとも明確に残る。	N4/ 灰 砂粒・白色粒子多 砂礫やや多 焼成良	表土層
第54図7 須恵器甕	破片	甕の体部破片。内面ヘラナデ、外面平行タタキ。当て具痕をナデ消したものか。	7.5Y5/1 灰 砂礫・黒色融解粒多 焼成良	表土層
第54図8 土製紡錘車	径 4.5 高 1.2	孔の内面に木質が残る。全体的に摩滅しているが外周一部のみ欠、ほぼ完存。	2.5Y6/3 に近い黄 砂粒・白色粒子多 焼成良	トレンチ
第54図9 青磁碗	破片	内外面口クロナデ。内面に梅花文? 体部はほぼ直線上に立ち上がり、口唇部は内削ぎ状で僅かに外反する。	5Y6/3 オリーブ灰 胎土均質で緻密 焼成良	表土層
第54図10 土師質皿	口 (6.8) 底 (3.5) 高 2.1	内外面口クロナデ。底部回転系切り離し? 底部内面中央が大きく窪む。	7.5YR6/4 に近い粗 砂粒・赤色融解粒やや多 焼成良	表土層
第54図11 内耳土器	破片	内外面口クロナデ。外面に調整用工具? による凹線が2本めぐる。破片下端は底部との接合面。全体的に摩滅。	7.5YR3/1 黒褐色 砂粒・白色粒子極多 焼成やや不良	トレンチ表土層

第5章 栃本西遺跡の調査

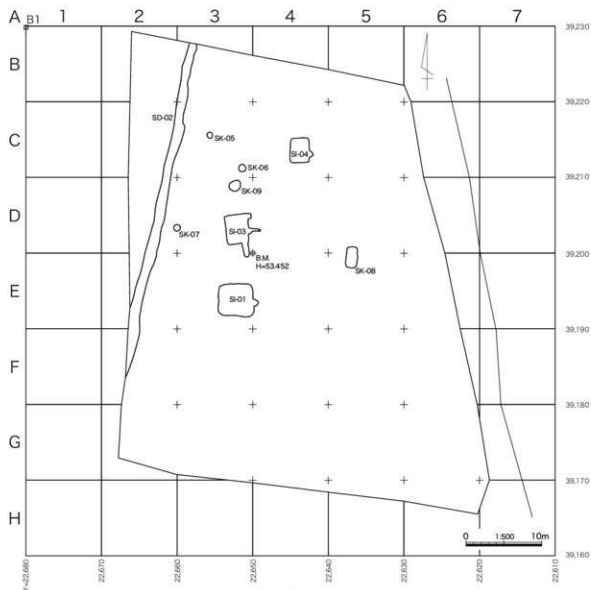
第1節 調査の概要と基本土層

1. 調査の概要

栃本西遺跡の調査では、竪穴住居跡3軒、土坑5基、溝跡1条が確認された。本調査の対象となった箇所
の西側・東側も試掘調査を行ったが、遺構群の広がりには認められなかった。遺構群の南北方向は調査対象外
であるため集落の全体像は把握できないが、おそらく竪穴住居跡数軒単位の小規模な集落であったと考えら
れる。発見された竪穴住居は、出土遺物から10世紀後半に比定される。土坑については、SK-06から竪穴
住居と同じ年代に比定される遺物が出土している。また、SK-06及びSK-07・09の3基には竪穴住居跡と
同じ覆土が堆積していることから、同じ時期の所産と考えられる。ロームブロックを多く含む土層や耕作土
と似た土層が堆積するSK-08・SK-05の2基は、現代の耕作に伴う穴である可能性が高い。溝跡については、
覆土の状況から機能時には水流があったと考えられるが、上面を削平されていることから全体の規模や形状
は不明である。現在の地割とは方向が異なること、覆土中から中世以降の遺物が出土していないことから、
竪穴住居跡群とはほぼ同じ時代の産物である可能性が高い。今回の調査区では中世以降に比定される遺物は出
土していないため、この地は中世以降、居住域としての利用はなかったと考えられる。



第55図 栃本西遺跡位置図



第56図 橋本西遺跡全体図

2. 基本土層

調査区の現地表面から約30cm厚堆積している耕作土の下に、小礫・白色粒子・明橙色粒子を少量含む黄褐色ローム土層（I層）が確認された。この土層は、田沼扇状地から流出した二次堆積ローム土であり、遺構はこの層の上面で確認されている。I層上面が標高53.2m～3m、I層底面が標高52.7m、平均の厚さは45cmを計り、調査区内ではほぼ水平に堆積している。その下には暗黄褐色を呈する砂質土層（II層）が確認された。土地分類基本調査によれば、二次堆積ローム土層下は砂礫層とされているが、調査区内では粒子の細かい均質な砂質土層が確認された。II層上面から40cm(標高52.3m)まで掘り下げたが、層位の変化は見られず、同じ暗黄褐色砂質土層が堆積していた。



第57図 橋本西遺跡
土層柱状図

第2節 発見された遺構と遺物

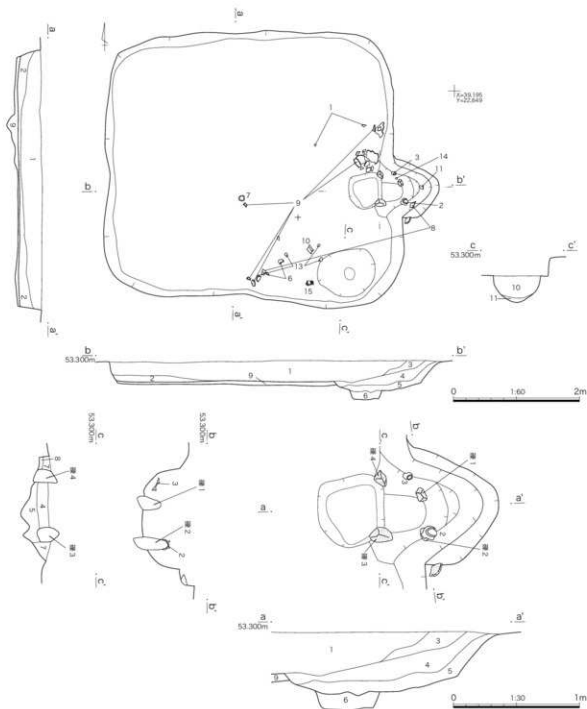
1. 竪穴住居跡

SI-01 竪穴住居跡

E3・E4グリッドに位置する。北側約5mの地点にSI-03が存在する。橋本西遺跡の遺構群の中で、最も南に位置する遺構である。本調査に先立つ試掘調査の際に、トレンチ6の中で確認された。規模は東西4m75cm、南北4m20cmと東西に長い長方形を呈し、南東隅がやや張り出す。カマドを通る東西の中軸線は、N-90°-Eである。各壁は斜めに開きながら立ち上がり、確認面からの深さは、北壁で34cmである。床面は基本土層の砂質土層上面まで平坦に掘り込んだ後、黒色土ブロックを多く含むローム土で厚さ4～5cmの貼床を施している。カマド前から貯蔵穴の周辺にかけて（住居南東部分）では、他の部分よりも比較的貼床が厚くなっている。貼床上面はあまり硬化していない。貯蔵穴は住居南東隅の貼床下で1基確認された。長軸92cm、短軸76cmの東西に長い楕円形を呈し、深さは42cmである。底面には焼土をやや多く含む土層が薄く堆積しており（1層）、カマドからの流れ込みと考えられる。内部から遺物は出土しなかった。また、周溝及び柱穴は確認されなかった。覆土は2層に分層され、壁際に砂質の暗褐色土（2層）が堆積した後、住居全体を覆うように黒褐色土（1層）が堆積している。いずれの層も内容物をあまり含まず、均質な層である。カマドは東壁中央からやや南寄りに構築されている。ほぼ断面のみが残存しているため、規模は不明である。煙道は住居壁から約60cm張り出し、奥壁はなだらかに立ち上がる。袖を構築する粘土は全く残っておらず、左袖部分の地山が僅かに馬の背状に掘り残されている。カマド内部と袖に相当する部分にそれぞれ1対の長楕円形の礫が立ったままの状態を確認された（礫1～4）。礫3・4は袖を構築する部材の一部、礫1・2は支柱と考えられるが、礫1・2はカマド中央からずれた位置に置かれており、カマド部材の一部である可能性もある。また、礫5は地山に埋め込まれており、カマド壁に礫を貼っていたものと考えられる。礫2の上には高台付塊（第59図2）が被さった状態で残っており、礫1のそばにも高台付塊（第59図3）が確認されている。いずれも著しい二次被熱は認められないため、住居廃絶時に置かれたものであろう。燃焼部は約10cm隅丸方形に掘り窪めた後、少量の焼土粒子・炭化物粒子を含む黒色土（6層）で埋め戻している。この上面に、燃焼面と考えられる層（5層）が堆積しているが、焼土や炭化物は少ない。また、カマド壁及び火床はあまり焼けていない。貼床が厚く施される住居南東部分に集中しており、カマド左袖があったと考えられる部分からは、土師器甕（第59図9）が出土している。住居南東部分は覆土中からも多くの遺物が出土しているが、小片中心で復元可能な個体は少ない。住居南西部分では、覆土中から炭化材が数点出土している。床下からは、住居跡よりも古い時代の軒丸瓦（第60図15）が出土しており、胎土の特徴から三龜山麓窯跡群と推定される。下野国分寺・国分寺出土瓦の中には同じものが見あたらないが、外縁が平坦縁になり圏縁が2本めぐるといった点で、匱瓦19型式に似る。

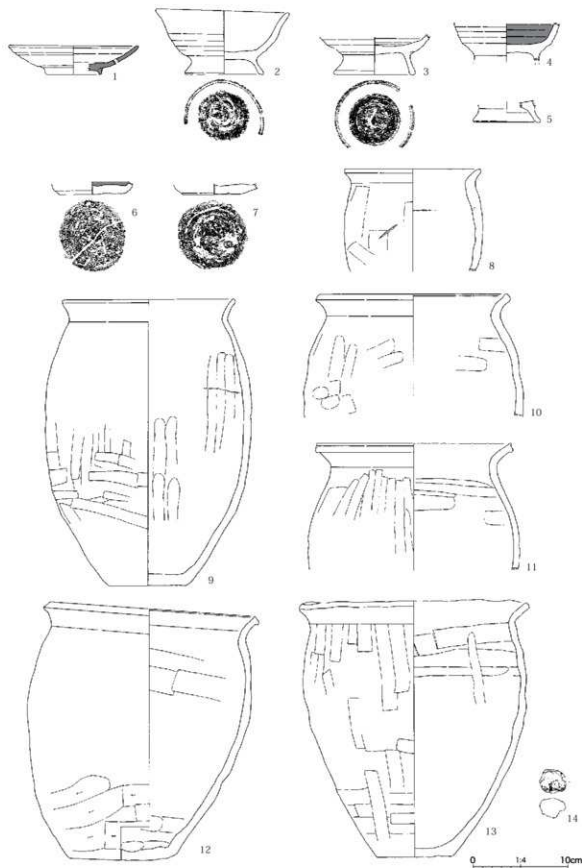
SI-03 竪穴住居跡

D3グリッドに位置する。南側約5mの地点にSI-01が存在する。遺構群のほぼ中央に位置する住居跡である。規模は東西3m南北3m86cmと南北に長い長方形を呈し、北東隅および南東隅に方形の張り出し部分を有する。カマドを通る中軸線は、N-88°-Eである。各壁は僅かに斜めに開きながら立ち上がり、確認面からの深さは、北壁部分で44cmである。床面は基本土層の黄褐色ローム土層中に構築されており、平坦に掘り込んだ後、部分的に薄く貼床を施す。床面は全体的に硬化している。住居北壁及び西壁の南半分から南壁にかけて、周溝が確認された。幅は10cm～16cm、深さは約5cmと浅い。内部には住居下層と同じ土層（2層）が堆積している。北東隅の張り出し部分は、幅71cm、奥行き44cmの方形を呈し、底面は住居床と同じレベルだが貼床は施されておらず、硬化も認められない。南東隅の張り出し部分は、幅

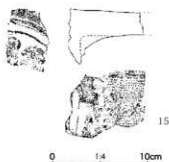


- 1層 黒褐色土 ロームブロックやや少量 白色粒子・明褐色粒子・小礫少量 赤色粒子・炭化物粒子微量 しまり強 粘性弱
 2層 暗褐色土 白色粒子・明褐色粒子少量 炭化物粒子・小礫・赤色粒子微量 しまり強 粘性弱 砂っぽい
 3層 黒褐色土 ロームブロックやや少量 白色粒子・明褐色粒子少量 炭化物粒子微量 しまり強 粘性弱
 4層 赤みを帯びた暗褐色土 焼土ブロックやや多量 白色粒子・明褐色粒子・焼土粒子少量 ロームブロック・黒色土ブロック微量 しまり強 粘性弱
 5層 暗褐色土 焼土粒子やや多量 明褐色粒子・炭化物粒子・焼土ブロック微量 しまりやや強 粘性弱
 6層 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量 砂質土 しまりやや強 粘性弱
 7層 褐色土 白色粒子・明褐色粒子・炭化物粒子微量 焼土粒子少量 しまり強 粘性弱 カマド跡の裏込め土
 8層 褐色土 7層に焼土が多量を含む7層
 9層 黄褐色土 炭色土ブロック少量 白色粒子・明褐色粒子・焼土粒子・小礫微量 しまり強 粘性弱 (陥床)
 10層 黒褐色土 ロームブロックやや少量 白色粒子・明褐色粒子・炭化物粒子・小礫少量 赤色粒子微量 しまり強 粘性弱 (1層に炭化物粒子を多く含む層)
 11層 黒褐色土 焼土粒子やや多量 焼土ブロック少量 炭化物粒子微量 砂質土 しまりやや弱 粘性弱

第58図 栃木西遺跡 SI-01 竪穴住居跡



第59図 栃本西遺跡 SI-01 竪穴住居跡出土遺物(1)



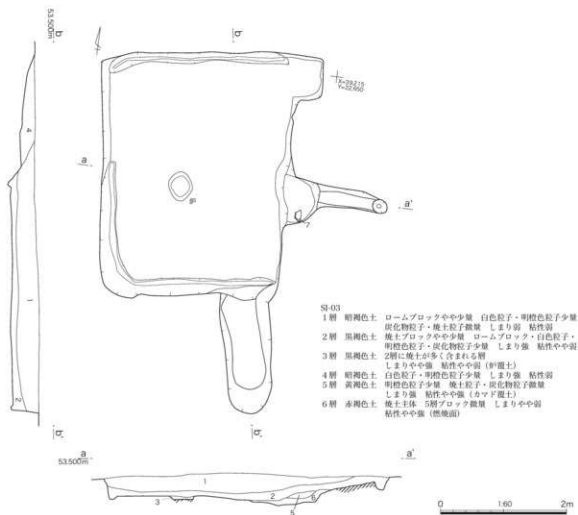
第60図 橋本西遺跡 SI-01 竅穴住居跡出土遺物(2)

第26表 橋本西遺跡 SI-01 出土遺物観察表

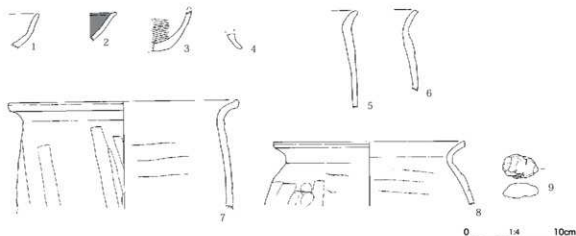
番号/種類	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/その他	注記
第59図 1 灰輪陶器 皿	口(13.6) 最大径(13.7) 底(5.6) 残存高3.0	体内外面ロクロナデ。底部からやや丸みを持って立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。輪軸(方法は不明)。高台内は無釉。内面底に重ね巻きの口縁部が露出。口縁部と体へ底面破片は接合しないが、同一個体と考えられる。	7.5Y7/1 灰白 白色粒子微量 焼成良	口2/8	SI01-89
第59図 2 土師器 碗	口13.6/15.4 高台8.4 高6.5/6.9	体内外面ロクロナデ。底部回転へら切り難し後、粗い回転へラケズリを施し高台接着。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部外反。高台はハの字に開き、接地面は弱い凹縁が一周する。口縁部が楕円状に大きく歪む(実測は短径僅か凹面)。	5YR6/6 明赤褐 砂粒・砂礫多 焼成良	口4/8 底完存	SI01-3, SI01 カマド
第59図 3 土師器 碗	高台径8.5 残存高4.3	内外面ロクロナデ。底部回転へら切り難し後高台接着後、接着部分をロクロナデ。体部は丸みを持って立ち上がる。高台接地面に弱い凹縁が一周する。高台に歪みあり。	7.5YR6/6 相 砂粒・黒色粒子やや多 砂礫少 焼成良	体2/8 底7/8 高台6/8	SI01 カマド-41
第59図 4 土師器 碗	底(8.0) 残存高4.0	内外面ロクロナデ。高台端部、口縁部欠損。内面黒色処理。	7.5YR6/6 相 砂粒・黒色粒子やや多 砂礫少 焼成良	体7/8 底7/8 高台1/8	SI01 覆土、カマド
第59図 5 土師器 碗	高台(7.0)	高台部のみ残存。やや外反しながらハの字状に開き、端部は丸みを帯びる。内面黒色処理。	7.5YR6/4 に近い相 砂礫やや多 砂粒少 焼成やや良	高台2/8	SI01 覆土
第59図 6 土師器 碗	底7.0 残存高1.1	内外面ロクロナデ。底部回転へら切り難し後調整なし(底部は粘土紐を巻いて成形した可能性もあり)。底部立ち上がり部分の内面に横、底部外面は二段底状。	7.5YR6/6 相 砂粒・赤色粒子多 砂礫少 焼成良	底完存	SI01-32
第59図 7 土師器 碗	底7.0 残存高1.3	内外面ロクロナデ。底部回転へら切り難し後調整なし(底部は粘土紐を巻いて成形した可能性もあり)。底部立ち上がり部分の内面に横、底部外面は二段底状。	7.5YR6/4 に近い相 砂粒多 砂礫少 焼成やや良	底完存	SI01-1920
第59図 8 土師器 器	口14.2 最大径14.4 残存高10.7	口縁部ヨコナデ。外面は縦方向へラケズリ、内面は弱いヘラナデ。内面に縦積層が残る。著しく被熱しているが、一部被熱のない破片あり(注記SI01-2.20)。SI03 出土遺物と遺構同程度。	2.5YR4/4 に近い赤褐 砂粒多 砂礫多 二次被熱	口7/8 体6/8	SI01-220SI01 カマド SI01 貯蔵穴 SI03 カマド
第59図 9 土師器 器	口(17.6) 最大径(18.0) 高30.1	口縁部ヨコナデ。外面は縦方向の後に横方向へラケズリ、製部上半は摩耗により調整不明。内面は縦方向ナデ。調整が粗く、部分的に縦積層が残る。	5YR6/4 に近い相 砂粒多 焼成良	口1/8 体2/8	SI01-56.25,26.27, SI01-01 カマド SI01 床 SI01 覆土
第59図 10 土師器 器	口(19.6) 最大径(20.4) 残存高12.9	口縁部ヨコナデ。外面は縦方向弱いへラケズリ、ヘラナデ。内面は弱いヘラナデ。内外面とも摩滅、調整は粗い。	5YR5/6 明赤褐 砂粒・砂礫多 二次被熱	口4/8 体3/8	SI01 カマド-1, SI01-14.5SI01 カマド SI01 覆土
第59図 11 土師器 器	口(20.4) 最大径(20.8) 残存高13.2	口縁部ヨコナデ。外面は縦方向へラケズリ、横方向ヘラナデ。最大径は折り返し状に見える。内面著しく被熱のため、調整は不明。	5YR6/6 相 砂粒・砂礫多 二次被熱	口5/8 体4/8	SI01 カマド-12 SI01 覆土 SI01 床 SI01 カマド
第59図 12 土師器 器	口(21.4) 最大径(22.7) 底(11.0) 残存高26.0	口縁部ヨコナデ。外面は弱いナデ。製部下半縦方向へラケズリ。内面はヘラナデ。底部近くユビナデ。SI03 出土遺物と遺構同程度。	5YR5/6 明赤褐 砂粒・砂礫、白色粒子多 二次被熱	口1/8 底4/8	SI01 カマド-13 SI01 貯蔵穴 SI03 カマド 覆土
第59図 13 土師器 器	口20.6/24.0 底8.0 高26.6	口縁部ヨコナデ。外面は体部縦方向、底部近く横方向のへラケズリ。内面は横方向のナデ。口縁部から体部半ばにかけて楕円状に歪み、全体的に調整が粗い。	7.5YR5/4 に近い褐 砂粒多 砂礫少 焼成良	完存	SI01 カマド-15 SI01-52,15,16,18,22 SI01 覆土 SI01 床
第59図 14 粘土 土塊	幅2.7 長さ2.5 厚2.4	粘土層を握ったような塊状。焼けており、実測図裏面は黒黒あり。表面に筋状の圧痕が残る。(ヘラもしくは植物の茎か?)	7.5YR6/6 に近い相 砂粒多 焼成良	-	SI01-4
第60図 15 軒丸瓦	破片	瓦当部分は残存部が少なく、文様構成は不明。外区に2本の備線がめぐらせ、外縁は半円錐形である。内区には弁と思われる痕跡が残るが、形状は不明。丸瓦部凹面には布目筋が残る。	5Y6/1 灰 砂礫・白色粒子・微量 黒色粒子多 焼成良	破片	SI01-No.40 床下

76cm、奥行1 m 96cmの半楕円形を呈し、深さは23cm(住居床との差は約15cm)である。底面は先端から住居壁に向かって緩やかに下がり、貼床や底面の硬化は認められない。住居より古い土坑の可能性もあ

るが、覆土が住居覆土とよく似ていることから、住居に付随する施設と判断した。柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。住居覆土は2層に分層され、内容物の少ない黒褐色土層（2層）がレンズ状に堆積した後、他の住居跡上層と似た暗褐色土層（1層）が厚く堆積している。住居中央の1層中には焼土・炭化材が含まれる部分がブロック状にあるが、覆土中での燃焼面は確認されていない。カマドは東壁中央よりやや南よりに構築されている。燃焼部及び煙道の壁に粘土を貼り付けており、粘土は著しく焼けて赤化している。壺方は凸字状を呈すると考えられるが、記録不備のため粘土の貼り付け範囲、規模とも不明である。煙道は先端部分のビットも含めて長さ60cmを計り、先端に向かって緩やかな傾斜で立ち上がる。燃焼部分の底面は壁と同じく焼けて赤化している。袖は残っておらず、地山の掘り残しもない。燃焼部分の内部には焼土が著しく堆積しており、その上をロームブロックが覆っている。更にその上から煙道にかけては、住居覆土下層と同じ土が堆積している。カマドとは別に、住居のほぼ中央にがとえられる燃焼面を伴う浅い土坑状の掘り込みが確認された。長径48cm、短径40cmの東西に長い楕円形を呈し、深さは約5cmと浅い。内部には住居覆土下層と同じ土層が堆積し、底面は著しく焼けている。遺物はカマド内部及び焚き口に当たると考えられる部分から大型の土師器片が出土しているが、復元可能な個体は少ない。覆土中から出土した遺物は土師器の小片で、出土量も少ない。



第61図 栃水西遺跡 SI-03 竪穴住居跡



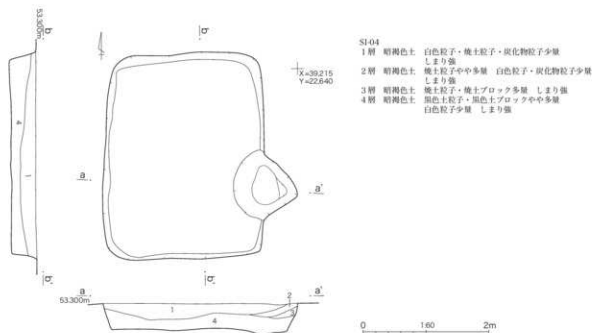
第62図 橋本西遺跡 SI-03 竪穴住居跡出土遺物

第27表 橋本西遺跡 SI-03 出土遺物観察表

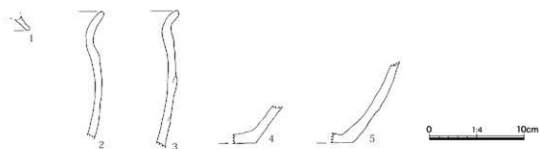
番号 / 種類	大きさ (cm)	特徴	色調 / 胎土 / 焼成	出土位置 / 残存状態	注記
第62図 1 土師器碗	破片	内外面口ロナデ。口縁部はやや外側に開きながら立ち上がる。全体的に厚減。	7.5YR6/6 橙 砂粒多 二次被熱	破片	SI-03
第62図 2 土師器杯	破片	内外面口ロナデ。体部がやや膨らみながら立ち上がり、口唇部は外反する。内面黒色処理。	10YR6/3 に近い黄橙 砂粒少 焼成良	破片	SI-03 カマド覆土
第62図 3 土師器杯	破片	内外面口ロナデ。内面に密なミガキ。	7.5YR6/4 に近い橙 砂粒多 二次被熱	破片	SI-03 カマド覆土
第62図 4 土師器碗	破片	高台部破片 (接合面で欠損)。ハの字状に開き、端部は平坦になる。	7.5YR6/4 に近い橙 微細な砂粒多 焼成やや良	破片	SI-03
第62図 5 土師器盤	破片	小型の撰。外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向の強いナデ。口縁部は調整なし。	5YR6/6 橙 砂粒極多 焼成良	破片	SI-03 覆土
第62図 6 土師器盤	破片	口縁部ヨコナデ、体部外面は縦方向のヘラケズリ、体部内面は横方向の強いナデ。口唇部に凹線がめぐる。	5YR5/6 明赤褐 砂粒極多 砂礫多 焼成良	破片	SI-03 覆土
第62図 7 土師器盤	口 (19.0) 最大径 (24.2) 高 (11.2)	口縁部ヨコナデ、体部外面は縦方向のヘラケズリ、体部内面は横方向の強いナデ。	5YR5.6 明赤褐 砂粒多 二次被熱	—	SI-03-1
第62図 8 土師器盤	口 20.0 最大径 20.2 高 (6.8)	口縁部ヨコナデ、体部外面は縦方向の粗いヘラケズリ、結核痕、指痕が残る。体部内面は横方向の強いナデ。内外面とも厚減。	5YR5/6 明赤褐 砂粒多 二次被熱	—	SI-03
第62図 9 粘土塊	幅 3.7 長 2.6 厚 1.6	平面箱円状でやや扁平。大きめの砂礫を含む (斜線部分)。工具痕はなし。	10YR6/4 に近い黄橙 砂粒やや多 焼成良	—	SI-03

SI-04 竪穴住居跡

C 4 グリッドに位置する。南西約 10m の地点に SI-03 が存在する。規模は東西 2m 52cm、南北 3m 28cm と南北に長い長方形を呈する。他の竪穴住居跡 2 軒と比べ規模の小さい住居である。カマドを通る中軸線は、N-93° - E である。各壁は斜めに開きながら立ち上がり、確認面からの深さは北壁部分で 52cm である。床面は基本土層の黄褐色ローム土層中に構築されており、平坦に掘り込むのみで、貼床は施されていない。柱穴、周溝、貯蔵穴は確認されなかった。覆土は 2 層に分層され、黒色土ブロックを多く含む暗褐色土 (4 層) が厚く堆積した後、他の住居覆土上層と似た暗褐色土層 (1 層) が堆積している。4 層に含まれる黒色土ブロックは基本土層に対応する層層がなく、由来は不明である。カマドは東壁の南東隅近くに構築されている。堀方のみが残存しており、規模は不明である。壁外を三角形に掘り込んでおり、壁には僅かに貼り付けられた粘土が残っている。煙道壁面が焼けて赤化しているが、その他の部分に赤化は見られない。焼成部分は底面が僅かに掘り込まれており、内部には覆土下層 (4 層) が堆積している。煙道部分には



第63図 栃木西遺跡 SI-04 竪穴住居跡



第64図 栃木西遺跡 SI-04 竪穴住居跡出土遺物

第28表 栃木西遺跡 SI-04 出土遺物観察表

番号 / 種類	大きさ (cm)	特徴	色調 / 胎土 / 焼成	残存状態	注記
第64図 1 土師器壺	破片	高台部破片 (接合面で欠損)。ハの字状に開き、端部は丸みを帯びる。	7.5YR6/4 に近い橙砂礫多焼成良	破片	SI-04 カマド覆土
第64図 2 土師器壺	破片	口縁部ヨコナデ、体部外面は縦方向の強いヘラケズリ、体部内面は横方向のナデ。	7.5YR6/4 に近い橙砂粒・砂礫多焼成良	破片	SI-04 覆土
第64図 3 土師器壺	破片	口縁部ヨコナデ、体部外面は弱いナデ、体部内面は横方向のナデ。積積痕が残る。	10YR6/4 に近い黄橙砂粒・赤色融解粒多焼成良	破片	SI-04 カマド底面
第64図 4 土師器壺	破片	底部片。体部外面は横方向のヘラケズリ、内面は不明。	7.5YR5/4 に近い褐砂礫多二次焼熱	破片	SI-04 覆土
第64図 5 土師器壺	破片	底部片。体部外面はヘラケズリか。内面は不明。全体にスス付着。	7.5YR3/2 黒褐砂礫多焼成やや不良	破片	SI-04 覆土

焼土ブロックが堆積しているが、覆土下層よりも上位に堆積しているため、カマド使用時に伴う焼土ではない可能性もある。出土遺物は極めて少なく、復元可能な個体はなかった。

2. 溝跡

SD-02 溝跡

B3 グリッドから F2 グリッドにかけて位置する。調査区西端を南北に直線的に走る溝で、上面を大きく削平されている。断面は皿状を呈するが、北半では東側壁が段状になっており、掘り返しの可能性もある。幅はほぼ一定で、最も広い E3 グリッド杭付近で 1 m 50cm、最も狭い調査区北端で 1 m 20cm である。深さは調査区北端で 28cm、D2 グリッド杭付近で 22cm、調査区西端で 30cm と、調査区内のほぼ中央で浅くなっている。覆土は 2 層に分けられるが、南半では底面に基本土層の黄褐色ロームブロックを含む砂質土（3 層）が堆積する。この層及び覆土下層（2 層）には砂粒が含まれていることから、水流のある溝だったと考えられる。覆土上層（1 層）は均質な暗褐色土層で、他の竪穴住居覆土とはやや異なることから、竪穴住居跡とは埋没年代が異なるものと考えられる。一方で出土遺物は住居跡群と同じく古代のものに限られ、中世以降の遺物は含まれない。よって、中世以前にある程度埋没していたものと考えられるが、上面が削平されていることから、この溝の埋没完了年代は不明である。

3. 土坑

SK-05

C 3 グリッドに位置する。長径 82cm、短径 72cm の楕円形で、深さ 12cm である。覆土は内容物をあまり含まない灰黒褐色土で、遺物は土師器小片のみである。

SK-06

C 3 グリッドに位置する。径 95cm の円形を呈し、深さ 45cm である。覆土は 2 層に分層され、上層には竪穴住居跡の覆土に似た黒褐色土が堆積する。覆土中からは土師器杯（第 67 図 1・2）および灰釉陶器皿（第 67 図 3）が出土している。

SK-07

D 3 グリッドに位置する。径 88cm の円形を呈し、深さ 32cm である。覆土は 2 層に分層され、上層には竪穴住居跡の覆土に似た暗褐色土が堆積する。覆土中からは土師器片 1 点のみ出土している。

SK-08

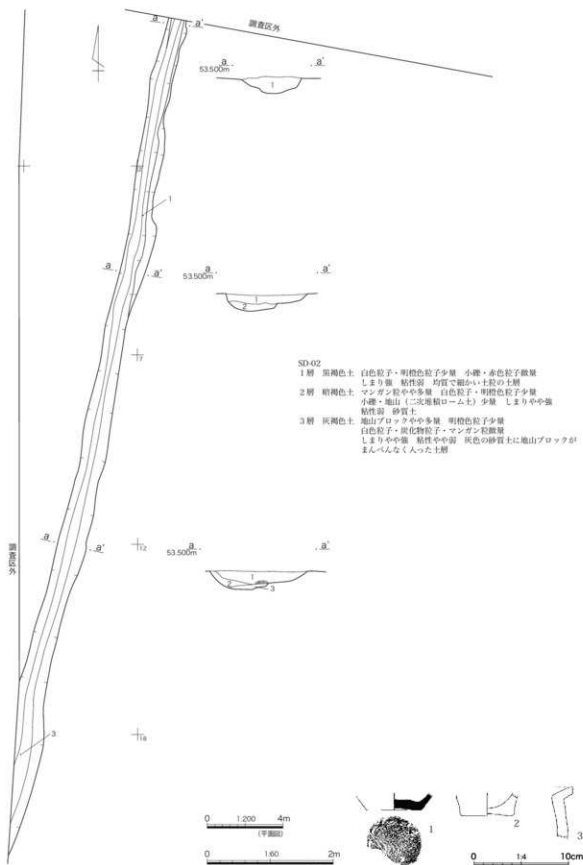
E 5 グリッドに位置する。長軸 2 m 78cm、短軸 1 m 50cm の長方形を呈し、深さは 39cm である。覆土は 2 層に分層され、いずれの層も他の土坑に比べロームブロックが多く含まれる。須恵器・土師器の小片が出土している。

SK-09

D 3 グリッドに位置する。長径 1 m 58cm、短径 1 m 30cm の楕円形を呈し、深さは 33cm である。北東半分の底面がやや高くなっている。覆土は住居覆土に似る黒褐色土である。灰釉陶器皿（第 67 図 4）の他に土師器の小片が出土している。

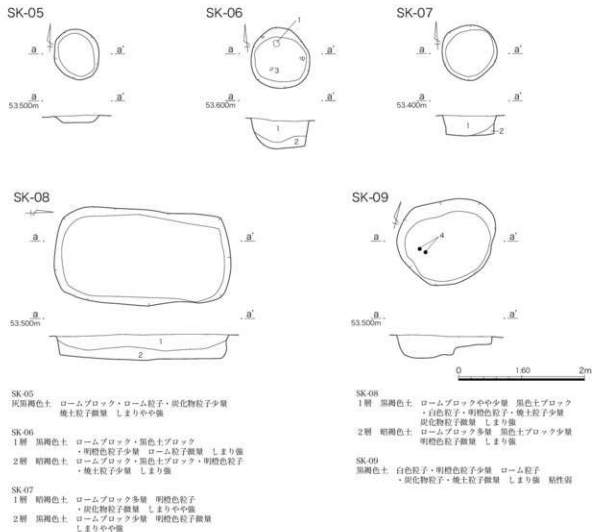
第 29 表 SD-02 出土遺物観察表

番号/種類/材質	大きさ (cm)	特徴	色調/胎土/焼成	出土位置/残存状態	注記
第 65 図 1 須恵器杯	底 (5.8) 高 (1.5)	内外面ロクロナデ。底部回転率切りはなし後、底部外周を細いヘラ状工具で回転ヘラナデ。	10YR5/1 灰 白色粒子・砂礫少 焼成良	体 3/8 底 5/8	SD-02 2
第 65 図 2 土師器壺	底 (5.6) 高 (2.2)	摩滅により調整不明。底部は上げ底状。	7.5YR6/4 に近い 橙 砂粒極多 二次焼成	体~底 4/8	SD-02 覆土
第 65 図 3 土師器壺	破片	口縁部ヨコナデ。体部外面は縦方向のヘラケズリ、体部内面は横方向のヘラナデ。口縁部がくの字に屈曲。	7.5YR6/6 橙 砂粒・砂礫多 二次焼成	破片	SD-02 5

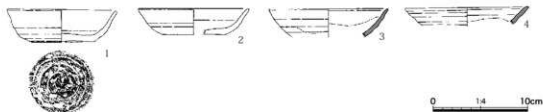


第 65 図 栃本西遺跡 SD-02 溝跡及び出土遺物

第5章 橋本西遺跡の調査



第66図 橋本西遺跡 SK-05～SK-09



第67図 橋本西遺跡 土坑出土遺物

第30表 橋本西遺跡 土坑出土遺物観察表

番号 / 種類	大きさ (cm)	特徴	色調 / 粘土 / 構成	出土位置 / 残存状態	注記
第67図 1 土師器環	口11.0 底3.3 高3.4	内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り難し後、粗い回転ヘラケズリ。体部はやや膨らみながら立ち上がり。口縁部は僅かに外反する。(底部は粘土紐を巻いて成形した可能性もあり。)	5.5YR5/6 明赤褐 砂粒・赤色繊維粒多 砂礫やや多 焼成長	完存	S06-5
第67図 2 土師器環	口(11.6) 底(6.6) 残存高2.8	内外面ロクロナデ。底部の調整不明。口縁部は薄く、内削ぎ状になる。	5YR5/6 明赤褐 砂粒・赤色繊維粒多 砂礫やや多 焼成長	口～底2/8	S06 覆土
第67図 3 灰輪陶器碗	口(12.6) 残存高3.0	内外面ロクロナデ。底部回転ヘラケズリか。底部からやや膨らみを持って立ち上がる。内外面に施釉(浸けがけか)。	2.5Y7/1 灰 白色粒子少 緻密 焼成長	口～体1/8	S06-2
第67図 4 灰輪陶器皿	口(13.0) 残存高1.9	内外面ロクロナデ。底部から開きながら直線的に立ち上がる。内外面に施釉(刷毛塗りか)。断面で釉上が層状に剥離している様子が観察できる。	2.5Y7/1 灰白 白色粒子少 緻密 焼成長	口～体2/8	S09-1,2

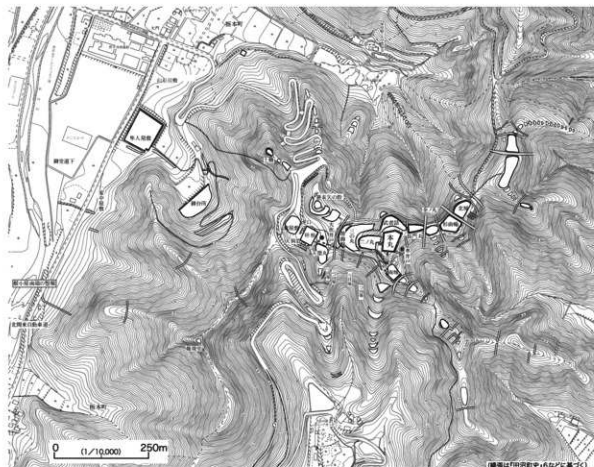
第6章 唐沢山城跡の調査

第1節 調査の概要と基本土層

1. 調査の概要

唐沢山城跡は、佐野市北東部の唐沢山一帯に展開する中世の山城である。研究者のみならず一般の歴史愛好家の間では、本丸跡に残る中世期の高石垣に代表される山頂の遺構が有名であるが、唐沢山西麓に展開する「根小屋地区」とよばれる家臣団の屋敷地が良好な状態で保存されている点で、歴史的価値の高い城跡とされる。多くの山城においては、山麓部が近世以降に開発されてしまうため、中世期の根小屋地区の遺構が残ることは稀である。しかし、唐沢山は江戸時代に彦根藩の御留山となって一般庶民の立ち入りが禁止されたことにより、中世段階の城に関わる遺構の多くが開発を免れて今日まで残されてきた。これらの貴重な遺構を後世に残すため、現在、国指定史跡化を目指した調査が佐野市教育委員会によって進められている。唐沢山城跡の範囲を把握するための遺構確認調査は、上記の根小屋地区を中心に平成20年度から5ヶ年計画で実施されており、それ以前の旧田沼町教育委員会による発掘調査も合わせ、根小屋地区の状況がかなりの部分で明らかになっている（第31表）。

北関東自動車道建設に伴う発掘調査は、根小屋地区の南側に位置する「根小屋南端の堅堀」が対象となった。この堅堀は現地表面からも溝状の凹みとして確認することができ、根小屋地区を区切る施設と考えられ



第68図 唐沢山城跡全体図（佐野市教育委員会作成を一部改変）

第6章 唐沢山城跡の調査

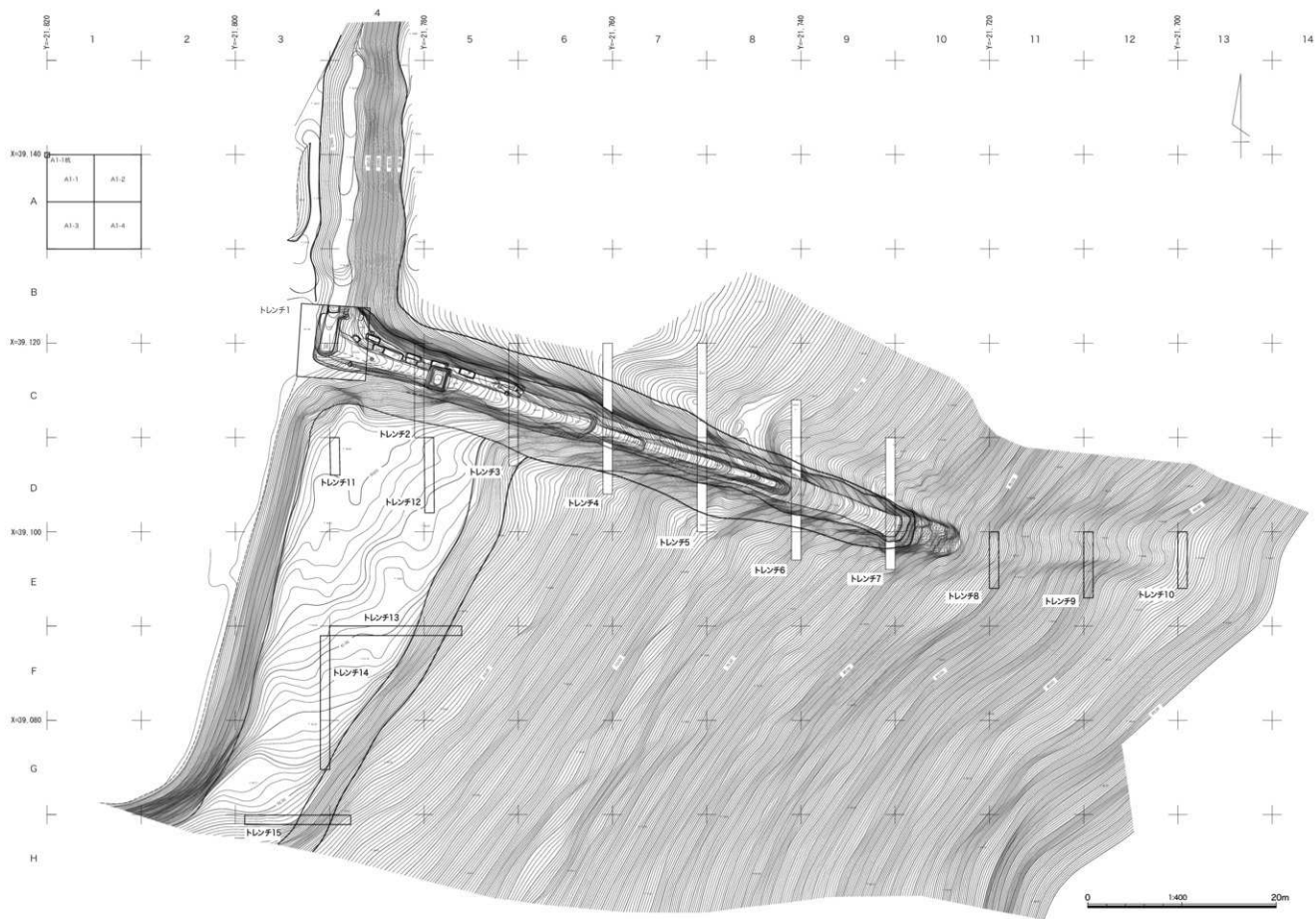
ていた。佐野市教育委員会が実施している縄張調査によれば、この堅堀の北側には和泉屋敷・単人居敷・御台所・家中屋敷など、根小屋地区の中核となる施設が密集しているのに対し、堅堀の南側には城郭遺構と推定される箇所は明らかに少なくなっている。この点からも、「根小屋南端の堅堀」は当初の想定通り、家臣団の居住区域である根小屋地区を区画する施設である可能性が高く、よって今回の調査においては、堅堀本体の構造を明らかにすると共に、堅堀周辺、特に堅堀南側での城郭遺構の有無を明らかにすることに重点を置くこととした。

調査の結果、堅堀は全長約60m、幅は最大で11m弱となること、堅堀は調査区西端で北方向に折れ曲がり、堅堀西側を流れる秋山川の方向に向かって伸びていくことが確認された。さらに、堅堀の北側に沿って残っていた地影は土塁であり、地山からの高さが最大で1m、幅が8mになる大規模なものであることが判明した。あわせて、堅堀の南側では平坦面・斜面共に遺構が存在しないことも確認された。また、調査区内で発見された遺物の多くは堅堀内から出土したもので、土師質小皿（かわらけ）が大半を占める。これらの遺物の年代は概ね、唐沢山城が機能していた15世紀末から17世紀初頭にかけてのものと考えられる。

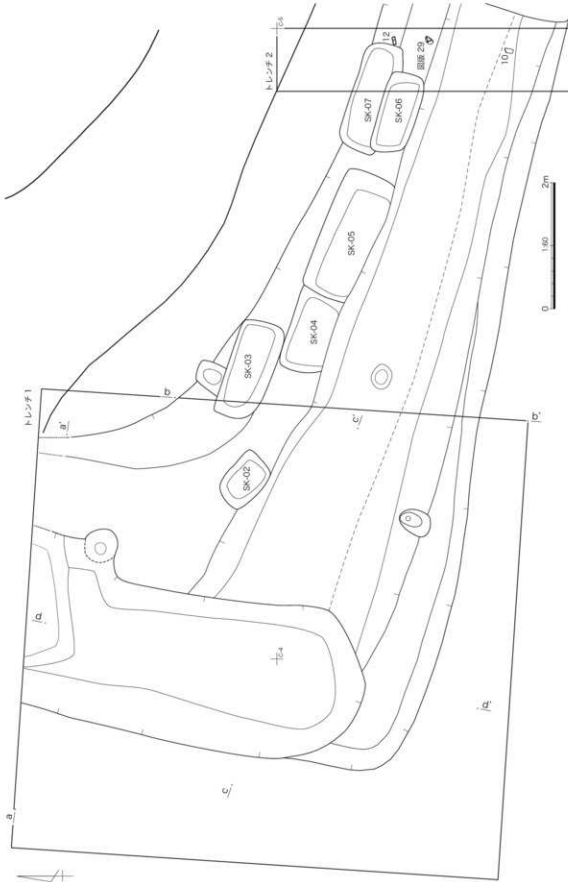
なお、発掘調査終了後、堅堀は北関東自動車道の建設に伴って消滅したが、唐沢山城跡トンネルの田之内町側出口（田沼インター側出口）の北側に、堅堀のコーナー部分がわずかに残されている。

第31表 唐沢山城跡調査一覧

調査年度	調査主体	調査の概要	確認された遺構	文献
平成9年度	田沼町教育委員会	大沢地区確認調査（1次調査）	土塁2基 土塀跡1箇所 推定屋敷跡1箇所 推定城郭遺構3箇所 溝跡2条 虎口跡3箇所	『唐沢山城跡』Ⅰ （田沼町教育委員会2000）
		大沢地区北西部発掘調査（2次調査）	堀跡1基 溝跡10条 土坑1基 集石遺構・虎口遺構8基 曲輪跡2箇所 柱穴跡37基	
平成10年度	田沼町教育委員会	大沢地区北西部発掘調査（3次調査）	土塁2基 溝跡4条 道路跡1条 集石遺構他4基	『唐沢山城跡』Ⅱ （田沼町教育委員会2001）
		大沢地区（1号・2号土塁他）確認調査（4次調査）	土塁2基 曲輪跡1箇所 溝跡1条 集石遺構・虎口遺構8箇所	
平成11年度	田沼町教育委員会	根小屋地区南部（家中屋敷）発掘調査（5次調査）	土塁2基 曲輪跡1箇所 溝跡1条 集石遺構・虎口遺構8箇所	『唐沢山城跡』Ⅲ （田沼町教育委員会2001）
		大沢地区東端部（1号・2号虎口他）の確認調査（6次調査）	虎口2箇所 井戸曲輪跡1基 井戸跡1基 溝跡5条 道路跡2条 土坑7基 集石遺構・虎口遺構13基	
平成12年度	田沼町教育委員会	根小屋地区中央部（家中屋敷・単人居敷・和泉屋敷）発掘調査（7次調査）	土塁1基 曲輪跡2箇所 石垣1箇所 溝跡5条 集石遺構・石積石列7箇所 ビット10基	『唐沢山城跡』Ⅲ （田沼町教育委員会2001）
平成15年度	田沼町教育委員会	大沢地区北西部発掘調査（8次調査）	礎石建物跡1棟 建物跡9棟 溝跡11条 土坑7基 土塁1基 欄列2基 井戸跡1基 性格不明遺構3基	『唐沢山城跡』Ⅳ （田沼町教育委員会2004）
平成16年度	田沼町教育委員会	大沢地区北西部発掘調査（9次調査）	溝跡11条 土塁2基 土坑2基	
平成18年度	栃木県教育委員会（財）とちぎ生涯学習文化財団	「根小屋南端の堅堀」発掘調査	堅堀1条	本報告書
平成19年度	佐野市教育委員会	主要地点の踏査 山頂上郭部（本丸・二の丸）の現況測量 根小屋地区（御堂道下・単人居敷地区）の遺構確認調査 家中屋敷地区の縄張調査	石垣・土塁・曲輪・空堀・石積・虎口等	『唐沢山城跡調査』Ⅰ （佐野市教育委員会2008）
平成20年度	佐野市教育委員会	縄張調査・地形測量調査 根小屋地区（単人居敷）遺構確認調査	石垣・石列・土塁・堀・曲輪・虎口等	『唐沢山城跡調査』Ⅱ （佐野市教育委員会2009）
平成21年度	佐野市教育委員会	縄張調査・地形測量調査 根小屋地区（単人居敷・家中屋敷・御台所地区）遺構確認調査	石垣・石積・石列・石組跡・土塁・堀・曲輪・虎口等	『唐沢山城跡調査』Ⅲ （佐野市教育委員会2010）
平成22年度	佐野市教育委員会	根小屋地区（御台所）遺構確認調査 地形測量調査・史料調査	石垣・石積・石列・石組跡・土塁・堀・曲輪・虎口等	『唐沢山城跡調査』Ⅳ （佐野市教育委員会2011）
平成23年度	佐野市教育委員会	（調査中）		



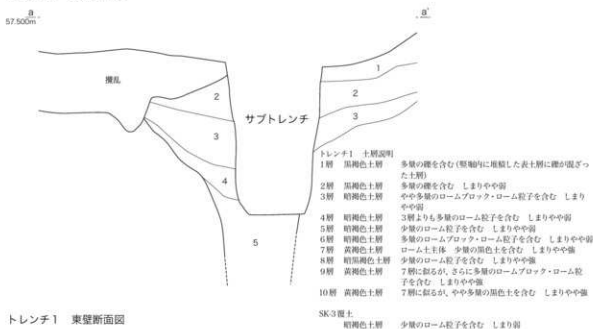
第69図 唐沢山城跡 調査区全体図(1/400)



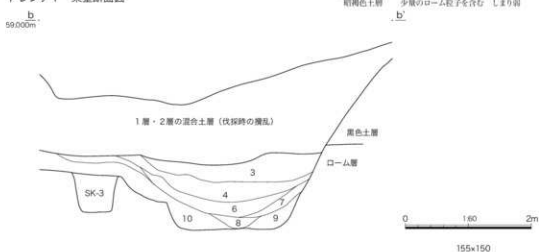
第70図 唐河山城跡 堅堀部分拡大図(1)

第6章 唐沢山城跡の調査

トレンチ1 北壁断面図



トレンチ1 東壁断面図

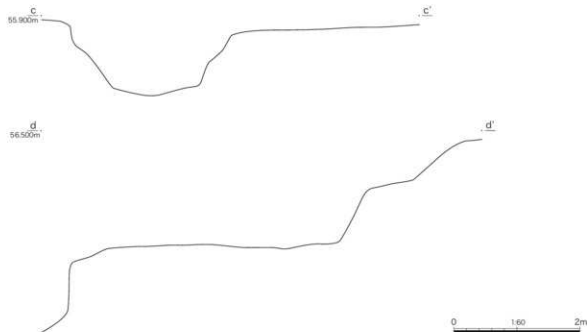


第71図 トレンチ1 土層断面図

2. 調査区の地形と基本土層

調査区は、南東から北西へ向かって下る斜面となっている。標高は、調査区南東端の11グリッド杭付近で98.99m、調査区北東端のC4グリッド杭付近で56.73m、両地点の高低差は約42.26mである。この斜面は、飯森(守)山の尾根筋から西側へ下るもので、斜面裾部分は人工的にカットされて高さ2m程度の段差となっている。段差の下は、東西約18m、南北約45m、面積約800㎡の方形を呈する平坦地となる(平坦地とはいえ、南から北へ緩やかに傾斜する)。調査区の西側は町道で区切られており、町道の西側は秋山川の河川敷となっている。

基本土層は、調査区が広くかつ斜面地のため、地点により大きく異なる。堆積状況は各トレンチのセクション図の中で示している。調査区東端(トレンチ10 第79図)では、斜面上方から流れ込んだと考えられる礫混じりの流入土層(2~4層)の上に、腐植土層と考えられる黒褐色土層(1層)が堆積している。流入土層は、基盤層が黄褐色ローム土層となる部分では80cm~1mの厚さで堆積しているが、基盤層がチャート岩盤となる部分(トレンチ8)では50cm程度の厚さとなっている。また、斜面下方(トレンチ3 第75図)



第72図 唐沢山城跡 トレンチ1 堅堀コーナー部分エレベーション図

では、斜面上方からの流入土層（トレンチ3～7 a～e層）がより厚く堆積していると考えられるが、堅堀や土塁の構築に伴う造成を受けているため、本来の堆積の厚さは不明である。腐食土層（1層）は、流入土層と反対に斜面下方の方がより薄く堆積している。調査区西の平坦地（トレンチ11・12・14図）では、腐食土層（1層）が30cm～70cmの厚さで堆積し、その下は砂混じりの暗黄褐色ローム土層となる。

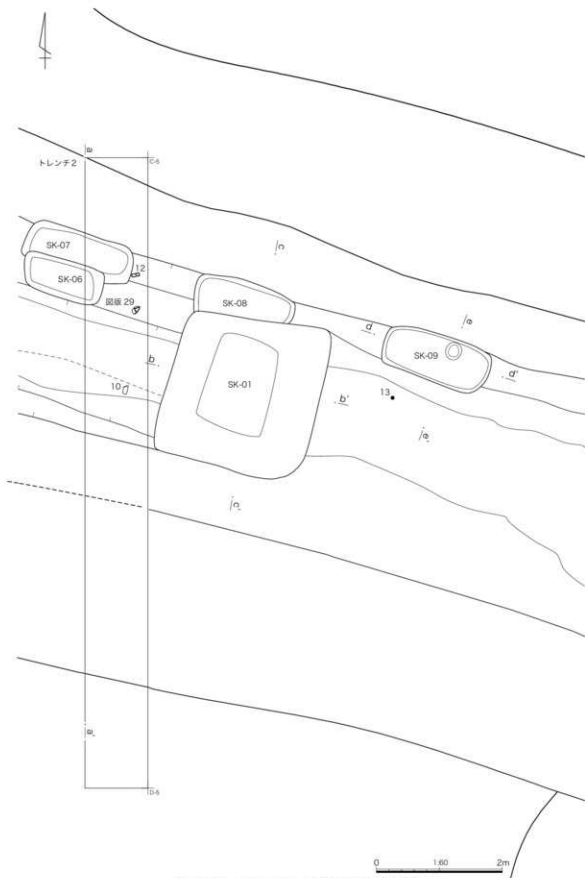
第2節 発見された遺構と遺物

1. 堅堀・土塁の調査

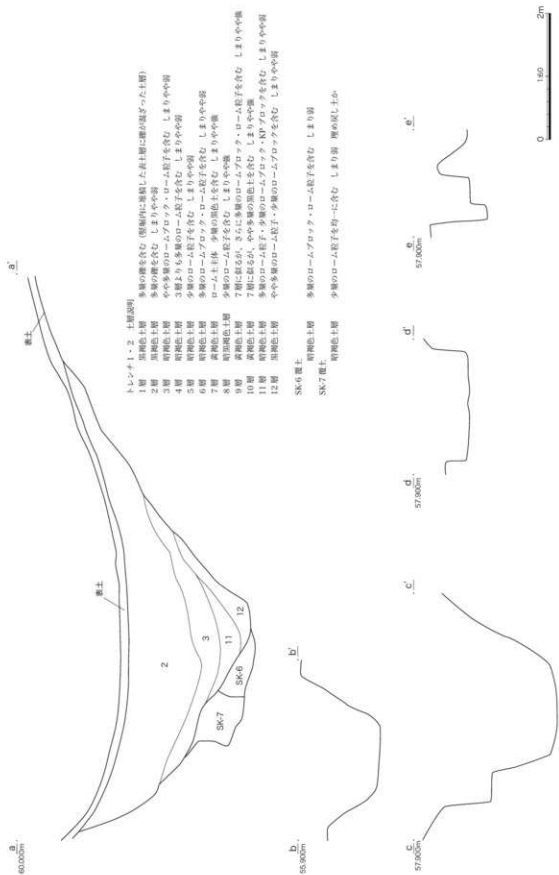
堅堀の規模と形状

調査区内は、調査開始前は竹や杉などの樹木が密集している林地だった。すでに旧田沼町教育委員会及び佐野市教育委員会が実施した縄張調査により大まかな遺構の形状は把握されていたが、発掘調査に入る前により詳細な地形測量が必要と考え、立木を刈り払った後、現況の航空写真測量を実施した。その結果をふまえ、調査区全体に設定した10m×10mの大グリッド（国土座標第Ⅸ系に基づく）に沿って堅堀にほぼ直行する方向の試掘トレンチを約10mおきに10本設定し、トレンチ壁で土層堆積状況の記録観察を行った。トレンチ調査の結果、トレンチ1からトレンチ7で、堅堀の断面が確認された。その結果、堅堀はB4・C4グリッドからE9グリッドにかけて掘り込まれており、全長は約60mであることがわかった。佐野市教育委員会による縄張調査及び調査前の航空測量では、堅堀はさらに30mほど東へ延びて全長90m程度と考えられていたが、堅堀の西端から約60m東の地点に設定したトレンチ7（10グリッドライン）付近でチャート岩盤が確認され、その岩盤に沿って堅堀の東端が急角度で立ち上がって終息することが確認された（第77・78図）。堅堀の幅は、最も広いC6グリッド付近で10m70cm、最も狭いD9グリッド付近で5m80cmである。溝底面の幅は、最も広いC4グリッド付近で1m60cm、最も狭いD9グリッド付近で85cmである。

堅堀の方向がやや北側に振れると考えられていたトレンチ8以东（11グリッドラインよりも東側）では、現地表面から約70cm下でチャート岩盤にあたり、この地点より東側には堀状遺構は作られていないこと



第73図 唐沢山城跡 壘壁部分拡大図(2)



トレンチ1・2 土層説明

- 1層 黒褐色土層 多量の腐葉を含む(埋藏内に連続した表土層に覆われた土層)
- 2層 黒褐色土層 多量の腐葉を含む しまりや中層
- 3層 暗褐色土層 中や多量のロームブロック・ローム瓦片を含む しまりや中層
- 4層 暗褐色土層 3層よりも多量のローム瓦片を含む しまりや中層
- 5層 暗褐色土層 少量のローム瓦片を含む しまりや中層
- 6層 暗褐色土層 多量のロームブロック・ローム瓦片を含む しまりや中層
- 7層 暗褐色土層 ローム土主体 少量の黒色土を含む しまりや中層
- 8層 暗褐色土層 ローム土主体 少量の黒色土を含む しまりや中層
- 9層 暗褐色土層 7層に近づくが、さらに多量のロームブロック・ローム瓦片を含む しまりや中層
- 10層 暗褐色土層 多量の黒色土を含む しまりや中層
- 11層 暗褐色土層 多量の黒色土を含む 少量のロームブロック・ローム瓦片を含む しまりや中層
- 12層 暗褐色土層 中や多量のローム瓦片・少量のロームブロックを含む しまりや中層

- SK-6遺土 暗褐色土層 多量のロームブロック・ローム瓦片を含む しまり層
- SK-7遺土 暗褐色土層 少量のローム瓦片を約一に含む しまり層 埋め戻し土

第74図 唐沢山城跡 トレンチ2 土層断面図及びSK-1・SK-9エレベーション図

が確認された。よって、現地表面に残っていた溝状の凹みは、竪堀やその他の堀状遺構に伴うものではないことが明らかとなった。また、この溝状の凹みはトレンチ 10 周辺で消滅し、屋根上に通じる道ではないことも合わせて確認されている。トレンチ 10 で炭窯が 1 基確認されており、調査区外の斜面にも複数存在する可能性があることを合わせて考えると、この溝状の凹みは、竪堀が埋没した後、炭窯などの山林利用に伴って自然道として使用されるうちできた凹みの可能性が高いと考えられる。

一方竪堀の西端は、北方向へと延びていくことが確認された（この部分については、以下「南北方向へ延びる堀」と記載する）。調査前に行った現地地形の測量からは、南北方向へ延びる堀は直角よりもやや開いた角度をもって曲がるものと考えられていたが、コーナー部分はほぼ直角に曲がり、現在の町道 232 号線に平行して北側へと延びていくように見える。しかし、コーナー部分から先は 1 m 程度しか調査できなかったため、堀が延びる方向については確たる判断がしがたい。直角に曲がった場合に堀の延長方向にあたる「家中屋敷」とよばれる部分では、市教育委員会による範囲確認調査が実施されているが、この南北方向へ延びる溝の延長と判断される遺構は確認されていない。また、現地地形の測量から推定されるとおり、直角よりもやや北西に開いた方向に延びた場合は、秋山川に堀が合流していくことになるが、延長方向に当たる秋山川河川敷部分では、現地表面からは堀状の凹みなどを確認することはできなかった。

南北方向に延びる堀は、東西方向に延びる竪堀よりも約 1 m 深く、断面は逆台形状を呈する。コーナー部分より 5 m 50 cm で調査区外となるが、調査区北端では竪堀底面に土坑状の掘り込みが確認された。コーナー部分の竪堀上面は、現地表面から 50 cm ほどの深さまで攪乱を受けているため、この部分の竪堀壁の立ち上がり形状は確認できなかった。

竪堀の断面は概ね菜研状を呈するが、溝の幅が広くなる C 6 グリッド以西では、逆台形あるいは皿状になる。トレンチ 1 の東壁断面では竪堀の掘り返しが認められるが（第 72 図）、トレンチ 2・3 では明瞭ではない（第 74・75 図）。調査時の所見では、C 4 グリッドから C 5 グリッドにかけて（トレンチ 1～3 の間）の竪堀北壁でテラス状になる平坦部分（第 70・73 図）が古い竪堀の底面に対応すると判断しているが、トレンチ 3 の断面観察では土層が堀全体に均質に堆積しており（第 75 図）、掘り返しの有無は確認できなかった。トレンチ 4 以東では、テラス状の平坦面が確認されず、底面も平坦であることから、掘り返しは C 6 グリッド以西のみの部分的なものと判断される。

竪堀の底面は、部分的に段状の掘り込みが認められる（第 69 図・付図参照）。この段差は、山の斜面の傾斜角度が変わる C 6 グリッド及び D 8 グリッドに作られている。竪堀底面の傾斜角を、山の斜面に合わせるために設けられたものと考えられる。古い竪堀の底面とされる北壁のテラス状の平坦面にも、トレンチ 3 周辺部分的に段状の掘り込みが認められた。

土塁の規模と形状

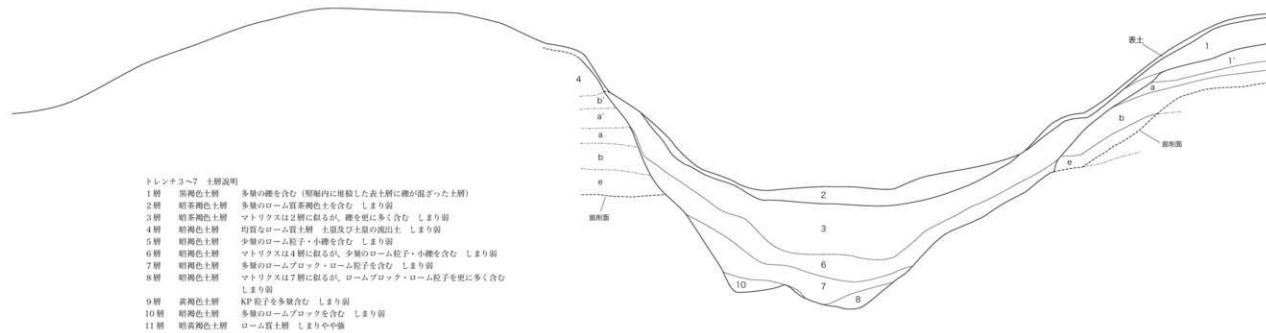
竪堀の北側には、幅 5～8 m、地山面からの高さ 70 cm～1 m の土塁が確認された。全長は竪堀と同じく約 60 m で、竪堀の北壁に沿って作られている。土塁は基本的に、竪堀を構築する際に出た廃土と推測される均質なローム土（4 層）を盛り上げて構築しているが、トレンチ 6 のように地山のローム層が薄い部分でも、土塁構築土に黒褐色土などは混入していないことから、単純に掘り上げた土を脇に盛ったものではなく、ローム土層が厚く堆積する斜面下方からも土を運び上げて構築しているものと考えられる。この際に掘り込まれる旧表土層（a 層）などの褐色土層は基本的には土塁には使用せず、いずれかに持ち去ったものと考えられる。ただし、トレンチ 3 の断面のみで、基本土層の a 層・b 層が土塁下部に使用されているのが確認されており、部分的にはローム土層以外も使用している可能性がある。

土塁内では版築などの硬化面は認められず、全体的に締まりが弱い。そのため、盛土は竪堀内へ流出しており、特にトレンチ 4～6 で竪堀内に厚く堆積している。堀底面から地山の最頂部までの比高差は、最も差

トレンチ3 断面図

SP300
63.500m

SP310



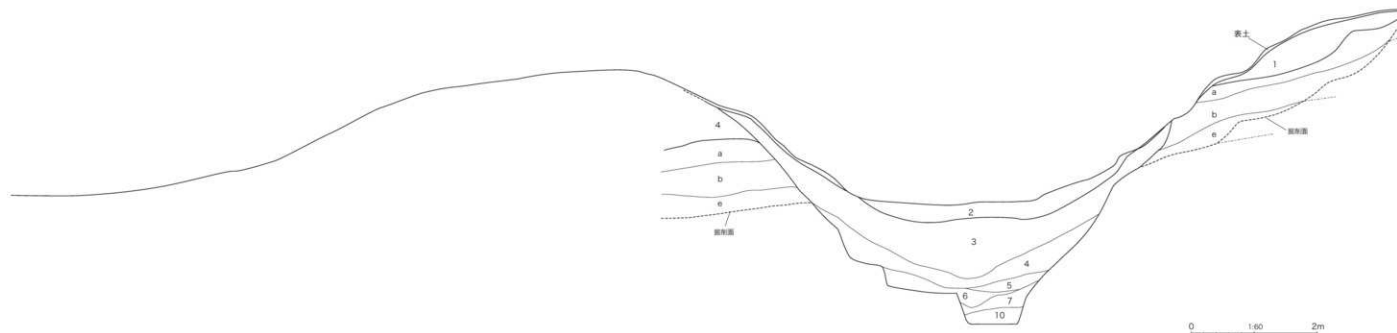
トレンチ3コア 土層説明

- | | | |
|-----|--------|--|
| 1層 | 黒褐色土層 | 多量の礫を含む (掘削時に堆積した表土層に混ざった土層) |
| 2層 | 暗茶褐色土層 | 多量のローム質茶褐色土を含む しまり弱 |
| 3層 | 暗茶褐色土層 | マトリクスは2層に似るが、礫を更に多く含む しまり弱 |
| 4層 | 暗褐色土層 | 均質なローム土層 小礫及び土原の混入土 しまり弱 |
| 5層 | 暗褐色土層 | 少量のローム粒子・小礫を含む しまり弱 |
| 6層 | 暗褐色土層 | マトリクスは4層に似るが、少量のローム粒子・小礫を含む しまり弱 |
| 7層 | 暗褐色土層 | 多量のロームブロック・ローム粒子を含む しまり弱 |
| 8層 | 暗褐色土層 | マトリクスは7層に似るが、ロームブロック・ローム粒子を更に多く含む しまり弱 |
| 9層 | 黄褐色土層 | KF粒子を多量含む しまり弱 |
| 10層 | 暗褐色土層 | 多量のロームブロックを含む しまり弱 |
| 11層 | 暗茶褐色土層 | ローム質土層 しまりやや強 |

トレンチ4 断面図

SP400
65.000m

SP410



第75図 唐沢山城跡 トレンチ3・4 土層断面図

があるトレンチ3部分で4m 10cm、最も差がないトレンチ7で1m 70cmであった。斜面下部（西側）へ行くほど盛土が高くなる傾向にあるが、トレンチ2以西は土塁が調査区外となるため、その部分での土塁の規模は不明である。次項で詳述するが、トレンチ2以西では堀の北側に地影れが残っているものの、トレンチ3以東の土塁を構成する均質なローム土層（4層）に対応する土層が竪堀内に認められない点から、トレンチ2以西でトレンチ3以東と同様の土塁が構築されているかについては不明であり、今後検討すべき課題である。

土層堆積状況

竪堀周辺の地山は、下位から

地山（1）層：礫をあまり含まないローム土層

地山（2）層：黄褐色ローム土や褐色土を基層として礫を多量に含む土層（b～e層）

地山（3）層：礫を多量に含む旧表土層（a層）

の3層に分けられる。（1）のローム土層は締まりが強い一方で、（2）・（3）層は締まりが弱く、斜面下位になるほど厚く堆積していることから、（2）・（3）層は、山の斜面上方から流れ出して堆積した土層と考えられる。

竪堀内の土層は、西側コーナー部分にかかるトレンチ1・2と、トレンチ3～7で大きく異なる。まずトレンチ3～7の土層は、下位から

竪堀①層：ロームブロックを多く含む暗褐色～黄褐色土層（トレンチ3～7 7～11層）

竪堀②層：均質なローム土層／土塁及び土塁の流入土（トレンチ3～7 4・6層）※5層は部分的にみられる黒色土層

竪堀③層：多量の礫を含む黒褐色～茶褐色土／斜面上方からの流出土（トレンチ3～7 1～3層）の3層に大別される。竪堀内の最下層となる竪堀①層には礫がほとんど含まれない。また、竪堀①層が厚く堆積するトレンチ3～5では、地山（1）層であるローム土層も厚く堆積し、逆に地山（1）層の堆積範囲のわずかに外側となるトレンチ6・7では竪堀①層がほとんど堆積していないことから、竪堀の壁にかかる（1）層が崩れて堀内に堆積したものと判断される。竪堀②層は、土塁構築土層と同じ特徴を持つ土層であることから、土塁が崩れて竪堀内に流入したものであろう。竪堀③層は、地山（3）と同じく礫を大量に含み、色調等も似ていることから、斜面上方からの流出土が堆積したものと判断される。また、いずれの土層も竪堀内でレンズ状に堆積していることから、竪堀の廃絶時には埋め戻しなどは行われず、自然に埋没していったものと考えられる。

トレンチ1・2の土層には、前項でも触れたとおり、上記の竪堀②層（土塁からの流出土）が確認されていない。トレンチ1・2の1層・2層は竪堀③層に対応する土層であり、斜面上方からの流出土と判断される。下位の3層以下ではロームブロックを多く含む土層が確認されており、これは竪堀①層に対応するものであろう。この中に含まれるトレンチ1・2の7層は、ローム土を主体とする点で土塁構築土層と似ているが、竪堀が直角に折れ曲がった先のトレンチ1東壁で確認されているのみであり、土塁構築土層と同じ土層とは考えられない。よって、トレンチ1・2内では、土塁構築土層に対応する土層そのものが堆積していないと判断される。また、トレンチ2以西では堀内に土坑が多数掘り込まれるなど、トレンチ3以東とは大きく異なる状況が認められる。さらに、トレンチ3の断面のみでローム土層以外の基本土層を土塁内に使用している状況からも、トレンチ3周辺を境にして、土塁に使用される土層が異なっている可能性が考えられる。なお、竪堀内に堆積する土層中には、年代を明らかにするテフラの堆積は認められなかった。

2. 竪堀内土坑の調査

調査時に古い竪堀の底面と判断されたテラス状の平坦面には、長方形土坑が8基確認された（SK-02～09）。また、竪堀底面に方形土坑が1基確認された（SK-01）。これらの土坑はC4・C5グリッド内に集中している。調査時の覆土断面記録が残っているのは、トレンチ断面にかかったSK-03・06・07の3基のみである。SK-06は多量のロームブロックを含む暗褐色土、SK-03・07は少量のロームブロックを均質に含む暗褐色土が堆積していた。土坑の上面は竪堀に切られていることから、これらの土坑は竪堀よりも古いものと考えられる。SK-02・04・05・08・09の5基は調査時の土層観察記録がされていないが、調査者の所見により、SK-03・06・07同様竪堀よりも古い段階のものと考えられる。

C5グリッドで確認されたSK-01は、2m40cm四方、竪堀底面からの深さ1.8mのほぼ方形を呈する土坑である。断面は逆台形で、底面は東西1m7cm、南北1m50cmの長方形を呈する。覆土は、トレンチ1の東壁断面の最下層で確認されている8層と同じく、ローム粒子を少量含む暗黒褐色土層が堆積していた。竪堀が機能している段階に同時に開口していたものと考えられるが、その性格は不明である。また、南北方向に伸びる竪堀の底面で（トレンチ1北壁）、SK-01に似た土坑状の掘り込みが確認されている。大半が調査区外となるため詳細は不明であるが、土坑内部にはSK-01同様竪堀の覆土が流れこんでいる（第70・71図）。

いずれの土坑内からも遺物は出土していないが、これらの土坑群が確認されたC4・C5グリッドでは、竪堀の覆土中から、他の部分に比較して多く遺物が出土している。土師質小皿が最も多いが、その他に五輪塔火輪部（第82図13）や人の頭骨（図版二十九）、土師質鍋（第82図10）、石製硯（第82図12）などが出土した。これは、長方形土坑に埋納されていたものが竪堀の掘削に伴い攪乱され、竪堀内に再堆積したものと考えられる。各遺物については、出土遺物の項でまとめて記載する。

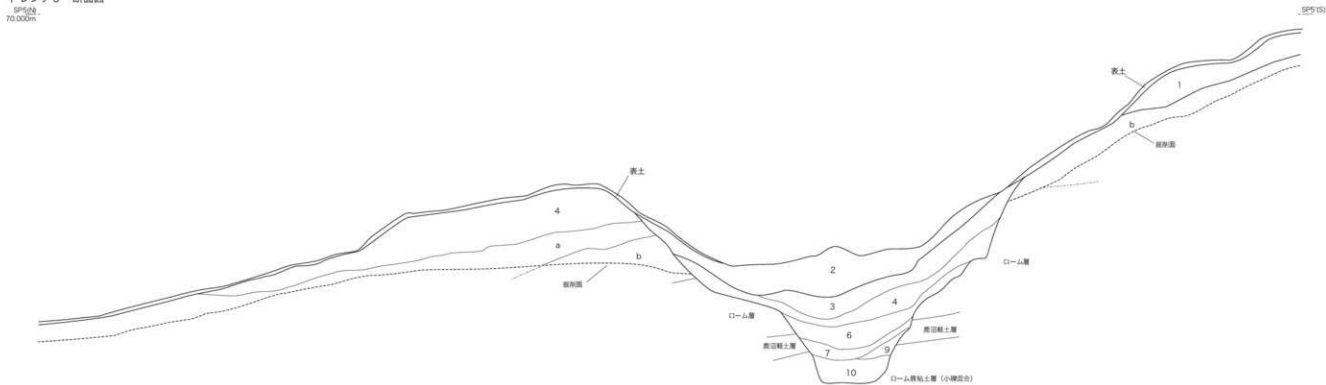
3. 炭窯状遺構の調査

調査区最東端のトレンチ10では、焼土と炭化材が内部に堆積する長楕円形の掘り込みが確認された（第79図）。形状から、近世以降の炭窯と考えられる。山の斜面がほぼ直角に掘り込まれ、奥壁に当たる部分及び床面は焼けて赤化していた。底面には焼土が薄く堆積していたが、炭化材はほとんど残っていないかった。また、遺構内には多量の礫と少量の焼土が含まれる暗黄褐色土が堆積していることから、炭を取り出した後に窯を埋め戻して廃絶したものと考えられる。上面には、竪堀と同じ礫を多量に含む黒褐色土が堆積していた。なお、遺構内では遺物は確認されなかったため、炭窯の詳細な時期は不明である。

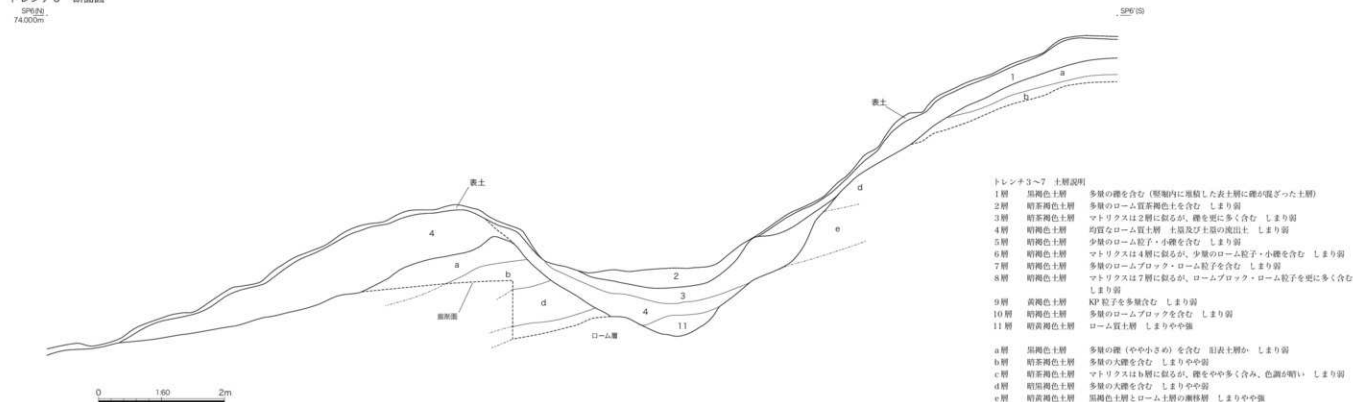
4. 竪堀南側の平坦部及び斜面の調査

竪堀南側の斜面は、竪堀と同じく東側から西側へと傾斜しているが、調査区西端（3・4グリッドライン付近）では平坦になっていた。この平坦地は東西約18m、南北45m、面積約800㎡の方形を呈し、周辺の「家中屋敷」「御台所」と同様に屋敷地として利用されていた可能性を考え、トレンチ調査を実施することとした。トレンチは、平坦部の地形に合わせて南北に3本、東西の斜面部から平坦部にかけて2本を設定した。平坦部に設定した11・12・14の3本のトレンチ（第80図）では、現地表面から20～70cm下で、地中である暗黄褐色ローム土層が確認された。それより上位では、竪堀内に堆積していた表土層（竪堀①層）とほぼ同様の、礫を大量に含む黒褐色土層（1層）が堆積していた。トレンチ14では、部分的に粘性のある暗褐色土層（2層）が確認されているが、ローム層同様地山と考えられる。トレンチ内では遺構は確認されず、トレンチ周辺も含め遺物も確認されなかったことから、平坦部に遺構は存在しないと考えられる。近隣住民への聞き取り調査によれば、近世以降に唐沢山の材木を利用した材木商による地形改変が行われているとのことであるが、改変の範囲や時期については確認を得ることができなかった。

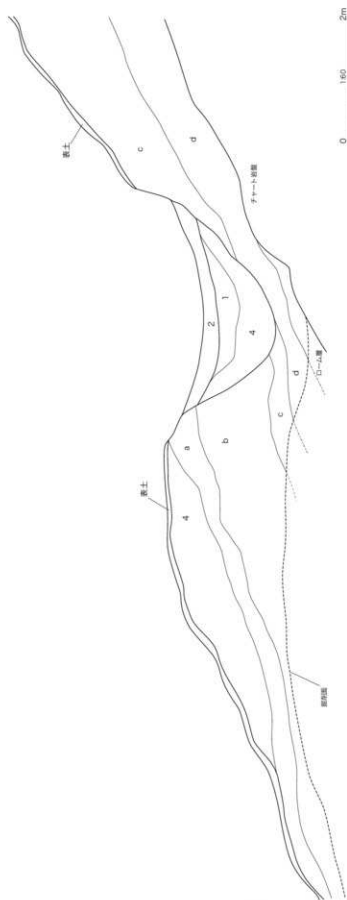
トレンチ5 断面図



トレンチ6 断面図



第76図 唐沢山城跡 トレンチ5・6 土層断面図



トレンチ3-7 土層説明

- 1層 黒褐色土層 多量の礫を含む(断面内に露出した表土層に礫が埋まった土層)
- 2層 暗赤褐色土層 多量のローム質赤褐色土を含む。しまり層
- 3層 暗赤褐色土層 マトリクスは2層に似るが、礫を更に多く含む。しまり層
- 4層 暗赤褐色土層 均質なローム質土層。土層及び土層の突出土。しまり層
- 5層 暗赤褐色土層 少量のローム粒子・小礫を含む。しまり層
- 6層 暗赤褐色土層 マトリクスは4層に似るが、少量のローム粒子・小礫を含む。しまり層
- 7層 暗赤褐色土層 多量のローム質プロック・ローム粒子を含む。しまり層
- 8層 暗赤褐色土層 マトリクスは7層に似るが、ローム質プロック・ローム粒子を更に多く含む。しまり層
- 9層 黄褐色土層 KPE層を多量含む。しまり層
- 10層 暗赤褐色土層 多量のローム質プロックを含む。しまり層
- 11層 暗赤褐色土層 ローム質土層。しまりや中礫

- a層 黒褐色土層 多量の礫(やや小さい)を含む。粗粒土層からしまり層
- b層 暗赤褐色土層 多量の土層を含む。しまりや中礫
- c層 暗赤褐色土層 マトリクスはb層に似るが、礫をやや多く含む。色調が暗い。しまり層
- d層 暗赤褐色土層 多量の土層を含む。しまりや中礫
- e層 暗赤褐色土層 黒褐色土層とローム土層の薄積層。しまりや中礫

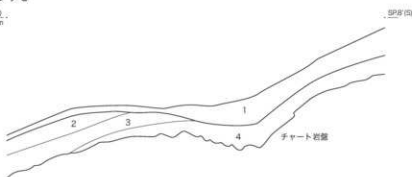
第2節 発見された遺構と遺物

第77図 唐沢山城跡 トレンチ7 土層断面図

第6章 唐沢山城跡の調査

トレンチ 8

SP8(N) 83.000m



トレンチ 9

SP9(N) 89.500m



トレンチ 8～10 土層説明

- | | | |
|----|--------|--------------------------|
| 1層 | 黒褐色土層 | 多量の礫を含む (表土層に礫が混ざった土層) |
| 2層 | 暗黄褐色土層 | 多量の礫を含む しまり岩 |
| 3層 | 暗黄褐色土層 | 多量の礫を含む しまり岩 黒表土か? |
| 4層 | 暗黄褐色土層 | 多量の礫を含む しまり岩 |
| 5層 | 暗黄褐色土層 | 少量の焼土と多量の礫を含む しまり岩 炭灰の混入 |
| 6層 | 黄褐色土層 | 多量の礫・焼土と少量の炭化物を含む しまり岩 |
| 7層 | 黄褐色土層 | やや多量の礫を含む しまり岩 (地山) |

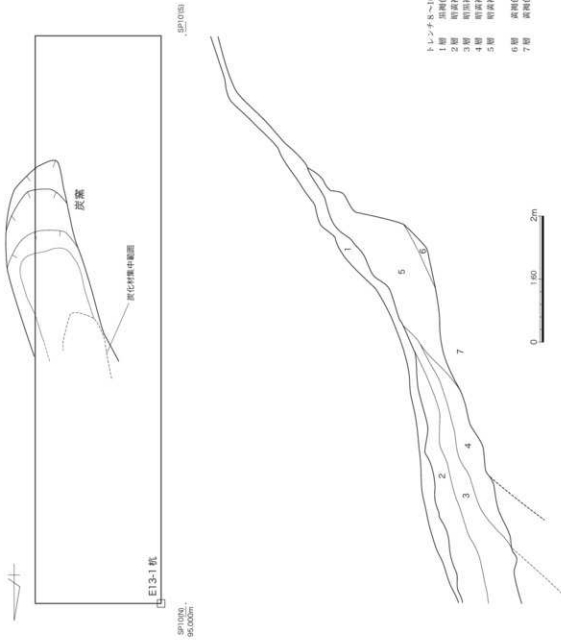
第78図 唐沢山城跡 トレンチ 8・9 土層断面図

平坦部から斜面にかけて設定したトレンチ 13・15 では (第 80・81 図)、平坦部同様に礫を大量に含む黒褐色土層の下に地山の暗黄褐色ローム土層が確認されたが、平坦部と比較して 1 層が 10～50cm と薄かった。表土層 (1 層) 中には、多量の礫と共に木根なども含まれており、近年の造成に伴うものと考えられる。また、壱堀南側の斜面では遺物の散布が認められず、地形にも急斜面であるため遺構は存在しないものと判断された。壱堀調査に伴う仮設階段を設置する際に重機による掘削を行ったが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

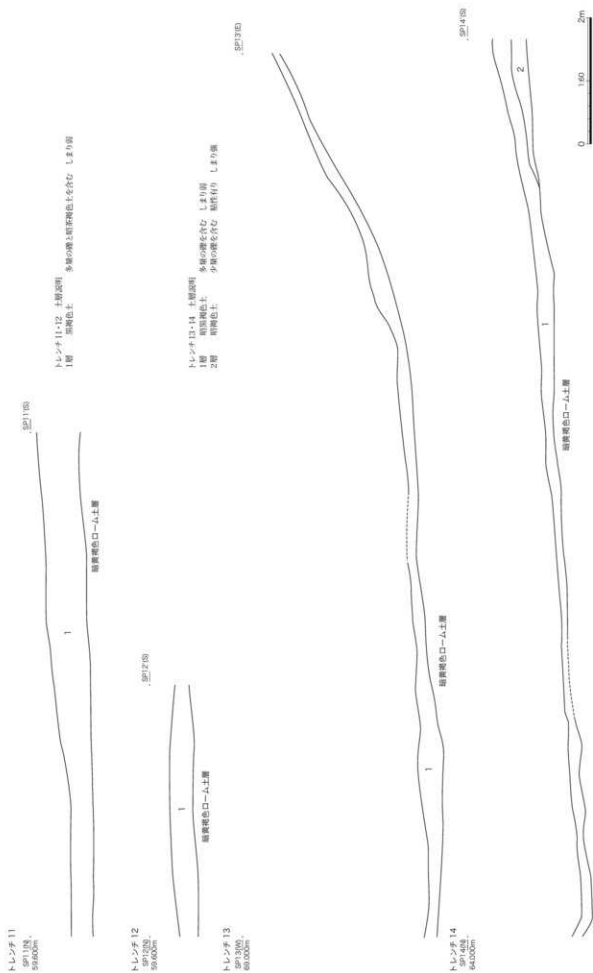
6. 出土遺物

中世の遺物

壱堀及びその周辺からは、唐沢山城の最盛期である 16 世紀を中心とする中世の遺物が出土している。中心となるのは土師質小皿及び土師質鍋だが、実測可能なものは土師質小皿 8 点、播鉢 1 点、内耳鍋 2 点、硯 1 点、鉄製鎌 1 点、鉄製釘 1 点であった。また、これらの遺物と共に、人の頭骨 (部分骨) が出土している。図化した土師質小皿のうち、第 82 図 1 のみが小皿形を呈し、他はいずれも皿形となる。いずれもロクロ



第79図 唐沢山城跡 トレンチ10 土層断面図及び炭層平面図

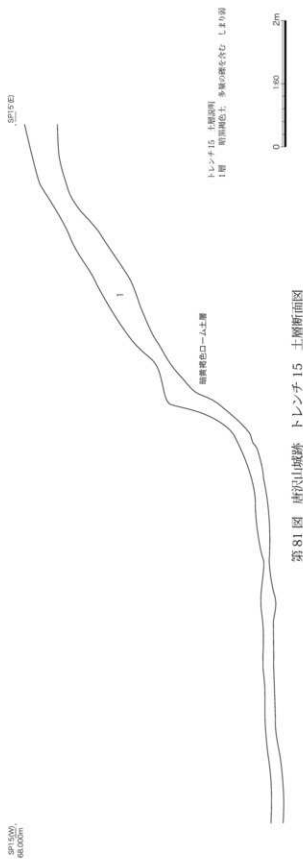


第 80 図 唐沢山城跡 トレンチ 11 ～ 14 土層断面図

成形のものであり、小片も含めて非口ロ成形成のもの出土していない。皿形を呈するもの（第82図2～8）のうち、第82図8以外は口径が10～12cm、定型が6cm前後のものとなる（5は底部を欠損するため、口径のみの値である）。8は、口径が10cm、底径が4.2cmと、他のものに比べて底径が小さい。底部が欠損する第82図5以外の底径と口径の比を底径/口径×100という形で算出したところ、8は40未満で他のものに比べて明らかに小さくなっている。他の5点については、50前後のもの（2類・3点）、60前後のもの（3類・2点）の2種類に分かれた。断面形は8以外は器壁が直線的に立ち上がる逆台形状を呈するが、8は器壁が丸みを帯びて立ち上がる。他にも、8以外は見込み部にナデが認められるなどの違いが認められる。

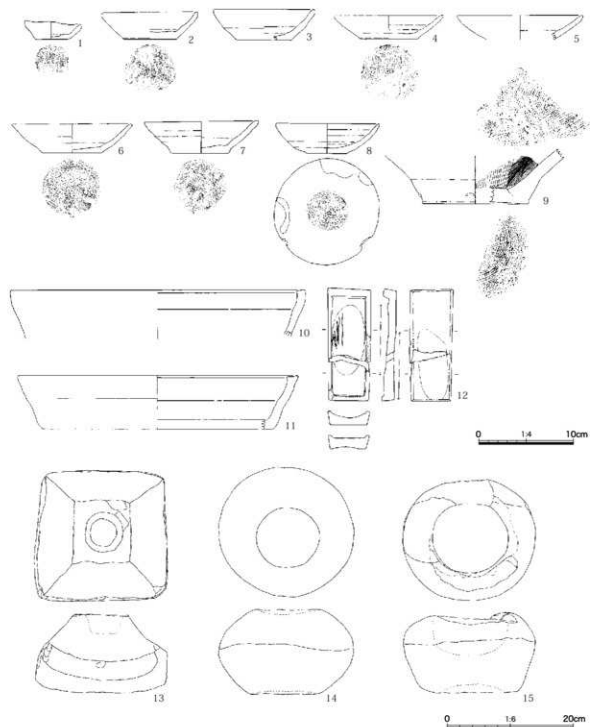
なお、佐野市教育委員会による準人屋敷の調査では土師質皿が大量に出土しており、形態分類が行われている（出居2009）。資料整理中のため分類の概要のみの記載となっており、はっきりと確定させることは出来ないが、今回の出土資料のうち第82図1がI-B類、2～7がII-DあるいはE類、8はI-C類に当てはまると考えられるが、今後より詳細な検討が必要であろう。

土師質小皿以外にある程度の年代が推定できる遺物として、陶器の瀬戸・美濃播鉢（第82図9）と五輪塔が出土している（第82図13～15）。播鉢は底部破片のため年代を確定させることは難しいが、底部径と柳目の特徴から16世紀後半のものと考えられる。五輪塔については、水輪2点のうち第82図14が最大径の部分が突出し上下につぶれたような形状、第82図15が最大径が上部に偏るそばん玉形を呈する。埼玉県内における五輪塔の編年を行った栗岡眞理子の論考（栗岡2001）によれば、いずれの形状も15世紀末から17世紀にかけて使用されるものとされる。形状の特徴及び石質が安山岩であることを考えると、五輪塔の大量生産が始まったとされる16世紀後半以降に位置づけることができよう。15は内側に大きな碗状の抉りが入っているが、同様のものが栃本東遺跡で表採されている（第7章 第104図1）。田沼町史で報告された準人屋敷出土の五輪塔（田沼町1984）の中にも、

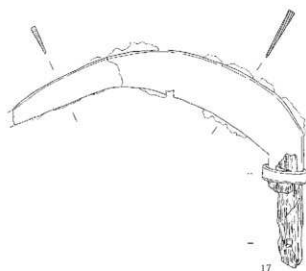


第81図 唐沢山城跡 トレンチ15 土層断面図

第6章 唐沢山城跡の調査



第82図 唐沢山城跡 出土遺物(1)



第2節 発見された遺構と遺物

0 12 5cm

第83図 唐沢山城跡 出土遺物(2) 鉄製品

第32表 唐沢山城跡出土遺物 観察表

番号/種類	大きさ (cm)・重量 (g)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/ その他	注記
第82回 1 土師質皿	口5.8 底3.8 高1.9	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り難し後ナデ。口縁部が大きく歪み、器厚も一定しない。口縁部にタール状の付着物あり(内面にも薄く付着)。打明細か。	5YR6/6 橙 砂粒多、赤色粒子少 焼成良	口~底6/8	C-5-3 SD 覆土中層
第82回 2 土師質皿	口(10.0) 底5.8 高3.0	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り難し後調整なし(底部に粘土残付着)。見込み部ナデあり。	7.5YR6/6 橙 砂粒・白色粒子少 焼成良	口1/8 底4/8	C-5-3 SD 覆土中層
第82回 3 土師質皿	口(10.4) 底(6.0) 高3.2	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り難し後調整なし。見込み部ナデあり。	5YR6/6 橙 砂粒・赤色粒子多 焼成良	口3/8	C-5-1 下層 (SD 覆土か?)
第82回 4 土師質皿	口(11.8) 底6.2 高2.5	内外面ロクロナデ、摩耗により底部調整は不明。見込み部ナデあり。	7.5YR6/4 に近い橙 砂粒・赤色粒子多 焼成良	口2/8 底5/8	C-5-3 SD 覆土中層
第82回 5 土師質皿	口(13.2) 残存高2.5	内外面ロクロナデ。	7.5YR6/4 橙 砂粒少 焼成良	口1/8	C-5-1 SD 覆土下層
第82回 6 土師質皿	口(12.1) 底6.3 高3.0	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り難し後調整不明。見込み部ナデあり。全体的に摩滅。	7.5YR6/4 に近い橙 黒色細粒子・赤色粒子少 焼成良	口4/8 底8/8	C-5-1 SD 覆土下層
第82回 7 土師質皿	口12.0 底6.0 高3.4	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り難し後調整なし。見込み部ナデあり。内外面とも摩滅。	10YR7/4 に近い黄橙 砂粒少 焼成良	口4/8 底完形	C-5-1 SD 覆土下層
第82回 8 土師質皿	口10.9 底4.2 高3.1	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り難し後調整なし。内面口縁目強。外面にタール状・スズ状の付着物あり打明細か。	7.5YR6/4 に近い橙 黒色細粒子・赤色粒子少 焼成良	口7/8 底完形	C-5-1 SD 覆土下層
第82回 9 陶器插鉢	底(11.2)	内外面ロクロナデ後、内面に放射状の線目(1単位22本)底部回転糸切り難し後調整なし。底部近く外面に粗いコビナデ。内外面に鉄輪を施す。底部外面・底面に目跡あり(4単位?)。瀬戸・美濃(16世紀後半)	2.5Y7/3 浅黄(胎土) 10YR3/1 黒褐(釉) 砂粒多 焼成良	底4/8	C-5-3 SD 覆土中層
第82回 10 内耳土器	口(31.4)	土師質の内耳土器。内外面ロクロナデ、口縁部内面に強い稜。外面に薄くスズ付着。	10YR5/2 灰黄褐 砂粒多・赤色粒子少 焼成良	口1/8	C-4-4 トレンチ No.1
第82回 11 内耳土器	口(29.4) 底(24.4) 高5.5	瓦質の内耳土器。内外面ロクロナデ。体部下外面は被熱により摩滅。破片端の形状から、内側に耳状把手が着くと考えられる。	5Y7/1 灰白 砂粒多 焼成やや良	口2/8	B-4-3 SD 覆土中層
第82回 12 石製硯	長11.8 幅4.4 厚1.4 重9.8	表面 硯面一部分が使用により大きく凹む。左側に線状の傷が数本あり。 裏面 実面側下側を右部分として使用。皿状に凹む。墨は残存していない。	5YR4/1 褐灰 2.5YR6/2 灰赤(使用部分) 軟質	中央で2 つに分れて いる	C-4-4 トレンチ No.4

番号 / 種類	大きさ (cm)・重量 (g)	特 徴	色調 / 胎土 / 焼成	残存状態 / その他	注記
第 82 図 13 五輪塔 (火輪)	長 21.2 短 20.8 高 12.5 重 7,500	上側の軒反りが下側より強く、水輪との接地面が下側に膨らむ。軒口はほぼ垂直で、扉だみは緩やか。	—	安山岩	C-5-1
第 82 図 14 五輪塔 (水輪)	長 21.5 短 20.6 高 13.5 重 7,650	上面と下面が皿状に窪み、最大径が突出する。	—	安山岩	B-4-3 表土層
第 82 図 15 五輪塔 (水輪)	長 21.1 短 19.0 高 12.7 重 5,400	実測図上面の中央が大きく凹み、ターレット状の付着物が認められる。最大径は上側に偏る。	—	安山岩	SD 覆土中 (出土グリッド不明)
第 83 図 16 鉄製釘	長 4.5 幅 0.4 厚 0.4 重 3.99	断面が円形となる棒状の鉄製品。上面は矩形を呈すると見られるが、腐食が著しく不明。	—	下層欠損	C-5-3 SD 覆土中層
第 83 図 17 鉄製鎌	刃部長 15.5 刃部幅 2.6 刃部厚 0.3 重 66.25	断面円形の木製柄に刃部を装着し、基部をリング状のタガと目釘で留める。目釘跡は1辺3mmの方形で、目釘の先端部が残っている。刃部は切先のみ欠損する。刃部・棟側とも残存する先端部から約6cmほど直線的に伸び、その後基部に向かって緩くカーブする。	—	—	C-5-1 表土層

同様に内部を碗状に抉るものがあり、この地域に特徴的な形状である可能性も考えられる。火輪（第82図13）は、水輪との接地面が下側に膨らみ、上側の軒反りが下側よりも強いといった形態的特徴や石質から水輪と同じく、16世紀後半以降のものと考えられる。

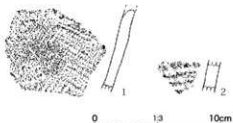
鉄製品は2点出土している。第83図16は釘としたが、錆が著しいため形状は判然としない。上面は方形で、断面は円形を呈すると考えられる。鉄製鎌（第83図17）は、断面円形の木製柄に刃部を装着し、基部をリング状のタガと目釘で留めている。断面の棟側は平坦である。表土層から出土しているため、堅堀に伴う遺物か否かは判断がつかない。

人骨（図版二十九）はトレンチ2北壁寄り・C-4-4グリッドの2層中から出土した。頭頂骨・左側頭骨・後頭骨左側が残存する。左外耳孔が残るが、乳様突起は残っていない。ラムダ縫合の融合状況から成人と推測されるが、性別は不明である。人骨出土位置周辺からは、第82図12の石製硯、第82図10の土師質鍋の他、土師質小皿が多く出土している。周辺には堅堀よりも古い墓坑と考えられる長方形土坑が多数あり、人骨や周辺遺物はそれらの墓坑に埋設されていたものの可能性が高いと考えられる。

縄文時代の遺物

トレンチ及び溝覆土中層から縄文土器の破片が2点出土しているが、当該時期に比定される遺構は確認されなかった。1は単節LRに2本の撚糸r及び単節RLに2本の撚糸lを組み合わせた付加条縄文を横方向に施文する深鉢型土器の破片である。胎土に白色粒子、繊維を含み、破片上端部は腹口縁状となっている。2は、単節RLを横方向に施文する深鉢型土器の破片である。胎土には繊維を含む。いずれも、前期中葉黒浜式に比定される。

今回の調査区を含む唐沢山西麓では、縄文土器が散布している箇所が複数確認されている。旧田沼町教育委員会による栃木大沢口の調査（青木・栗田・水野2004）では、黒浜式の他に後期から晩期にかけての粗製土器が多く出土しており、唐沢山西麓に縄文時代前期及び後期から晩期にかけての集落が存在する可能性が指摘されている。



第84図 唐沢山城跡出土縄文土器

第7章 足利～岩舟間における試掘・確認調査結果

第1節 試掘・確認調査の概要

第1章で述べたとおり、北関東自動車道建設に先立ち、平成9年に栃木県教育委員会事務局文化課（以下県文化課、平成11年度より県文化財課）により実施された路線内の埋蔵文化財所在調査（以下所在調査）では、栃木・群馬県境から岩舟ジャンクションまでの間（以下岩舟～足利間）の18箇所まで埋蔵文化財の調査が必要であると判断された。その後、唐沢山城跡・西根2遺跡・小野寺城跡の3箇所が新たに確認され、最終的には21箇所が埋蔵文化財調査の調査が必要であると判断された（第1章 第1表）。これらの埋蔵文化財の調査が必要な箇所は、所在調査の結果に基づき遺跡の存在及び範囲が特定できる箇所については「本調査（発掘調査）」、遺跡の存在は判断できるが、その範囲が明確に把握できない箇所については「確認調査」、所在調査のみでは遺跡の存在を判断できない箇所については「試掘調査」の3段階に区分し、平成14年度から平成19年度にかけて順次調査を行った。

試掘及び確認調査では、北関東自動車道建設路線内の該当箇所について、地形や土地の形状に合わせて適宜トレンチを設定し、遺構が確認できる面（主としてローム土層）もしくは基礎層（礎層もしくは砂礫層）まで重機で掘り下げた後、トレンチ内を人力で清掃して遺構確認と基本土層の観察、図面と写真での記録を行うことを基本とした。調査後は、県文化財課による現地及び記録の確認と合わせ、その後の調査対応について協議を行った。

その結果、調査が必要とされた21箇所のうち11箇所が本調査（発掘調査）の対象となり、残りの10箇所については本調査の必要はなく、「慎重工事」の扱いとされた。本章では、本調査の必要が無いと判断された10箇所について、その調査結果を報告する。本調査に至った11遺跡については、各遺跡の本調査（発掘調査）と合わせてその結果を報告しているため、各遺跡の報告書を参照されたい。また、試掘・確認調査を実施した遺跡の一覧は第1章第1表に示した。なお、下都賀郡岩舟町に所在する小野寺城跡における確認調査については平成21年度に西根2遺跡と合わせて既に報告済みであるため、ここでは扱わない。

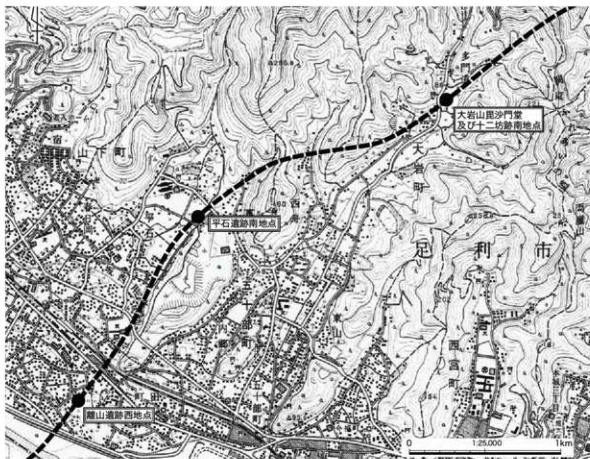
各遺跡とも路線内での試掘トレンチ位置図及びトレンチ内における土層堆積状況の概念図（柱状図）を掲載し、出土遺物や表採遺物がある場合は合わせて掲載した。なお、土層堆積柱状図は現地表面からの相対的な深さを示すものであり、絶対高を示したものではない。また、土層注記については、各調査担当者の記録をそのまま掲載しており、各遺跡間で統一はしていない。

なお、周知の埋蔵文化財包蔵地であった行屋遺跡・塩坂遺跡、周知の埋蔵文化財包蔵地の周辺地として扱った平石遺跡以外については、年報等で遺跡名を（仮称）として公表しているが、今回の試掘・確認調査及びそれに先立つ所在調査の成果を基に足利市教育委員会・佐野市教育委員会と協議した結果、遺物が出土、またはその散布が確認できた箇所については調査時の遺跡名を踏襲し、遺物が確認できなかった、あるいは散布量が極僅かだった箇所については、本書のとおり名称の変更を行った。

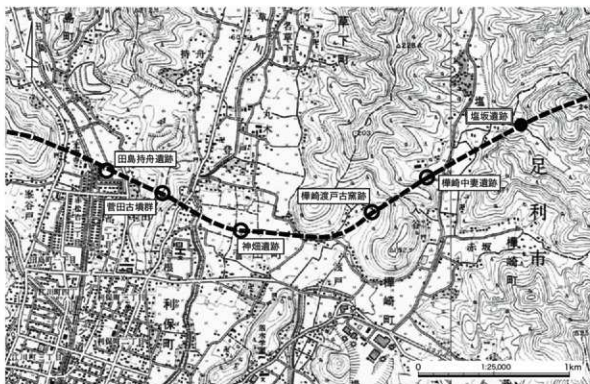
第2節 足利市域における試掘・確認調査

1. 離山遺跡西地点（旧「山前遺跡」）

離山遺跡西地点（第87～89図）は、足利市鹿島町山前地内に位置する。離山遺跡（県遺跡番号4951・足利市遺跡番号131）が路線にかかり、さらに現地で墓地を造成した際に縄文土器が出土したとの情報があったため、所在調査時に現況を確認した。その結果、離山遺跡が位置する丘陵西側の崖面（岩盤層）が路線に



第85図 足利市域における試掘・確認調査箇所（1）

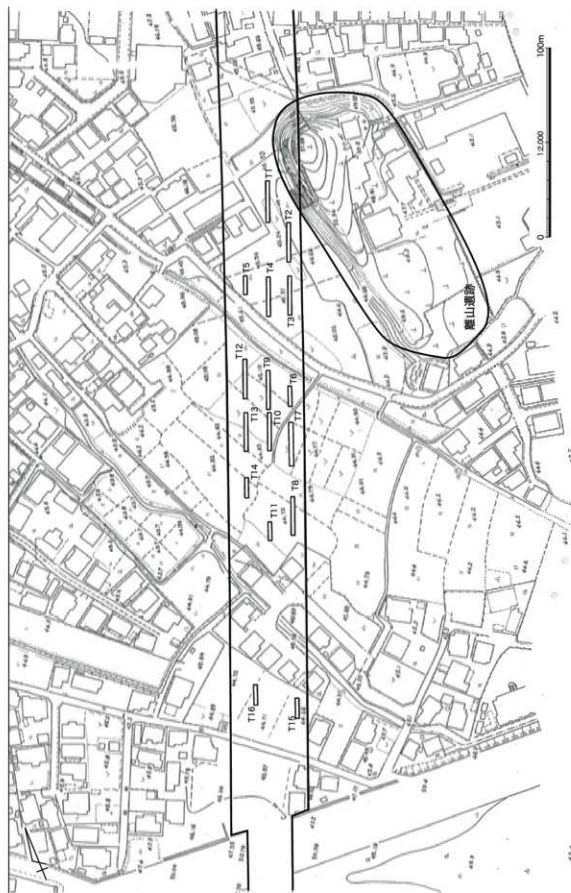


第86図 足利市域における試掘・確認調査箇所（2）

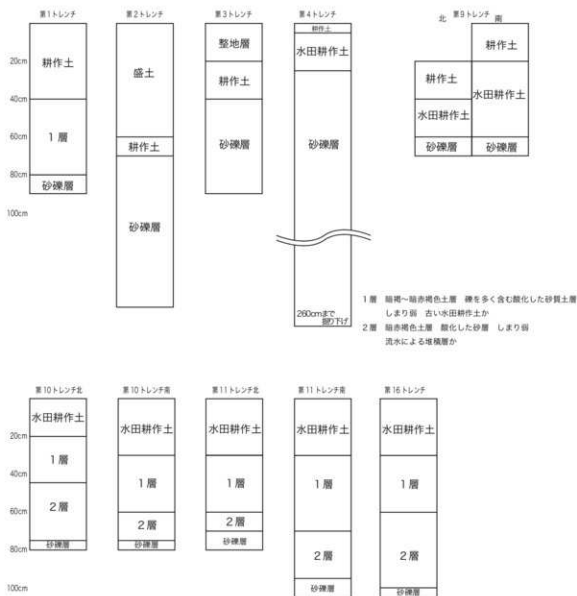
かかるのみであったが、路線南東に所在する寺院が中世期の創建とされることから、中世寺院に関する遺構の有無を確認するために路線内の低地部分の試掘調査を実施することとなった。発掘対象面積は4,300㎡である。試掘調査は、平成15年1月6日から1月31日まで実施した。対象地区内に、路線と並行して幅2m・長さ10mもしくは20mのトレンチを16本設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げを行った後、遺構が確認されなかったトレンチは基盤層である砂礫層まで掘り下げた。その結果、第1～第5トレンチでは、15cm程度の厚みの耕作土の直下に60～70cmのチャート礫混じりの埋め立て層が確認された



第87図 離山遺跡西地点及び平石遺跡南地点位置図（足利市遺跡地図1989を改変）



第88図 麓山遺跡西地点 周辺地形と試掘トレンチ位置

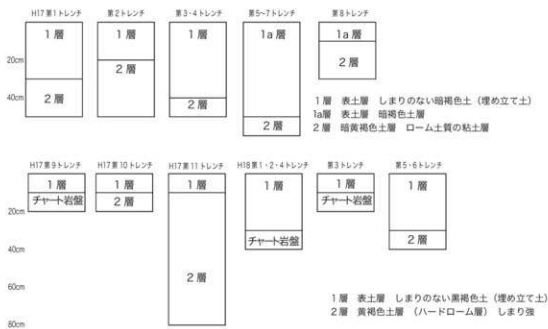
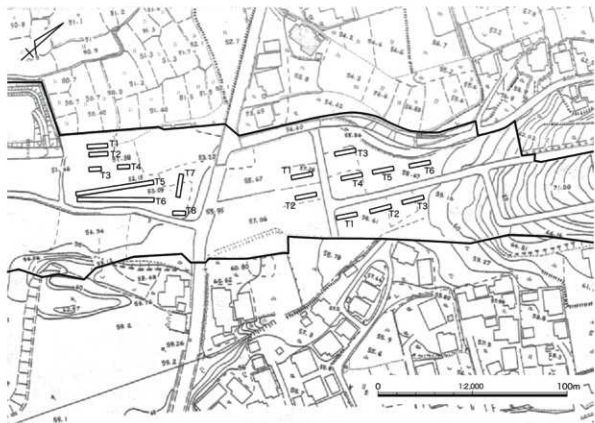


第89図 離山遺跡西地点 試掘トレンチ土層柱状図

が、水田造成時の整地層であると考えられる。その下にさらに20cm程度の耕作土を挟んで基盤層である砂礫層となった。いずれの層内でも、遺構・遺物は確認されなかった。第8トレンチを除く第6～第16トレンチでは、15cm程度の耕作土の直下が砂礫層となり、遺構・遺物は確認されなかった。第8トレンチでは、15cm程度の水田耕作土と砂礫層の間に、砂質粘土層が堆積していた。この層内に水田遺構が残る可能性を考え断面を観察したが、テフラ層などを含め遺構・遺物は確認されなかった。以上の結果により本調査は行わないこととし、離山遺跡西地点の調査を終了した。

2. 平石遺跡南地点 (旧「平石遺跡 (周辺地)」)

平石南地点遺跡 (第87・90図) は足利市山下町に位置する。所在調査の際に遺物の散布は認められなかったが、中世寺院跡である智光寺跡 (県遺跡番号 4957・足利市遺跡番号 99) や、縄文時代の集落跡である平石遺跡 (県遺跡番号 4956・足利市遺跡番号 97) が隣接するため、試掘調査を実施することとなっ

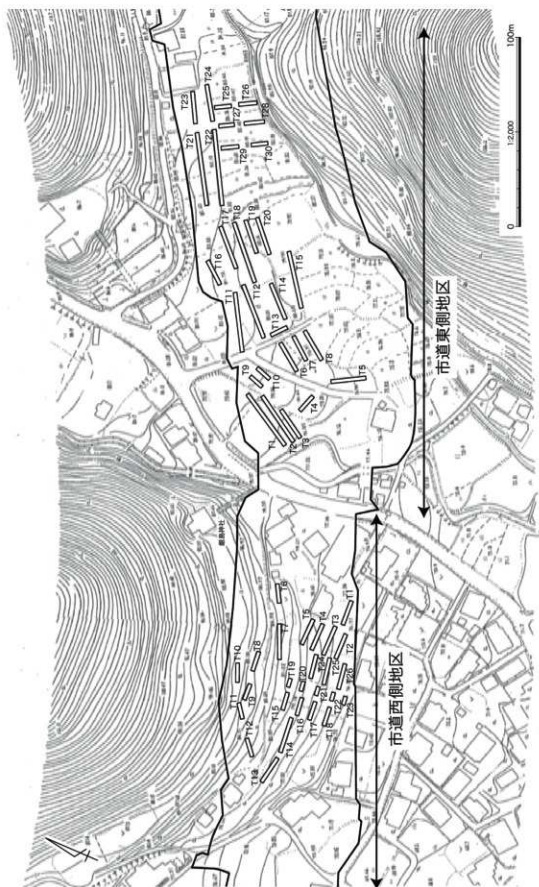


第90図 平石遺跡南地点 周辺地形と試掘トレンチ位置図及び土層柱状図



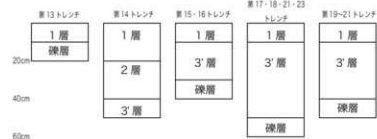
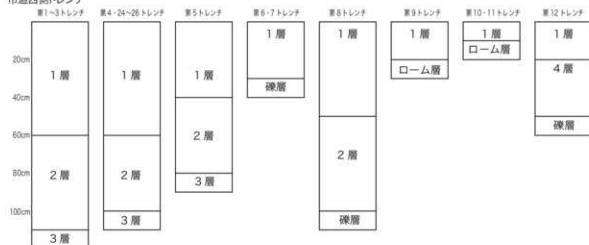
第91図 大岩山毘沙門堂及び十二坊跡南地点位置図（足利市遺跡地図1989を改変）

た。発掘対象面積は、当初の発掘対象面積 11,700㎡のうち、未収去家屋や用地引き渡し未了箇所などを除く 6,300㎡である。試掘調査は用地取得状況に合わせ、平成 17 年 10 月 24 日～28 日、12 月 8 日、平成 18 年 8 月 2 日の 3 回にかけて実施した。平成 17 年度調査区のうち、10 月の調査では調査区を横切る市道の南側全域と、北側の一部に、地形及び土地形状に合わせて幅 1m、長さ 5～40m のトレンチ 8 本を設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げを行った。市道の北側では、宅地造成により 1～4m の削平が行われており、チャート岩盤が露出していた。また、宅地のコンクリート基礎等による攪乱が著しかったため、トレンチ調査は実施しなかった。市道の南側では、第 1～8 トレンチを設定して掘り下げを行ったところ、第 1～4 トレンチでは、地表面から 20～40cm の厚さで宅地造成時の埋め立て土と考えられる表土層が堆積し、その下に粘土質の暗黄褐色ローム土層が確認された。第 5～7 トレンチでは地表面から約 50cm、第 8 トレンチでは地表面から約 10cm の厚さの表土層が堆積し、その下に粘土質の暗黄褐色ローム土層が確認された。いずれのトレンチでも遺構・遺物共に確認されなかった。平成 17 年 12 月の調査では、市道北側の調査未了箇所のうち東半分の 1,100㎡を調査した。対象地区の中央に幅 2m、長さ 10m のトレ



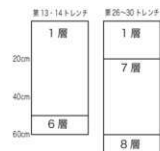
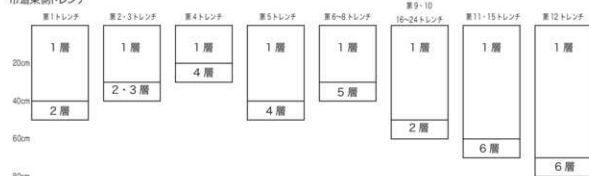
第92図 大岩山趾砂門堂及び十二坊跡南地点 周辺地形と試掘トレンチ位置図

市道西側トレンチ



- 1層 表土層 暗褐色土層 チャート小礫を多量に含む しまり弱
 2層 暗褐色土層 チャート小礫を多量に含む しまり強
 3層 暗褐色土層 2層に類似するが、より粘土質の層
 3'層 暗褐色土層 3層に黄褐色ローム粒子を含む

市道東側トレンチ



- 1層 表土層 暗褐色土層 しまり弱
 2層 暗褐色土層 黄褐色粘土粒子・チャート礫を多量に含む 粘性強
 3層 砂礫層 砂質で多量の石・砂が主体
 4層 ローム層
 5層 黄白色土層 ローム質の砂礫層
 6層 茶褐色土層 ローム土・礫を多量に含む 粘性強
 7層 黒褐色土層 砂状 明確なテフラ層はない
 8層 粘土層 黒灰色～黄白色の粘土主体

第93図 大岩山毘沙門堂及び十二坊跡南地点 試掘トレンチ土層柱状図

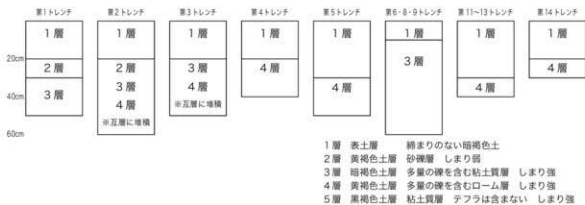
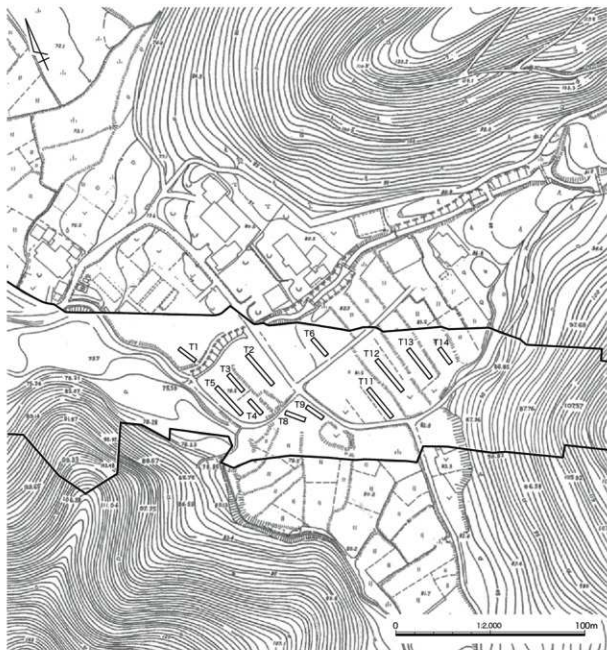
ンチ3本を設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げを行った。その結果、いずれのトレンチでも10月の調査で確認された宅地造成時の埋め立て土が約10cm堆積し、その直下に第9トレンチではチャート岩盤、第10・11トレンチでは黄褐色土ローム層が確認された。第10・11トレンチで確認されたローム土層は上面を大幅に削平されており、第9トレンチも合わせていずれのトレンチでも遺構・遺物共に確認されなかった。平成18年度は、市道北側の調査未了箇所のうち、用地引き渡し完了していない部分を除く2,400㎡について調査を行った。対象地区の地形及び土地形状に合わせて幅2m、長さ10mのトレンチを6本設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げを行った。その結果、第1～4トレンチでは、厚さ5～30cmの埋め立て土の直下にチャート岩盤が確認された。第5・6トレンチでは、厚さ30cmの埋め立て土の直下に黄褐色ローム土層（チャート岩盤直上ハードローム層）が確認されたが、前年度の調査地区同様、上面を大幅に削平されていた。いずれのトレンチでも遺物・遺構とも確認されなかった。以上の結果により、未収容箇所を含めて本調査は行わないこととし、平石遺跡南地点の調査を終了した。

3. 大岩山毘沙門堂及び十二坊跡南地点（旧「厳島神社南遺跡」）

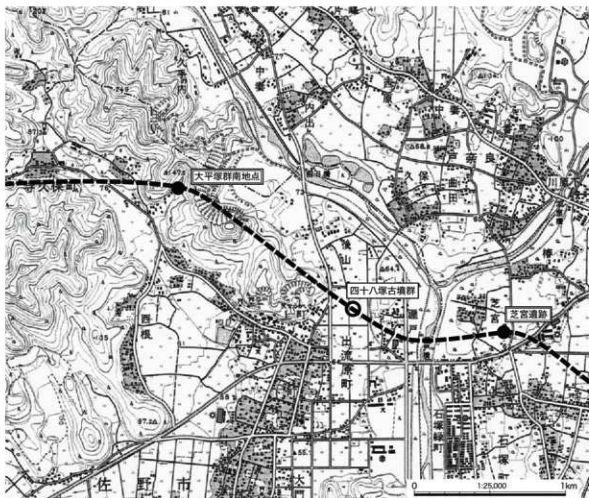
大岩山毘沙門堂及び十二坊跡南地点（第91・92図）は、足利市大岩町山平地内に位置する。所在調査の際に、南向きの微高地上で少量の時期不明の土器片が、ごく少量ではあるが散布している状況が確認された。また、大岩山毘沙門堂十二坊の一つである「醍醐坊」及び「高僧寺」（廃寺）の推定地に隣接するため、試掘調査を実施することとなった。発掘対象面積は、当初の発掘対象面積20,400㎡のうち、未収去家屋や用地引き渡し未了箇所などを除く19,845㎡である。試掘調査は、平成18年1月10日から1月24日に実施した。対象地区内を横切る市道を境に東西2地区に分け、地形及び土地形状にあわせて幅1m、長さ5～40mのトレンチを市道西側に26本、東側に30本設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げを行った。遺構が確認できないトレンチについては、礫層または旧河道と考えられる小礫を多量に含む層まで掘り下げを行った。市道西側地区は山裾の急傾斜面であり、現況で平坦となっている畑地も山裾を削り出して造成されていることが確認された。また、斜面の下方には山砂と考えられる多量の土砂が堆積していた。トレンチ内では、第9～11トレンチの丘陵上部にあたる部分にローム土層が僅かに残るのみで、遺物・遺構共に確認されなかった。市道東側地区は大部分が大きな沢地の中にあたり、現況で畑地となっていた部分には、とことろ鳥状に低台地が存在しローム土層が確認できたが、全体としてはごく僅かな部分であった。トレンチ内では不整形の掘り込みがいくつか確認されたが、いずれも現代の耕作に伴う攪乱と判断され、その他には遺物・遺構共に確認されなかった。現況で水田となっていた部分では、湧水の少ない部分を選んでトレンチを設定し掘り下げたが、明確なテフラ層や遺構・遺物は確認されなかった。また、調査区周辺で現地表面の踏査を行ったが、遺物は全く確認されなかった。以上の結果により本調査は行わないこととし、大岩山毘沙門堂及び十二坊跡南地点の調査を終了した。

4. 塩坂遺跡

塩坂遺跡（県遺跡番号5251・足利市遺跡番号82 第94図）は、足利市榊崎町に所在する。所在調査の際に遺物の散布は認められなかったが、周知の埋蔵文化財包蔵地にあたるため、確認調査を実施することとなった。発掘対象面積は、当初の発掘対象面積13,000㎡のうち、未収去家屋や用地引き渡し未了箇所など調査不能の箇所を除く7,350㎡である。確認調査は、平成18年2月20日から2月28日まで実施した。対象地区内に、地形及び土地形状にあわせて幅1m、長さ10もしくは20mのトレンチを12本設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げを行った。その結果、調査区の大半は大きな沢地の中にあたり、第11～14トレンチを設定した山裾に近い部分は、地表面から深さ20～30cmで第1～第9トレンチ（第7・10トレンチは欠番）では、地表面から深さ50～60cmで黄褐色ローム土層に達した。地表面から黄褐色ローム



第94図 塩坂遺跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図及び土層柱状図



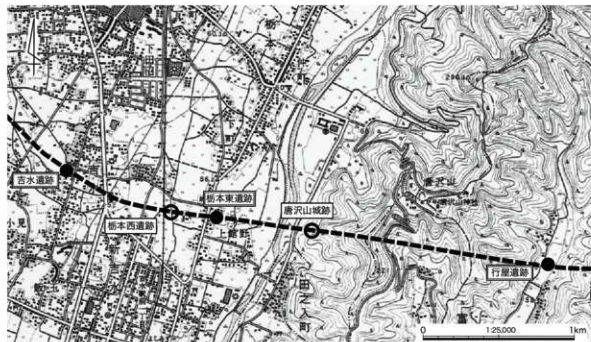
第95図 佐野市域における試掘・確認調査箇所(1)

ム土層の間には、砂礫層やチャート礫を多量に含む粘土層が薄く堆積していたが、いずれのトレンチでも遺構・遺物は確認されなかった。第11～14トレンチでは、地表面から約30cmで黄褐色ローム土層に達したが、ローム土層自体が水田造成時に大きく削平されており、遺構確認面も失われている状況であった。なお、調査区を横切る市道は塩坂峠へ至る古道とされているが、市道脇のトレンチで遺構は確認されなかった。以上の結果により本調査は行わないこととし、塩坂遺跡の調査を終了した。

第3節 佐野市域の試掘・確認調査

1. 大平塚群南地点(旧「大平遺跡」)

大平塚群南地点(第97・98図)は佐野市寺久保町域内に位置する。所在調査の際に遺物の散布は認められなかったが、中世の塚と考えられている大平塚群(県遺跡番号5365・佐野市遺跡番号230～233)、及び縄文時代の遺跡である八木田遺跡(県遺跡番号5364・佐野市遺跡番号なし)の隣接地となるため、試掘調査を実施することとなった。調査対象面積は7,400㎡である。試掘調査は、平成20年3月4日に実施した。未収去家屋部分を除外した対象地区内に、地形や土地形状にあわせて幅1m、長さ15～30mのトレンチを6本設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げた。その結果、対象地区は家屋基礎造成時の土取りにより大幅に削平されていることが確認された。第1～4トレンチでは表土層が50～70cm堆積し、その下に旧表土層と判断した黒褐色土層が30～40cm堆積していた。さらにその下に、第1・2トレ



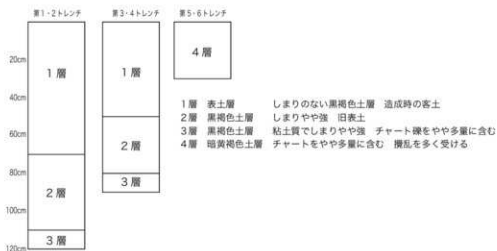
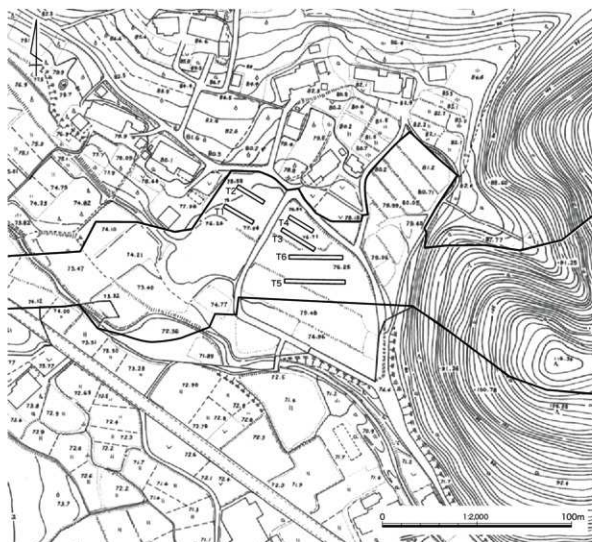
第96図 佐野市域における試掘・確認調査箇所(2)

ンチではチャート礫を多く含む粘土質の黒褐色土層が確認された。旧地権者への聞き取りによれば、第1・2トレンチを設定した畑地は土取り後に客土により埋め立てたとのことであった。一方、第3・4トレンチを設定した箇所は土取りが及んでおらず、表土層の下にチャート礫を多く含む攪乱の多い暗黄褐色ローム土層が確認された。第5・6トレンチを設定した箇所は土取りによる攪乱が最も激しい部分で、現地表面からチャート礫を多く含む暗褐色ローム土層が確認され、上面が大幅に削平されているものと判断された。第1～6トレンチのいずれでも遺構・遺物は確認されなかった。以上の結果により本調査は行わないこととし、大平塚群南地点の発掘調査を終了した。

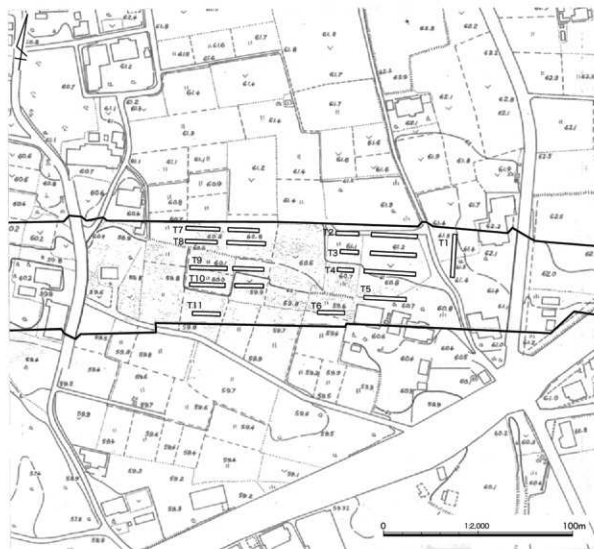
第97図 大平塚群南地点位置図
(佐野市遺跡地図1990を改変)

2. 芝宮南遺跡(旧「芝宮遺跡」)

芝宮南遺跡(第99・100図)は佐野市田沼町戸奈良に所在する。所在調査の際に、沖積地内に存在する南向きの微高地上で少量の時期不明の土器片が散布している状況が確認されたため、試掘調査を実施することとなった。発掘対象面積は8,200m²である。試掘調査は平成15年11月17日から21日まで実施した。対象地区内に、路線と並行して幅2m・長さ40m前後のトレンチを10本、対象地区の東端に路線に直行するトレンチを1本設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げを行った後、人力による精査を行った。その結果、対象地区全域で現地表面から60cm～80cm下で二次堆積と考えられる砂質ローム土層、その直下に礫層が検出され、いずれのトレンチ内でも遺構・遺物が検出されなかった。以上の結果により本



第98図 大平塚群南地点 周辺地形と試掘トレンチ位置図及び土層柱状図



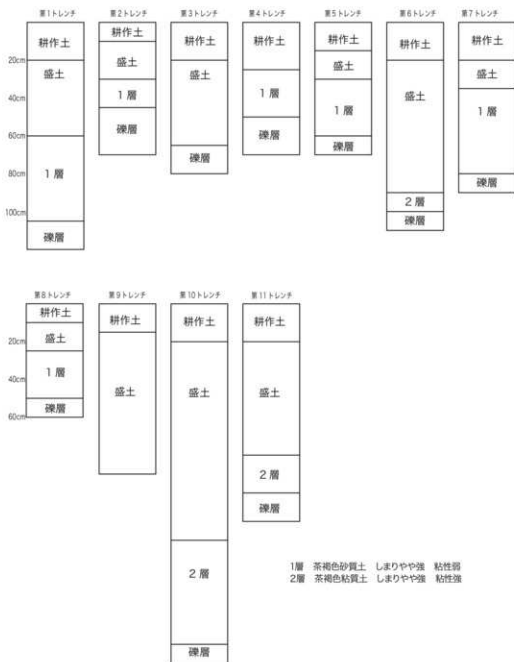
第99図 芝宮南遺跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図

調査は行わないこととし、芝宮南遺跡の調査を終了した。なお、調査時には「芝宮遺跡」と仮称していたが、本報告書作成作業時に、調査地点の北側約500mの地点に既存の「芝宮遺跡」（県遺跡番号5073）が存在することを確認したため、調査地点については「芝宮南遺跡」に名称を変更した。

3. 吉水遺跡

吉水遺跡（第101・103図）は佐野市田沼町吉水地内に所在する。所在調査の際に、沖積地内に存在する微高地上で少量の縄文土器・土師器片が散布している状況が確認されたため、試掘調査を実施することとなった。発掘対象面積は5,500㎡である。試掘調査は、平成15年2月3日から2月28日まで実施した。対象地区内に、路線と並行して幅2m・長さ10mから30mのトレンチを14本設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げを行った後、人力による精査を行った。その結果、黒色土（耕作土）直下に暗赤褐色粘土層が堆積し、その下が二次堆積と考えられる砂質ローム土層となる箇所と、暗赤褐色粘土層が無くローム土層が露出する箇所が確認された。地元住民への聞き取りによれば、対象地区周辺では縄文時代の石皿などが表採されているが、互用の粘土採掘が江戸時代から行われており、黒色土（耕作土）下の粘土（ローム土層上面に堆積する暗赤褐色粘土）を30cmから1m程度の深さまで採掘を行った後に黒色土を埋め戻

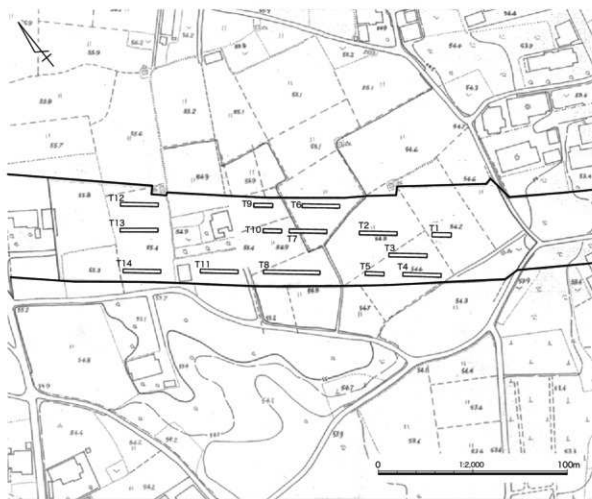
第7章 足利～岩舟間における試掘・確認調査



第100図 芝宮南遺跡 土層柱状図

して整地している箇所があるとのことだった。よって、黒色土は客土であり、遺構がある場合は粘土層上面で確認されると判断し、この土層を中心に精査を行った。その結果、第8トレンチの粘土層中から縄文土器片（前期黒浜式 第103図1・2）が3点出土した。また、第13トレンチの攪乱土層中からも縄文土器片（後期堀之内式 第103図3）が出土した。土器片の出土地点周辺でさらに精査を行ったが、遺構は確認されなかった。いずれの土器片も小片で摩滅が著しく、遺構に伴わないことから、これらの遺物は河川による土層の再堆積によって運ばれたものと判断された。以上の結果により本調査は行わないこととし、吉水遺跡の調査を終了した。

出土した縄文土器片は、第103図に図示した。1は胎土に繊維を含む深鉢形土器の破片で、表面が摩滅



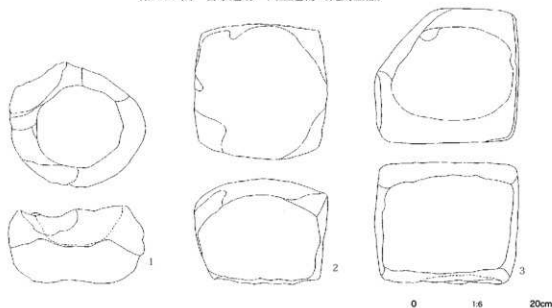
1層 暗赤褐色ローム土層 上面は整地により不整合面となる。しまり層 粘性極強
 1'層 1層よりもさらに赤黒い色調の粘土質ローム土層 現代の互製作に使用される粘土

第101図 吉水遺跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図及び土層柱状図





第103図 吉水遺跡 出土遺物(縄文土器)



第104図 栃本東遺跡 調査区内表採遺物

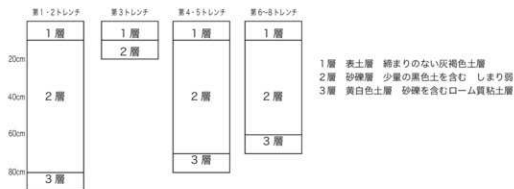
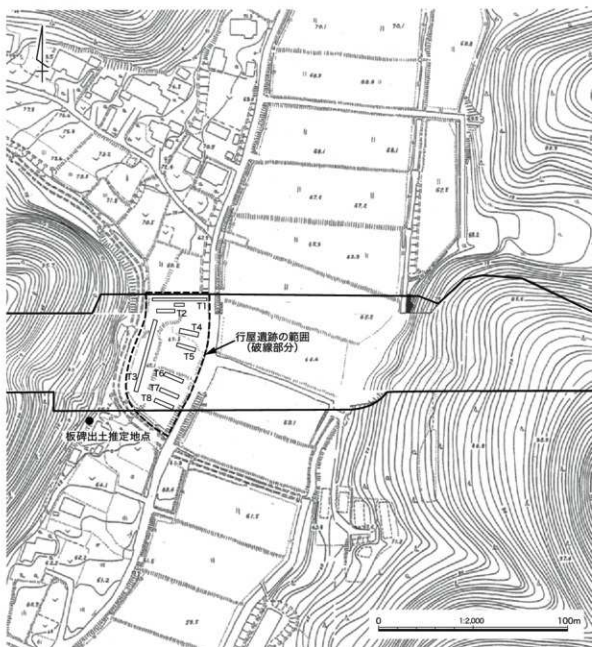
第33表 栃本東遺跡 調査区内表採遺物観察表

番号/種類・材質	大きさ (cm)・重量 (g)	特徴	色調/胎土/焼成	残存状態/その他	注記
第104図 1 五輪塔(水輪)	長軸 21.2 短軸 20.8 高 12.5 重 7.500	全体的にかけた部分が多く、断面形状は扁平な楕円状。中央が大きく凹み、タール状の付着物が認められる。	-	安山岩	調査区内表採
第104図 2 五輪塔(地輪)	長軸 21.5 短軸 20.6 高 13.5 重 7.650	上面が弧状に大きく膨らみ、断面形状は下に向かって細くなり、側面は4面とも中ほどで緩く膨らむ。底面は水平。	-	安山岩	調査区内表採
第104図 3 五輪塔(地輪)	長軸 21.1 短軸 19.0 高 12.7 重 5.400	上面が緩やかに膨らみ、断面形状は長方形に近い。側面は4面ともほぼ垂直だが、中ほどで僅かに膨らむ。底面は中央を浅く掘り凹めて水平にしている。	-	安山岩	調査区内表採

しているため文様は不明である。2は、胎土に繊維を含む深鉢形土器の破片で、単節LRを縦方向に施文し、半截竹管腹面による押し文を2列施文する。破片上部は擬口縁状となる。3は沈線による帯状のモチーフを持つ深鉢形土器の破片で、表面の剥落が著しいため地文は不明である。1・2は前期中葉黒沢式、3は後期前葉堀之内式に比定される。

4. 栃本東遺跡

栃本東遺跡(第102・104図)は、佐野市栃本町地内に所在する。所在調査の際に、沖積地内に存在する微高地上で少量の土器及び陶器片が散布している状況が確認されたため、試掘調査を実施することとなった。発掘対象面積は10,600㎡である。試掘調査は、平成17年7月25日から7月29日まで実施した。対



第105図 行屋遺跡 周辺地形と試掘トレンチ位置図及び土層柱状図

象地区区内に、北関東自動車道の路線に平行する方向で幅2m、長さ20～40mのトレンチ15本を設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げを行った。その結果、調査区北西に設定した第1～3トレンチでは、約40cmの表土層の下に、小礫を含む淡褐色の粘土質土層が確認された。このうち、第3トレンチの一部で160cmの深さまで掘り下げたところ、約20cm厚の粘土質土層の下に、約50cm厚の小礫を含む褐色の二次堆積ローム土層が確認された。さらにその下部には、明黄褐色のローム土層が確認された。その他のトレンチでは、表土層の下に20～50cm厚の再堆積ローム土層、さらにその下に褐灰色の砂礫層が確認された。現地表面から砂礫層までの深さは、約60cm～80cmである。よって、第1～3トレンチを設定した北西部分は沖積地内に残る微高地であり、その箇所を除く調査区の大部分は秋山川の旧河床と判断された。第2・3トレンチでは時期不明の土師質土器片及び陶器片が少量出土したが遺構は確認されなかったため、これらの遺物は河川による土層の再堆積によって運ばれたものと判断された。その他のトレンチでは遺物・遺構共に確認されなかった。以上の結果により本調査は行わないこととし、栃本東遺跡の調査を終了した。

栃本東遺跡では、試掘調査に先立って調査区内で五輪塔が採集されている。第105図1は水輪で、唐沢山城跡から出土しているもの(第82図15)と同じく内面が碗状に大きく抉られている。側面はそろばん玉状を呈すると思われるが、欠け部分が多く不明である。第105図2・3は地輪で、2は上側が著しく丸味を帯び、側面のラインがやや内傾する。3は上面が浅い皿状に窪み、側面のラインはほぼ垂直となる。2・3も、15世紀末以降に現れる形態であるが、安山岩製であることから、五輪塔の大量生産・流通が始まった16世紀後半以降に比定されよう。

5. 行屋遺跡

行屋遺跡(県遺跡番号5238・佐野市遺跡番号96 第105図)は、佐野市富士町大富士地内に所在する。唐沢山東麓の山裾部分に位置し、周辺で板碑が採集されている(佐野市教育委員会1990)。所在調査では遺物の散布は認められなかったが、周知の埋蔵文化財包蔵地内のため確認調査を実施することとなった。発掘対象面積は2,100m²である。確認調査は、平成17年11月1日から11月11日まで実施した。対象地区内には一部家屋のコンクリート基礎が残っていたため、その部分を避けて幅2m、長さ10～40mのトレンチ8本を設定し、重機により遺構が確認できる面まで掘り下げを行った。その結果、約10cmの表土層の直下に50～60cmの砂礫層が確認され、更にその下部には砂礫混じりのローム質黄白色粘土層が確認された。粘土層の上面は山の斜面に沿って傾斜しており、砂礫層はその上面に堆積した山砂と考えられ、元は唐沢山の小支谷内に土砂が堆積していたところを、上面を平坦に削平して平地に改変したものと判断された。第1トレンチ及びその南側のサブトレンチでは、粘土層上面から50cm程度下がる人為的な掘り込みが確認されたが、平面形が不整かつ掘方が直線的であることから、土地改変に伴う重機の掘削痕と判断した。いずれのトレンチでも、その他に遺物・遺構は確認されなかった。以上の結果により本調査は行わないこととし、行屋遺跡の調査を終了した。

第8章 調査の成果

本書に収められた各遺跡の調査成果については各章の第1節で「調査の概要」として適宜ふれているため、ここでは榊崎渡戸古窯跡及び栃木西遺跡の遺物年代を中心に、本文の記載を補足する形で調査成果のまとめとしたい。

1. 榊崎渡戸古窯跡出土須恵器の様相と年代

榊崎渡戸古窯跡の調査で出土した須恵器は、中型バンケース約30箱にのぼる。器種は蓋環、高環、こね鉢、瓶類（提瓶・フラスコ瓶・平瓶・横瓶他）、壺類（長頸壺・短頸壺他）、甕があり、中でも横瓶と甕の出土量が多い。時間的制約により、出土器種を定量的に把握することはできなかったが、器種による破片の大きさの差を考慮に入れても、甕と横瓶の出土が目立って多い。

窯跡の時期を考えるにあたっては、蓋環の編年の位置が指標となる。出土した蓋環はいずれも奈良文化財研究所分類の環Hであり、環Gは1点も出土していない。環蓋は口縁部と天体部境の稜が鈍く、坯身は短めの口縁部が内傾し、口唇部の立ち上がりの引き上げが鋭くなっている。これらの特徴は、陶邑窯跡群出土のTK209型式が持つ特徴に近い（田辺1966・西1986）が、法量を見ると、環蓋が口径12～13cm・高さ3.6～4.1cmの間、坯身が口径10.7～10.9cm・高さ3.8～4.1cmの間と、TK209型式に比べて小さい値を示しており、時期が下るにつれ口径が矮小化するとされる環Hの特徴から、より新しい時期のものであると考えられる。一方で、TK209型式に続くTK217型式を特徴づける環Gが1点も出土していないことから、TK217型式よりも古い時期である可能性が高い。よって、当古窯跡から出土した須恵器はTK209型式直後段階の所産と判断され、年代を7世紀初頭から前半に位置づけることができよう。蓋環以外の器種でも、定形的な提瓶がほとんど見られず卵形やフラスコ瓶に近い形のものになる点や、有蓋高環が出土しないといった点からも、この年代観は違和感はないと考える。なお、灰原から出土した炭化材3点について、ウィグルマッチング法により放射性炭素年代を測定したところ、1点のみ編年による年代観に近い7世紀前半から中葉の年代を示している（付章第2節参照）。

県内において古墳時代の操業が確実とされている窯跡としては、足利市馬坂古窯跡・田島岡古窯跡、益子町南高岡窯跡群がある。馬坂古窯跡は榊崎渡戸古窯跡から南東約1kmの地点に所在し、宅地造成や圃場整備事業に際して灰原や土坑状の掘り込みが発見されている。概観には、出土遺物として7世紀初頭の須恵器坯身・環蓋が1点ずつと、内面黒色処理の施される土師器環が1点掲載されている（前澤他1989）。このうち坯身については、形態や法量が榊崎渡戸古窯跡出土坯身とほぼ同じだが、環蓋は口径17.2cm、高さ4.1cmと榊崎渡戸古窯跡のものとは比べて大きく、口縁部と天井部の境に明瞭な稜を持つなどの古い様相を呈する。田島岡古窯跡は、榊崎渡戸古窯跡の北西約3kmの地点にあり、北之沢支群の北之沢第1号窯が古墳時代後期の操業とされている（足利市教育委員会2000）。図示された出土遺物は破片が中心だが、報告者により7世紀中葉の年代が示されている。以上の調査成果から、足利北部丘陵地帯における須恵器生産の開始は7世紀初頭にはまだ確実にはさかのぼり、その後、足利北部丘陵内の小支谷を比較的短期間で転々としながら、生産を継続していたと想定される。

古墳時代後期の北関東では、群馬県域を中心として「北関東型須恵器」と呼ばれる在産須恵器が継続して生産される（酒井1988他）。栃木県内でも北関東型須恵器が多数出土しており、榊崎渡戸古窯跡自体も、6世紀後半から一大生産地として操業されている太田市金山丘陵窯跡群と直線距離にして約10kmという至近距離にあることから、北関東型須恵器生産の影響を受ける環境にあったと考えられる。しかし、北関東型須恵器の特徴とされる八の字状口縁を有する環蓋や、長脚1段透かしが継続する高環、補強帯を有する甕

などは榊崎渡戸古窯跡ではほとんど見られず、特に蓋環は薄手で作りの良いもので占められるなどの点で、北関東型須恵器を主体的に生産する金山丘陵窯跡群とは異なり、須恵器生産の先進地域である畿内・東海の強い影響が認められる。一方で、口縁部に斜行文を持つ大型甕やタマゴ形の提瓶・フラスコ瓶、透かしを持たない高坏の存在などは、同時に在地特有の須恵器生産が行われていたことを示すものと言える。今回の調査は灰原の一部を調査したに過ぎず、窯本体も発見されていないため、技術の系譜や工人の編成を詳細に論じることはできないが、榊崎渡戸古窯跡の出土資料の様相の背景には、畿内や東海などの先進地域からの工人による技術指導をベースとして、在地工人の育成を目指す生産体制があった可能性を指摘できる。

なお現時点では、確実に榊崎渡戸古窯跡産と比定できる資料が周辺の遺跡から出土した例は確認されていない。本報告では、榊崎渡戸古窯跡出土資料の胎土分析を行い、合わせて榊崎渡戸古窯跡から西へ約1.4kmの地点にある菅田古墳群で出土した須恵器片の胎土と比較したが、胎土の特徴は一致しなかった（付章第4節参照）。今後、周辺遺跡における事例の増加を待ちながら、榊崎渡戸古窯跡で生産された須恵器がどのように流通したのか、また周辺で確認されている馬坂・田島岡両古窯跡との関係性についても、さらに検討していく必要があるだろう。

2. 栃本西遺跡出土遺物の年代と集落の様相

栃本西遺跡の調査では、平安時代の竪穴住居跡3軒、溝跡1条、土坑3基が確認された。このうち、少ないながらも最も遺物がまとまっているのはSI-01 竪穴住居跡である（第59図）。年代の指標となる灰釉陶器は小片のため確定はできないが、その特徴から美濃・折戸53号窯式に併行すると考えられ、およそ10世紀中葉～後葉に比定されよう。この年代観は、供膳具において高めでハの字に開く高台を有する土師器碗（第59図2～5）が主体となる点や、土師器甕が厚手で粗雑なもので占められる点、出土土器の中に須恵器が全く見られない点とも矛盾しない。

SI-01以外の竪穴住居跡や土坑では器形が復元できる遺物が少なく時期比定は難しいが、出土土器片にはSI-01と同様の特徴が見られることや、覆土の特徴や堆積状況がSI-01とよく似ていることから、10世紀代の所産と考えられる。SD-02については須恵器が1点のみ伴い、覆土も竪穴住居跡とは異なる特徴を持っているが、中世の遺物が全く含まれていないことから、住居跡に近い年代に機能していたものと推定される。

栃本西遺跡が立地する田沼扇状地では、古墳時代後期以降、低地内に残された島状の微高地上に集落が点在する状況にある。発掘調査が行われた代表的な例としては、栃本西遺跡の南西約2kmの寺之後遺跡があげられる。寺之後遺跡では、昭和54年度、平成11年度、平成22年度の3回にわたる発掘調査が行われ、6世紀後半から10世紀中葉までの竪穴住居跡58軒などが確認されている（齋藤他1982・茂木2001）。今回調査された栃本西遺跡の集落は、この寺之後遺跡の集落が終焉を迎える時期に成立したと想定される。また、寺之後遺跡では、長期間にわたり竪穴住居が比較的狭い範囲に重なり合って作られており、短期間に作られた住居が点在する栃本西遺跡の様相とは大きく異なっている。

栃本西遺跡の集落が営まれた10世紀中葉から後葉は、遺跡周辺に居住地の伝承が数多く残る藤原秀郷が、平将門の反乱（承平・天慶の乱）を鎮圧した時期であり、同時に武士の台頭が始まった時期にあたる。栃本西遺跡の集落はこのような社会の変革期の中で営まれていたと想定され、それまでの集落とは大きく異なる様相も、これらの社会変化に集落のあり方が影響を受けた結果である可能性が考えられよう。

第8章 調査の成果

主要参考文献

- 青木健一・栗田敏行・水野順敏 2004 『唐沢山城跡Ⅳ』日本楽業史研究所
 浅野晴博 1989 『東国における中世在地系土器について—主に関東を中心として—』『国立歴史民族博物館研究報告』第31集
 足利市文化財総合調査団・足利市教育委員会 1981 『年報Ⅰ』足利市文化財総合調査昭和55年度
 足利市文化財総合調査団・足利市教育委員会 1982 『年報Ⅱ』足利市文化財総合調査昭和56年度
 足利市教育委員会 1989 『足利市道跡地図』
 足利市教育委員会 1989 『足利市文化財総合調査 総括報告書』
 足利市道跡調査団・足利市教育委員会 1989 『昭和63年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市埋蔵文化財調査報告第20集
 足利市教育委員会 1995 『法寺寺跡発掘調査概要』足利市埋蔵文化財調査報告第29集
 足利市教育委員会 2000 『田沼古窯跡第5次発掘調査』『平成11年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市埋蔵文化財調査報告第44集
 足利市教育委員会 2006 『馬塚古窯跡発掘調査』『平成16年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市埋蔵文化財調査報告第54集
 足利市文化財協議会 2009 『足利の礎守』
 足立佳代・斉藤和行 1993 『足利における中世瓦の一様相』『唐沢考古』12 唐沢考古会
 足立佳代 2008 『第5章 まめめ』『史跡神崎寺跡発掘調査概要Ⅱ』足利市埋蔵文化財調査報告第57集 足利市教育委員会
 瀧美智香・小野寿美子・中尾麻由実 2006 『柏崎窯跡発掘調査報告—古墳時代須恵器窯の調査—』『筑波大学 先史学・考古学研究』第17号 筑波大学人文社会科学部研究科歴史・人類学専攻
 出居 博 2008 『唐沢山城跡調査Ⅰ』佐野市文化財調査報告第15集 佐野市教育委員会
 出居 博 2009 『唐沢山城跡調査Ⅱ』佐野市文化財調査報告第20集 佐野市教育委員会
 出居 博 2010 『福城塚道跡』佐野市文化財調査報告第26集 佐野市教育委員会
 出居 博・茂木克茂・澤田直之 2010 『唐沢山城跡調査Ⅲ』佐野市文化財調査報告第28集 佐野市教育委員会
 出居 博・太田謙彦・澤田直之 2011 『唐沢山城跡調査Ⅳ』佐野市文化財調査報告第31集 佐野市教育委員会
 内山政行 1997 『律令制成立期の須恵器の系譜 栃木県』『関東の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜』古代生産史研究会
 内山政行 2001 『関東の須恵器製作技法』『古代の上器研究』古代の上器研究会第6回シンポジウム資料 古代の上器研究会
 大川清・鈴木公雄・工業書通編 1996 『日本土器事典』雄山閣出版
 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものさし—陶器の須恵器』平成17年度冬季企画展図録
 大阪府立近つ飛鳥博物館 2010 『ふたつの飛鳥の終末期古墳』平成21年度冬季特別展図録
 大澤博幸 2003 『下野国におけるかわらけの変遷—中世前半を中心として—』『栃木の考古学—堀船大先生古希記念論文集—』堀船大先生古希記念論文集Ⅰ 堀船大先生古希記念論文集Ⅰ 栃木県考古学刊行委員会
 上三川勝 2000 『唐沢山城跡Ⅲ』田沼町教育委員会
 上三川勝・茂木孝行 2001 『唐沢山城跡Ⅳ』田沼町教育委員会
 上三川勝 2001 『唐沢山城跡Ⅴ』田沼町教育委員会
 栗岡眞理子 2001 『埼玉県の中世瓦輪編年表』『研究紀要』第23号 埼玉県歴史資料館
 小森田忠 栄木 誠 1990 『真岡市根本神宮寺塚古墳出土の「磚」をめぐって—地方における須恵器生産開始期の一様相—』『古代』第89号 早稲田大学考古学会
 小島友美・山口明良 2003 『丸丸神社土器跡』佐野市埋蔵文化財調査報告第28集 佐野市教育委員会
 後藤信祐 1990 『第2章 調査の成果と問題点』『瀬ノ台道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第107集 財団法人栃木県文化振興事業団
 今平幸司 2001 『下野における中世土器類について』『栃木県考古学会誌』第22集 栃木県考古学会
 財団法人瀬ノ台埋蔵文化財センター 1999 『阿島に広がる大塚型—東日本の様相—』財団法人瀬ノ台埋蔵文化財センター企画展図録
 財団法人瀬ノ台埋蔵文化財センター 2001 『瀬ノ台大塚とその時代』財団法人瀬ノ台埋蔵文化財センター設立10周年記念企画展図録
 斎藤義二 1995 『第5章第2節 中世共同墳墓の背景』『横倉宮ノ内道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第161集 財団法人栃木県文化振興事業団
 斎藤義二 1982 『寺之後道跡発掘調査報告書』田沼町教育委員会
 酒井清治 1988 『関東における古墳時代の須恵器生産—群馬・埼玉を中心に—』『考古学雑誌』第73巻第3号 日本考古学会
 酒井清治 1991 『須恵器の編年 関東』『古墳時代の研究』6 須恵器と土器 雄山閣出版
 酒井清治 2007 『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅰ』駒澤大学考古学研究室
 酒井清治・藤野一之・三原瑞吉 2009 『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅱ』駒澤大学考古学研究室
 佐野市教育委員会 1990 『佐野市道跡地図』
 佐野市教育委員会 2007 『佐野市の文化財保護』佐野市文化財調査報告第4集
 藤原忠志 2011 『田沼持舟道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第339集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
 下河原大・大古直之 2011 『権名火山の後期更新世及び完新世噴出物から得られた炭灰14年代』『地質調査研究報告』第62巻第3/4号
 田中広明 1993 『補強帯のある大塚の生産と流通』『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
 田沼昭三 1966 『第4章 出土遺物の検討』『陶器古窯跡Ⅰ』平安学際考古学クラブ
 津野 仁・山口一・内山敏行・池田敏宏 2004 『三義山麓窯跡群の須恵器生産（Ⅱ）—前中期の様相を中心として—』『栃木県考古学会誌』第25集 栃木県考古学会
 津野 仁 2011 『説光沢窯跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第341集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
 藤岡正昭 1999 『関東の7世紀の須恵器生産』『東京考古』第17号 東京考古談話会
 新潟土器研究会 2000 『須恵器生産の出現から酒蔵—松坂窯—湖西窯産内の再構築—』第1回関東土器研究会資料
 栃木県教育委員会 1997 『栃木県道跡地図』
 中村賢太郎・早川由紀夫・藤根久・伊藤茂・廣田正史・小林紘一 2008 『ウイグルマッチング法による様名沱川噴火の年代決定（再検討）』『日本第四紀学会 講演要旨集』
 仲山英樹 2011 『四十八塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第340集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
 三 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』真岡社
 服部政史 1995 『東国における六・七世紀の須恵器生産—経営主体と工人をめぐって—』『王朝の考古学』大川清博土古希記念会
 藤野一之 2005 『日本の道跡5 瀬ノ台窯跡』同成社
 藤野一之 2008 『須恵器生産の拡大と人口集団の多様化—群馬県における須恵器生産体制の変化—』『生産の考古学Ⅱ』倉田万郎先生追悼論文編集委員会
 前澤輝政・田村充彦・大澤博幸 1989 『馬塚古窯跡第1次発掘調査』昭和63年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市埋蔵文化財調査報告第20集
 茂木孝行 2001 『寺之後道跡』田沼町教育委員会
 栄木 誠 1997 『南高岡窯跡群採集の須恵器』『真岡市史案内』第六号 真岡市史編纂室
 栄木 誠・田沼謙彦 1989 『古代下野の土器様相（Ⅰ）』『栃木県考古学会誌』第11集 栃木県考古学会
 栄木 誠・田沼謙彦 1989 『栃木県における歴史時代の須恵器 研究ノート—窯跡出土資料の検討とその編年について—』『栃木県考古学会誌』第6集 栃木県考古学会
 渡辺 一 2006 『古代東国の楽業生産の研究』青木書店

付章 自然科学分析

第1節 樺崎渡戸古窯跡の放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	D 4-13 グリッド	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	Radiometric
No.2	D 4-14 グリッド	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	Radiometric
No.3	E 4-1 グリッド	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	A M S
No.4	E 4-2 グリッド	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	Radiometric

※ Radiometric は液体シンチレーションカウンタによるβ線計数法
AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

2. 測定結果

試料名	測定No. (Beta.)	^{14}C 年代 ¹⁾ (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年 BP)	暦年代(西暦) ⁴⁾
No.1	219554	1270 ± 40	-27.1	1240 ± 40	交点: calAD 780 1σ: calAD 710 ~ 810 calAD 840 ~ 860 2σ: calAD 680 ~ 890
No.2	219555	1610 ± 40	-26.8	1580 ± 40	交点: calAD 450 1σ: calAD 420 ~ 540 2σ: calAD 400 ~ 570
No.3	219556	1420 ± 50	-29.7	1340 ± 50	交点: calAD 670 1σ: calAD 650 ~ 700 2σ: calAD 630 ~ 780
No.4	219557	1580 ± 60	-27.8	1540 ± 60	交点: calAD 540 1σ: - AD 430 ~ 600 2σ: - AD 400 ~ 640

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を用いる。今回暦年代較正に使用したプログラムは、CALIB5.0.2 である。最新のデータベースでは約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68% 確率) と 2 σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

参考文献

Paula J Reimer, Mike G L Baillie, Edouard Bard, Alex Bayliss, J Warren Beck, Chanda J H Bertrand, Paul Glackwell,

Caitlin E Buck, George S Burr, Kirsten B Cutler, Paul E Damon, R Lawrence Edwards, Richard G Fairbanks, Michael Friedrich, Thomas P Guilderson, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, Bernd Kromer, Gerry McCormac, Sturt Manning, Christopher Bronk Ramsey, Ron W Reimer, Sabine Remmele, John R Southon, Minze Stuiver, Sahra Talamo, FW Taylor, Johannes van der Plicht, Constanze E Weyhermeyer. 2004. INTCAL04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon 46:1029-1058.

第2節 榑崎渡戸古窯跡出土炭化材のウィグルマツチング法による放射性炭素年代測定

株式会社 パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

藤根 久・伊藤 茂・安昭炫・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani

1. はじめに

榑崎渡戸古窯跡は、足利市街地北東の丘陵裾部に位置する古墳時代後期（7世紀前半）の須恵器窯跡である。調査では、灰原から須恵器の破片や燃料材の一部と思われる炭化材が検出された。ここでは、出土した炭化材について、ウィグルマツチング法による放射性炭素年代測定を行った。なお、年代測定した炭化材は、樹種同定も行っている（炭化材樹種同定の項を参照）。

2. 試料と方法

各炭化材試料については、実体顕微鏡を用いて最終形成年輪の有無を確認し、年輪数の計測を行った（図版1）。その結果、いずれの炭化材も最終形成年輪を有していた。年輪計測では、No.1の炭化材で23年輪

第1表 ウィグルマツチング測定試料および処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理データ
PLD-20086	試料 No. 1 位置：E4-1, 黒色土層（ベルト） 種類：炭化材（コナラ属クスギ節） 年輪：最終形成年輪有（年輪数 23 年輪）	採取位置：1-5 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-20087		採取位置：11-15 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-20088		採取位置：21-23 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-20089	試料 No. 3 位置：E4-8,（出土層位不明） 種類：炭化材（コナラ属クスギ節） 年輪：最終形成年輪有（年輪数 37 年輪）	採取位置：1-5 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-20090		採取位置：11-15 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-20091		採取位置：21-25 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-20092	試料 No. 6 位置：E4-2, 黒色土層 種類：炭化材（コナラ属クスギ節） 年輪：最終形成年輪有（年輪数 45 年輪）	採取位置：1-5 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-20093		採取位置：11-15 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-20094		採取位置：31-35 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-20095		採取位置：41-45 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）

確認され、最終形成年輪から1-5年輪と、11-15年輪、21-23年輪の3点を測定試料とした。No.3の炭化材では37年輪確認され、同様に1-5年輪と、11-15年輪、21-25年輪の3点を測定試料とした。No.6の炭化材では45年輪確認され、同様に1-5年輪と、11-15年輪、31-35年輪、41-45年輪の4点を測定試料とした(第1表)。

各試料は、調製した後、加速器質量分析計(コンパクト AMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

第2～4表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、ウィグルマッチング結果を、第1図にウィグルマッチング結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較

第2表 No.1 (位置: E4-1)の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

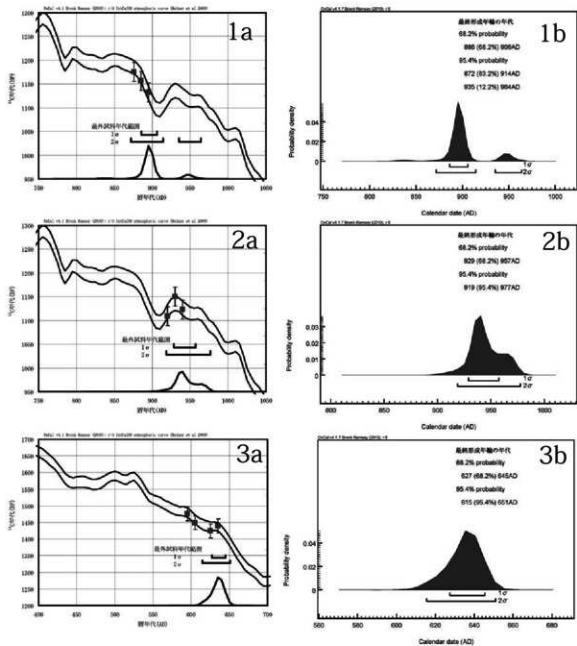
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-20086	-25.35 \pm 0.19	1132 \pm 20	1130 \pm 20	890AD(11.3%)900AD 918AD(56.9%)965AD	874AD(95.4%)983AD
PLD-20087	-24.52 \pm 0.15	1157 \pm 20	1155 \pm 20	784AD(1.9%)787AD 825AD(9.6%)842AD 862AD(35.2%)899AD 920AD(21.5%)946AD	780AD(4.6%)792AD 805AD(61.0%)902AD 916AD(29.8%)967AD
PLD-20088	-25.04 \pm 0.17	1176 \pm 20	1175 \pm 20	782AD(5.7%)789AD 810AD(30.6%)848AD 855AD(31.9%)890AD	777AD(92.2%)895AD 925AD(3.2%)937AD
最終形成年輪の年代				886AD(68.2%)906AD	872AD(83.2%)914AD 935AD(12.2%)964AD

第3表 No.3 (位置: E4-8)の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-20089	-26.67 \pm 0.15	1123 \pm 20	1125 \pm 20	894AD(7.9%)901AD 918AD(60.3%)967AD	886AD(95.4%)981AD
PLD-20090	-25.79 \pm 0.18	1150 \pm 20	1150 \pm 20	871AD(28.0%)900AD 917AD(40.2%)965AD	781AD(2.4%)790AD 808AD(48.8%)905AD 911AD(44.2%)970AD
PLD-20091	-26.01 \pm 0.14	1109 \pm 20	1110 \pm 20	897AD(29.1%)923AD 940AD(39.1%)974AD	892AD(95.4%)985AD
最終形成年輪の年代				929AD(68.2%)957AD	919AD(95.4%)977AD

第4表 No.6 (位置: E4-2)の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-20092	-26.61 \pm 0.17	1439 \pm 21	1440 \pm 20	607AD(68.2%)642AD	582AD(95.4%)651AD
PLD-20093	-25.84 \pm 0.17	1424 \pm 21	1425 \pm 20	615AD(68.2%)647AD	597AD(95.4%)656AD
PLD-20094	-26.82 \pm 0.17	1449 \pm 20	1450 \pm 20	600AD(68.2%)640AD	574AD(95.4%)647AD
PLD-20095	-26.21 \pm 0.18	1475 \pm 21	1475 \pm 20	566AD(68.2%)613AD	552AD(95.4%)638AD
最終形成年輪の年代				627AD(68.2%)645AD	615AD(95.4%)651AD



第1図 炭化材試料の校正曲線プロット図 (a) とウィグルマッチング結果 (b)

1a-1b No.1, E4-1 黒色土層 (ベルト) 出土炭化材 (コナラ属クスギ節)

2a-2b No.3, E4-8 (出土位置不明) 出土炭化材 (コナラ属クスギ節)

3a-3b No.6, E4-2 黒色土層出土炭化材 (コナラ属クスギ節)

正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年校正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年校正]

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇

宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: IntCal09)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎あるいは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせるにより最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心の年代を表している。そのため試料となった木材の最終形成年輪の年代を得るためには、最外試料としてまとめた年輪数と、さらにその外側にある年輪数を考慮する必要がある。

4. 考察

各試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行い、ウィグルマッチング法により最終形成年輪の暦年代(伐採年代)を求めた。

その結果、E4-1の黒色土層(ペルト)から出土した炭化材No.1(コナラ属クヌギ節)は、1σ暦年代範囲において886-906 cal AD(68.2%)、2σ暦年代範囲において872-914 cal AD(83.2%)および935-964 cal AD(12.2%)であった。1σ暦年代範囲において9世紀後半～10世紀初頭の年代範囲を示した。

E4-8(出土位置不明)から出土した炭化材No.3(コナラ属クヌギ節)は、1σ暦年代範囲において929-957 cal AD(68.2%)、2σ暦年代範囲において919-977 cal AD(95.4%)であった。1σ暦年代範囲において10世紀前半～中頃の年代範囲を示した。

E4-2の黒色土層から出土した炭化材No.6(コナラ属クヌギ節)は、1σ暦年代範囲において627-645 cal AD(68.2%)、2σ暦年代範囲において615-651 cal AD(95.4%)であった。1σ暦年代範囲において7世紀前半～中頃の年代範囲を示した。

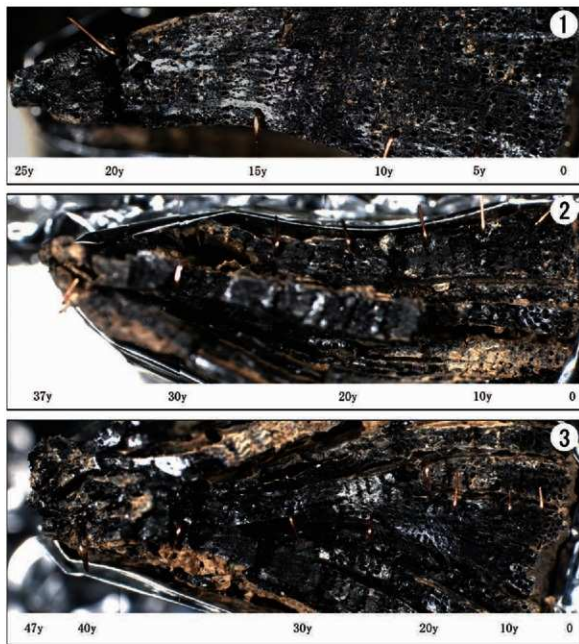
榊崎渡戸古竈跡は、出土した須恵器の編年観から古墳時代後期(7世紀前半)の須恵器竈跡であるが、E4-1の黒色土層(ペルト)から出土したNo.1とE4-8(出土位置不明)から出土した炭化材No. 仮3は、いずれも9世紀後半以降に伐採された炭化材であった。

一方、E4-2の黒色土層から検出されたNo.6は、1σ暦年代範囲において7世紀前半～中頃の年代範囲を示したことから、榊崎渡戸古竈跡で使用された燃料材の一部と考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43(2A), 381-389.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会。

Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111–1150.



図版1 ウィグルマッピングを行った炭化材の年輪計測結果

1a・1b, No.1, E4-1 黒色土層（べルト）出土炭化材（コナラ属クヌギ節）

2a・2b, No.3, E4-8 （出土位置不明）出土炭化材（コナラ属クヌギ節）

3a・3b, No.6, E4-2 黒色土層出土炭化材（コナラ属クヌギ節）

第3節 樺崎渡戸古窯跡出土炭化材の樹種同定

小林克也・藤根 久（パレオ・ラボ）

1. はじめに

樺崎渡戸古窯跡は足利市樺崎町に所在する7世紀前半と考えられる須恵器窯跡である。発掘調査では、須恵器窯跡の窯体は確認されていないが灰原などが検出され、炭化材が出土した。ここでは出土した炭化材の樹種同定を行なった。そして同定試料の一部を用い、ウィグルマッチングによる放射性炭素年代測定が行なわれている（第2節参照）。また年代測定試料の半径および年輪数の計測は藤根が行った。なお、炭化材の伐採季節の確認にあたり、森林総合研究所の能城修一氏の御教示を得た。

2. 試料と方法

試料は灰原であるE4-1とE4-2の黒色土層で各2点、E4-8で1点、不明遺構であるSX-01覆土で1点の、計6点の出土炭化材である。遺構の時期は、ウィグルマッチング法による放射性炭素年代測定の結果、試料No.1は1σ暦年代範囲において9世紀後半～10世紀初頭、試料No.3は10世紀前半～中頃、試料No.6は7世紀前半～中頃の年代値であった（第2節参照）。確認できる試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の記録を行った。復元直径の計測は1cm刻みの同心円に試料を当て、直径を求めた。残存半径は試料で残存している半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。そして確認できる試料について、伐採季節の確認を行なった。

炭化材の樹種同定は、試料をまず乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（紐目）の各断面について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）で検鏡および写真撮影を行った。なお、同定試料の残りはとちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）のみが産出した。灰原および不明遺構から出土した炭化材は、いずれもクヌギ節であった。年輪数の計測については、試料No.2のクヌギ節は根材状の形状のため残存半径3.3cm内に8年輪がみられるなど年輪幅が広がったが、その他の樹種は、試料No.6のクヌギ節で残存半径が3.4cm内に45年輪がみられるなど、年輪幅が比較的詰まった材が多かった。そして燃料材の復元直径では、試料No.1と試料No.4のクヌギ節が最も小さく5cm、試料No.6のクヌギ節が最も大きく9cmとなり、いずれの材も復元直径は10cm未満であった。伐採季節については試料No.1と3について確認できたが、いずれも晩材部の小道管が形成されておらず、伐採時期は夏であると考えられる。同定結果の一覧を表1に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版1 1a-1c(No.3)、2a-2c(No.6)、3a(No.1)、4a(No.4)、5a(No.5)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では径を急に減じた厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアバマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で切削などの加工はやや困難である。

第1表 榑崎渡戸古窯跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	出土位置	層位	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	復元直径 (cm)	伐採季節	備考	年代測定番号
1	E4-1	黒色土層 (ベルト)	コナラ属クヌギ節	2.3	23	5	夏	最終形成年輪有	PLD-20086 ~ 20088
2	E4-1	黒色土層	コナラ属クヌギ節	3.3	8	-	-	最終形成年輪有 根材状	
3	E4-8		コナラ属クヌギ節	2.9	37	6	夏	最終形成年輪有	PLD-20089 ~ 20091
4	E4-2	黒色土層 (下)	コナラ属クヌギ節	1.8	12	5	-	最終形成年輪欠如	
5	SX 01	覆土	コナラ属クヌギ節	2.4	23	6	-	最終形成年輪欠如 (辺材あり)	
6	E4-2	黒色土層	コナラ属クヌギ節	3.4	45	9	-	最終形成年輪有	PLD-20092 ~ 20095

4. 考察

同定の結果、いずれの炭化材もクヌギ節であった。材の復元直径ではいずれの材も10cm以内であり、年輪幅が詰まった材が多かった。

材の用途については、須恵器窯跡の燃料材として利用されていたと考えられていたが、年代測定の結果では、7世紀前半～中頃と9世紀後半～10世紀代という、異なる年代値の炭化材が確認された。窯跡の操業は、土器型式では7世紀前半頃と考えられており、7世紀前半～中頃の年代値が得られた試料No.6のクヌギ節は須恵器窯跡の燃料材、10世紀代の年代値が得られた試料No.1と3のクヌギ節は、榑崎渡戸古窯跡操業後に混入した炭化材であると考えられる(第2節参照)。なお、10世紀代の年代値が得られた試料No.1と3の炭化材は、夏頃に伐採されたことが確認できたが、材の用途は不明である。またその他の3点の炭化材については年代測定が行なわれておらず、用途は不明であった。

クヌギ節は、燃料材として利用したときに、高火力は得られないが長時間燃焼し続けるという材質を持つ。須恵器窯跡では窯跡周辺に生育する樹木を燃料材に利用していたと考えられ(藤原, 1993)、榑崎渡戸古窯跡では、窯跡周辺の植生からクヌギ節を利用していたと考えられる。

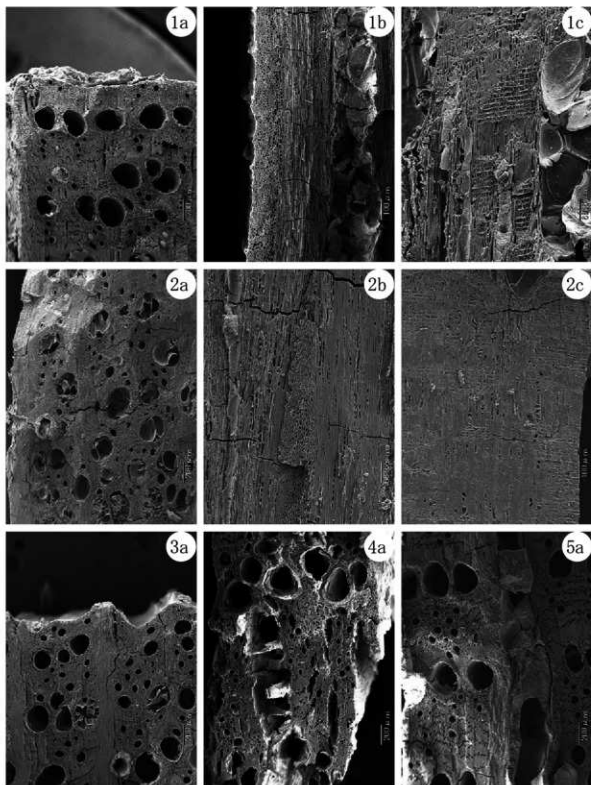
関東地方の7世紀前半の須恵器窯跡については、茨城県かすみがうら市の柏崎1号窯跡で燃料材18点全てがクヌギ節と同定された例(能城, 2006)以外は、樹種同定はほとんど行なわれていない。時期は異なるが、7世紀後半では、東京都の多摩ニュータウン遺跡内の小山窯跡(多摩ニュータウンNo.342遺跡1号窯跡)や、埼玉県の南比企丘陵の石田A1号窯跡で出土した燃料材のほとんどがクヌギ節であるという結果が得られている(千野, 1993; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1995)。

以上のように、7世紀代の関東地方では須恵器窯で用いる燃料材にクヌギ節を極めて多く利用する傾向がみられる。榑崎渡戸古窯跡では、少なくとも復元直径で9cmの年輪幅の詰まったクヌギ節を1点は利用していることが確認できた。

関東地方の7世紀代の須恵器窯跡の燃料材利用では、クヌギ節を選択伐採していた可能性があり、今回行なったような、燃料材の復元直径や年輪数の計測、燃料材の伐採時期の特定を行なう窯跡の事例が増えれば、地域や時期による傾向などが判明すると考えられる。

引用文献

- 千野裕道(1991)1号窯跡出土の炭化材樹種。東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター編「多摩ニュータウン遺跡 平成3年度(第5分冊)」:252-254, 東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター。
- 藤原 学(1993)須恵器窯と燃料薪。考古学論叢。関西大学考古学研究室開設四拾周年記念-, 495-517。
- 能城修一(2006)柏崎1号窯出土炭化材の樹種。筑波大学先史学・考古学研究編集委員会編「筑波大学先史学・考古学研究 第17号」:68-69, 筑波大学人文社会科学部研究科 先史学・考古学コース。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1995)樹種同定。鳩山町教育委員会編「竹之城・石田・血沼下遺跡」:210-211, 鳩山町教育委員会。



図版1 榊崎渡戸古窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. コナラ属クスギ節 (No.3)、2a-2c. コナラ属クスギ節 (No.6)、3a. コナラ属クスギ節 (No.1)、4a. コナラ属クスギ節 (No.4)、5a. コナラ属クスギ節 (No.5)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第4節 榑崎渡戸古窯跡出土須恵器の胎土分析

竹原弘展・藤根 久(株式会社 パレオ・ラボ)

1. はじめに

足利市街地北東の丘陵裾部に位置する榑崎渡戸古窯跡は、古墳時代(7世紀前半)の須恵器窯跡である。ここでは、榑崎渡戸古窯跡から出土した須恵器、および近隣の菅田古墳群から出土した須恵器について、波長分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、元素組成からみる材料の特徴を比較、検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、榑崎渡戸古窯跡の灰原より出土した須恵器16点である。また、比較試料として、榑崎渡戸古窯跡から約1.5kmの場所に位置する菅田古墳群より出土した同時期の遺物とみられる須恵器2点についても同様に分析した(第1表)。

分析は、須恵器のガラスビードを作製して蛍光X線分析を行った。須恵器は、岩石カッターを用いて必要量を採取し、表面の汚れ等を削り落とした後、それぞれ精製水で超音波洗浄を行った。各試料は、セラミック乳鉢で粉末にした後、るつぼに入れて電気炉で750℃、6時間焼成し、デシケータ内で放冷した。試料1.8000gを、無水四ホウ酸リチウムLi₂B₄O₇と、リチウムメタボレイドLiBO₂を8:2の割合で調製した融剤3.6000gと十分に混合し、白金製のるつぼに入れ、ビードサンプラーにて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

蛍光X線分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX(PW2424型)にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米

第1表 分析した須恵器とその詳細

分析 No	遺跡名	グリッド	遺構名	層位	種類	器種	図版番号	備考
1	榑崎渡戸 古窯跡		SX-01	フク土	須恵器	坏蓋		
2		E4-1		黒色土	須恵器	坏蓋		
3		D4-14		黒色土	須恵器	坏蓋		
4		E3-4		黒色土	須恵器	坏身		
5		E4-6		黒色土	須恵器	坏身		
6		E4-2		黒色土	須恵器	壺類(口縁部)		
7		D4-6, D4-7		黒色土	須恵器	横瓶		
8			SX-01	フク土	須恵器	横瓶		
9		D4-14, E4-1		黒色土	須恵器	糞	第32図3	
10		E4-6		黒色土	須恵器	糞		
11		E3-4		黒色土	須恵器	斜行文糞	第28図1と同個	
12		D4-8		黒色土ペルト	須恵器	波状文糞		
13			SX-01	フク土	須恵器	斜行文糞	第29図5	
14		E4-3		黒色土	須恵器	糞		
15		D4-11, D4-9		黒色土	須恵器	大型糞か	第37図9・11と同個	
16		E4-1		黒色土	須恵器	糞	第31図2と同個	緑色釉付着
17	菅田28号墳		石室	カクラン土	須恵器	中型糞		焼き締まり弱
18	菅田29号墳	J-10			須恵器	中型糞		胎土灰白色 自然釉付着

国標準技術研究所 (NIST) の岩石標準試料計 15 種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、二酸化ケイ素 (SiO₂)、五酸化二リン (P₂O₅)、酸化カリウム (K₂O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO₂)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe₂O₃) の主成分 10 元素と、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr) の微量成分 2 元素の計 12 元素である。

3. 結果

第 2 表に蛍光 X 線分析の測定結果を示す。分析の結果、榊崎渡戸古窯跡出土の須恵器は Na₂O が 0.39 ~ 0.56%、MgO が 0.62 ~ 1.08%、Al₂O₃ が 16.2 ~ 17.5%、SiO₂ が 72.6 ~ 75.8%、P₂O₅ が 0.017 ~ 0.050%、K₂O が 1.16 ~ 1.42%、CaO が 0.21 ~ 0.60%、TiO₂ が 0.80 ~ 0.90%、MnO が 0.026 ~ 0.093%、Fe₂O₃ が 4.82 ~ 6.85%、Rb が 66 ~ 82ppm、Sr が 38 ~ 63ppm であった。また、菅田古墳群出土の須恵器は Na₂O が 0.86% と 1.04%、MgO が 0.72% と 0.64%、Al₂O₃ が 18.1% と 17.0%、SiO₂ が 68.9% と 69.9%、P₂O₅ が 0.028% と 0.026%、K₂O が 1.28% と 1.42%、CaO が 0.42% と 0.37%、TiO₂ が 0.95% と 0.92%、MnO が 0.049% と 0.046%、Fe₂O₃ が 8.26% と 8.34%、Rb が 58ppm と 66ppm、Sr が 84ppm と 83ppm であった。第 1 図に各元素の分布図を示す。

第 2 表 蛍光 X 線分析結果

分析 No	遺跡名	Na ₂ O (%)	MgO (%)	Al ₂ O ₃ (%)	SiO ₂ (%)	P ₂ O ₅ (%)	K ₂ O (%)	CaO (%)	TiO ₂ (%)	MnO (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)
1	榊崎渡戸 古窯跡	0.42	0.78	16.7	75.1	0.029	1.16	0.21	0.83	0.027	5.36	100.6	66	38
2		0.41	0.76	16.8	75.4	0.030	1.23	0.22	0.83	0.043	5.32	101.0	68	40
3		0.39	0.80	16.8	75.3	0.039	1.17	0.22	0.85	0.029	5.33	100.9	66	38
4		0.45	0.73	16.6	75.8	0.022	1.35	0.24	0.80	0.038	4.93	101.0	76	44
5		0.39	0.62	17.5	72.6	0.050	1.16	0.27	0.90	0.045	6.85	100.4	68	46
6		0.41	0.69	16.9	74.9	0.034	1.36	0.22	0.82	0.029	5.46	100.8	75	43
7		0.54	0.75	16.2	75.0	0.017	1.39	0.32	0.83	0.068	5.03	100.1	79	54
8		0.52	0.76	16.3	75.5	0.032	1.42	0.23	0.83	0.026	4.82	100.4	82	46
9		0.49	0.88	16.7	74.4	0.034	1.29	0.45	0.81	0.045	5.33	100.4	75	56
10		0.51	0.87	16.9	75.1	0.036	1.22	0.35	0.87	0.093	5.39	101.3	72	59
11		0.51	0.77	16.3	74.7	0.021	1.29	0.23	0.84	0.034	6.48	101.2	75	44
12		0.51	1.08	16.9	73.4	0.042	1.25	0.60	0.80	0.087	5.50	100.2	70	63
13		0.48	0.74	16.2	75.3	0.022	1.37	0.21	0.81	0.034	5.21	100.4	74	50
14		0.55	0.84	16.6	74.6	0.022	1.24	0.34	0.83	0.074	5.19	100.3	72	54
15		0.53	0.77	16.2	74.4	0.024	1.32	0.26	0.84	0.031	5.78	100.2	74	45
16		0.56	0.80	16.5	74.4	0.017	1.33	0.34	0.82	0.090	5.01	99.9	74	54
	最小値	0.39	0.62	16.2	72.6	0.017	1.16	0.21	0.80	0.026	4.82	99.9	66	38
	最大値	0.56	1.08	17.5	75.8	0.050	1.42	0.60	0.90	0.093	6.85	101.3	82	63
17	菅田 28号墳	0.86	0.72	18.1	68.9	0.028	1.28	0.42	0.95	0.049	8.26	99.6	58	84
18	菅田 29号墳	1.04	0.64	17.0	69.9	0.026	1.42	0.37	0.92	0.046	8.34	99.7	66	83

4. 考察

まず、第 1 図において、榊崎渡戸古窯跡出土の須恵器同士を比較すると、酸化マグネシウム (MgO) における分析 No 12、酸化カルシウム (CaO) における分析 No 9 や分析 No 12 など、一部値がばらつくものもみられるが、多くの元素において比較的似た値を示した。また、化学組成上からこれら 16 点間において、明確な差異は見出せなかった。このことから、これら 16 点の須恵器は、同一の胎土材料由来であると捉えられる。

次に、榊崎渡戸古窯跡出土の須恵器 16 点と菅田古墳群出土の須恵器 2 点を比較すると、菅田古墳群出土の須恵器は 2 点とも酸化ナトリウム (Na₂O) や二酸化ケイ素 (SiO₂)、酸化チタン (TiO₂)、酸化鉄 (Fe₂O₃)、ストロンチウム (Sr) など、多くの元素において榊崎渡戸古窯跡出土の試料の値とは異なる組成を示した (第 1 図)。このことから、菅田古墳群出土の須恵器は、榊崎渡戸古窯跡出土の須恵器とは異なる胎土材料で製

作されていると考えられる。なお、菅田古墳群出土の須恵器2点間を比較すると、組成上の特徴がよく似ており、両者には同一の胎土材料が用いられていることを示している。

第2図に酸化アルミニウム (Al_2O_3)-二酸化ケイ素 (SiO_2) の分布図、および榑崎渡戸古窯跡出土の須恵器16点と菅田古墳群出土の須恵器2点のそれぞれの近似直線とその数式、 R^2 値を示す。この酸化アルミニウム (Al_2O_3)-二酸化ケイ素 (SiO_2) の分布図は、縦軸の酸化アルミニウム (Al_2O_3) が粘土分を代表し、横軸の二酸化ケイ素 (SiO_2) が砂粒分を代表することから、材料中の粘土と砂粒の混合割合を示すと解釈される (小村・藤根, 2002)。

榑崎渡戸古窯跡の須恵器について見ると、分析№5と分析№12は、その他の須恵器群と離れた位置に分布するが、この酸化アルミニウム (Al_2O_3)-二酸化ケイ素 (SiO_2) の分布図が材料の粘土と砂粒の混合割合を示し、概ね直線的に分布することから、混合割合に多少の違いはあっても同じ粘土と砂粒を用いて製作されたと考えられる。

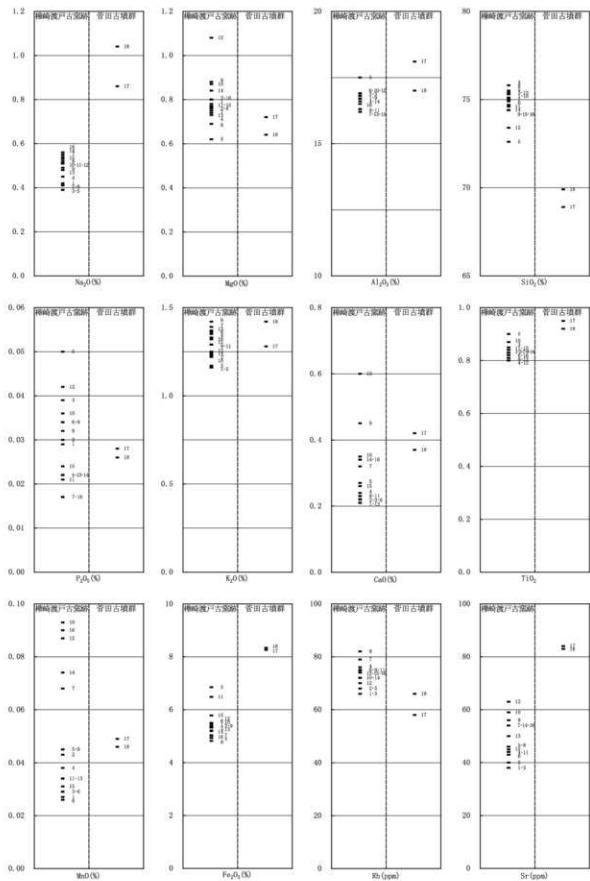
一方、菅田古墳群出土の須恵器は、榑崎渡戸古窯跡の須恵器一群の直線の延長上左側に位置するとも解釈できるが、他の多くの元素の値において違いが見られたことから、榑崎渡戸古窯跡出土須恵器と同じ胎土材料の須恵器とは言い難い。菅田古墳群出土の分析№17と分析№18の須恵器を結んでできる直線は、榑崎渡戸古窯跡出土の須恵器の一群の直線とは違う傾きを示していると捉えることができる。

5. おわりに

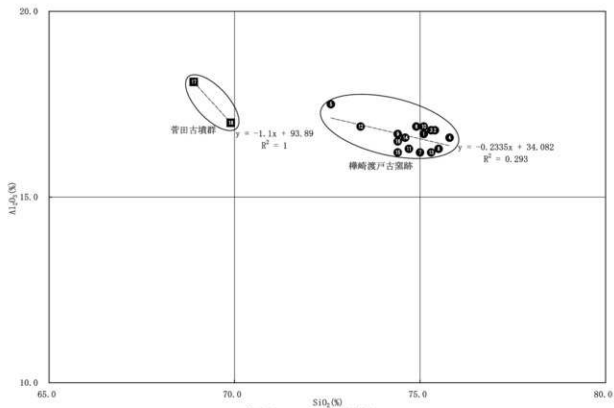
榑崎渡戸古窯跡および菅田古墳群出土の須恵器の化学組成を比較検討した結果、榑崎渡戸古窯跡出土の須恵器16点はそれぞれ似た組成を示し、同一材料から製作された須恵器と考えられた。一方、菅田古墳群より出土した須恵器2点は、2点間は互いによく似た組成であったものの、榑崎渡戸古窯跡出土の須恵器とは多くの元素において組成が異なり、異なる胎土材料を用いて製作された須恵器であると考えられた。

引用文献

小村美代子・藤根 久 (2002) 山茶碗胎土の化学的評価。日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集、60-61、日本文化財科学会。

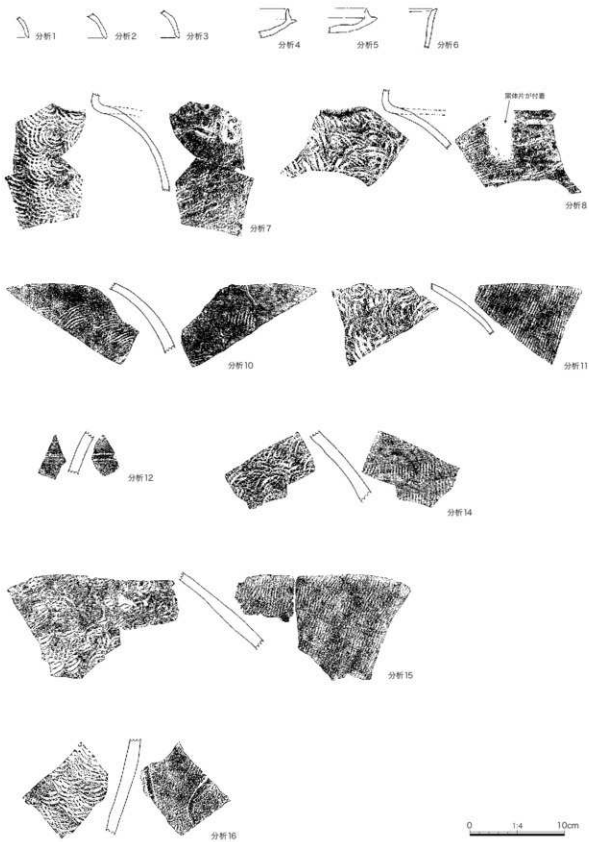


第1图 元素分布图



第2図 Al_2O_3 - SiO_2 分布図

胎土分析实施资料



写真図版



榑崎渡戸古窯跡 調査前遠景（南上空から）



榑崎渡戸古窯跡 現況（西から 右手切り通し手前が調査区）



調査区遠景（北東から）



調査区東側 山麓斜面（西から）



調査前の状況（南から）



調査区南北セクション（南西から）



調査区東西セクション（南東から）



調査区東西セクション（南から）



東西セクション（南東から）



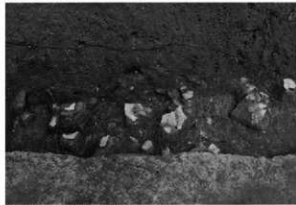
南側調査区 調査風景（東から）



SX-01 (南から)



SX-01 西側壁セクション (東から)



SX-01 出土状況 (西から)



D4-14 出土状況 (南から)



E4-2 出土状況 (南から)



E4-2 完掘状況 (南から)



南側調査区 完掘状況 (東から)

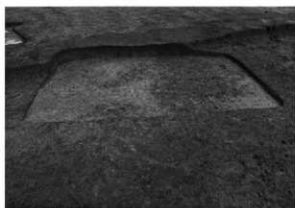


北側調査区 完掘状況 (東から)

図版四
樺崎中妻遺跡
遺構



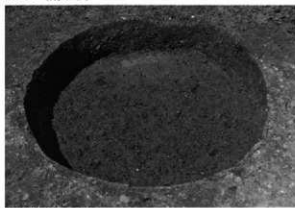
調査区全景（東から）



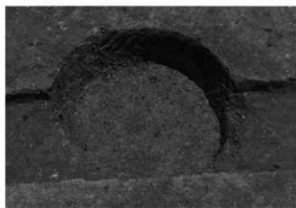
SK-01（南から）



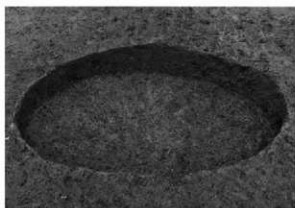
SK-05（南から）



SK-02（南から）



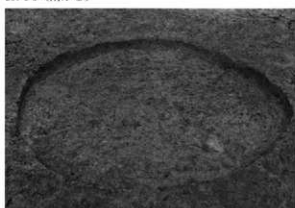
SK-03（南から）



SK-04（南から）



SK-06（南から）



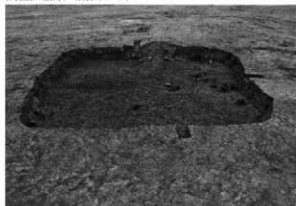
SK-07（南から）



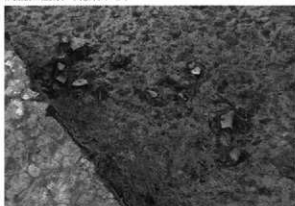
調査区全景（南西から）



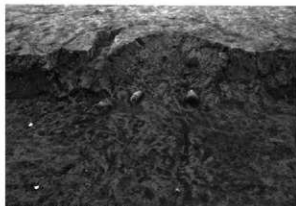
調査区全景（北東から）



SI-01（西から）



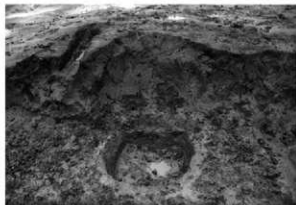
SI-01 出土状況（南東から）



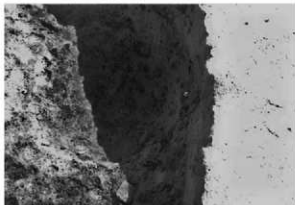
SI-01 カマド（西から）



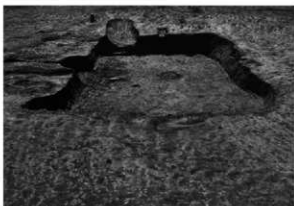
SI-01 カマド出土状況（南から）



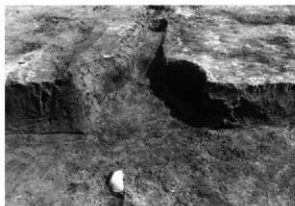
SI-01 カマド掘方（西から）



SI-01 貯蔵穴（西から）



SI-03 (西から)



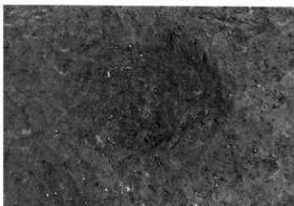
SI-03 カマド (西から)



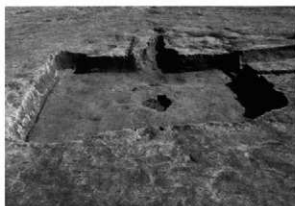
SI-03 南東コーナー突出部 (北から)



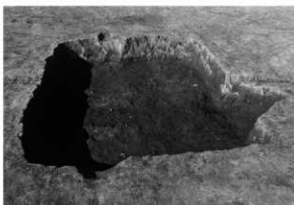
SI-03 北東コーナー突出部 (西から)



SK-03 が (西から)



SI-03 堀方 (西から)



SI-04 (南から)



SI-04 カマド (西から)



SK-05 (南から)



SK-06 (北東から)



SK-07 (南から)



SK-08 (西から)



SK-09 (南から)



SD-02 (南西から)



SD-02 (北から)



調査区全景 (東から)

図版八 唐沢山城跡 遺構



唐沢山城跡遠景（西上空から）



唐沢山城跡 調査前状況（南西上空から）



豎堀遠景（調査前・西から）



豎堀東端から秋山川を望む（東から）



調査前の豎堀埋没状況（西から）



調査前の豎堀奥部（西から）



調査区南側の斜面（北から）



調査区東側斜面（西から）



調査区南側の斜面（西から）



調査区南側の斜面と平坦部（南から）

図版十 唐沢山城跡 遺構



竖堀完掘状況（西から）



竖堀完掘状況（南東から）



トレンチ1 豎堀コーナー西壁セクション(東から)



トレンチ1 豎堀コーナー完掘状況(南東から)



トレンチ1 豎堀コーナー北壁セクション(南西から)



トレンチ1 豎堀コーナー完掘状況(西から)



トレンチ1 豎堀コーナー東壁セクション(南西から)



C-4 グリッド付近 土坑集中状況(南西から)



トレンチ1 豎堀コーナー完掘状況(北西から)



作業風景



トレンチ2北側部分セクション（北西から）



トレンチ2中央部分セクション（西から）



トレンチ2南側部分セクション（南西から）



トレンチ2中央部分セクション（東から）



トレンチ2調査状況（南から）



SK-05～09（南から）



SK-01（南から）



SK-01（北東から）



トレンチ2遺物出土状況（西から）



土坑群の集中状況（北西から）



SK 09 及び周辺ピット群（南西から）



トレンチ3セクション（南西から）



トレンチ3土層部分セクション（南から）



トレンチ3北側部分セクション（西から）



トレンチ3中央部分セクション（南西から）



トレンチ3南側部分セクション（北西から）

図版十四 唐沢山城跡 遺構



トレンチ4セクション (南西から)



トレンチ4土塁部分セクション (南から)



トレンチ4中央部分セクション (北西から)



トレンチ4南側部分セクション (西から)



トレンチ4から東側完掘状況 (西から)



トレンチ5土塁部分セクション (南西から)



トレンチ5北側部分セクション (西から)



トレンチ5南側部分セクション (南西から)



トレンチ5から東側完掘状況（南西から）



トレンチ6土層部分セクション（西から）



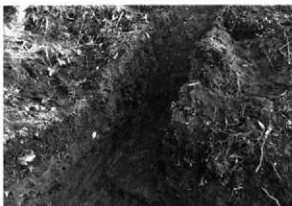
トレンチ6北側部分セクション（西から）



トレンチ6中央部分セクション（西から）



トレンチ6南側部分セクション（西から）



トレンチ6南端部分セクション（北西から）



縦堀完掘状況（北東から）



調査風景

図版十六 唐沢山城跡
遺構



トレンチ7北側部分セクション（南西から）



トレンチ7中央部分セクション（西から）



トレンチ7南側部分セクション（北西から）



豎堀東端の岩盤（西から）



C-9 グリッドから東側完掘状況（西から）



トレンチ8セクション (南から)



トレンチ9北側部分セクション (西から)



トレンチ9セクション (西から)



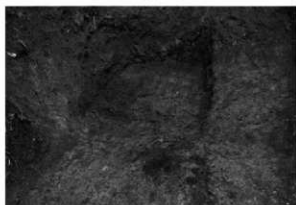
トレンチ9セクション (北西から)



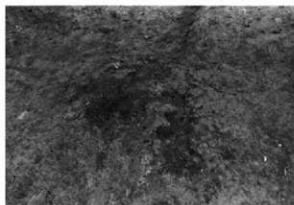
トレンチ10セクション (西から)



トレンチ10北側部分セクション (北西から)



トレンチ10 炭窯 (北西から)



トレンチ10 炭窯焼土 (北西から)



トレンチ11セクション(南から)



トレンチ12セクション(北から)



平坦部トレンチ設定状況(北西から)



トレンチ13セクション(北西から)



トレンチ14セクション(北西から)



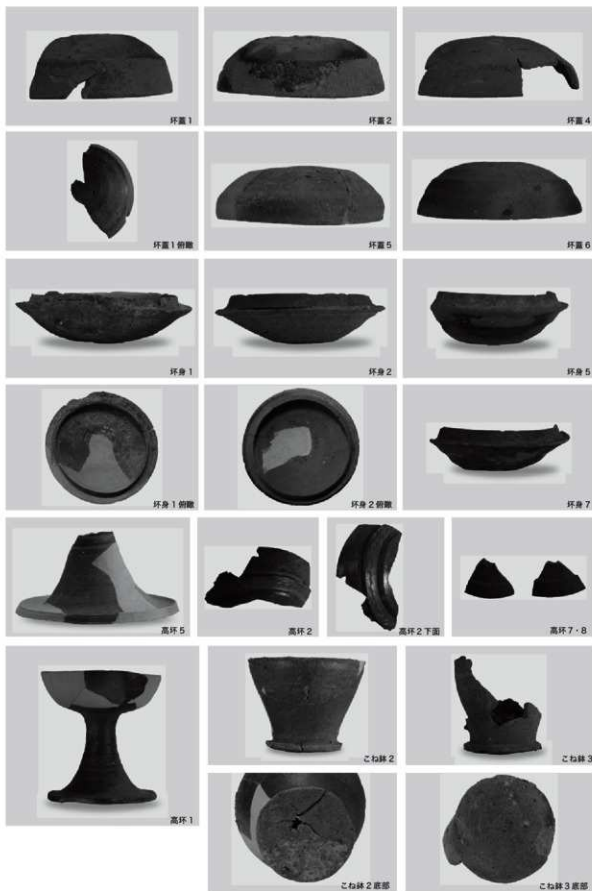
トレンチ15セクション(北から)



トレンチ15中央部分セクション(北から)



トレンチ15西側部分セクション(北から)

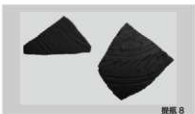




平威 7



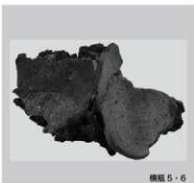
平威 2



平威 8



平威 1



平威 5・6



平威 8



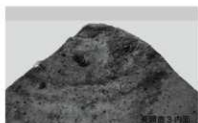
短頸甕 5



短頸甕 6



長頸甕 1



壺口縁部 1



壺口縁部 2



壺口縁部 4



壺口縁部 5



壺口縁部 6



壺口縁部 7



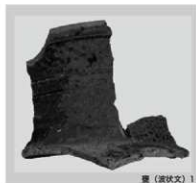
壺口縁部 8



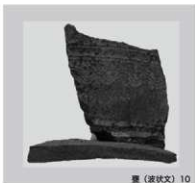
脚付甕 13



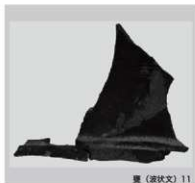
長頸甕 14



窯 (波状文) 1



窯 (波状文) 10



窯 (波状文) 11



窯 (波状文) 5



窯 (波状文) 10 接合面



窯 (波状文) 11 接合面



窯 (波状文) 2 裏



窯 (波状文) 2 表



窯 (波状文) 3 裏



窯 (波状文) 3 表



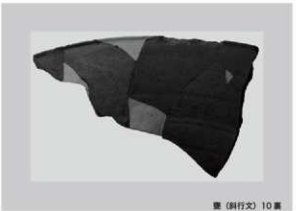
窯 (斜行文) 9 表



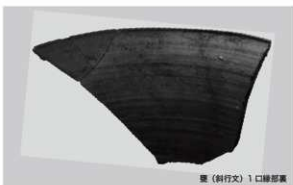
窯 (斜行文) 9 裏



窯 (斜行文) 10 表



窯 (斜行文) 10 裏





罍 (斜行文) 6



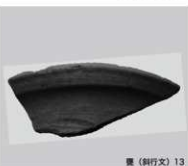
罍 (斜行文) 8



罍 (斜行文) 11



罍 (斜行文) 12



罍 (斜行文) 13



罍 (斜付) 1



罍 (斜付) 4



罍 (斜付) 6



罍 (斜付) 1 側面



罍 (斜付) 2



圖 (口縁部無文) 1



圖 (口縁部無文) 3

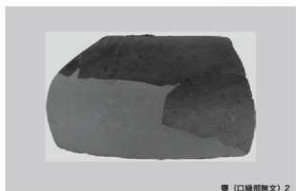


圖 (口縁部無文) 2



圖 (口縁部無文) 2 接合面

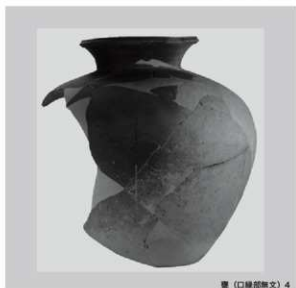


圖 (口縁部無文) 4

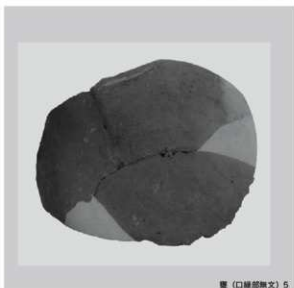


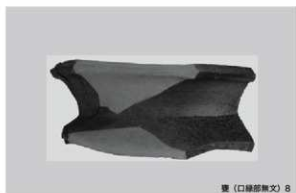
圖 (口縁部無文) 5



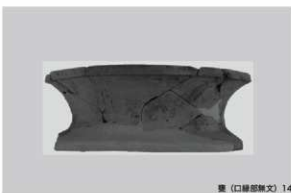
圖 (口縁部無文) 6



圖 (口縁部無文) 7



壺 (口縁部無文) 8



壺 (口縁部無文) 14



壺 (破片) 3 表



壺 (破片) 3 裏



壺 (破片) 6 表



壺 (破片) 6 裏



壺 (破片) 9 表



壺 (破片) 9 裏



壺 (破片) 15 表



壺 (破片) 15 裏



壺 (破片) 21 表



壺 (破片) 21 裏



壺 (破片) 22 表



壺 (破片) 22 裏



壺 (破片) 1 表



壺 (破片) 20 表



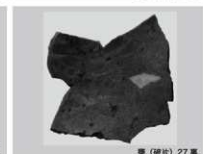
壺 (破片) 27 裏



壺 (破片) 1 裏

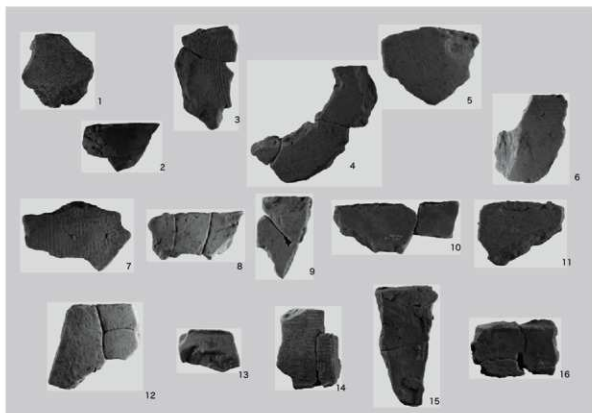


壺 (破片) 26 裏

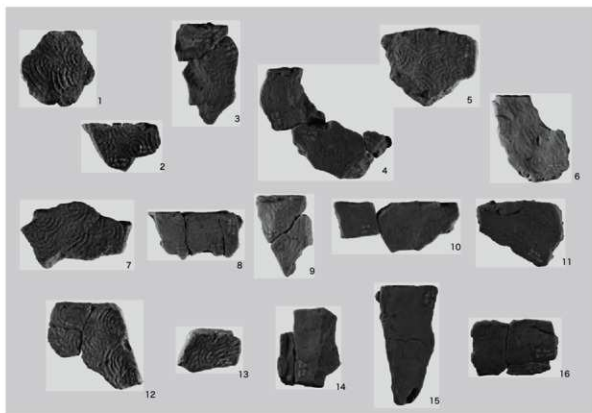


壺 (破片) 27 裏





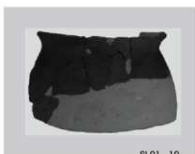
土師質の板状品 (表)



土師質の板状品 (裏)



榑本西遺跡





唐沢山城跡 1



唐沢山城跡 8



唐沢山城跡 6



唐沢山城跡 7



唐沢山城跡 9



唐沢山城跡 12



唐沢山城跡 13



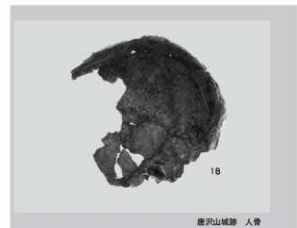
唐沢山城跡 14



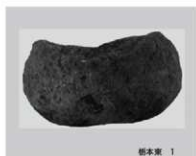
唐沢山城跡 15



唐沢山城跡 鉄製品



唐沢山城跡 人骨



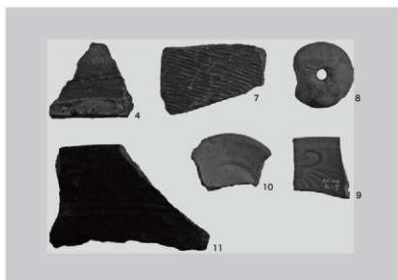
栃本東 1



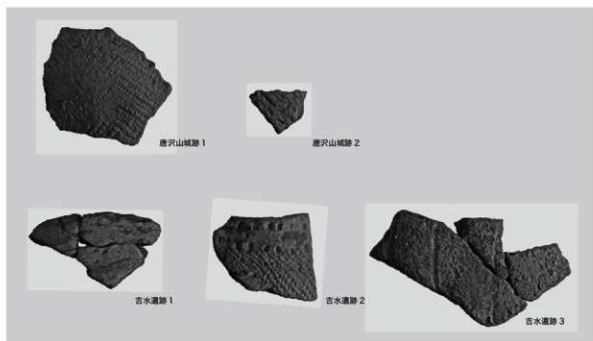
栃本東 2



栃本東 3



榑崎中妻遺跡出土遺物



唐沢山城跡・吉水遺跡出土縄文土器

報告書抄録

ふりがな	かばさきわたごうあと・かばさきなかづまいせき・とちもとにいせき・からさわやまじょうせき
書名	榊崎渡戸古窯跡・榊崎中麦遺跡・榊山西遺跡・唐沢山城跡
副書名	北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査XIV
巻次	24
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第353集
編著者名	合田恵美子
編集機関	財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2012年3月30日 (平成24年3月30日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
榊崎渡戸古窯跡	足利市榊崎町	09202		36° 36' 35"	139° 49' 11"	20060401～ 20060620	2,900	北関東自動車道建設
榊崎中麦遺跡	足利市榊崎町	09202		36° 36' 56"	139° 49' 52"	20060626～ 20060831	7,000	
榊山西遺跡	佐野市榊本町	09204		36° 35' 30"	139° 58' 10"	20050801～ 20051228	9,325	
唐沢山城跡	佐野市榊本町	09204	5215	36° 35' 20"	139° 59' 10"	20060901～ 20070329	5,800	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
榊崎渡戸古窯跡	窯跡	古墳時代 中世	須恵器窯跡(灰原)1ヶ所 性格不明遺構 1基	須恵器、焼台、竈体、土師質の板状品 土師質土器、陶器、青磁、瓦	古墳時代後期の須恵器窯跡
榊崎中麦遺跡	集落	時期不明	土坑 7基	須恵器・土師器、紡錘車、青磁片	時期不明の土坑群
榊山西遺跡	集落	古代 時期不明	竪穴住居跡 3軒 溝 1条 土坑 3基 土坑 2基	灰輪陶器、土師器、焼成粘土塊、瓦	古代の集落跡
唐沢山城跡	城跡	中世	城跡(塹壕) 1基	土師質土器、鋸、鉄製品(鎌・釘)、人骨	中世(戦国期)の山城跡

要約
<p>榊崎渡戸古窯跡は足利市北部の丘陵地帯に営まれた古墳時代後期の窯跡である。灰原1カ所を調査した結果、7世紀初頭から前半にかけての須恵器が多く出土した。製品は全体的に薄手で作りが良く、口縁が八の字に開く坏蓋や、頸部補強帯を持つ甕など、いわゆる北関東系須恵器がごく僅かであることから、須恵器生産の中心地である東海西部の製作技術が深く関わったものと推測される。また、県内で調査された窯跡の中では最も古い時代に属するものである。窯本体は調査区内では確認されていない。出土遺物の時期や出土状況から、短期間に単発的に操業された窯跡である可能性が高いと考えられる。</p> <p>榊崎中麦遺跡は榊崎渡戸古窯跡に隣接し、榊崎川に面した沢の斜面に位置する。試掘調査では極名ニッ活汎川テフラ、浅間Bテフラが確認されたが、いずれも遺構に伴うものではなかった。確認された土坑群の時期は不明だが、遺構外からは古墳時代から近代に至る遺物が出土している。</p> <p>榊山西遺跡は、佐野市北部の田沼扇状地内に残る微高地上に位置する。古代(10世紀)の竪穴住居跡3軒、溝1条、土坑3基が確認された。住居跡群は南北の調査区外に缺くと考えられるが、竪穴住居跡数軒の小規模な集落であったと想定される。住居跡内からは土師器埴や甕、灰輪陶器が出土している。SI-01 竪穴住居跡の床下からは、住居の時期よりも古い瓦が出土した。</p> <p>唐沢山城跡は、佐野市北東部の唐沢山内に展開する中世の山城であり、山麓の根小屋地区の南端に位置する塹壕を調査した。塹壕は全長約60m、最大幅11mの規模で、北側に最大高1m、最大幅8mの土塁を伴う。塹壕南側の斜面及び平地では城郭に伴う遺構は確認されず、この塹壕が当初の想定通り、根小屋地区の南端を区切る施設であることが確認された。遺物の多くは塹壕内から出土したもので、土師質皿を中心に五輪塔、石製鏡、人の頭骨などが出土している。</p>

北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

- I 「一本松遺跡・文殊山遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 230 集 1999 年 3 月
II 「杉村・磯岡・磯岡北」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 241 集 2000 年 3 月
III 「八剣遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 254 集 2001 年 3 月
IV 「谷向・国谷馬場・中の内・惣宮・鍋小路」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 255 集 2001 年 3 月
V 「上神主・茂原 茂原向原 北原東」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 256 集 2001 年 3 月
VI 「権現山遺跡・百目鬼遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 257 集 2001 年 3 月
VII 「西赤堀遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 304 集 2007 年 3 月
VIII 「峰高前遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 308 集 2007 年 9 月
IX 「高島遺跡群」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 309 集 2008 年 3 月
X 「下陰遺跡 I」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 310 集 2008 年 3 月
XI 「西物井遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 316 集 2009 年 3 月
XII 「西根 2 遺跡・小野寺城跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 320 集 2009 年 3 月
XIII 「谷向遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 321 集 2009 年 3 月
XIV 「五雲遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 322 集 2009 年 3 月
XV 「原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎 III 遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 323 集 2009 年 3 月
XVI 「曲田遺跡・馬場先遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 324 集 2009 年 3 月
XVII 「下陰遺跡 II」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 330 集 2010 年 3 月
XVIII 「田島持舟遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 339 集 2011 年 3 月
XIX 「四十八塚古墳群」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 340 集 2011 年 3 月
XX 「寂光沢窟跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 341 集 2011 年 3 月
XXI 「和田遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 350 集 2012 年 3 月
XXII 「菅田古墳群」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 351 集 2012 年 3 月
XXIII 「神畑遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 352 集 2012 年 3 月
XXIV 「榊崎渡戸古窯跡・榊崎中妻遺跡・栃木西遺跡・唐沢山城跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 353 集
2012 年 3 月

栃木県埋蔵文化財調査報告第 353 集
榊崎渡戸古窯跡・榊崎中妻遺跡・栃木西遺跡・唐沢山城跡
—北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 XXIV—

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市編田 1-1-20

TEL 028 (623) 3425

財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町 1-8

TEL 028 (643) 1011

平成 24 年 3 月 30 日発行

編集 財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

TEL 0285 (44) 8441

印刷 株式会社 泰明グラフィクス
